

独立行政法人文化財研究所
平成18年度業務実績報告書

独立行政法人通則法（平成11年法律第103号）第31条の規程により、平成18年4月1日付け18庁財第12号で認可を受けた独立行政法人文化財研究所中期計画に基づく平成18年度の業務別概要は、次のとおりです。

I 国民に対して提供するサービスその他の業務の質の向上に関する目標を達成するためにとるべき措置

1 文化財に関する調査及び研究の推進

(1) 文化財に関する基礎的・体系的な調査・研究の推進

① 新たに文化財保護法の保護対象となった文化的景観、民族技術に関する基礎的・体系的な調査・研究

ア 文化的景観に関する概念整理等の基礎的調査研究(No. 1)

イ 民族技術に関する保護現状の調査及び資料収集(No. 2)

② 我が国の有形文化財及びそれに関わる諸外国の文化財の調査研究

ア 東アジア地域における美術の価値形成の調査研究と美術史研究の資料学的基盤の整備(No. 3)

イ 近現代美術の歴史の研究手法の開発と現代芸術の動向に関する調査研究(No. 4)

ウ 美術の創作のプロセス、技法、材料の歴史的変遷の調査研究(No. 5)

エ 古都所在寺社の歴史資料・書跡資料等の原本調査し、日本の歴史・文化の源流研究(No. 6)

オ 文化財建造物の保存・修復・活用に向けた歴史的建造物、伝統的建造物群の分析研究(No. 7)

③ 伝承実態の把握に向けた音声や映像等による記録の収集及び無形文化財の調査研究(No. 8)

④ 風俗慣習、民俗芸能、民俗技術など無形民俗文化財の調査研究(No. 2)

⑤ 遺跡の発掘調査、出土品・遺構等の調査研究及び文化財建造物の基礎的調査研究

ア 平城京跡及び飛鳥・藤原京跡の発掘調査(No. 9～18)

イ 出土遺物及び遺構に関する調査、分析、復原的研究(No. 19～21)

ウ アジアにおける古代都城遺跡、生産遺跡、墓制及び陶磁器に関する調査研究(No. 22)

エ 平安時代以降の発掘庭園を中心にした調査研究(No. 23)

オ 飛鳥時代の壁画古墳についての調査研究(No. 24)

⑥ 遺跡の保存・整備・活用に関し技術開発の推進及び保存修復・整備の一体的な調査研究

ア 遺跡の保存・整備後の公開・活用、遺構の露出展示整備例の調査研究(No. 25)

イ 遺構の安定した公開・展示に向けた事前調査法、保存技術及び監視技術の開発的研究(No. 26)

ウ 平城宮跡第一次大極殿正殿復原の整備・公開等に関する専門的・技術的支援(No. 27)

(2) 文化財に関する新たな調査手法の研究・開発の推進

① 文化財の高精細デジタル画像手法に関する調査研究(No. 28)

② 彩色文化財の材質調査・構造分析の光学的調査方法の基礎的研究(No. 29)

③ 遺跡調査における新たな指標や属性分析法の確立に関する研究

ア 官衙関連遺跡および豪族居宅遺跡の指標、及び発掘調査法の研究(No. 30)

イ 地方官衙遺跡と豪族居宅遺跡に関する研究(No. 31)

ウ 遺跡の測量・探査における新たな技術の有効利用法を研究(No. 32)

- ④ 遺跡出土木材等の年輪年代測定技術・手法の研究と年輪年代測定による自然災害の考究 (No. 33)
 - ⑤ 動植物遺存体による環境考古学的研究 (No. 34)
- (3) 科学技術の活用等による文化財の保存科学や修復技術に関する先端的調査研究等の推進
- ① 木質文化財の劣化診断や被害防止対策の調査研究 (No. 35)
 - ② 環境の調査手法、解析手法の研究及び実践 (No. 36)
 - ③ 韓国と日本国内の石造文化財の劣化要因究明及び修復材料・技術の開発の日韓共同研究 (No. 37, 38)
 - ④ 考古資料の材質・構造の調査法、考古資料の保存・修復に関する実践的な研究 (No. 39)
 - ⑤ 絵画修復材料の現地試料収集及び自然科学的な分析・調査 (No. 40～42)
 - ⑥ ドイツ技術博物館との共同研究及び欧米での修復事例調査 (No. 43)
- (4) 国・地方公共団体の要請による保存措置等のために必要な実践的な調査・研究及び文化庁が行う高松塚古墳・キトラ古墳の壁画の調査及び保存・活用に関する技術協力 (No. 44, 45)

2 文化財の保存・修復に関する国際協力の推進

- (1) 文化財の保護制度や施策の国際動向及び国際協力及び国際共同研究
- ① 世界遺産委員会や無形遺産委員会等の国際会議に出席とヨーロッパ連合内の文化財保護制度等の調査とアジア地域の文化財保護機関と連携して国際ワークショップを開催 (No. 46)
 - ② 文化財の保存修復事業及び国際共同研究事業の実施
 - ア カンボジア・アンコール遺跡群のタ・ネイ遺跡及び西トップ寺院遺跡において建築史的、考古学的、保存科学的調査とベトナム・ミソン遺跡では、環境計測の実施 (No. 47, 48)
 - イ 龍門石窟の文化財保存に関する保存科学的現地調査の実施と西安唐代陵墓石彫像の保存修復事業を西安文物保護修復センターと共同で実施及び敦煌莫高窟壁画保存と制作技法に関する現地調査及び研究を実施 (No. 49, 50)
 - ウ アフガニスタン(主としてバーミヤーン)及びイラクの文化財保存修復協力事業を実施 (No. 51)
- (2) 諸外国における文化財の保存・修復に関する技術移転とアジア諸国の文化財保護担当者や保存・修復専門家などの人材養成支援事業及び教材や教育手法に関する研究開発
- ア 中国、アフガニスタン、イラク等の考古学、建造物保存専門家及び歴史資料保存専門家養成研修の実施 (No. 52)
 - イ 国際協力機構、ユネスコアジア文化センター等が実施する研修協力 (No. 53)

3 調査研究成果の積極的な発信による社会への還元

- (1) ネットワークのセキュリティの強化及び情報基盤の整備・充実と文化財情報の計画的収集・整理・保管及び文化財に関する専門的アーカイブの拡充
- ① ネットワークのセキュリティの強化及び情報基盤の整備・充実 (No. 54, 55)
 - ② 文化財に関する専門的アーカイブの拡充 (No. 56～60)
 - ③ 文化財関係資料や図書の収集・整理・公開・提供の充実 (No. 61)
 - ④ 文化財情報電子化の研究に基づき、データベースの充実 (No. 62)

(2) 文化財に関する調査・研究の成果について、定期刊行物の発行及び公開講演会、現地説明会、国際シンポジウム等の開催と広報のためのホームページの充実

① 定期刊行物の刊行

- 『東京文化財研究所年報』2005年度版(No. 63)
- 『東京文化財研究所概要』2006年度版(No. 63)
- 『東文研ニュース』第25号～第28号(No. 63)
- 『美術研究』第389号～第391号(No. 64)
- 『平成17年度版 日本美術年鑑』(No. 64)
- 『無形文化遺産研究報告』第1号(No. 65)
- 『第1回無形民俗文化財研究協議会報告書－民族技術の保護をめぐる－』(No. 65)
- 『保存科学』第46号(No. 66)
- 『第29回文化財の保存・修復に関する国際研究集会報告書の刊行』(No. 67)
- 『奈良文化財研究所紀要』2006年度版(No. 68)
- 『奈良文化財研究所概要』2006年度版(No. 68)
- 『奈文研ニュース』第21号～第24号(No. 68)
- 『埋蔵文化財ニュース』第126号～第129号(No. 68)

② 公開講演会、現地説明会、国際シンポジウムの開催等

- 国際シンポジウムの開催
 - 「第30回文化財の保存・修復に関する国際研究集会」(平成19年2月14日～16日)(No. 69)
- 公開学術講座
 - 「美術部オープンレクチャー」(平成18年10月27日～28日)(No. 70)
- 公開講演会
 - ・第98回公開講演会「キトラと高松塚について」「唐代宮殿の風景」「遺跡からの情報発信」(No. 71)
 - ・第99回公開講演会「遺跡の現地保存を考える」「明治・大正・昭和の住まいと文化財」「木簡調査の100年－全国出土木簡の追跡から－」(No. 71)
 - ・飛鳥資料館特別講演会「海獣葡萄鏡について」(No. 71)
 - ・飛鳥資料館特別講演会「伯牙弹琴鏡－唐と日本で好まれた鏡－」(No. 71)
 - ・飛鳥資料館特別講演会「飛鳥の考古学2006－発掘された蘇我氏の飛鳥－」(No. 71)
- 発掘調査現地説明会
 - ・平城第404次(西大寺旧境内)発掘調査(現場一般公開)(No. 71)
 - ・飛鳥藤原第142・144次(藤原宮朝堂院第四堂)発掘調査(No. 71)
 - ・平城第404・410次(西大寺旧境内)発掘調査(No. 71)
 - ・飛鳥寺講堂(現場公開)(No. 71)
 - ・平城第401次(東院地区)発掘調査(No. 71)
 - ・飛鳥藤原第146次(甘檜丘東麓遺跡)発掘調査(現地見学会)(No. 71)
 - ・平城第406次(第二次大極殿院東方官衙地区)発掘調査(No. 71)
 - ・飛鳥藤原第145次(石神遺跡第19次)発掘調査(No. 71)

③ ホームページアクセス件数(No. 72, 73)

ホームページアクセス件数	独立行政法人文化財研究所	306, 213件
	東京文化財研究所	1, 355, 306件
	奈良文化財研究所	1, 033, 457件

(3) 黒田記念館、平城宮跡資料館、藤原宮跡資料室、飛鳥資料館の展示公開

○黒田記念館における作品の展示公開(No. 74)

常設展

共催展の開催

豊田市美術館共催展(平成18年7月15日～8月27日)

○平城宮跡資料館における展示公開(No. 75)

・常設展

・発掘速報展「日中共同 唐長安城大明宮太液池の発掘調査」パネル展

「奈良の都を掘る 発掘成果展 平城2006」

「西大寺食堂院の井戸」

○飛鳥資料館における展示公開(No. 76)

・常設展

・特別展 春期特別展示「キトラ古墳と発掘された壁画たち」

秋期特別展示「飛鳥の金工」

・企画展 夏期企画展示「東アジアの十二支像」

冬期企画展示「発掘調査速展」

○藤原宮跡資料室における展示公開(No. 77)

・常設展

・速報展 「石上遺跡(140次)」「藤原宮朝堂院東第四堂」「甘樫岡東麓遺跡」

「石上遺跡(145次)」

(4) 文化庁が行う平城宮跡、飛鳥・藤原宮跡等の公開・活用事業に協力・支援及び解説ボランティア事業を運営と各種ボランティア支援(No. 78～80)

○平城宮跡解説ボランティア事業の運営

○各種ボランティアに対する活動機会・場所の提供、文化財に関する学習会の実施

「専門研修」「平城宮跡クリーンフェスティバル」「『続日本紀』読書会」

「遺跡見学会」「清掃活動」等

(5) 奈良県の「平城遷都1300年記念事業」に向け最新の調査・研究に基づく平城宮跡資料館の展示リニューアル及び古代都城等に関する国際共同研究の成果の展示公開の検討(No. 75)

4 地方公共団体への協力等による文化財保護の質的向上

(1) 地方公共団体や大学、研究機関との連携・協力体制の構築と文化財に関する協力・助言の実施及び埋蔵文化財保護行政の調査研究を実施し、地方公共団体等への協力・助言・専門的知識の提供等と他機関等との共同研究及び受託事業の実施(No. 81～84)

(2) 地方公共団体等の文化財担当者に埋蔵文化財に関する研修、保存科学に関する保存担当学芸員研修を実施と東京芸術大学、京都大学、奈良女子大学との連携大学院教育を実施

①埋蔵文化財担当者研修(No. 85)

一般研修1課程、専門研修12課程、計13課程実施

②博物館・美術館等の保存担当学芸員研修(No. 86)

③東京芸術大学、京都大学、奈良女子大学との連携大学院教育の推進(No. 87, 88)

○東京芸術大学：システム保存学（保存環境学、修復材料学）

- 京都大学：文化・地球環境学（文化財調査法論、環境考古学論）
- 奈良女子大学：比較文化学（文化史論）

II 業務運営の効率化に関する目標を達成するためにとるべき措置(No. 89)

- 1 事務・事業・組織等の見直し等により経費の合理化を図る。また、運営費交付金を充当して行う業務については国において実施されている行政コストの効率化を踏まえ、下記の業務の効率化を進める。
 - (1) 両文化財研究所の共通業務の見直し等による一般管理部門の効率的な運用
 - (2) 業務の見直しによる研究・事業部門の効率的な実施
 - (3) 省エネルギー、廃棄物減量化、リサイクルの推進、ペーパーレス化の推進及び環境物品等の調達等の推進等
 - (4) セミナー室、講堂等の施設の有効利用
- 2 役職員の給与に関し、国家公務員の給与構造改革を踏まえ取り組む。
- 3 外部有識者による評価を含めた適切な自己点検評価自己点検評価を実施するとともに、評価結果を法人運営の改善に反映させる。

業務実績書

中期計画の項目 (I 1 (1) ①)	文化財保護法の一部改正に伴い新たに保護対象となった文化的景観、民族技術に関する基礎的・体系的な調査・研究を実施し、今後の指定をはじめとする保護施策に関する資料と指針を提供する。
------------------------	--

【事業名称】	文化的景観に関する調査研究 (I 1 (1) ①ア)
--------	----------------------------

【事業概要】	平成 16 年 5 月の文化財保護法改正により、文化的景観が文化財として位置づけられるようになり、これに対応するため翌 17 年 4 月、当研究所に景観研究室が設置された。文化的景観については、景観の分類・分析・評価など基礎的・理論的な研究と、具体的な地域を対象にした調査研究を実施した。前者では、文化庁の行う「採掘・製造・流通・往来および居住に関連する文化的景観の保護に関する調査研究」に係わる業務を企画競争を経て受託し、二次調査対象を選定する作業に協力した。一方、具体的な研究対象地域は高知県内の四万十川流域とし、流域の文化的景観の特徴やその保護策について研究を進めた。
--------	---

【担当部課】	文化遺産部 景観研究室	【事業責任者】	主任研究員 内田和伸
【スタッフ】	高瀬要一 窪寺茂 清水重敦 吉川聡 山中敏史 中島義晴 島田敏男 栗野隆 黒坂貴裕 村上隆 高妻洋成 宮城俊作 (奈良女子大学)		

【年度実績概要】	文化庁は、平成 12 年度から平成 15 年度にかけて「農林水産業に関連する文化的景観の保存・整備・活用に関する調査研究」を実施しており、同文化的景観については学術的な分析及び価値評価の観点が確定している。これに続く形で文化庁は、農林水産業関連以外の文化的景観について「採掘・製造・流通・往来及び居住に関連する文化的景観の保護に関する調査研究」を実施することとなった。この調査に係わる業務を当研究所が受託し、平成 18 年度の報告書を作成した。全国から集めた一次調査対象物件約 2000 ヶ所の文字データと写真データをデータベース化して整理し、二次調査対象を選定するための資料作成などを行った。この業務を通して文化的景観に関する基礎資料を蓄積し、景観の類型に関する研究の端緒を得ることができた。 平成 18 年度からの中期計画の中で取り組む文化的景観の調査研究対象を高知県内の四万十川流域とし、1 市 4 町の調査を行った。そのうち、四万十市・梶原町については文化的景観保存活用事業として文化庁の補助事業が開始され、それぞれの調査を当研究所が受託し、平成 18 年度報告書を作成した。四万十市では四万十川で行われる伝統漁法、沈下橋の景観などの現地調査を行った。梶原町では、お遍路さんを茶で接待するためなどに使われた茶堂という四阿風仏堂の景観調査、坂本龍馬らが脱藩するのに通ったという「脱藩の道」(梶原街道)の現地調査、棚田オーナー制度発祥の地となった神在居の棚田の現地調査を行った。
【実績値】	報告書 3 件 (①～③) 文化的景観約 2000 ヶ所の一次調査対象地の文字データと写真データをファイルメーカーに入力、整理した。 論文等数 1 件 (④)
【年度決算見込額】	4,989 千円 (受託研究分)

【備考】	①「平成 18 年度採掘・製造・流通・往来および居住に関連する文化的景観の保護に関する調査研究報告書」文化庁文化財部記念物課 2007.3 ②「平成 18 年度四万十川(四万十市)の文化的景観保存活用事業報告書(現況調査編)」四万十市 2007.3 ③「平成 18 年度梶原町の文化的景観保存活用事業報告書(現況調査編)」梶原町 2007.3 ④内田和伸「四万十川流域の文化的景観」『奈良文化財研究所紀要 2007』2007.6
------	---

当該事務または事業の実績に関する自己点検評価

1. 定性的評価

観点	適時性	継続性	発展性			
判定	A	A	A			
備考 適時性：文化庁で一次調査、四万十市・梶原町で国庫補助事業がはじまるところをそれぞれ受託調査として研究を進めた 継続性：文化庁・四万十市・梶原町のそれぞれで文化的景観調査は受託調査として継続の見込み 発展性：全国各地の文化的景観保護施策への応用が期待できる						

2. 定量的評価

観点	論文数	発表件数				
判定	A	A				
備考						

3. 実績の総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	定性的評価、定量的評価において全ての項目がAであることから総合的評価をAとした。

4. 当年度における中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	当初の予定通り事業を実施できたことから順調であると判断した。

業務実績書

中期計画の項目 (I 1 (1) ①) (I 1 (1) ④)	文化財保護法の一部改正に伴い新たに保護対象となった文化的景観、民俗技術に関する基礎的・体系的な調査・研究を実施し、今後の指定をはじめとする保護施策に関する資料と指針を提供する。 我が国の風俗慣習、民俗芸能、民俗技術など無形民俗文化財の現在における伝承の実態、伝承組織、公開のあり方等を明らかにするとともに、各地の保存団体や保護行政担当者等とこれら研究成果及び問題意識の共有化を図り、「無形民俗文化財の映像記録作成ガイドライン(仮称)」等の指針を作成し公表する。
---	---

【事業名称】	民俗技術に関する調査・資料収集 (I 1 (1) ①イ) 無形民俗文化財の保存・活用に関する調査研究 (I 1 (1) ④)
--------	--

<p>【事業概要】</p> <p>風俗慣習、民俗芸能、民俗技術など無形民俗文化財の現在における伝承の実態、伝承組織、公開のあり方等についての全国的調査研究を行い、その成果をデータベースとして構築する。さらに研究協議会の開催を通じて各地の保存団体や保護行政担当者等とこれら研究成果及び問題意識の共有化を図り、「無形民俗文化財の映像記録作成ガイドライン(仮称)」等の、具体的保護施策の実施に資する指針を作成し公表する。さらに、韓国等との研究交流を積極的に実施し、無形遺産分野における国際協力体制の充実に資する。</p> <p>また、文化財保護法の一部改正に伴い新たに保護対象となった民俗技術に関する基礎的な調査・研究を実施し、今後の指定をはじめとする保護施策に資するデータを提供する。</p>
--

【担当部課】	無形文化遺産部	【事業責任者】	無形民俗文化財研究室長 宮田繁幸
【スタッフ】	俵木悟 (無形文化遺産部)、大島暁雄、服部比呂美 (客員研究員)		

<p>【年度実績概要】</p> <p>現代における民俗芸能の伝承活動のユニークな試みとして、中国地方の神楽を取り上げ、広島県・島根県で盛んになっている「スーパー神楽」等と呼ばれる舞台公演の例として、島根県出雲市で開催された競演大会を調査した。あわせて同地域で行われながら、競演大会には参加せず地域での式年奉納の様式を守っている大元神楽の事例も比較対象として調査した。また岡山県の備中神楽が近年、都市部の民間施設を利用して稽古および定期公演を行っており、伝統的な演目だけでなく、新たな演目を創作するなどの活動も行っている。この事例についても現地調査を行った。また千葉県館山市・南房総市で伝承されるミノコドリについて、この事例が国の記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財に選択されたことを受け、選択の過程が現地に及ぼす影響を考察すべく、対象となっている館山市波左間、および南房総市川口のミノコドリについても現地調査を行ったほか、同事例の類例と考えられる事例についても現地調査を行った。</p> <p>公開の実態調査としては、関東、近畿・東海・北陸、中国・四国、及び九州の各ブロック別民俗芸能大会、地域伝統芸能全国フェスティバル、等の公開確認調査、犬山祭における常設展示施設調査を実施した。</p> <p>新たに無形の民俗文化財の対象となった民俗技術の伝承状況の調査としては、七夕馬の製作技術の調査を行った。事例として、千葉県茂原市、福島県いわき市の七夕馬製作について現地調査を行った。両事例とも、地域社会において七夕馬を製作する技術は伝承が困難になっており、地域博物館における体験学習などを通して伝承が保証されている実態が明らかになった。調査の成果は『無形文化遺産研究報告』等で報告した。</p> <p>毎年開催してきた民俗芸能研究協議会を引き継ぎ、新たに無形民俗文化財研究協議会と改称し、その第 1 回を「民俗技術の保護をめぐる」をテーマとして 2006 年 11 月 22 日に開催した。その成果は報告書として刊行し、関係者に配布するとともに、HP 上で広く一般に公開している。また、「無形の民俗文化財映像記録作成」小協議会を 4 回開催した。その成果の一部は『無形文化遺産研究報告』で報告した。</p>
--

【実績値】
論文等掲載数 2 件 (1, 2)
研究会等発表件数 2 件 (3, 4)
<参考指標>
報告書刊行 11 件 (5)

【年度決算見込額】
3,255 千円

<p>【備考】</p> <ol style="list-style-type: none"> 宮田繁幸 「無形文化遺産保護における国際的枠組み形成」 『無形文化遺産研究報告』1 2007.03 俵木悟 「無形民俗文化財映像記録の有効な保存・活用のための提言—情報の共有と開かれた利用の実現に向けて—」 『無形文化遺産研究報告』1 2007.03 宮田繁幸 「無形文化遺産保護条約と日本の芸能」 楽劇学会第 54 回例会 東京芸術大学 2006.12.13 俵木悟 「東京文化財研究所の無形文化遺産保護のための取り組み」 第 30 回文化財の保存および修復に関する国際研究集会 東京文化財研究所 2007.02.15 『第 1 回無形民俗文化財研究協議会報告書』 2007.03

当該事務または事業の実績に関する自己点検評価

1. 定性的評価

観 点	適時性	発展性	効率性	継続性		
判 定	A	A	A	A		
備考						

2. 定量的評価

観 点	論文等掲載数	研究会等発表件数				
判 定	A	A				
備考						

3. 実績の総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	本年度は、新規中期計画の一年目として、新たな調査研究をスタートさせた。無形民俗文化財研究協議会では、新たに国の指定・選択になったと同時に、無形文化遺産部の新規の研究対象となった民俗技術をいち早く取り上げた。民俗技術に関して関係者が一堂に会して議論する初めての機会となり、大きな反響を得た。民俗技術を対象とした調査研究にも新たに着手した。また従来の活動との継続という意味では、これまでの調査研究活動を総括して国際シンポジウムで報告することによって対外的にアピールすることができた。また、来年度の刊行を目指して進めている映像記録作成の手引書づくりも順調に進展している。以上の状況を総合的に判断して、Aと判定した。

4. 当年度における中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	本調査研究は、年度当初の計画通り実施されており、目的を順調に達成した。調査研究活動については、今後もこのペースを維持し、協議会についてはこれまで以上に緊急の課題に対応するという視点からテーマ設定をしたいと考えている。映像記録作成の手引書については来年度内の刊行を目指す。

業務実績書

中期計画の項目 (I 1(1)②i)	我が国の有形文化財及びそれに関わる諸外国の文化財に関し、以下の課題に重点的に取り組む。 i 日本を含む東アジア地域における美術の価値形成の多様性の解明
-----------------------	--

【事業名称】	東アジアの美術に関する資料学的研究 (I 1 (1) ②ア)
--------	--------------------------------

【事業概要】	日本をふくむ東アジア地域の美術を対象に、人とモノとが複雑に絡み合って多様に展開する価値形成のしくみを解明することを目指す。研究にあたっては、より質の高い資料の提示が求められる時勢に対応して、新しい技術、精度、信頼性、網羅性など必要な条件を満たす、これからの美術資料のあり方や可能性を探り、資料の収集・蓄積・公表等においてそれを具体的に実現することに留意している。
--------	---

【担当部課】	美術部	【事業責任者】	美術部長 中野照男
--------	-----	---------	-----------

【スタッフ】	田中淳、津田徹英、塩谷純、綿田稔 (以上、美術部) 山梨絵美子、勝木言一郎、皿井舞、江村知子 (以上、企画情報部) 相澤正彦 (客員研究員)
--------	--

【年度実績概要】	(1) 情報資料の収集のための調査：龍華寺（神奈川県）蔵菩薩半跏像および金蔵寺（兵庫県）蔵阿彌陀如来坐像をとりあげて調査・撮影を行った（津田）。また予備的に、土佐光吉筆「曾我物語図屏風」（鳥取県・渡辺美術館蔵）の調査（相澤・江村）、個人（東京都）蔵の室町〜江戸時代初期の絵画四点の調査（綿田）を行った。 (2) 美術史研究のためのコンテンツの形成：企画情報部のモノクロ写真データベースへの情報登録に協力したほか、室町時代の絵師宗湛に関する資料を収集整理して詳細な年譜を制作した（綿田）。 (3) 研究会の開催：折々の美術部研究会において研究経過・成果を発表したほか、美術部オープンレクチャーを本研究と関連させ、「人とモノの力学」というテーマのもとに開催した。 (4) 報告書の刊行：龍華寺蔵菩薩半跏像を対象として、『龍華寺蔵菩薩半跏像-美術研究作品資料-第四冊』を出版刊行した。本像は発見当時、首、胴、両腕、脚部、足先が断絶していた。それらの詳細な画像情報や調書は、天平時代脱活乾漆造技法の解明にとって、貴重な資料である。そこで本報告書においては、修理後の情報とともに修理前の情報を極力掲載することを旨とした。
【実績値】	学会誌等への掲載論文数2件 (①②) 学会等での発表件数7件 (③〜⑨) 報告書刊行数1件 (⑩)
【年度決算見込額】	8,825千円

【備考】	① 綿田稔「雪舟入明補遺-シンポジウム報告と「破墨山水図」のこと」 『天開圖畫』6 2006.9 ② 綿田稔「雪舟自序を読む」 『雪舟等楊-「雪舟への旅」展 研究図録』2006.12 ③ 中野照男「大谷探検隊将来衆人奏楽図 -図像の再検討と光学的・科学的調査による知見-」 総合研究会 東京文化財研究所セミナー室 2006.6.13 ④ 皿井舞「10世紀の造寺造仏」 第40回美術部オープンレクチャー 東京文化財研究所セミナー室 2006.10.27 ⑤ 綿田稔「雪舟と宗湛」 第40回美術部オープンレクチャー 東京文化財研究所セミナー室 2006.10.28 ⑥ 綿田稔「雪舟と山口（江戸時代篇）」 「雪舟への旅」展連続講座 山口県立美術館講座室 2006.11.25 ⑦ 江村知子「曾我物語図の系譜および土佐派の物語絵について-宗達、光琳へとつづく絵画表現の水脈-」 美術部研究会 美術部研究会室 2006.12.18 ⑧ 津田徹英「横浜・龍華寺蔵 菩薩半跏像をめぐる知見」 美術部研究会 美術部研究会室 2007.2.7 ⑨ 皿井舞「平安時代前期の工房と上醍醐の造像」 美術部研究会 美術部研究会室 2007.2.28 ⑩ 『龍華寺蔵菩薩半跏像-美術研究作品資料-第四冊』 東京文化財研究所 2007.3
------	--

当該事務または事業の実績に関する自己点検評価

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	継続性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
備考						

2. 定量的評価

観点	論文等掲載数	発表件数	報告書刊行数			
判定	A	A	A			
備考						

3. 実績の総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	文化財の保存と活用の現場とは切り離すことのできない「価値」の問題に踏み込み、なおかつ、それを念頭に置きながらあくまでも「基礎的」な資料を構築・提示しようとしている。計画初年度としては十分な成果を得られたため、Aと判定した。

4. 当年度における中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	今年度は講師との日程調整がうまくいかず、ミニシンポジウムを開催することができなかったが、全般的には計画通りに進捗したと考える。次年度は外部との研究交流の機会を増やしつつ、次々年度以降の報告書についても具体的に計画をたて、その実現に向けた調査研究・資料収集・データ整理を継続的に行っていきたい。

業務実績書

中期計画の項目 (I 1 (1) ② ii)	我が国の有形文化財及びそれに関わる諸外国の文化財に関し、以下の課題に重点的に取り組む。 ii 我が国における近現代美術の歴史の解明
---------------------------	--

【事業名称】	近現代美術に関する総合的研究 (I 1 (1) ②イ)
--------	-----------------------------

【事業概要】	多様化する現代美術の動向の調査研究を含め、日本近代美術の研究資料のあり方、研究の手法の開発、研究成果の公開の仕方を研究し、文化財行政に寄与することを目的としている。そのため、具体的には、第1にこれまで未公開の基礎資料の収集整理の上、データ化等の公開にむけた調査研究を行う。第2に資料にもとづく研究協議、論文等の研究成果の公開を進める。
--------	---

【担当部課】	美術部	【事業責任者】	黒田記念近代現代美術研究室長 田中淳
--------	-----	---------	--------------------

【スタッフ】	塩谷 純、小林 未央子 (以上美術部)、山梨 絵美子 (企画情報部)、青木 茂 (客員研究員)
--------	---

【年度実績概要】	<p>本年度の事業実績の下記の2項である。</p> <p>1 未公開資料の収集整理とデータ化にむけた調査研究。 本年度は、下記の3件の調査研究をおこなうことができた。</p> <p>(1) 黒田清輝の著述文献の再検証を目的に、平成13年度より継続して収集調査してきたが、これにより既刊の著述集『絵画の将来』(中央公論美術出版、昭和58年)に未収録の著述を集成した『黒田清輝著述集』を報告書として刊行することができた。</p> <p>(2) 平成18年2月に黒田清輝夫人である黒田照子の御遺族である金子家から寄贈を受けた黒田清輝関係写真等の資料をデータ化し、保存公開にむけた準備をすすめることができた。</p> <p>(3) 笹木繁男氏主宰現代美術資料センター寄贈資料のうち、平成17年度に報告書『現代美術資料センター寄贈資料目録 画廊関連データ』(CD-ROM)につづく研究として、作家別資料の整理作業に着手することができた。</p> <p>2 資料にもとづく研究協議、論文等の研究成果の公開推進。 本年度は、平成17年度に刊行した報告書『昭和期美術展覧会出品目録』の成果をふまえて、これにもとづく研究論文集『昭和期美術展覧会の研究』(仮称)の準備作業に入り、あわせて他機関の研究者の参加を仰ぎ、その問題点等を積極的に協議するための研究協議会を開催することができた。同協議会は、平成18年9月28日に当研究所において開催し、参加者は下記の通りである。大谷省吾 (東京国立近代美術館)・河田明久 (早稲田大学)・田中修二 (大分大学)・藤井素彦 (高岡市美術館)・森 登 (中央公論美術出版)・柴田 卓 (キュリオ・エディターズ・スタジオ) 田中 淳・山梨絵美子・塩谷 純 (以上、東京文化財研究所)。</p>
【実績値】	<p>研究会等発表 3件 (①～③)</p> <p>論文掲載数 3件 (④～⑥)</p> <p>報告書刊行 1件 (⑦)</p>
【年度決算見込額】	13,467千円

【備考】	<p>① 田中淳「絵画の家郷」、京都工芸繊維大学・京都国立近代美術館共同シンポジウム「1930年代日本の基層文化一試みとしての<伝統>」、京都国立近代美術館、2006.8.19</p> <p>② 田中淳『「画家がいる「場所」」のその後と現在について』、九州大学文学部、2007.1.18</p> <p>③ 塩谷純「川端玉章の研究」、美術部研究会 東京文化財研究所 2007.3.28</p> <p>④ 田中淳「絵画の重さについて—『場からの創出』という問題のための断章」『佐川晃司展—場からの創出』図録 豊田市美術館 2006.8</p> <p>⑤ 田中淳「後期印象派—考—1912年前後を中心に」『美術研究』390号 2007.01</p> <p>⑥ 塩谷純「冨田の“腹芸”、雅邦の“心持”」河野元昭先生退官記念論文集編集委員会『美術史家、大いに笑う 河野元昭先生のための日本美術史論集』ブリュッケ 2006.4</p> <p>⑦ 『黒田清輝著述集』東京文化財研究所 2007.3</p>
------	---

当該事務または事業の実績に関する自己点検評価

1. 定性的評価

観 点	適時性	独創性	発展性	継続性	正確性	
判 定	A	A	A	A	A	
備考						

2. 定量的評価

観 点	研究会等発表数	論文掲載数	報告書刊行数			
判 定	A	A	A			
備考						

3. 実績の総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	未公開資料の収集整理とデータ化という点からは、『黒田清輝著述集』を刊行できたことは、これまでの研究調査による資料収集の集大成として評価されるべきであると考え。また、資料にもとづく研究協議、論文等の研究成果の公開推進という点では、 中期計画にあげた研究成果報告書『昭和期美術展覧会の研究』にむけて、研究協議会を開催することができ、その基盤作りができたことを評価したい。ただし、本研究協議会においてその方向性、内容、構成等など、まだ協議尽くすことができなかった点は、改善すべき点として次年度の課題として引き続き協議をかさね、決定したと考える。

4. 当年度における中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	全般的に中期計画のとおり実施しており、継続して次年度に課題を残す部分もあったが、順調に進捗していると判断した。

業務実績書

中期計画の項目 (I 1 (1)②iii)	我が国の有形文化財及びそれに関わる諸外国の文化財に関し、以下の課題に重点的に取り組む。 iii 美術や文化財に対する理解を深めるための美術の創作のプロセスの解明
--------------------------	---

【事業名称】	美術の技法・材料に関する広領域的研究 (I 1 (1) ②ウ)
--------	---------------------------------

【事業概要】	この研究では、文化財にかかわる諸分野との提携によって、美術作品の多角的研究を目指す。具体的には美術作品が基盤としている材料や用いられた技法、制作の過程・作品の成り立ち、生成されてから今日にまでそれがどのように受容され、あるいは伝来してきたか等を、関係の文献史料や、あるいは直接、作品に対しての科学的・光学的手法（X線透過撮影、蛍光X線非破壊分析、赤外線撮影など）による分析をも援用しながら解明し、美術作品を考究していくことを目的としている。
--------	--

【担当部課】	美術部	【事業責任者】	広領域研究室長 津田徹英
--------	-----	---------	--------------

【スタッフ】	中野照男、田中淳、塩谷純、綿田稔（以上、美術部）、 山梨絵美子、勝木言一郎、皿井舞、江村知子（以上、企画情報部）
--------	---

【年度実績概要】	<p>本年度の実績は以下の通りである。</p> <p>1) 作品の調査・研究</p> <p>① 仏教彫刻の調査・研究</p> <p>ア) 鎌倉時代の善光寺式模刻像の調査</p> <ul style="list-style-type: none"> ・木型の可能性が考えられる尊像の調査（千葉・東光院観音菩薩立像） ・同一型から鋳造されたと考えられる尊像の調査（東京国立博物館、茨城・大乘寺、埼玉・龍高寺、長野・筑北村八木区、埼玉・天宗寺の各、阿彌陀如来立像） <p>イ) 天平時代の脱活乾漆像の調査（香川・願興寺観音菩薩坐像など）</p> <p>ロ) 鎌倉末・南北朝時代の金泥塗像の調査（埼玉・長福寺阿彌陀如来坐像、千葉・常敬寺阿彌陀如来坐像）</p> <p>② 近代絵画の調査・研究</p> <ul style="list-style-type: none"> ・京都国立近代美術館蔵《卓上静物》1928年作、《横たわる裸女B》1928年作 ・芦屋市立美術館蔵《ソファの裸女》1930年（ガラス絵）、《裸女（赤いバック）》1930年（ガラス絵） <p>2) 彩色関係データ（語彙・史料編）の集積とホームページによる公開</p> <p>美術工芸品の彩色を考えてゆくうえで、史料にあらわれた関係語彙とその使用例を総覧することを目的に彩色関係資料データベース（語彙・史料編）のデータ集積をおこなった。集積に際しては公刊史料（活字本）をもとに、その中から彩色関係の語彙の抽出につとめ、分類し、奈良時代史料にあらわれた彩色語彙データベースをホームページにおいて公開するとともに、逐次、更新に努めた。</p>
【実績値】	<p>彩色関係資料データベース 入力件数 1,170件</p> <p>論文掲載数 1件 ①</p> <p>発表件数 2件 ② ③</p>
【年度決算見込額】	5,186千円

【備考】	<p>①津田徹英「研究資料 善光寺式 阿彌陀如来像ならびに観音菩薩像」『美術研究』390 2006.3</p> <p>②津田徹英「三国をめぐる中世の仏教世界観とその造形への視座」美術史学会全国大会招待発表、名古屋大学 2006.5.27.</p> <p>③津田徹英「善光寺式阿彌陀如来像—仏像そのものを原型として模刻増殖する作例の紹介—」美術部研究会 2006.6.28.</p>
------	--

当該事務または事業の実績に関する自己点検評価

1. 定性的評価

観 点	適時性	独創性	発展性	継続性	正確性	
判 定	A	A	A	A	A	
備考						

2. 定量的評価

観 点	論文掲載数	発表件数	データ集積数			
判 定	A	A	A			
備考						

3. 実績の総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等					
A	美術や文化財に対する理解を深めるための美術の創作のプロセスの解明を行うべく、実作例と史料の双方からアプローチを行っている。計画初年度としては十分な成果を得られたため、Aと判断した					

4. 当年度における中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等					
順調	一般的に計画通りに進捗したと考える。これらは当該研究の次年度以降における一層の深化が期待でき、次年度も計画的に調査研究・史料収集・データ整理を継続したい。					

業務実績書

中期計画の項目 (I 1 (1)② iv)	我が国の有形文化財及びそれに関わる諸外国の文化財に関し、諸課題に重点的に取り組む。
--------------------------	---

【事業名称】	古都所在寺社の歴史資料等に関する調査研究 (I 1 (1) ② エ)
--------	------------------------------------

【事業概要】

古都に所在する寺社、特に南都の興福寺、東大寺、薬師寺、唐招提寺や、京都の高山寺、滋賀の石山寺など、世界文化遺産に登録されているような大寺社を主たる調査研究対象として、それら古寺社が所蔵している古文書、古記録、聖教、経巻、版木などの歴史資料や書跡資料を継続的に、かつ悉皆的に整理、写真撮影、調書作成などの調査を行い、現存資料の実態の究明、把握に努め、その調査成果を目録、データベース等の方法により公開し、重要資料については、翻刻を行い紹介する。また書跡資料の記載内容の分析から、各寺社伝来の文化財の歴史的性格と個別的特徴を研究し、日本の歴史、文化の研究に資する。調査にあたって撮影した写真は焼き付けを作成し、研究者などの研究に供する。

本研究は、以下の如き理念を持っている。日本の古都においては、記念工作物等、建造物、史跡等の文化遺産自身が、多くの歴史資料等を所蔵している。それらの資料を継続的・悉皆的に調査研究することは、文化遺産を総合的に調査研究するために、さらには、それが所在する古都、ひいては日本文化の歴史的特質を究明するために必須の作業である。そのため、着実に中断なく、精確に全容を把握する調査を意図している。したがって調査研究の方法は、その改良も試みているが、根本的には独創性などの新規な観点のみでなく、精確なデータの提供を意図している。

【担当部課】	文化遺産部	【事業責任者】	主任研究員 吉川聡
【スタッフ】	高瀬要一、渡辺晃宏、馬場基、市大樹、山本崇、浅野啓介、綾村宏 (客員研究員)		

【年度実績概要】

本年度は、興福寺・薬師寺・東大寺・唐招提寺、さらに高山寺所蔵の書跡資料についておこなった。興福寺調査は現在、従来把握されていなかった函について整理を進めている。2006年度は、第89函・第96函～第102函について、函番号をつけ、目録データをパソコンに入力し、一部は調書を作成した。近世寺院史料として興味深いものや、中世の経典などを把握できた。写真は第82函等を撮影している。薬師寺は、筆筒である第29函と、第31函～第45函の調書作成をおこなった。写真は第24函を撮影している。また、薬師寺典籍文書データベースはデータを入力・修正すると共に、企画調整部文化財情報研究室がおこなったソフトの改善に協力し、その体裁を改めた。そして、第1函1号黒草紙・その紙背文書、第1函10号新黒双紙については影印・翻刻を作成し、『黒草紙・新黒双紙(薬師寺所蔵)』として刊行した。中世薬師寺研究の基礎史料として活用できるものである。

東大寺は、東大寺図書館収蔵庫第4号室収蔵の新修東大寺文書聖教の調査を、科学研究費補助金も充当して実施した。主に中村準一寄贈文書を調査し、第15函の目録データをパソコンに入力し、一部写真撮影をおこなった。江戸時代後期から明治初年にかけての興福寺関係文書が多い。唐招提寺所蔵資料については、惣倉所在の近代書類を調査している。さらに、高山寺の調査を実施し、第309函・310函の調書作成・写真撮影をおこなった。高山寺調査の成果は、高山寺典籍文書総合調査団編集の目録に掲載すべく、現在準備を進めている。

また奈文研所蔵の資料については、「関野貞日記」の翻刻作業を進めているところである。

その他、調査協力の依頼を受けて、滋賀県石山寺聖教調査や、京都市大覚寺文化財総合調査、文化庁依頼の醍醐寺聖教調査、奈良市教育委員会依頼の氷室神社大宮家文書調査などに協力した。そのうち大宮家文書に関しては、その調査成果の一部を「大宮家文書の原本調査から」と題する文章として、『奈良文化財研究所紀要2007』に掲載した。またその文書目録は奈良市より、2006年度に『奈良市歴史資料調査報告書(23)』として刊行されるに至っている。

【実績値】

論文等数2件 (刊行図書1件①、論文1件②、発表件数1件③)
 収集資料点数 興福寺：写真撮影資料点数342点、調査及びデータ入力点数293点
 薬師寺：調書作成資料点数371点、写真撮影資料点数15点、データ入力点数224点
 東大寺：調査及びデータ入力資料点数2182点、写真撮影資料点数455点

【年度決算見込額】

12,362千円

【備考】

- ① 奈良文化財研究所 『黒草紙・新黒双紙(薬師寺所蔵)』『奈良文化財研究所史料第78冊』2007.3
- ② 吉川 聡・桑原文子 「大宮家文書の原本調査から」『奈良文化財研究所紀要2007』2007.6
- ③ 綾村 宏 「経巻、聖教と函」奈良文化財研究所退官記念講演会2006.4

当該事務または事業の実績に関する自己点検評価

1. 定性的評価

観点	正確性	適時性	継続性	有用性		
判定	A	A	A	A		
備考 正確性：調査における作成調書・データベースの内容 適時性：現在本調査をおこなう意義 継続性：本調査研究が書跡資料所蔵機関との協力により、持続的、悉皆的におこなっている意義 有用性：調査研究の成果が、所蔵者、研究者やその他の人々に取り役に立つかの視点						

2. 定量的評価

観点	調査対象箇所数	論文等数	発表件数	データ入力件数		
判定	A	A	A	A		
備考						

3. 実績の総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	興福寺、東大寺、唐招提寺、薬師寺の調査は計画通り実施した。薬師寺は『黒草紙・新黒双紙（薬師寺所蔵）』を刊行した。また、高山寺の調査を実施することができた。さらに、奈良市の調査に協力した大宮家文書調査については、奈良市から報告書が刊行されるに至り、そしてその成果の一部は別に、吉川聡・桑原文子「大宮家文書の原本調査から」（『奈良文化財研究所紀要2007』）として公表した。以上の成果を総合的に判定してAとした。

4. 当年度における中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	調査研究事業は、まずは年度計画通り堅調に実現できたと考える。また、高山寺の調査も実施することができた。高山寺については、調査結果の公表が今後の課題となろう。他の寺社の調査研究は、今後もこのペースで進める必要がある。その成果の公表については、当年度は『黒草紙・新黒双紙（薬師寺所蔵）』を出版したが、今後は他の寺社についても推進する必要がある。

業務実績書

中期計画の項目 (I1(1)②v)	わが国の有形文化財及びそれに関わる諸外国の文化財に関し、諸課題に重点的に取り組む。
----------------------	---

【事業名称】	歴史的建造物の保存・修復・活用の実践的研究(I1(1)②a)
--------	--------------------------------

【事業概要】	文化財建造物の保存・修復・活用に向けた歴史的建造物、伝統的建造物群及び近代化遺産等に関する基礎データを蓄積するため、高知県中芸地区森林鉄道遺産調査(18・19年度継続)及び塩尻市重文堀内家住宅の調査を受託業務として実施したほか、国宝三仏寺奥院(投入堂)及び出雲大社境外諸社殿の現地調査をおこない、それぞれ成果を報告書等に取り纏めた。また、研究所保管資料(建造物写真乾板と建造物現状変更説明)を順次整理してデジタルデータ化等の作業を行ったほか、今年度に立ち上げた古代建築の技術に関する研究では、資料の収集・整理とともに定めたテーマに基づく研究を行い、年度成果を開催した研究集会で発表した。
--------	---

【担当部課】	文化財遺産部	【事業責任者】	建造物研究室長 窪寺茂
--------	--------	---------	-------------

【スタッフ】	島田敏男、箱崎和久、清水重敦、黒坂貴裕、金井健、清永洋平、西田紀子、大林潤、栗野隆、吉川聡、脇谷草一郎、中村一郎、村田健一(文化庁)、田中泉・金子隆之・山田 宏・山下秀樹(以上奈良県教育委員会)、春日井道彦・加藤雅大(以上文化財建造物保存技術協会)、木村勉(長岡造形大学)、黒田龍二(神戸大学)、清水真一(東京藝術大学)、田中淡・福田美穂・山岸常人(以上京都大学)、富島義幸(滋賀県立大学)、鳴海洋博(和歌山県文化財センター)、藤井恵介(東京大学)、藤田盟児(広島国際大学)、渡邊晶(竹中大工道具館)
--------	--

【年度実績概要】	<p>受託研究として行った高知県中芸地区森林鉄道遺産調査では、隧道・橋梁などについて調査作成・実測・写真撮影のほか、関係資料の収集整理と分析をおこなった。堀内家住宅調査では、建造物9棟の実測・聞き取り・史料調査、庭園調査、写真撮影等の実施と、対象物件の評価、修復・活用計画の策定を行い、成果を報告書に取り纏めた。以上の受託業務については別紙参照(No.7-2、7-3)。国宝三仏寺奥院(投入堂)の保存修理を契機として、建物と附指定古材を対象とした塗装・飾金具調査を行い、成果を修理事業で刊行された工事報告書に掲載した。また、文化財未指定物件である出雲大社境外諸社殿12棟の建築史的特徴を把握するための現地調査(調査作成・実測・写真撮影等)を行った。</p> <p>以上の各調査成果については、上記以外に『奈良文化財研究所紀要2007』に論文を掲載し、考察を加えた。なお、関連報告書として18年度以前に実施した鳥取県近代和風建築総合調査(県事業・編著協力)とベトナム・ドゥオンラム村集落保存対策調査の報告書がある。</p> <p>研究所保管資料として過去の建造物修理時に撮影された約3万枚の建造物写真乾板と、重要文化財の建造物修理時に作成された現状変更説明資料がある。これらは文化財建造物の保存修理を推し進めるために有効性の高い一次資料で、これを公表する作業(デジタルデータ化及びデータ化)を近年継続している。写真乾板については写真画像掲載の全5冊の目録刊行企画に沿い、今年度は第4巻(兵庫県～和歌山県)を刊行した。現状変更説明については、1971年～1973年分を本文編と図版編に分けて刊行した。</p> <p>今年度に立ち上げた古代建築の技術に関する再検証を行う研究は2010年度まで継続するが、本年度は2階建構造の建築に関する研究をテーマの中心に据え、既往研究論文・建築資料等を収集しながら内容の再検証を行い、成果としての中間報告を2月に開催した第1回目の研究集会で発表するとともに、本研究の方向性について研究協力者と議論し、その記録を作成した。</p> <p>このほか、現在工事中の第一次大極殿正殿復原原施工に関する援助・助言を継続して行っているが、今年度は金具を中心とした詳細設計などの検討を行った。</p>
【実績値】	<p>論文等数 17件(公刊図書6件①～⑥、論文等11件⑦～⑰) 発表件数2件(⑱⑲)</p> <p>保管建造物関係資料整理:写真乾板デジタル化936枚、写真乾板デジタルデータ化7,355枚、現状変更資料入力1971年～1973年分</p> <p>古代建築研究資料収集整理:伽藍5件分、建造物60棟分</p> <p>保管建造物資料の外部利用数:乾板写真3件20枚、建造物保存図5件60枚</p>
【年度決算見込額】	20,583千円(受託業務No.7-1、No.7-2 4,526千円を含む)

【備考】	<p>①塩尻市教育委員会『重要文化財堀内家住宅保存活用計画調査報告書』2007.3 ②奈良文化財研究所『ベトナム社会主義共和国 ハタイ省ドゥオンラム村集落調査報告書』2007.3 ③鳥取県教育委員会『鳥取県近代和風建築総合調査報告書』2007.3 ④奈良文化財研究所『国宝・重要文化財建造物写真乾板目録IV 兵庫県～和歌山県』2007.3 ⑤奈良文化財研究所『重要文化財建造物現状変更説明 1971～1973(本文編)』2006.12 ⑥奈良文化財研究所『重要文化財建造物現状変更説明 1971～1973(図版編)』2006.12 ⑦島田敏男「高知県中芸地区森林鉄道遺産の調査」⑧黒坂貴裕「栄耀普請土蔵の建築技法―塩尻市・重要文化財堀内家住宅の建造物調査から―」⑨栗野隆「塩尻市・堀内家住宅の庭園構成と意匠」⑩窪寺茂「塗装と飾金具、国宝・三仏寺投入堂の荘厳」⑪大林潤「出雲大社境外社の調査」⑫清水重敦・山下秀樹「飛鳥・白鳳期寺院建築における二重構造」⑬山下秀樹・窪寺茂・清水重敦「古代建築における扉の構造と意匠―第一次大極殿復原原の再検証―」(⑦～⑬『奈良文化財研究所紀要2007』2007.6) ⑭窪寺茂「三仏寺奥院の塗装と垂木古口金具」『国宝三仏寺奥院(投入堂)ほか三棟保存修理工事報告書』三佛寺、2006.11 ⑮島田敏男「大極殿の復原検討 古代建築としての大極殿」⑯大林潤「第一次大極殿の屋根瓦」⑰窪寺茂「大極殿の内部装飾」(⑬～⑰『文化庁月報2006年7月号』ぎょうせい、2006.7) ⑱清水重敦「飛鳥・白鳳期寺院金堂における2階建構造」⑲山下秀樹「飛鳥・白鳳期寺院中門における2階建構造」(⑱⑲奈良文化財研究所 第1回古代建築の技術研究会 2007.2)</p>
------	--

当該事務または事業の実績に関する自己点検評価

1. 定性的評価

観 点	必要性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判 定	A	A	A	A	A	A
備 考	必要性：失われつつある歴史遺産の保護を目的とした調査実践。 発展性：多様な調査研究対象への対応に対する評価。 継続性：基礎データの継続的採取と継続的な建造物調査の実行。		独創性：新たな視点による古代建築の再検証、その方法の評価。 効率性：集中的な調査手法と内容の綿密さ 正確性：乾板写真内容の検証作業の徹底による写真同定の評価			

2. 定量的評価

観 点	論文等数	発表件数	乾板写真画像の デジタル化			
判 定	A	A	A			
備 考						

3. 実績の総合的評価

判 定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	定性的評価、定量的評価ともすべての面でAであるため、総合的に評価してAと判断した。

4. 当年度における中期計画の実施状況の確認

判 定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順 調	調査対象内容に違いのある受託調査に対し、これまで蓄積してきた調査手法により委託者の要望に応える成果をあげた。保管資料である建造物関係資料のデジタル化・データ化、古代建築の技術の研究における資料収集や分析・考察作業の双方とも順調な進捗をみた。 今後もこの水準を保持して建造物調査等を継続していきたい。

業務実績書

中期計画の項目 I 1 (1) ③	我が国の古典芸能及び伝統的工芸技術等の無形文化財の伝承実態を把握するとともに、その伝承・公開の基礎となる技法・技術を明らかにする。
----------------------	---

【事業名称】	無形文化財の保存・活用に関する調査研究 (I 1 (1) ③)
--------	---------------------------------

<p>【事業概要】</p> <p>わが国の無形文化財、並びに文化財保存技術の伝承実態を把握し、その保護に資するため、伝承の基礎となる技法・技術の実態や変遷の調査研究、及び資料の収集を行い、現状記録の必要な対象を精査して記録作成をおこなう。</p> <p>また、無形文化遺産分野についての国際的研究交流として、アジア地域を中心とした諸外国の関係機関との具体的な交流を推進するための協議を行う。</p>

【担当部課】	無形文化遺産部	【事業責任者】	部長心得 宮田繁幸
--------	---------	---------	-----------

<p>【スタッフ】</p> <p>鎌倉恵子、高桑いづみ、飯島満、俵木悟、福岡裕子、森下愛子</p>

<p>【年度実績概要】</p> <p>文化財保護委員会が作成した音声資料について調査を行い、善竹弥五郎師の狂言謡、鶴沢清八師の「義太夫節の種類と解説」について、第4回東京文化財研究所総合研究会、及び第1回無形文化遺産部公開学術講座で発表した。</p> <p>岡山県瀬戸市内内の弘法寺遍明院所蔵の鼓胴(旧牛窓町指定文化財)、及び太鼓樽の調査をおこない、『無形文化遺産研究報告』に発表した。無形文化遺産部所蔵の音声資料、明治・大正期の歌舞伎絵はがき・プロマイドを整理し、所蔵一覧等を『無形文化遺産研究報告』に概説した。また、熊本放送局所蔵のSPレコードについて現物調査を行った結果、これまで所在が知られていなかった歌舞伎SP数点が、試聴可能な状態で保管されていることを確認した。</p> <p>選定保存技術「文楽人形鬘・床山」保持者の名越昭司氏、「能楽大鼓(革)制作」保持者の木村幸彦氏から、聞き取り調査を実施した。</p> <p>工芸技術に関しては、染織工芸技術及び陶芸技術に関する先行研究の把握と資料収集をおこない、無形染織文化財の素材と製作技術の科学的分析、陶芸に関する第二次世界大戦後の展覧会の状況について調査研究をおこなった。</p> <p>無形文化財記録作成事業として、近年の伝承に変化が著しい宝生流謡曲について、流儀の最長老今井泰男師による番謡の音声記録を行った。また連続口演の機会が激減している講談について、宝井馬琴師と一龍斎貞水師による実演記録を作成した。</p> <p>12月19日、江戸東京博物館ホールにおいて「1950年代の義太夫節と狂言謡—文化財保護委員会作成の録音資料をめぐって—」と題して第1回無形文化遺産部公開学術講座をおこなった。</p> <p>無形文化遺産保護分野での国際的研究交流として、6月に韓国国立文化財研究所を訪問し、同研究所の映像記録作成事業の現場を調査するとともに、今後の研究交流についての協議を行った。また、9月にはベトナム文化情報研究所を訪問し、同研究所の無形文化遺産分野における保護活動の取り組みを調査するとともに、今後の研究交流に向けての予備的協議を行った。</p>
<p>【実績値】</p> <p>論文等掲載数 4件 (1~4)</p> <p>発表件数 3件 (5~7)</p> <p><参考指標></p> <p>記録作成数 33件 (宝生流謡曲23 講談10)</p> <p>公開講座の開催 1件</p>
<p>【年度決算見込額】</p> <p>7,364千円</p>

<p>【備考】</p> <p>1 高桑いづみ 過渡期の鼓胴その後 『無形文化遺産研究報告』1 2007.03</p> <p>2 飯島満 吉田兵次「とやぶれ」 『無形文化遺産研究報告』1 2007.03</p> <p>3 飯島満 歌舞伎SPレコード(明治大正期) 図版解説 『歌舞伎 研究と批評』38 2007.02</p> <p>4 鎌倉恵子 [聞き書き] 人形浄瑠璃文楽の鬘・床山の世界—名越昭司師に聞く— 『無形文化遺産研究報告』1 2007.03</p> <p>5 飯島満・高桑いづみ「文化財保護委員会作成の無形文化財録音資料をめぐって」 第4回総合研究会 東京文化財研究所セミナー室 2006.12.5</p> <p>6 飯島満「鶴沢清八の義太夫節解説」 第1回無形文化遺産部公開学術講座 江戸東京博物館 2006.12.19</p> <p>7 高桑いづみ「善竹弥五郎の狂言謡」 第1回無形文化遺産部公開学術講座 江戸東京博物館 2006.12.19</p>

当該事務または事業の実績に関する自己点検評価

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	
判定	A	A	A	A	A	
備考						

2. 定量的評価

観点	論文等数	発表数				
判定	A	A				
備考						

3. 実績の総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	プロジェクト1年目で、あらたに文化財保護委員会作成資料の調査、選定保存技術の調査に着手した。このうち文化財保護委員会に関しては調査結果の一部を公開学術講座で公表した。いずれも他の機関が行っていない調査で独創性が強く、公共性も高い。今後も、この調査を継続する予定である。以上の観点を総合してAと判定した。

4. 当年度における中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	調査研究は、その進捗度、内容において一定の水準を維持しつつ、比較的堅調に実現できたと考える。

業務実績書

中期計画の項目 (I1(1)⑤)	平城京、藤原京、飛鳥地域を中心とした我が国及び関連する中国・韓国等諸外国の遺跡の発掘調査並びに共同研究を行うとともに、出土品・遺構の調査・研究及び庭園等に関する基礎的な調査・研究を実施し、それにより古代日本の都城の構造及び建造物の様式並びに瓦・陶磁器・金属器等の手工業生産技術の実態やその変遷過程、庭園等の変遷過程、飛鳥地域の歴史等の解明に寄与する。
---------------------	---

【事業名称】	平城宮跡 東院地区 (第401次) の発掘調査 (I1(1)⑤ア)
--------	-----------------------------------

【事業概要】	<p>平城宮跡東院地区において発掘調査を実施した。調査対象地は、復元公開されている東院庭園の北西部に位置し、東院地区の西半部に当たる。平成18年度～平成22年度の5ヶ年にわたり、東院地区西半部を継続的に調査することで、その様相の把握に努める。</p> <p>調査面積は1711㎡、調査期間は平成18年4月4日～平成18年4月18日、一時中断し、平成18年10月2日から再開して平成18年12月27日に終了した。調査成果は、紀要および現地説明会などで公表した。</p>
--------	---

【担当部課】	都城発掘調査部 平城地区	【事業責任者】	部長 川越俊一
【スタッフ】	深澤芳樹、島田敏男、山本崇、森川実、和田一之輔、牛島茂		

【年度実績概要】	<p>奈良時代の掘立柱建物、掘立柱塀、石組溝などを数多く検出した。区画施設である南北方向の掘立柱塀に注目すると、奈良時代前半と後半とではその位置が異なることが明らかとなった。このことから、東院地区内部の区画のあり方に変化が生じたと考えられることとなる。</p> <p>この掘立柱塀の位置の変化に伴って、建物の様相にも変化が認められる。奈良時代前半では、桁行7間×梁行2間の庇付掘立柱建物や桁行7間×梁行2間の四面庇付掘立柱建物といった大型の東西棟建物が認められる。いっぽう、奈良時代後半では、桁行12間以上×梁行2間の長大な南北棟建物がみられる。このように前半と後半とでは建物の様相が大きく異なることが判明した。さらに、奈良時代後半では南北方向の掘立柱塀を挟んでその東西で建物群の様相がまったく異なる。東側では上記したとおりの長大な南北棟建物が認められるが、西側では7間×7間の大規模な総柱の掘立柱建物がみられるのである。このように様相の異なる建物群を区切るための掘立柱塀は、東院地区内部の重要な区画を限るための施設であると想定することが可能であろう。</p> <p>こうした奈良時代前半と後半の変化には、このような建物や塀の変化に加えて、石組溝の付け替えなども伴うことから、かなり大規模な改作がおこなわれたものと思われる。その背景として聖武天皇による平城遷都を想定することもできよう。</p> <p>東院地区の様相を解明するための手がかりを得ることができた。今後、周辺の調査を継続的に進めていくとともに、それらの成果を踏まえた総合的な検討が必要である。</p>
【実績値】	<p>論文等数4件 (論文1件①、解説等2件②③、その他1件④)</p> <p>発表件数2件 (記者発表1回、現地説明会1回)</p> <p>出土品 瓦類543kg、凝灰岩64kg、土器コンテナ36箱分</p> <p>記録作成数 実測図61枚、写真(4×5)282枚</p>
【年度決算見込額】	131,763千円 (No.9、10の合算額)

【備考】	<p>① 和田一之輔・森川実・深澤芳樹 「東院地区の調査 第401次」『奈良文化財研究所 紀要2007』2007.6</p> <p>② 奈良文化財研究所 「東院地区の調査 平城第401次調査」記者発表資料 2006.12</p> <p>③ 奈良文化財研究所 「東院地区の調査 平城第401次調査」現地説明会資料 2006.12</p> <p>④ 奈良文化財研究所 「平城宮東院地区の調査 平城第401次調査」『奈文研ニュースNo.24』2007.3</p>
------	--

当該事務または事業の実績に関する自己点検評価

1. 定性的評価

観点	適時性	継続性	発展性			
判定	A	A	A			
備考 適時性・・・区画ごとに建物群の様相が異なることが判明した。 継続性・・・東院地区内部の区画に関する基礎資料を得た。 発展性・・・東院地区の利用形態を解明するための基礎資料を得た。						

2. 定量的評価

観点	論文等数	発表件数				
判定	A	A				
備考						

3. 実績の総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	東院地区内部の区画方法や区画を境にして建物の様相が異なるなど利用形態にかかわる基礎資料が得られた。また、調査成果を一般に公開する役割も十分に果たしたとみて、総合的にAと判断した。

4. 当年度における中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	本調査研究は、年度当初の計画通り実施されており、目的を順調に達成した。

業務実績書

中期計画の項目 (I 1 (1) ⑤)	平城京、藤原京、飛鳥地域を中心とした我が国及び関連する中国・韓国等諸外国の遺跡の発掘調査並びに共同研究を行うとともに、出土品・遺構の調査・研究及び庭園等に関する基礎的な調査・研究を実施し、それにより古代日本の都城の構造及び建造物の様式並びに瓦・陶磁器・金属器等の手工業生産技術の実態やその変遷過程、庭園等の変遷過程、飛鳥地域の歴史等の解明に寄与する。
------------------------	---

【事業名称】	平城宮跡 東方官衙地区の調査 (I 1 (1) ⑤ア)
--------	-----------------------------

【事業概要】	<p>第二次大極殿院と東院に挟まれた東方官衙地区を対象として発掘調査を実施した。この地域は、従来一部の発掘調査が行われているが、官衙区画の配置と規模、区画内における建物配置などは不明である。そこで当調査部では、この地区の遺構配置の概要を把握するため、100m内外の試掘的調査区によって、今後数年にわたり調査をすることを計画した。</p> <p>今回の調査はその初回にあたり、幅6mとして、南北115m、東西101mの調査区を設定した。調査は平成19年1月9日より開始し、調査面積は1,296㎡である。</p>
--------	--

【担当部課】	都城発掘調査部 平城地区	【事業責任者】	部長 川越俊一
【スタッフ】	西口壽生、次山淳、浅野啓介、栗野隆、牛嶋茂、中村一郎		

【年度実績概要】	<p>今回の調査地の北では、東西築地 (SC11500) と、その築地の外側に平城宮の基幹排水路 (SD2700、SD3410) を検出しており (第22次調査・第154次調査)、東と西の両側を水路で挟まれた空間に官衙施設が存在すると想定されていた。第154次調査では、築地 (SC11500) は基底部分が5〜6尺内外であったこと、築地中央には出入り口が設けられていたことを確認しているほか、その築地の10尺南には、12尺等間で東西に並ぶ柱穴列を検出し、桁行5間の東西棟建物が対称位置に並ぶものと推定している (SB11540、SB11550)。</p> <p>上記の成果をふまえて発掘調査をおこなった結果、第154次調査で北端のみが確認された官衙は、南限は調査区外にあり、東西は約50m、南北は120mを超える、大きな規模をもつ区画であることが明らかになった。この区画では、北限にあたる築地塀 SC11500 から南側45mのところ築地塀を設けて、空間を区分して利用していることが特徴である。この区画内の北半では、南北に平行して並ぶ東西棟建物 (2棟) を検出したほか、第154次調査で確認された SB11540、SB11550 の柱穴列は、築地塀を後に築地回廊に改作した際に掘られた穴列であることも確認できた。また、区画内の南半では、北端に大型の基壇建物が存在し、その南側には桁行10間以上の長大な南北棟基壇建物を対称に配置しているという調査知見を得た。この区画の性格は、正殿としての大型建物の東西規模の判明をまって検討する必要があると思われる。</p> <p>さらに、第二次大極殿院東外郭の南方にも大型基壇南北棟建物が検出され、基幹排水路 (SD2700) と第二次大極殿院東外郭に挟まれた場所に官衙施設が営まれていたことを確認できたことも大きな成果として指摘できよう。</p>
【実績値】	<p>論文等数3件 (論文1件①、解説等2件②③) 発表件数2件 (記者発表1回、現地説明会1回) 出土品 土器コンテナ95箱、軒丸瓦73点、軒平瓦56点、道具瓦10点、丸・平瓦・磚・凝灰岩コンテナ625箱、木製品コンテナ15箱 (このうち、木簡は160点) 実測図40枚、写真 (4×5) 84枚</p>
【年度決算見込額】	131,763千円 (No.9、10の合算額)

【備考】	<p>① 西口壽生・次山淳・浅野啓介・栗野隆「平城第406次 東方官衙地区の調査」『奈良文化財研究所紀要2007』2007.6 ② 奈良文化財研究所「平城第406次 平城宮第二次大極殿院東方官衙地区の調査 記者発表資料」2007.3 ③ 奈良文化財研究所「平城第406次 平城宮第二次大極殿院東方官衙地区の調査 現地説明会資料」2007.3</p>
------	--

当該事務または事業の実績に関する自己点検評価

1. 定性的評価

観 点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判 定	A	A	A	B	A	A
備考 独創性・・・100m内外の試掘的による調査はこれまで平城宮跡では行わなかった方法であり、かつ官衙区画の概要を捉えることができた 発展性・・・今後の東方官衙地区の調査につながる基礎的知見を得た。						

2. 定量的評価

観 点	論文等数	発表件数				
判 定	A	A				
備考						

3. 実績の総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	東方官衙地区における今回の調査によって、平城宮においても大きな規模を持つ官衙区画を検出し、今後の調査に資する基礎的データとして遺構配置の概要を把握することができた。また、その成果を一般に公開する役割も十分に果たしたと見て、総合的にAと判断した。

4. 当年度における中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	本調査研究は、年度当初の計画通り実施することができた。 また、今後の東方官衙地区の調査をすすめるうえでの基礎資料が提示でき、目的を順調に達成した。

業務実績書

中期計画の項目 (I 1 (1) ⑤)	平城京、藤原京、飛鳥地域を中心とした我が国及び関連する中国・韓国等諸外国の遺跡の発掘調査並びに共同研究を行うとともに、出土品・遺構の調査・研究及び庭園等に関する基礎的な調査・研究を実施し、それにより古代日本の都城の構造及び建造物の様式並びに瓦・陶磁器・金属器等の手工業生産技術の実態やその変遷過程、庭園等の変遷過程、飛鳥地域の歴史等の解明に寄与する。
------------------------	---

【事業名称】	西大寺旧境内 (第404・410・415次) の発掘調査 (I 1 (1) ⑤ア)
--------	---

【事業概要】	<p>本調査は、マンション建設にともなう事前調査で、調査地は、奈良市西大寺本町に所在し、平城京条坊では右京一条三坊八坪・北辺三坊三坪にあたる。調査では、西大寺食堂院の諸施設と一条北大路の確定、右京北辺にかかわる遺構の検出が期待された。</p> <p>調査は、南北約107m、東西59mのL字形の調査区と(第404次・第410次)、建設予定建物の設計変更にともない設けた、2箇所の小トレンチ(第415次)にておこなった。調査期間は、第404次調査が2006年5月24日から8月30日まで、第410次調査が7月31日から10月16日まで、第415次調査が10月24日から31日まで、調査面積は合計1826㎡である。</p>
--------	---

【担当部課】	都城発掘調査部 平城地区	【事業責任者】	部長 川越俊一
--------	--------------	---------	---------

【スタッフ】	渡辺晃宏、神野恵、今井晃樹、大林潤、小池伸彦、林正憲、馬場基、金井健、和田一之輔、森川実、山本崇、島田敏男、深澤芳樹、牛島茂、中村一郎
--------	---

【年度実績概要】	<p>右京一条三坊八坪では、大きく3つの時期の遺構を確認した。</p> <p>奈良時代前半の遺構は、いずれも北で東に(もしくは東で南に)振れるという特徴を持つ。</p> <p>奈良時代後半の遺構として、西大寺食堂院の主要建物を検出した。SB955は東西棟建物の北東部分とみられ、全体の規模は、桁行方向はSB960より推定される中軸で折り返すと約30m(100尺)、梁行方向は約12m(40尺)に復元され、「西大寺資財流記帳(以下資財帳)」にみえる「殿」に等しい。SB960は礎石建ちの東西棟建物。桁行5間、梁行2間の身舎の四面に庇が付く建物と考えられる。全体の規模は、桁行方向約27m(90尺)、梁行方向約15m(50尺)と想定され、「資財帳」の「大炊殿」に比定される。このように、「資財帳」の記載と等しい規模の遺構を検出し、奈良時代後半に造営された西大寺食堂院の位置と伽藍配置の大半が確定した。</p> <p>食堂院の造営は、出土瓦より宝亀年間とみられ、「資財帳」が記された宝亀11年(780)までに完成する。廃絶の時期については、食堂院の主要施設は、8世紀末から9世紀半ばまでに廃絶したと考えられるが、調査区東端で検出した埋壘列の底部から出土した遺物や、遺構検出面を覆う包含層から出土する遺物は10世紀半ばを下限とするため、ごく早い時期に僧の共食の場としての本来の機能を失う一方、貯蔵機能をもつ埋壘列は、その後も存続した可能性がある。</p> <p>平安時代以降の遺構は、排水用の溝や炉跡などを確認したのみで、建物が再建された状況は確認されなかった。</p> <p>このほか、一条北大路は南側溝を検出し、右京北辺三坊三坪は、具体的な利用状況を示す遺構は確認されなかったが、奈良時代前半の区画にともなう溝を検出した。</p> <p>遺物は、井戸SE950を中心に、多種多様な遺物が出土した。なかでも、木簡や施釉瓦磚・土器、製塩土器などが注目される。</p>
【実績値】	<p>論文等数 10件(論文2件①②、解説等5件③～⑦、その他3件⑧～⑩)</p> <p>発表件数 5件(記者発表3回、現地説明会2回)</p> <p>出土品(2007.3現在) 木簡約360点、土器コンテナ約80箱、瓦磚類(軒丸平瓦261点、道具瓦232点、丸平瓦6097.2kg、磚209点、凝灰岩333点)、金属製品77点、木製品約700点、動植物遺体など</p> <p>記録作成数 実測図123枚、写真(4×5)540枚</p>
【年度決算見込額】	32,223千円(受託研究分)

【備考】	<p>①渡辺晃宏、神野恵、今井晃樹、大林潤、小池伸彦、林正憲、馬場基、山本崇「平城第404・410・415次調査 西大寺食堂院・右京北辺の調査」『奈良文化財研究所紀要2007』2007.6 ②渡辺晃宏、神野恵、今井晃樹、大林潤、小池伸彦、林正憲、馬場基、金井健、山本崇、金原正子、大河内隆之「西大寺食堂院・右京北辺発掘調査報告」2007.3 ③奈良文化財研究所「平城第404次調査(西大寺食堂院の調査)記者発表資料」2006.6 ④奈良文化財研究所「平城第404次調査(西大寺食堂院の調査)現地公開資料」2006.6 ⑤奈良文化財研究所「平城第410次調査(西大寺食堂院・北辺坊の調査)記者発表資料」2006.10 ⑥奈良文化財研究所「平城第410次調査(西大寺食堂院・北辺坊の調査)現地説明会資料」2006.10 ⑦奈良文化財研究所「西大寺食堂院跡(平城第404次調査)検出井戸 記者発表資料」2006.11 ⑧奈良文化財研究所「西大寺旧境内食堂院の調査(平城第404次)」『奈文研ニュース』No.22 2006.9 ⑨奈良文化財研究所「西大寺食堂院の井戸」『奈文研ニュース』No.23 2006.12 ⑩奈良文化財研究所「西大寺食堂院などの調査(平城第410次)」『奈文研ニュース』No.23 2006.12</p>
------	--

当該事務または事業の実績に関する自己点検評価

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性			
判定	A	A	A			
備考 適時性…西大寺食堂院の位置と伽藍配置を確定した 独創性…木簡などの遺物を多量に含む井戸を検出した 発展性…西大寺食堂院の位置が確定したことにより研究の進展が期待される						

2. 定量的評価

観点	論文等数	発表件数				
判定	A	A				
備考						

3. 実績の総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	西大寺食堂院の位置と伽藍配置を確定したほか、一条北大路南側溝を検出した。また、検出した井戸からは木簡や製塩土器などの多種多様な遺物が出土し、食堂院の実態を把握するための資料となりうる。以上の成果を評価し、Aと判断した。

4. 当年度における中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	中期計画通り順調に進んでいる

業務実績書

中期計画の項目 (I 1 (1) ⑤)	平城京、藤原京、飛鳥地域を中心とした我が国及び関連する中国・韓国等諸外国の遺跡の発掘調査並びに共同研究を行うとともに、出土品・遺構の調査・研究及び庭園等に関する基礎的な調査・研究を実施し、それにより古代日本の都城の構造及び建造物の様式並びに瓦・陶磁器・金属器等の手工業生産技術の実態やその変遷過程、庭園等の変遷過程、飛鳥地域の歴史等の解明に寄与する。
------------------------	---

【事業名称】	興福寺大乘院（第407次）の発掘調査（I 1 (1) ⑤ア）
--------	--------------------------------

【事業概要】	名勝・旧大乘院庭園を復原するための発掘調査の12年目にあたる。この調査をもって大乘院庭園の中核をなしていた西小池の池岸をすべて発掘したことになり、西小池の池岸の形状や大乘院庭園の造成に関してこれまでの調査の所見をさらに補強する成果が得られた。その概要は以下の実績概要に記す通りである。調査期間は平成18年7月3日～8月9日、調査面積は144 m ² 。
--------	---

【担当部課】	都城発掘調査部 平城地区	【事業責任者】	部長 川越俊一
【スタッフ】	小池伸彦、馬場基、林正憲、金井健		

【年度実績概要】	<p>大乘院は一乗院と並ぶ興福寺の門跡寺院で、室町時代の尋尊による復興により、南都随一と呼ばれた庭園が整備された。1995年度以降、日本ナショナルトラストからの委嘱を受けて、同庭園を復原するための基礎資料を得ることを目的として継続的な発掘調査を進めている。今回の調査地は旧大乘院庭園東大池の西岸に入り江状に残存する現在の西小池部分であり、庭園が存続した江戸時代以前の池岸の形状を確認することが調査の主たる目的であった。</p> <p>各岸のうち、西岸は近代以降の遺物を多量に含む造成土によって形成されるが、北岸、東岸、南岸はいずれもカワラケ混じりの明橙灰色土を積み上げて造成されており、近代以前に形成されたものであることは疑いない。検出した岸の形状はこれまでの所見通り『興福寺旧大乘院庭園図』（1939年模写）に描かれた状況と合致しており、同図の信頼性をあらためて確認できた。なお東岸には北端および中央部に円形を呈した部分があるが、これらはいずれも近代以降に削り込まれたものである。</p> <p>西岸をのぞく各岸の造成時期を示す積極的な根拠はないが、北岸の断面調査の結果、緩やかな暗褐色土のたかまりの上に橙褐色土を一気に積み上げて現況に近い立体的な岸辺をつくりだしている様子がうかがえることから、これを室町時代におこなわれた庭園の大改作とあわせて考えるのが妥当であろう。</p> <p>一方、池底には春日野礫層起源の小礫が一面に露出しており、北端に円形の石組井戸が掘り込まれる。井戸は池の堆積土によって完全に覆われ、また井戸内の埋土は堆積土と異なり、ほとんど遺物を含まない。こうした状況からは井戸の掘削は現在の西小池が整備される室町時代以前に遡るものと推定できる。ただし石組は2段と浅く、上部が破壊された痕跡も残さないことから、そもそも池底に掘削されたものとみられる。すなわち井戸として機能したのではなく、何らかの庭園施設であった可能性が高い。</p>
【実績値】	<p>出土品：軒丸瓦5点、軒平瓦5点、道具瓦12点、土器・陶磁器4箱、土管16点、木製品2バット、雑木1コンテナ、杭・梓木5点、銅製品2点、鉄製品3点、銭貨3点、凝灰岩9点</p> <p>記録作成数：遺構実測図7枚 写真28枚（4×5）</p> <p>論文数等3件（公刊図書①、講演②③）</p>
【年度決算見込額】	2,464千円（No.12、13 受託研究分）

【備考】	<p>① 金井健 「旧大乘院庭園の調査—第407次」『奈良文化財研究所紀要2007』2007.6</p> <p>② 次山淳 「大乘院と飛鳥小学校—出土品にみる学びと遊び」文化講演会・大乘院文化サロン2006.11</p> <p>③ 金井健 「大乘院庭園の岸辺の造景」文化講演会・大乘院文化サロン2006.11</p>
------	--

当該事務または事業の実績に関する自己点検評価

1. 定性的評価

観点	適時性	継続性	正確性			
判定	A	A	A			
備考						
適時性	復原整備事業の基礎資料の取得					
継続性	12年にわたる研究成果の蓄積					
正確性	池岸の形状および庭園の造成に関する知見					

2. 定量的評価

観点	論文等数	発表件数				
判定	A	A				
備考						
論文等数	『奈良文化財研究所 紀要2007』において調査研究成果を報告					
発表件数	大乗院庭園文化館が実施する文化講演会（大乗院文化サロン）において今回の調査における成果とこれまでに得られた資料に関連する研究について講演					

3. 実績の総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	大乗院庭園の中核をなす西小池について、池岸の形状や造成の過程について復原整備の基礎となる情報を得ることができた。これまでの発掘調査で得られた情報をどのように復原整備に反映するか、また発掘調査では明らかでできなかった部分をどのように復原整備するかが、今後の復原整備事業における課題である。

4. 当年度における中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	12年間の継続的な発掘調査によって膨大かつ緻密な遺跡の情報を蓄積することができた。こうした濃密な調査成果が復原整備事業に大いに反映できるように、今後も同事業に関わっていく必要がある。

業務実績書

中期計画の項目 (I 1 (1) ⑤)	平城京、藤原京、飛鳥地域を中心とした我が国及び関連する中国・韓国等諸外国の遺跡の発掘調査並びに共同研究を行うとともに、出土品・遺構の調査・研究及び庭園等に関する基礎的な調査・研究を実施し、それにより古代日本の都城の構造及び建造物の様式並びに瓦・陶磁器・金属器等の手工業生産技術の実態やその変遷過程、庭園等の変遷過程、飛鳥地域の歴史等の解明に寄与する。
------------------------	---

【事業名称】	興福寺旧境内果園推定地の発掘調査 (I 1 (1) ⑤ア)
--------	-------------------------------

【事業概要】	興福寺旧境内の西側、果園・園地推定地の北東部において、奈良弁護士会事務所を新築する計画に伴う事前調査として実施した。計画建物下に南北 20.2 m ² 、東西 6 m の調査区 (121.2 m ²) を設定し、調査は 2007 年 2 月 5 日に重機掘削を開始し、遺構検出、写真撮影、実測、補足調査、埋め戻しを経て、3 月 12 日の発掘器材撤収を以て終了した。
--------	--

【担当部課】	都城発掘調査部 平城地区	【事業責任者】	部長 川越俊一
--------	--------------	---------	---------

【スタッフ】	西口壽生、次山淳、栗野隆、浅野啓介、牛島茂
--------	-----------------------

【年度実績概要】	<p>調査地は興福寺旧境内の西側に想定される果園・園地推定地の北東部にあたる。団体事務所新築に伴い計画建物下に、南北 20.2m、東西 6 m の調査区を設定した。地表下 0.8m に近世末近代の石列 (土塀基礎) と石組井戸を検出し、地表下約 1.2m で、近世の埋甕 17 基、中世の礎石建物 2 棟と石組溝 1 条、石組方形土坑 1 基などを検出した。</p> <p>中世の礎石建物 2 棟は調査区の西北部と東南部とで確認した。両者の間には南北方向の石組溝があり、石組溝内には杭留めした板材が残る。雨落溝として共有したとみられる。建物内部には黄色土による整地をして小型の礎石を据えている。礎石・整地土面上には焼土混じりの炭化物層の薄い堆積がある。東南部の建物の北縁には、西方に下降させた東西の石組を設け、石組内には木杭で止めた板材が残る。石組内の水は建物西北角外に設けられた杭留めの木組に集水・貯水される構造をもつ。近世の埋甕は中世の建物の外側を中心に 2～4 個を集中させつつ配置する。甕には漆の痕跡をもつものがあり、「塗師屋」の一画である可能性を示している。</p> <p>古代の遺構はこれらの下層にあるとみられるが確認できず、古代における果園の様子は明らかにならなかったが、中世には建物が営まれる空間であったことが明らかになった。出土遺物には近世陶磁器類、土師器を中心に整理箱 62 箱の土器類のほか、中世の銅銭・鉄釘・刀子などの金属製品、漆器碗などの木製品、中世の軒瓦を含む瓦類がある。</p>
【実績値】	<p>出土品 土器類 62 箱 (整理箱)、銅銭 4 点、金属製品 4 点、漆器碗 2 点、木製品 2 点、軒丸瓦 5 点、軒平瓦 6 点、丸平瓦 19 箱</p> <p>作成記録数 実測図 11 枚、写真 (4×5) 10 点</p>
【年度決算見込額】	2,464 千円 (No.1 2、1 3 受託研究分)

【備考】	
------	--

当該事務または事業の実績に関する自己点検評価

1. 定性的評価

観 点	適時性	継続性	正確性			
判 定	A	A	A			
備 考	適時性：興福寺の変遷の把握 継続性：周辺地域における調査成果の蓄積 正確性：綿密な発掘調査の検討					

2. 定量的評価

観 点						
判 定						
備 考						

3. 実績の総合的評価

判 定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	興福寺旧境内果園・園地推定地の一画において、建物を検出する成果を得て、調査の必要性を再認識することとなった。

4. 当年度における中期計画の実施状況の確認

判 定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	適切かつ順調に実施し、今後も引き続き調査が必要なことを示した。

業務実績書

中期計画の項目 (I1(1)⑤)	平城京、藤原京、飛鳥地域を中心とした我が国及び中国・韓国等諸外国の遺跡の発掘調査並びに共同研究を行うとともに、出土品・遺構の調査・研究及び庭園等に関する基礎的な調査・研究を実施し、それにより古代日本の都城の構造及び建造物の様式並びに瓦・陶磁器・金属器等の手工業生産技術の実態やその変遷過程、庭園等の変遷過程、飛鳥地域の歴史等の解明に寄与する。
---------------------	---

【事業名称】	朝堂院東第四堂発掘調査 (I1(1)⑤ア)
--------	-----------------------

【事業概要】	平成11年度から、藤原宮中樞部の実体解明のために計画調査を実施している。今年度は朝堂院東第四堂を対象とした。調査総面積は、2024㎡、調査期間は平成18年4月3日～11月2日。調査成果については、研究所紀要、報道発表、現地説明会で公開した。
--------	--

【担当部課】	都城発掘調査部 飛鳥藤原地区	【事業責任者】	副部長 巽淳一郎
【スタッフ】	豊島直博 高橋克壽 市大樹 加藤雅士 松村恵司 箱崎和久 中川あや 関広尚世 石田由紀子 長谷川透		

【年度実績概要】	<p>藤原宮中樞部の構造は、昭和9年～昭和18年の日本古文化研究所の発掘調査ではじめて明らかとなった。だが近年の諸宮の発掘調査の進展の中で疑問点も指摘され、その解明のため、面的な継続調査を実施している。朝堂院地区ではこれまでに東第一堂から第三堂、東第六堂の調査を行っており、今年は朝堂院東第四堂の調査をおこなった。調査期間は平成18年4月3日から11月2日で、調査面積は2024㎡である。</p> <p>調査の結果、東第四堂の規模を確定することができた。桁行15間(168尺)・梁行5間(48尺)で、これは日本古文化研究所が復原した規模と異なる。また、基壇周囲の遺構の状況などから、途中で梁行を4間に縮小していることを確認した。この規模の変更は、建設段階での計画変更による可能性が考えられ、朝堂院全体の建設過程を復原する上で、重要な手掛かりとなる。また、東第四堂は、東第三堂と同規模で計画され、同規模に縮小されたことが明らかになった。これまでに調査した東第一堂、東第二堂、東第三堂、東第六堂それぞれの規模が異なるなか、東第四堂の規模が東第三堂と同一であったという新知見を得ることができた。</p> <p>朝堂院東面回廊についても部分的に調査をおこない、東面回廊の東側に位置する南北溝が、確実に回廊完成直前に埋没していたことを明らかにした。過去に調査したこの溝の南側延長部分からは、「大宝三年」の年紀を持つ木簡が出土している。藤原宮の完成時期を考える上で、非常に重要な手がかりである。</p> <p>このほか、東第四堂の下層で、古墳2基分の周溝を検出した。周溝は藤原宮期の整地土で覆われているため、古墳の主体部は造成時に削平されたと考えられる。埋土からは土器、円筒埴輪、管玉などが出土した。また、軟弱地盤で標高が低くなっているところでは、礫の混じった整地土を厚く盛っている様子が確認できた。宮造営前には土地の起伏に応じた造成をおこなっていたことが具体的に明らかとなった。</p>
【実績値】	<p>論文等数5件(論文1件①、解説等1件③、その他3件②・④・⑤) 発表件数2件(現地説明会1回、報道発表1回) 出土品 軒瓦89点、道具瓦13点、丸・平瓦コンテナ735箱(5145kg)、土器コンテナ7箱、埴輪コンテナ2箱、その他土製品コンテナ1箱、金属製品4点、石製品7点、木製品小型コンテナ11箱、その他小型コンテナ1箱 記録作成数 実測図80枚、写真(4×5)212枚</p>
【年度決算見込額】	175,112千円(No.14、15、16、17、20の合算額)
【備考】	<p>① 豊島直博・中川あや・箱崎和久 「朝堂院東第四堂の調査―第142・144次」『奈良文化財研究所紀要2007』2007.6(予定) ② 奈良文化財研究所 「飛鳥藤原第142・144次調査 記者発表資料」2006.9 ③ 奈良文化財研究所 「飛鳥藤原第142・144次調査 現地説明会資料」2006.9 ④ 豊島直博 「飛鳥藤原第142次調査」『奈文研ニュースNo.21』2006.6 ⑤ 中川あや 「飛鳥藤原第144次調査」『奈文研ニュースNo.23』2006.12</p>

当該事務または事業の実績に関する自己点検評価

1. 定性的評価

観点	適時性	発展性	独創性			
判定	A	A	A			
備考	適時性・藤原宮朝堂院の全体像解明へ寄与。 発展性・朝堂院の造営過程を復原するための手掛かりが得られた。 独創性・東第三堂との共通性、宮造営時の土地造成など多くの新知見が得られた。					

2. 定量的評価

観点	論文数等	発表件数				
判定	A	A				
備考						

3. 実績の総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	朝堂院東第四堂の全体像を明らかにし、注目すべき新たな知見を多く得ることができ、定性的評価、定量的評価ともにすべてAであるので、Aと判断した。

4. 当年度における中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	本調査研究は、年度当初の計画通り実施されており、目的を順調に達成した。

業務実績書

中期計画の項目 (I1(1)⑤)	平城京、藤原京、飛鳥地域を中心とした我が国及び中国・韓国等諸外国の遺跡の発掘調査並びに共同研究を行うとともに、出土品・遺構の調査・研究及び庭園等に関する基礎的な調査・研究を実施し、それにより古代日本の都城の構造及び建造物の様式並びに瓦・陶磁器・金属器等の手工業生産技術の実態やその変遷過程、庭園等の変遷過程、飛鳥地域の歴史等の解明に寄与する。		
【事業名称】	本薬師寺跡住宅建設に伴う発掘調査 (I1(1)⑤ア)		
【事業概要】	<p>平城京跡及び飛鳥、藤原京跡について、古代都城の実体解明のため本年度は以下の地域の発掘調査を実施する。本年度は藤原京においては本薬師寺跡、飛鳥地域では飛鳥寺跡、甘樫丘平吉遺跡北方で発掘調査を実施した。調査成果については、研究所紀要で公表した。</p>		
【担当部課】	都城発掘調査部 飛鳥藤原地区	【事業責任者】	副部長 巽淳一郎
【スタッフ】	石田由紀子、箱崎和久		
【年度実績概要】	<p>住宅建設にともなう事前調査である。平城薬師寺の伽藍配置から想定すると、南北棟の西僧房の東側柱周辺にあたる地点を調査した。僧房の基壇外周部と推定される位置で、造営中に廃絶したと考えられる井戸を検出したが、僧房関係の遺構は検出できなかった。しかし、遺物包含層に凝灰岩片が含まれることや、調査面積の割に出土瓦の量が多く、その多くが本薬師寺の創建瓦であることから、近傍に瓦葺建物が存在した可能性は高いと考えられ、今後の周辺の調査に期待される。調査総面積は57㎡、調査期間は平成18年7月18日～8月4日。</p>		
【実績値】	<p>論文等数1件 (論文1件①) 出土品調査数 軒丸瓦2点、軒平瓦7点、道具瓦22点、丸瓦214点、平瓦619点、土器コンテナ3箱、 記録作成数 実測図6枚、写真(4×5)12枚</p>		
【年度決算見込額】	175,112千円 (No.14、15、16、17、20の合算額)		
【備考】	① 石田由紀子 「本薬師寺跡の調査」『奈良文化財研究所紀要2007』2007.6(予定)		

当該事務または事業の実績に関する自己点検評価

1. 定性的評価

観点	適時性	発展性	継続性	正確性		
判定	A	A	A	A		
備考	適時性・緊急性。 発展性・影響性。 継続性・質・内容。 正確性・数値・データ。					

2. 定量的評価

観点	論文等発表数	資料収集数				
判定	A	A				
備考	年度計画の数値目標を達成した。					

3. 実績の総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	小規模調査であったが、得られた遺跡の調査成果は、今後行われる周辺の調査に対し有効な判断材料となったため、Aと判断した。

4. 当年度における中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	緊急を要する調査であったが、従来水準を維持しつつ、予想以上の成果が得られた。

業務実績書

中期計画の項目 (I1(1)⑤)	平城京、藤原京、飛鳥地域を中心とした我が国及び中国・韓国等諸外国の遺跡の発掘調査並びに共同研究を行うとともに、出土品・遺構の調査・研究及び庭園等に関する基礎的な調査・研究を実施し、それにより古代日本の都城の構造及び建造物の様式並びに瓦・陶磁器・金属器等の手工業生産技術の実態やその変遷過程、庭園等の変遷過程、飛鳥地域の歴史等の解明に寄与する。		
【事業名称】	来迎寺塀新設に伴う確認調査 (I1(1)⑤ア)		
【事業概要】	平城京跡及び飛鳥、藤原京跡について、古代都城の実体解明のため本年度は以下の地域の発掘調査を実施する。本年度は藤原京においては本薬師寺跡、飛鳥地域では飛鳥寺跡、甘樫丘平吉遺跡北方で発掘調査を実施した。調査成果については、研究所紀要、報道発表、現場公開で公表した。		
【担当部課】	都城発掘調査部 飛鳥藤原地区	【事業責任者】	副部長 巽淳一郎
【スタッフ】	玉田芳英 西田紀子 高田貴太 石村智 (企画調整部)		
【年度実績概要】	<p>来迎寺の境内で、南面と西面の塀新設にともなう事前調査として、講堂の西南隅から南辺部を調査した。1956年の調査で、講堂は桁行8間、梁行4間の四面廂付東西棟礎石建物で、玉石積みによる基壇外装をもち、周囲に玉石組の雨落溝があることが明らかとなっている。建物の規模は、桁行総長35.15m、梁行総長19mと推定している。今回は既検出の1個を含め、計5個の礎石を確認して詳細なデータが得られた。その結果、身舎の桁行部分の柱間は4.48m(15尺)で、廂部の柱間は3.83m(13尺)となることが判明した。身舎の梁行の柱間が5.40m(18尺)であることは既に判明しておるため、今回の調査により、講堂の規模は東西34.54m、南北18.46mであることが確認できた。礎石は円形作り出しがある花崗岩製の巨大なもので、創建時に据えられた位置を動いておらず、遺構の残存状況が良好であることがあらためて明らかとなった。また、礎石据付穴を確認する等、基壇の詳細についても合わせて明らかとし、わが国最初の寺院の中心伽藍の造営方法について、重要な知見を得ることができた。調査総面積は55㎡、調査期間は平成18年10月30日～11月21日。11月14～16日に現場公開を行い、約2100名が来場した。</p>		
【実績値】	<p>論文等数4件(論文1件①、解説等1件③、その他2件②・④) 発表件数2件(記者発表1回、現場公開1回3日間) 出土品調査数 軒丸瓦6点、垂木先瓦1点、丸・平瓦コンテナ66箱、土器コンテナ1箱、古銭3点、鉄釘1点 記録作成数 実測図9枚、写真(4×5)45枚</p>		
【年度決算見込額】	175,112千円(No.14、15、16、17、20の合算額)		
【備考】	<p>① 玉田芳英 「飛鳥寺跡の調査」『奈良文化財研究所紀要2007』2007.6(予定) ② 奈良文化財研究所 「飛鳥寺講堂跡の調査 記者発表資料」2006.11 ③ 奈良文化財研究所 「飛鳥寺講堂跡の調査 現場公開資料」2006.11 ④ 玉田芳英 「飛鳥寺講堂の調査」『奈文研ニュースNo.23』2006.12</p>		

当該事務または事業の実績に関する自己点検評価

1. 定性的評価

観 点	適時性	発展性	継続性	正確性		
判 定	A	A	A	A		
備 考	適時性・緊急性。 発展性・影響性。 継続性・質・内容。 正確性・数値・データ。					

2. 定量的評価

観 点	論文等発表数	資料収集数				
判 定	A	A				
備 考	年度計画の数値目標を達成した。					

3. 実績の総合的評価

判 定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	小規模調査であったが、得られた調査成果は、今後行われる周辺の調査に対し有効な判断材料となったため、Aと判断した。

4. 当年度における中期計画の実施状況の確認

判 定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	緊急を要する調査であったが、従来水準を維持しつつ、予想以上の成果が得られた。

業務実績書

中期計画の項目 (I1(1)⑤)	平城京、藤原京、飛鳥地域を中心とした我が国及び中国・韓国等諸外国の遺跡の発掘調査並びに共同研究を行うとともに、出土品・遺構の調査・研究及び庭園等に関する基礎的な調査・研究を実施し、それにより古代日本の都城の構造及び建造物の様式並びに瓦・陶磁器・金属器等の手工業生産技術の実態やその変遷過程、庭園等の変遷過程、飛鳥地域の歴史等の解明に寄与する。
---------------------	---

【事業名称】	石神遺跡(第19次)発掘調査(I1(1)⑤ア)
--------	-------------------------

【事業概要】	石神遺跡は飛鳥の宮殿遺跡として重要な遺跡の一つである。昭和56年度から、この遺跡の実体解明のために継続的に発掘調査を実施している。今年度で19次となる。本調査区は18次調査の北側にあたる。調査総面積は870㎡、調査期間は平成18年10月23日～平成19年●月●日。調査成果については、研究所紀要、報道発表、現地説明会で公開した。
--------	--

【担当部課】	都城発掘調査部 飛鳥藤原地区	【事業責任者】	副部長 巽淳一郎
--------	----------------	---------	----------

【スタッフ】	石田由紀子(特別研究員) 山崎信二 黒坂貴裕 小田裕樹 関広尚世 石村智(企画調整部)
--------	--

【年度実績概要】	<p>石神遺跡の発掘調査では、遺跡北側における空間利用の実態の解明と、遺跡北方に位置が想定される「阿倍山田道」の確認が課題とされていた。このため、これらの課題についての検討資料を得るべく18次調査区の北側について調査を行った。</p> <p>調査の結果、本調査区内において古墳時代以降の数度にわたる空間利用の変遷を追うことができた。特に、7世紀後半以降に作られた東西溝を検出し、これらは「阿倍山田道」に関連する遺構であるとの知見を得た。</p> <p>7世紀後半の東西溝は、7世紀前半頃に作られた幅22m以上もある巨大な南北溝を埋め立てて掘削している。この時期に阿倍山田道が整備されたものと考えられる。また、藤原初期にこの東西溝を埋め立て、再び東西溝を2条掘削している。藤原初期の東西溝を検出したことにより、1990年度に行った山田道第2次調査の成果と併せて、当該期の阿倍山田道の規模を路面幅18m、溝心々間距離21~22mであったと推定することができた。</p> <p>ただし、本調査区ではさらに古い時期の阿倍山田道を確認することはできず、今後の周辺地域における調査の必要性が課題として残った。</p> <p>出土遺物については木簡・木製品・金属製品・動植物遺存体・土器などの多種多様な考古資料が出土し、当該期における活動の状況や遺構の性格を明らかにする上で重要な情報を得ることができた。</p> <p>今回の調査において、長年の課題であった石神遺跡北側を画する阿倍山田道の位置と規模に関する情報を得ることができ、今後の調査への新たな見通しを得た。次年度以降は石神遺跡の全体像を明らかにするため、石神遺跡の範囲の確定を目的とする調査を計画している。</p> <p>3月31日に現地説明会を行い、1153名が来場した。</p>
【実績値】	<p>論文等数3件(論文1件①、解説等1件③、その他1件②)</p> <p>発表件数2件(現地説明会1回、報道発表1回)</p> <p>出土品 軒瓦・丸・平瓦40kg、土器(整理箱)92箱、木器、金属製品、動植物遺存体(整理箱)146箱、木簡15点以上(現状)</p> <p>記録作成数 遺構実測図50枚、遺構写真30枚</p>
【年度決算見込額】	175,112千円(No.14、15、16、17、20の合算額)

【備考】	<p>① 小田裕樹 「石神遺跡の調査―第145次」『奈良文化財研究所紀要2007』2007.6(予定)</p> <p>② 奈良文化財研究所 『石神遺跡の調査―石神遺跡第19次調査記者発表資料』2007.3</p> <p>③ 奈良文化財研究所 「石神遺跡の調査―石神遺跡第19次調査現地説明会資料」2007.3</p>
------	--

当該事務または事業の実績に関する自己点検評価

1. 定性的評価

観点	適時性	発展性	継続性	正確性		
判定	A	A	A	A		
備考	適時性・需要、必要性。 発展性・影響性。 継続性・質・内容。 正確性・数値・データ。					

2. 定量的評価

観点	論文等発表数	収集資料数				
判定	A	A				
備考						

3. 実績の総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	定性的評価、定量的評価ともにすべてAであるので、Aと判断した。

4. 当年度における中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	課題だった山田道を検出し、今後の石神遺跡の調査方針を策定することができた。

業務実績書

中期計画の項目 (I1(1)⑤)	平城京、藤原京、飛鳥地域を中心とした我が国及び中国・韓国等諸外国の遺跡の発掘調査並びに共同研究を行うとともに、出土品・遺構の調査・研究及び庭園等に関する基礎的な調査・研究を実施し、それにより古代日本の都城の構造及び建造物の様式並びに瓦・陶磁器・金属器等の手工業生産技術の実態やその変遷過程、庭園等の変遷過程、飛鳥地域の歴史等の解明に寄与する
---------------------	--

【事業名称】	甘樫丘東麓遺跡発掘調査 (I1(1)⑤ア)
--------	-----------------------

【事業概要】	平成17年度から、飛鳥地域で甘樫丘東麓遺跡の実体解明のために計画調査を実施している。今年度は東に開く谷の奥部を対象とした。調査総面積は、916㎡、調査期間は平成18年10月4日～平成19年3月14日。調査成果については、研究所紀要、報道発表、現地見学会で公開した。
--------	--

【担当部課】	都城発掘調査部 飛鳥藤原地区	【事業責任者】	副部長 巽淳一郎
--------	----------------	---------	----------

【スタッフ】	玉田芳英 西田紀子 高田貴太 石田由紀子 竹本晃 石村智 (企画調整部)
--------	--------------------------------------

【年度実績概要】	<p>これまで甘樫丘では数度にわたる調査を実施し、7世紀中頃の焼土層と焼けた建築部材や壁土、7世紀代の建物跡を確認している。『日本書紀』によれば、蘇我氏は乙巳の変で滅ぶまで、甘樫丘に邸宅を構えていた。この邸宅と、先行調査成果との関係が従来注目されてきた。</p> <p>今年度は、既調査区の位置する谷部の東奥に調査区を設定した。調査の結果、7世紀代の大規模な整地や建物跡を確認した。整地は、大きく3時期に分かれる。もっとも古い整地の年代は7世紀前半で、谷の東半に盛土をして一段高い平坦地をつくり、そこに建物や塀を建てていた。盛土の法面には石垣を築いて、構造的に保護すると共に、迫力ある敷地構えとしていた。7世紀中頃には、再び大規模な整地が行われ、石垣および段差は埋め立てられて、広い平坦な敷地がつくられた。この敷地は建物を何度か建て替えながら、7世紀後半まで継続的に利用されていたようである。総柱建物も2棟確認できた。7世紀末期にも、調査区全面に盛土をして整地をした。この時期の遺構としては、調査区をL字形に流れる溝と、谷奥の傾斜地に位置する炉を4基確認できた。このうち1基は炉の壁面の立ち上がりが残っていた。</p> <p>今回の調査により、7世紀代の活発な土地利用の様相が明らかになった。特に7世紀前半の盛土と石垣は、大規模な造営作業の所産であり、何らかの権力の介入を想定させる。一方、建物の焼けた痕跡などはみられず、今回検出した遺構と蘇我氏の邸宅との関係については今後の調査への課題といえよう。</p> <p>2月11日に現地見学会を行い、5015名が来場した。</p>
----------	--

【実績値】	<p>論文等数3件 (論文1件①、解説等1件③、その他1件②)</p> <p>発表件数2件 (現地見学会1回、報道発表1回)</p> <p>出土品調査数 軒丸瓦1点、垂木先瓦5点、鴟尾片1点、丸瓦5.4kg、平瓦24.05kg、土器コンテナ56箱、木製品コンテナ2箱、鉄製品小型コンテナ1箱、石製品・石器等4箱、その他5箱</p> <p>記録作成数 実測図70枚、写真(4×5)172枚</p>
-------	---

【年度決算見込額】	3,881千円 (受託研究分)
-----------	-----------------

【備考】	<p>① 玉田芳英 西田紀子 高田貴太 石田由紀子 竹本晃 豊島直博 「甘樫丘東麓遺跡の調査」『奈良文化財研究所紀要2007』(予定)</p> <p>② 奈良文化財研究所 『甘樫丘東麓遺跡の調査 記者発表資料』2007.1</p> <p>③ 奈良文化財研究所 『甘樫丘東麓遺跡の調査 現地説明会資料』2007.2</p>
------	--

当該事務または事業の実績に関する自己点検評価

1. 定性的評価

観 点	適時性	発展性	継続性	正確性		
判 定	A	A	A	A		
備 考	適時性・公開性。 発展性・影響性。 継続性・質・内容。 正確性・達成値。					

2. 定量的評価

観 点	論文等発表数	収集資料数				
判 定	A	A				
備 考						

3. 実績の総合的評価

判 定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	定性的評価、定量的評価ともにすべてAであるので、Aと判断した。

4. 当年度における中期計画の実施状況の確認

判 定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	次年度の調査場所の選定に関し、見通しが得られた。

業務実績書

中期計画の項目 (I1(1)⑤)	平城京、藤原京、飛鳥地域を中心とした我が国及び関連する中国・韓国等諸外国の遺跡の発掘調査並びに共同研究を行うとともに、出土品・遺構の調査・研究及び庭園等に関する基礎的な調査・研究を実施し、それにより古代日本の都城の構造及び建造物の様式並びに瓦・陶磁器・金属器等の手工業生産技術の実態やその変遷過程、庭園等の変遷過程、飛鳥地域の歴史等の解明に寄与する。
---------------------	---

【事業名称】	平城京跡出土遺物の調査研究 (I1(1)⑤イ)
--------	-------------------------

【事業概要】	本年度の発掘調査による平城宮・京跡の木製品・金属製品・石製品・土器・土製品・瓦磚類・木簡などの整理、分析研究、出土遺構の図面及び写真作成、分析研究を年間通じて実施し、昨年度以前の調査において出土した遺物について、報告書刊行またはその準備作業としての再調査を行う。また、出土遺物の保存処理を継続して実施する。
--------	---

【担当部課】	都城発掘調査部 平城地区	【事業責任者】	部長 川越俊一
--------	--------------	---------	---------

【スタッフ】	牛嶋茂、中村一郎、小池伸彦、次山淳、和田一之助、西口壽生、森川実、神野恵、深澤芳樹、今井晃樹、林正憲、島田敏男、金井健、栗野隆、大林潤、渡邊晃宏、馬場基、山本崇
--------	--

【年度実績概要】	<ul style="list-style-type: none"> ・本年度の発掘調査による出土遺物などについて 平城宮・京跡で出土した木製品・金属製品・石製品・土器・土製品・瓦磚類・木簡などの整理、分析研究、出土遺構の整理、分析研究、出土遺構の図面・写真作成、分析研究及び出土遺物の保存と保存処理は、発掘調査研究の基礎作業であり、年間を通じて発掘調査と併行して遅滞なく実施した。そのうち、西大寺食堂院跡の調査で出土した木製品・金属製品・土器・土製品・瓦磚類・木簡などについては、発掘調査概報『西大寺食堂院・北辺坊』の刊行に向けて基礎的な整理、分析研究を進めた。また、西大寺食堂院跡の発掘調査と平成17年度の発掘調査で出土した遺物を中心として、文化財情報課と協力して「発掘成果展 平城2006」を実施した(平成18年10月31日～平成18年12月27日)。 ・平成17年度以前の出土遺物について コンピュータ処理などによるデータ化を目指して、各発掘資料・遺物などの再整理・分析を重点的に実施した。特に第一次大極殿院に係るデータについて、『平城宮発掘調査報告(第一次大極殿院)』の刊行に向けて基礎的分析作業を実施した。平城京跡・寺院跡出土の硯についても『平城京出土陶硯集成Ⅱ』の刊行に向けてデータの分析作業を実施した。このほか、飛鳥資料館秋期特別展では高松塚古墳出土海獣葡萄鏡を中心とした展示に協力した。なお、木器・木簡や金属製品などの保存処理事業については、埋蔵文化財センターと共同で遂行した。 ・報告書などの刊行について これまで準備を進めてきた『平城京出土陶硯集成Ⅱ—平城京跡・寺院跡—』(奈良文化財研究所史料第80冊)、『西大寺食堂院・右京北辺発掘調査報告』など計2冊を刊行した。
----------	---

【実績値】	論文数等計5件(論文2件①②、解説等3件③～⑤)
-------	--------------------------

【年度決算見込額】	62,688千円
-----------	----------

【備考】	<ol style="list-style-type: none"> ①『平城京出土陶硯集成Ⅱ—平城京跡・寺院跡—』(奈良文化財研究所史料第80冊)2007.3 ②『西大寺食堂院・右京北辺発掘調査報告』2007.3 ③『西大寺食堂院の井戸』(速報展資料)2006.11 ④ 発掘成果展 平城2006『奈良の都を掘る』2006.10 ⑤ 飛鳥資料館秋期特別展『飛鳥の金工 海獣葡萄鏡の諸相』2006.10
------	--

当該事務または事業の実績に関する自己点検評価

1. 定性的評価

観 点	継続性	発展性	適時性	正確性		
判 定	A	A	A	A		
備考 継続性：膨大な歴史資料の基礎的分析研究 発展性：新たな資料提示方法の追究 適時性：新出土資料についての知識供与による文化財活用 正確性：蓄積されている資料の正確な資料化による貢献						

2. 定量的評価

観 点	論文等数					
判 定	A					
備考						

3. 実績の総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	平城宮・京で出土した考古・文献資料を整理・分析研究し、それぞれの研究に東アジア的視点で検討を加えたことなど、総合的に見てAと判断した。

4. 当年度における中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	これまでの研究を基礎にして、さらに新しい方法を加味・活用して、研究を深化した。

業務実績書

中期計画の項目 (I1(1)⑤)	平城京、藤原京、飛鳥地域を中心とした我が国及び中国・韓国等諸外国の遺跡の発掘調査並びに共同研究を行うとともに、出土品・遺構の調査・研究及び庭園等に関する基礎的な調査・研究を実施し、それにより古代日本の都城の構造及び建造物の様式並びに瓦・陶磁器・金属器等の手工業生産技術の実態やその変遷過程、庭園等の変遷過程、飛鳥地域の歴史等の解明に寄与する。
---------------------	---

【事業名称】	飛鳥・藤原宮跡出土遺物の調査研究 (I1(1)⑤イ)
--------	----------------------------

【事業概要】	発掘調査成果を報告書等で公表するための基礎的整理・分析・復原的研究をおこなう。
--------	---

【担当部課】	都城発掘調査部 飛鳥藤原地区	【事業責任者】	副部長 巽淳一郎
【スタッフ (法人外のスタッフががいる場合も記入)】			
山崎信二 松村恵司 豊島直博 高橋克壽 市大樹 箱崎和久 中川あや 玉田芳英 西田紀子 高田貴太 黒坂貴裕 小田裕樹 廣瀬寛 関広尚世 石田由紀子 長谷川透 加藤雅士 竹本晃			

【年度実績概要】	<p>出土遺物・遺構実測図・写真等の資料は、日常業務として各整理室で計画的な整理事業を実施している。</p> <p>藤原京左京六条三坊の『発掘調査報告』、今年度の『紀要』での公表のための整理、及び平成18年度以前の出土遺物の整理を行った。石神遺跡から出土した鉄製鋸については、レプリカ製作のための復元的検討を行った。</p> <p>山田寺跡から出土した建築部材、礎石等について、台帳を作成して整理を行った。なお、これらの建築部材、出土品については平成19年2月に重要文化財としての指定を受けた。条坊関係の発掘成果をデータ化する作業は、前年度に引き続いて実施した。</p> <p>韓国との古代都城に関する共同研究に関連して、慶州四天王寺址や隍城洞遺跡の発掘調査に参加した。また、九黄洞苑池遺跡、南山磨崖塔、月城などの踏査、そして咸安城山山城出土木簡の調査も行った。これらはいずれも新羅王京と関連する遺物・資料であり、調査の中で飛鳥・藤原宮跡及び関連遺跡との関連性について知見を深めた。</p> <p>木簡について、近年出土した石神遺跡や藤原宮・京跡などから出土した木簡の整理を行い、『飛鳥・藤原宮発掘調査出土木簡概報20』などに反映させた。また、飛鳥池遺跡・飛鳥池東方遺跡・山田寺跡から出土した木簡1464点の写真、最新の釈文・解説などからなる木簡図録『飛鳥藤原京木簡一』を作製した。また、後者の図録では、飛鳥池遺跡の性格をめぐる考察も掲載した。</p>
【実績値】	論文数等2件 (公刊図書①、②)
【年度決算見込額】	175,112千円 (No.14、15、16、17、20の合算額)

【備考】	<p>① 奈良文化財研究所『飛鳥・藤原宮発掘調査出土木簡概報20』2006.11</p> <p>② 奈良文化財研究所『飛鳥藤原京木簡一』2007.3</p>
------	--

当該事務または事業の実績に関する自己点検評価

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
備考	適時性…需要、必要性。 継続性…質・内容。					
	独創性…発想、着想。		発展性…多様性。		効率性…時間的投資	
	正確性…網羅性。					

2. 定量的評価

観点	論文等発表数					
判定	A					
備考	年度計画の数値目標を達成した。					

3. 実績の総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	定性的評価、定量的評価ともにすべてAであるので、Aと判断した。

4. 当年度における中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	報告書作製のための遺物整理作業等もほぼ予定通り進めることができた。

業務実績書

中期計画の項目 (I1(1)⑤)	平城京、藤原京、飛鳥地域を中心とした我が国及び関連する中国・韓国等諸外国の遺跡の発掘調査並びに共同研究を行うとともに、出土品・遺構の調査・研究及び庭園等に関する基礎的な調査・研究を実施し、それにより古代日本の都城の構造及び建造物の様式並び瓦・陶磁器・金属器等の手工業生産技術の実態やその変遷過程、庭園等の変遷過程、飛鳥地域の歴史等の解明に寄与する。
---------------------	--

【事業名称】	古代瓦に関する研究集会の開催 (I1(1)⑤イ)
--------	--------------------------

【事業概要】	飛鳥白鳳期の古代瓦を、実物を見ながら議論し、造瓦技術の変遷と伝播を明らかにする研究集会である。10回目の今回は、榑原廃寺式・原山廃寺式・湖東式・備中式の重弁蓮華文軒丸瓦の展開をテーマとして、2007年2月3日・4日に平城宮跡資料館に於いて開催した。成果に関しては、報告書を刊行して公開した。
--------	---

【担当部課】	都城発掘調査部 飛鳥藤原地区	【事業責任者】	考古第三研究室長 山崎信二
--------	----------------	---------	---------------

【スタッフ】	中川あや 高田貴太 石田由紀子
--------	-----------------

【年度実績概要】	<p>白鳳期の重弁蓮華文軒丸瓦のうち、山背の榑原廃寺式の瓦、河内の原山廃寺式の瓦、近江の湖東式の瓦、備中の備中式の瓦について、年代・文様・技法・広がり及び中国・朝鮮からの影響について検討する研究会である。</p> <p>榑原廃寺の瓦については、最古のものが7世紀中葉で、次の段階のものが7世紀後半で、全体として新羅との関係が指摘された。高井田廃寺の瓦は、金堂・講堂・塔の順での生産が考えられ、原山廃寺式軒丸瓦は間弁 T 字形の系列と、間弁に珠文を配する系列に大別し、後者と側板連結模骨丸瓦との関係が議論された。瓦当文様における古新羅系・百済系・高句麗系要素の混在は、高井田廃寺周辺の渡来人の多様性に由来するものとの指摘があった。湖東式の瓦については、従来百済との関係が指摘されていたが、湖東式の軒丸瓦に最も類似する現状での資料は、東魏・北齊の鄴城の瓦であり、粘土紐桶巻作りの比率が多いこと、瓦当裏面に刻みを入れて丸瓦と接合すること、瓦当文様の各要素が高句麗瓦との関係を考慮すべきであるとの指摘があった。備中式の瓦については、備中式と淀江廃寺式との関係、大阪府堂ヶ芝廃寺との関係が議論され、側板連結模骨丸瓦の存在が指摘された。</p>
【実績値】	<p>参加人数：176名 発表件数：11件 外部招聘者：9名</p>
【年度決算見込額】	529千円

【備考】	① 奈良文化財研究所 『飛鳥白鳳の瓦づくりⅩ—重弁蓮華文軒丸瓦の展開—発表要旨—』2007.2
------	---

当該事務または事業の実績に関する自己点検評価

1. 定性的評価

観 点	適時性	独創性	発展性			
判 定	A	A	A			
備 考	適時性…全国的な瓦研究の現状に即した研究課題の設定。 独創性…新たな知見。 発展性…今後の課題への見通し。					

2. 定量的評価

観 点	参加者数					
判 定	A					
備 考						

3. 実績の総合的評価

判 定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	定性的評価、定量的評価ともにすべてAであるので、Aと判断した。

4. 当年度における中期計画の実施状況の確認

判 定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	瓦製作技法ならびに瓦当文様を総合的に検討し、かつ東アジアの瓦文化の中での位置づけも行い、新規性、発展性を提示できたので、順調であると判断した。

業務実績書

中期計画の項目 (I1(1)⑤)	平城京、藤原京、飛鳥地域を中心とした我が国及び関連する中国・韓国等諸外国の遺跡の発掘調査並びに共同研究を行うとともに、出土品・遺構の調査・研究及び庭園等に関する基礎的な調査・研究を実施し、それにより古代日本の都城の構造及び建造物の様式並び瓦・陶磁器・金属器等の手工業生産技術の実態やその変遷過程、庭園等の変遷過程、飛鳥地域の歴史等の解明に寄与する。
---------------------	--

【事業名称】	アジアにおける古代都城遺跡、生産遺跡、墓制及び陶磁器に関する調査研究のための中国、韓国との共同研究 (I1(1)⑤ウ)
--------	--

【事業概要】	A: 漢長安城桂宮発掘調査報告書の作成、唐大明宮太液池の共同発掘調査を実施し日本の園地との関連を追究し、調査・研究の成果を公刊する B: 朝陽地区隋唐墓出土副葬遺物を共同で整理し比較研究をおこない、日本都城成立期の交流を考察しその成果を公表する。 C: 鞏義市黄冶唐三彩窯跡及び製品の共同研究を実施し、日本の奈良三彩との関連を考察し、成果を公刊する。 D: 日本と韓国の都城・王京形成の共同研究を実施し、古代における両国の文化交流を跡付ける。
--------	--

【担当部課】	都城発掘調査部	【事業責任者】	所長 田辺征夫
--------	---------	---------	---------

【スタッフ】	A: 川越俊一・小池伸彦他 20名 (劉慶柱、安家瑤他) B: 安田龍太郎・小林謙一他 9名 (王晶辰・田立坤他)、C: 川越俊一・巽淳一郎ほか6名 (孫新民・趙志文他)、D: 山崎信二他 17名 (朴允貞・田庸昊他)		
--------	---	--	--

【年度実績概要】	<p>A: 2001年度から5カ年にわたって実施してきた、唐長安城大明宮太液池遺跡の共同発掘調査の成果については、2006年の5月から12月にかけて、平城宮跡資料館において写真パネル展を開催した。本年度は、正式報告書作成に向けて出土遺物の調査研究をおこなった。2007年3月に計7名の人員を現地に派遣した。瓦磚類、青磁、白磁などの磁器、三彩陶器、礎石や欄干などの石製建築部材や青銅製の飾り金具などを調査した。なお、11月に中国側の研究者4名を招聘して今後の調査研究について協議をおこなった。</p> <p>次期共同研究項目である漢魏洛陽城については、中国側の都合により、本年度7月に再度、国家文物局に申請をおこなったが、現在許可待ちの状態である。調査前の準備として洛陽城付近の衛星写真を購入し、地形の把握、遺跡把握や地図作成に向けての基礎作業をおこなった。</p> <p>B: 今年度から遼寧省朝陽地区に集中する隋唐墓を対象とした共同研究が始まった。秋には5名の研究員を招聘し、関連遺跡・遺物の共同調査を実施するとともに、招聘研究員にはそれぞれの専門分野をテーマとした研究発表をお願いした。秋と春には、あわせて計11名の研究員を派遣し、蔡須達墓・蔡澤墓・黄冶唐墓・機械廠墓など24基の唐墓出土遺物について、調書作成、観察実測、写真撮影を行った。また、遺物の実測には非接触3次元デジタル計測を導入した。</p> <p>C: 春と秋に鞏義市白河水地河地区において河南省文物考古研究所が主導する窯跡の発掘調査に研究員を併せて7名派遣した。発掘調査は700㎡。窯跡3基(漢代・北朝)、廃棄物土坑38基、などを検出し、800件に及ぶ遺物の出土をみるなど重要な考古学的新発見を得た。とりわけ、水地河地区Ⅲ区で発見した1号窯跡は北朝(北魏～隋代)の大規模な窯跡であり、大量の青釉瓷器と窯道具類が出土し、この地域で最も古い青釉窯跡の発見となった。また、唐三彩の鉢高杯盤碗などの失敗品を捨てた土坑を検出し、白河一帯において唐三彩生産が行われていたことを明確にするとともに、唐三彩片中に日本の大安寺跡出土陶枕や繩生庵寺跡出土碗と酷似したものが含まれていることから、それらの製作地が黄冶窯であることが明確になった。秋には研究者5名を招聘し、関連遺物・遺跡の共同研究を行った。3月には研究者2名を派遣し、次年度の共同研究計画を協議した。なお、黄冶窯出土唐三彩片の蛍光X線分析などの成果を『華夏考古』誌上に公表した。</p> <p>D: 2006年度は、韓国国立文化財研究所との共同合意書に基づき『日韓文化財論集1』(仮題)を作成するための調査、学術交流を主たる目的とした。日本側からは、計8名が訪韓した。それぞれの研究テーマは、瓦、木簡、磨崖塔、都城制、遺跡の保存・活用など多岐にわたり、テーマに沿って韓国各地での調査を実施した。また韓国側からも計8名が訪日し、都城関連遺跡や庭園の踏査、生産関連資料の調査を行った。以上の調査成果に基づき、2007年度に論集を刊行する計画である。</p> <p>一方、国立慶州文化財研究所との間では、発掘調査交流協約書を取り交わし、日本側からは小田祐樹が2ヶ月間、慶州文化財研究所に派遣され、慶州四天王寺址や皇城洞遺跡の発掘調査に参加し、韓国各地の都城関連遺跡の視察を行った。韓国側からも朴允貞学芸研究官が約2ヶ月間、奈良文化財研究所に滞在し、甘樫丘東麓遺跡、石神遺跡などの発掘調査に参加し、あわせて都城関連遺跡の視察を行った。</p>
----------	---

【実績値】	論文等数5件 (①～⑤)
-------	--------------

【年度決算見込額】	33,013千円
-----------	----------

【備考】	<p>① 降幡順子「河南省鞏義市黄冶窯産唐三彩釉薬の科学的分析」『華夏考古』2007年第二期 2007.6</p> <p>② パネル展「日中共同唐大明宮太液池の発掘調査」A4パンフレット 2006.5</p> <p>③ 巽淳一郎「河南省文物考古研究所との共同調査成果」『総合研究会第17回資料集』2007.1</p> <p>④ 小田祐樹「新羅王京の発掘調査」『奈良文化財研究所紀要2007』2007.6</p> <p>⑤ 小田祐樹「新羅王京の発掘調査一日韓共同発掘調査交流成果報告」『総合研究会第17回資料集』2007.1</p>
------	---

当該事務または事業の実績に関する自己点検評価

1. 定性的評価

観 点	独創性	発展性	適時性			
判 定	A	A	A			
備考 独創性：最新情報提供による古代史の再検討。 発展性：日本文化の源流を探る基礎的研究。 適時性：公開展示の開催・成果報告書の刊行準備。						

2. 定量的評価

観 点	成果報告	論文件数	発表件数			
判 定	A	A	A			
備考						

3. 実績の総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	定性評価・定量評価いずれにおいてもAであり、この結果を総合的に判断してAと評価した。

4. 当年度における中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	計画通りに実施、成果をあげることができたため。 次年度には発掘調査にもう少し長い期間参加できるように工夫する。国際共同研究は、次期5カ年度には都城発掘調査部が担当し、4本の研究を総合的に組み立て、古代史の解明に資する成果の達成を目指す。

業務実績書

中期計画の項目 (I 1 (1) ⑤)	平城京、藤原京、飛鳥地域を中心とした我が国及び関連する中国・韓国等諸外国の遺跡の発掘調査並びに共同研究を行うとともに、出土品・遺構の調査・研究及び庭園等に関する基礎的な調査・研究を実施し、それにより古代日本の都城の構造及び建造物の様式並びに瓦・陶磁器・金属器等の手工業生産技術の実態やその変遷過程、庭園等の変遷過程、飛鳥地域の歴史等の解明に寄与する。
------------------------	---

【事業名称】	庭園に関する調査研究 (I 1 (1) ⑤エ)
--------	-------------------------

【事業概要】	日本の古代庭園に関して史料・文献資料の集約、発掘遺構についての情報収集整理、遺跡現地における地形・水系などの調査を行い、個々の庭園の形態、技術などを明らかにし、庭園の成立過程、系譜関係、その後の変遷などを解明する。平成18～22年度を研究第Ⅱ期とし、第Ⅱ期では平安時代の庭園遺跡、史料、絵画資料等を調査研究対象とする。成果は平成22年度に報告書として刊行する。研究は研究員による遺跡現地調査、史料調査、関係文献調査の他、個々の遺跡の発掘調査担当者、関係研究者を集めて各年度1回程度、研究会を開催し、情報収集と意見交換を図り、成果をまとめる。また、逐次収集した全国の発掘庭園に関する情報は発掘庭園データベースに追加し、当研究所ホームページ上で公開する。
--------	---

【担当部課】	文化遺産部	【事業責任者】	文化遺産部長 高瀬要一
【スタッフ】	内田和伸、中島義晴、栗野隆		

【年度実績概要】	平成18年度は平安時代庭園研究の初年度である。そこで平安時代庭園に関する既往の研究を把握すること、平安時代庭園遺跡の全国的情報の整理、史料・絵巻からの平安時代庭園像へのアプローチ、平安時代庭園植栽の把握、といった平安時代庭園の研究に関する現状と全体像を把握・整理する作業を行った。このための研究会を庭園研究関係者を集めて2006年10月に開催した。報告内容は、①平安時代庭園研究の現状、②平安時代庭園発掘調査の概要、③史料から見た平安京の庭園、④絵巻から見た平安時代の庭園、⑤平安時代庭園の植栽、の5本である。平安時代に入ると確認されている遺跡、文献史料、既往研究論文等が数多くあり、遺漏なく情報を集め、整理する作業の重要性と、次年度以降は平安時代前期、中期、後期に分けて調査研究を進めていく方針を確認した。 当研究所ホームページ上で公開している発掘庭園データベースについては、平成18年度は61件の新規データを和文と英文で追加した(計382件)。
【実績値】	研究会等開催数：1回(研究報告資料集1件①、参加者数：地方自治体職員・大学教員等23名) 論文等数7件(論文3件②～④、発表4件⑤～⑧) 発掘庭園データベース追加件数：61件(計382件)
【年度決算見込額】	6,114千円

【備考】	①奈良文化財研究所『古代庭園に関する研究会(平成18年度)資料集』2006.10 ②内田和伸「五月五日節会の復興に関する研究」『遺跡学研究第3号』2006.11 ③内田和伸「宇宙を象る宮殿—平城宮第一次大極殿院—」『東アジアの古代文化』2006.8 ④内田和伸「宇宙を象る宮殿—平城宮第一次大極殿院の設計思想—」『日本史の方法第5号』2007.2 ⑤高瀬要一「平安時代庭園研究の現状」2006.10 ⑥内田和伸「平安時代庭園発掘調査の概要」2006.10 ⑦高瀬要一「平城宮跡東院庭園の植栽復原」『日本遺跡学会2006年度大会発表資料集』2006.11 ⑧内田和伸「平城宮第一次大極殿院の設計思想と整備のあり方」奈良女子大学COE国際シンポジウム2006.11
------	---

当該事務または事業の実績に関する自己点検評価

1. 定性的評価

観 点	独創性	継続性	適時性			
判 定	A	A	A			
備考 独創性：庭園の機能・使われ方を復原するという視点 継続性：時代、地域を広げた研究の継続 適時性：英文データベースの汎用性						

2. 定量的評価

観 点	論文等数	発表件数				
判 定	A	A				
備考						

3. 実績の総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	定性的評価、定量的評価において全ての項目がAであることから総合的評価をAとした。

4. 当年度における中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	当初の計画通り事業を実施できたことから順調であると判定した。

業務実績書

中期計画の項目 (I1(1)⑤)	平城京、藤原京、飛鳥地域を中心とした我が国及び関連する中国・韓国等諸外国の遺跡の発掘調査並びに共同研究を行うとともに、出土品・遺構の調査・研究及び庭園等に関する基礎的な調査・研究を実施し、それにより古代日本の都城の構造及び建造物の様式並び瓦・陶磁器・金属器等の手工業生産技術の実態やその変遷過程、庭園等の変遷過程、飛鳥地域の歴史等の解明に寄与する。
【事業名称】	飛鳥地域の歴史に関する調査研究 (I1(1)⑤オ)

【事業概要】
山田寺出土展示部材の経年変化の計測研究 アジア史の中の飛鳥文化の研究として飛鳥地方壁画古墳の研究 飛鳥時代の工芸技術の研究として飛鳥・奈良時代の金工品の研究

【担当部課】	飛鳥資料館	【事業責任者】	学芸室長：杉山洋
【スタッフ】	加藤真二、清永洋平		

【年度実績概要】
<p>出土部材展示の経年変化の研究：当館では1982年に出土した山田寺東回廊の出土部材を、保存処理後に復元展示している。日本においてはこうした出土建築部材の出土処理後の展示公開は当館が初めてであり、木材の経年変化の遺跡研究が必要とされてきた。そのために展示後にセンサーを設置し、計測を続けてきている。</p> <p>当館の研究の中には飛鳥時代の工芸技術の研究が含まれている。高松塚古墳出土海獣葡萄鏡をはじめとして、飛鳥時代は日本の歴史において鏡が主要な遺物として再登場してくる時代に当たっている。これら唐式鏡を全国的にまとめて研究することが当館の研究目的に含まれている。今年度は当該研究として、高松塚古墳出土海獣葡萄鏡を主とした、中形海獣葡萄鏡の調査研究を行った。</p> <p>壁画古墳の研究としては、飛鳥地方の壁画古墳についての資料を収集すると共に、特に中国における壁画古墳の現状と、その保存に関する資料収集を行った。</p>
【実績値】
研究図録刊行 1冊
【年度決算見込額】
3,180千円

【備考】
「海獣葡萄鏡の研究」飛鳥資料館研究図録第9冊 2007.3

当該事務または事業の実績に関する自己点検評価

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	応用性	継続性		
判定	A	A	A	A		
備考 適時性：研究課題の必要性と緊急性、 独創性：基礎実験と現地における暴露試験および手法、 応用性：遺跡をとりまく環境の多様性への対応、 継続性：基礎データの収集						

2. 定量的評価

観点	論文等数	発表件数				
判定	A	A				
備考						

3. 実績の総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	定性的評価において、適時性、独創性、発展性、及び継続性の4項目においてAであることから、実績の総合的評価をAと判定した。

4. 当年度における中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	本年の計画を当初の予定とおり遂行したことから、当事業は順調であると判定した。

業務実績書

中期計画の項目 (I1 (1) ⑥)	遺跡の保存・整備・活用に関する体系的調査・研究、技術開発の推進及び整備事例のデータベース化等により、個々の遺跡の現況に応じた適切な保存修復・整備に資する。また、これに関連して、平城宮跡・藤原宮跡の整備・公開・活用に関する調査研究を行う。
-----------------------	--

【事業名称】	遺跡の保存・整備・活用に関する調査研究 (I1 (1) ⑥ア)
--------	---------------------------------

【事業概要】	<p>遺跡の保存・整備・活用に関する研究の一環として、遺跡の保存・整備(画段等)から整備後におけるまでの遺跡の公開・活用状況や、遺構の露出展示を伴う整備例の調査研究を行い、収集した資料のデータベース化を開始する。</p> <p>高松塚の整備関係では、文化庁から「特別史跡高松塚古墳仮整備基本設計業務」を受託し、計画案の立案を経て、基本設計図書を作成した。</p>
--------	---

【担当部署】	文化遺産部	【事業責任者】	遺跡整備研究室長 山中敏史
--------	-------	---------	---------------

【スタッフ】	高瀬要一、内田和伸、中島義清
--------	----------------

【年度実績概要】	<p>①今年度は遺跡の教育面に関する情報収集をおこなった。</p> <p>②2006年11月25・26日に、「遺跡の教育面に関する活用」のテーマで第一回遺跡整備・活用研究集會を平城宮跡資料館講堂にて開催した。 発表内容は遺跡現地での取り組みに関するものが6件、埋蔵文化財センターでの取り組みが1件、学校教育現場での取り組みが1件、NPOによる取り組みが1件であり、各発表の後、総合討議をおこなった。そして、研究集會参加者の83%からアンケートを回収し、そのうちの95%から有意義であったとの回答を得た。</p> <p>③研究集會開催後、来年度にこの研究集會の報告書を刊行する準備として総合討議の内容の整理等をおこなった。</p> <p>④国指定史跡における遺構の露出展示に関する整備例の資料を収集し、データベース化を開始した。データ内容は、遺跡の概要、整備の概要の他、遺構露出展示概要として、遺構概要、展示施設(掘削・構造・設備、保存処理内容、管理内容、各種図面・写真等)についての情報である。</p> <p>⑤文化遺産部の景観研究室と共同で、「宮中儀礼の復興による文化遺産の活用に関する研究会」を2007年2月22日に平城宮跡資料館講堂にて開催した。</p> <p>⑥高松塚古墳石室解体後の仮整備計画に関しては、文化庁から「特別史跡高松塚古墳仮整備基本設計業務」を受託した。関係者の意見を考慮しながら遺跡の保存・活用方法などを検討して整備案5案を作成し、平成18年7月19日のワーキング委員会に提示した。これを経て7月24日の国宝高松塚古墳壁画恒久保存対策検討会(第7回)に3案を提示、現在の保存施設を撤去し、本来的な墳丘外観に還元する方針を得た。その後、石室跡の埋め戻し方法、支保工の防錆仕様の検討等を経て、基本設計図書を作成した。</p>
----------	--

【実績値】	<p>研究集會等開催数：1回(研究報告資料集1件①)、参加者数：地方自治体職員・大学教員・大学院生など104人。</p> <p>研究会開催数：1回、参加者数：地方自治体職員・大学院生など35人。</p> <p>論文等数：6件(論文5件②～⑥、発表1件⑦)。</p> <p>遺構の露出展示に関するデータベース入力遺跡件数：34件。</p>
-------	--

【年度決算見込額】	4,190千円
-----------	---------

【備考】	<p>①『第一回遺跡整備・活用研究集會発表要旨集』2006.11</p> <p>②中島義清「遺跡の教育面に関する活用の現状」『奈良文化財研究所紀要2007』2007</p> <p>③内田和伸・芳之内圭「五月五日節会の復興に関する研究」『遺跡学研究第3号』日本遺跡学会2006.11</p> <p>④内田和伸「ソウル景福宮での内門將交代儀式について」『遺跡学研究第3号』日本遺跡学会2006.11</p> <p>⑤高瀬要一「カナダ、ランス・オー・メドー遺跡の整備」『遺跡学研究第3号』日本遺跡学会2006.11</p> <p>⑥内田和伸「高松塚古墳石室の3D測量」『遺跡学研究第3号』日本遺跡学会2006.11</p> <p>⑦内田和伸・芳之内圭「五月五日節会の復興に関する研究」宮中儀礼の復興による文化遺産の活用に関する研究会2007.2</p>
------	---

当該事務または事業の実績に関する自己点検評価

1. 定性的評価

観点	適時性	発展性	独創性	正確性		
判定	A	A	A	A		
備考						

2. 定量的評価

観点	論文等数	研究会等の開催数				
判定	A	A				
備考						

3. 実績の総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	定性的評価、定量的評価において全ての項目がAであることから総合的評価をAとした。

4. 当年度における中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	当初の計画通り事業を実施できたことから順調であると判定した。

業務実績書

中期計画の項目 (I1(1)⑥)	遺跡の保存・整備・活用に関する一体的な調査・研究、技術開発の推進及び整備事例のデータベース化等により、個々の遺跡の現況に応じた適切な保存修復・整備に資する。また、これに関連して、平城宮跡・藤原宮跡の整備・公開・活用に関する調査・研究を行い、文化庁が行う平城宮跡及び飛鳥・藤原宮跡の整備・復原事業に関して、専門的・技術的な協力・助言を行う。
---------------------	---

【事業名称】	遺跡の保存・整備・活用に関する技術開発研究 (I1(1)⑥イ)
--------	---------------------------------

【事業概要】	遺構の安定した公開・展示を行うことを目的とした事前調査法、保存技術ならびに監視技術の開発的研究の一環として、遺跡の水分状態や石材の劣化状態を把握する技術の応用研究、平城宮跡遺構展示館等における遺構安定化薬剤の実地試験に取り組む。
--------	--

【担当部課】	埋蔵文化財センター	【事業責任者】	保存修復科学研究室長 肥塚隆保
【スタッフ】	高妻洋成、降幡順子、脇谷草一郎(企画調整部)		

【年度実績概要】	<p>石造文化財の劣化診断をおこなうための石造文化財用打音試験装置を試作し、基礎的なデータを収集した。また、石造文化財の変形・破壊のモニタリングに応用することのできるアコースティックエミッション法について、フィールドで使用することのできるモバイル型の測定装置を導入し、高松塚古墳石室解体における微細な破壊のモニタリング、温度変化による石材の変形・破壊のモニタリングに応用した。高松塚古墳石室解体作業においては、解体時ならびに搬送時におけるモニタリングにおいて実用化されている。</p> <p>遺跡の地中における水分状態(地下水位、含水比、流向など)を調査するための技術として、自然電位測定法ならびに比抵抗測定法を導入し、妻木晩田遺跡堅穴住居址ならびに宮畑遺跡などにおいてフィールド調査をおこない、遺跡の保存整備に有効なデータを提示することが可能となった。</p> <p>妻木晩田遺跡ならびに平城宮跡遺構展示館において、土の水分含有率の変化に充分対応し、かつカビや蘚苔類の繁茂を防ぐことを目的に試作した有機珪酸エステルを用いた実地試験をおこない、その経過観察をおこなったところ、土壌含水比が変動しても安定した形態を保ち、カビや蘚苔類の繁茂を防げることを確認した。</p>
【実績値】	<p>発表件数 4件(日本文化財科学学会大会2件、東アジア文化財保存修復国際会議専門家会議「東アジアの文化財保存修復事情」2件)</p> <p>論文等数 7件(①～⑦)</p>
【年度決算見込額】	3,032千円

【備考】	<p>① 高妻洋成・脇谷草一郎・降幡順子・肥塚隆保「石造文化財の劣化状態を知るための打音試験法の応用I—打撃音の周波数解析と浮き・空洞の検出—」『日本文化財科学学会第23回大会研究発表要旨集』2006.6</p> <p>② 脇谷草一郎・高妻洋成・杉山洋・肥塚隆保「カンボジア・西トップ寺院遺跡の保存科学的研究1」『日本文化財科学学会第23回大会研究発表要旨集』2006.6</p> <p>③ 高妻洋成・脇谷草一郎・肥塚隆保「イースター島モアイ石像の保存科学的研究」『奈良文化財研究所紀要2006』2006.6</p> <p>④ 脇谷草一郎・高妻洋成「遺跡の露出展示に向けた基礎的研究」『奈良文化財研究所紀要2006』2006.6</p> <p>⑤ 肥塚隆保「石室解体にむけた実験」『文化庁月報No.461』2007.2</p> <p>⑥ 長尾かおり・高妻洋成・脇谷草一郎・肥塚隆保「妻木晩田遺跡における保存科学的研究—環境調査から—」『東アジア文化財保存修復国際会議専門家会議要旨集』2006.9</p> <p>⑦ 脇谷草一郎・高妻洋成・肥塚隆保「溶出実験による石材の化学的風化に関する考察」『東アジア文化財保存修復国際会議専門家会議要旨集』2006.9</p>
------	---

当該事務または事業の実績に関する自己点検評価

1. 定性的評価

観 点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判 定	A	A	A	A	A	
備考						

2. 定量的評価

観 点	発表件数	論文等数				
判 定	A	A				
備考						

3. 実績の総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	定性的評価においてAが5つであり、Aと認めたものである。

4. 当年度における中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	本年度の計画を当初の計画どおり実施できたことから、順調であると判定した。

業務実績書

中期計画の項目 (I1 (1) ⑥)	遺跡の保存・整備・活用に関する一体的な調査・研究、技術開発の推進及び整備事例のデータベース化等により、個々の遺跡の現況に応じた適切な保存修復・整備に資する。また、これに関連して、平城宮・藤原宮跡の整備・公開・活用に関する調査研究を行い、文化庁が行う平城宮及び飛鳥・藤原宮跡の整備・復原事業に関して、専門的・技術的な協力・助言を行う。
-----------------------	--

【事業名称】	第一次大極殿復原整備研究 (I1 (1) ⑥ウ)
--------	--------------------------

【事業概要】	平城宮跡・藤原宮跡の整備・公開・活用に関する調査研究のため、文化庁が行う平城宮跡第一次大極殿院地区の復原整備計画に沿った実践的調査研究を実施するとともに、「宮跡整備構想」に基づく具体的整備方針の再検討を目指し、情報収集や調査・分析を行う。文化庁がおこなう平城宮跡第一次大極殿院復原に関して、専門的・技術的な援助・助言を行うため、第一次大極殿院復原設計計画に沿った実践的研究及び第一次大極殿院正殿の復原施工段階における実践的研究を行うものとし、復原に関する資料の整理、新たに行うべき調査研究の計画案などを提示するとともに、文化庁記念物課や文部科学省文教施設企画部の主催する会議等に参画し、専門的・技術的な援助・助言をおこなう。
--------	--

【担当部課】	都城発掘調査部	【事業責任者】	部長 川越俊一
--------	---------	---------	---------

【スタッフ】	島田敏男、金井健、大林潤、黒坂貴裕、粟野隆、内田和伸、箱崎和久、西田紀子、清永洋平、今西康益、千田剛道、次山淳、山本崇、桑原隆佳、鈴木修二
--------	---

【年度実績概要】	<p>上記スタッフによって、宮跡の管理・活用を検討するワーキンググループを構成し、ワーキンググループ内で検討会をおこないながら、今後の宮跡の管理・活用についての調査研究をおこなった。今年度は主として、宮跡活用のためのゾーニング、なかでも中核施設の配置計画、導線計画について検討をおこなった。</p> <p>実施した調査研究項目は、①平城宮跡内における中核施設の位置付けの検討、②中核施設の施設・設備に関する検討、③中核施設を軸とした導線計画の検討、④大規模な遺跡の管理運営にかかる類例調査、⑤復原建物において、防災等の安全性能上必要な設備、管理・運営上必要な設備、活用にともない必要な設備について、⑥法令の検討および類例調査の研究、⑦第一次大極殿正殿の活用方法の検討、である。</p> <p>また、文化庁がおこなう第一次大極殿正殿の復原に対しての専門的・技術的協力として、屋根仕様および金具についての研究会を開催するとともに協力、施工に際しての助言をおこなった。</p>
----------	---

【実績値】	<p>『奈良文化財研究所総合研究会 (第17回) 資料集』所収 1篇 『奈良文化財研究所紀要 2007』所収 1篇 文化庁事業への協力</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 特別史跡平城宮跡及び藤原宮跡の保存整備に関する検討委員 出席 1回 ・ 軟弱地盤等の検討に関する小委員会 出席 3回 ・ 特別史跡平城宮跡第一次大極殿正殿内部 活用等検討会 出席 3回 ・ 大極殿復原事業に関する連絡会議 出席 11回 ・ 大極殿復原に関する屋根仕様研究会 開催 2回 ・ 大極殿復原に関する金具研究会 開催 2回 ・ 大極殿正殿復原事業にかかる指導・助言 23回
-------	--

【年度決算見込額】	17,196千円 (受託研究分 14,896千円含む)
-----------	-----------------------------

【備考】	<p>金井健 「平城宮跡の再整備 中核施設の配置計画」『奈良文化財研究所総合研究会 (第17回) 資料集』所収 金井健 「平城宮跡の再整備 中核施設の配置計画」『奈良文化財研究所紀要 2007』所収</p>
------	---

当該事務または事業の実績に関する自己点検評価

1. 定性的評価

観 点	適時性	独創性	発展性	継続性	正確性	
判 定	A	A	A	A	A	
備考						

2. 定量的評価

観 点	協力回数					
判 定	A					
備考						

3. 実績の総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	定性的評価において、Aが5つであり、これら結果から判断して、Aと認めたものである。

4. 当年度における中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	本研究事業は、継続的におこなっているもので、研究の段階も順調に進み、同時に文化庁事業への協力も順調におこなっており、今後もこのペースを維持しつつ、研究内容の向上に努めたい。

業務実績書

中期計画の項目 (I 1 (2) ①)	光に対する物性を利用した高精細デジタル画像を形成する手法に関する調査・研究を行い、文化財の色や形状・肌合いなどを正確かつ詳細に再現することを目指す。
------------------------	--

【事業名称】	高精細デジタル画像の応用に関する調査研究 (I 1 (2) ①)
--------	----------------------------------

【事業概要】	本研究では、前中期5年に開発した高精細デジタル画像形成の手法を用い、着色仏画・彩色壁画・油彩画・日本画・漆絵などの美術品を対象とし、それぞれについて、1) 光に対する物性の検討、2) 光物性の画像化に関わる技術開発、3) 形成画像の汎用的な活用法(表示・出力)に関する条件整備を行い、広範な文化財研究を支援するために不可欠な研究画像を形成し、それらに応用・利用する方法を探ることを目的とする。
--------	--

【担当部課】	企画情報部	【事業責任者】	企画情報部長 三浦定俊
--------	-------	---------	-------------

【スタッフ】	山梨絵美子、皿井舞、江村知子、城野誠治、鳥光美佳子 (以上、企画情報部)
--------	--------------------------------------

【年度実績概要】	<p>1. 他機関との共同研究 本研究は、先の中期計画において開発した画像形成技術を用いた画像の汎用的な活用・運用を行う方法・技法の研究に重点を置いている。平成17年度に行った奈良国立博物館との薬師寺蔵「吉祥天像」の共同研究の成果刊行を目指して協議を行い、同じく平成17年度に国立故宫博物院との共同研究として行った李唐筆「万壑松風図」の成果刊行を目指して編集会議を行った。また、以下の機関と共同で作品の調査研究を行った。 奈良国立博物館(薬師寺蔵 国宝「吉祥天像」 2006.8)、出光美術館(「伴大納言絵巻」 2006.8)、宮内庁三の丸尚蔵館(「春日権現縁起絵巻」2006.12)、国立故宫博物院(関同筆「秋山晚翠図」、孫過庭筆「書譜」黄庭堅筆「松風閣詩」 2006.10)、彦根城博物館(「彦根屏風」(2006.5))</p> <p>2. 高精細デジタルコンテンツとしての形成画像とその多目的利用 脆弱な材料で構成されている我国の貴重な文化財を間近で精査・鑑賞する機会は限定されている。文化財の高精細な画像を公開し、多目的な利用に供することは、文化財への理解を深め、実物の保存とともに活用の道を開く有効な方法である。 ① デジタルコンテンツの多目的利用の一環である画像展示を以下の場所で実施した。 ・ 黒田記念館特集展示(当所所蔵黒田清輝筆「智・感・情」湖畔)ほかの画像展示 東京文化財研究所黒田記念館(2006.7～) ・ 国宝「伴大納言絵巻」 出光美術館(2006.10.7～11.5) ・ 国宝「伴大納言絵巻」 東京文化財研究所1階ロビー(2006.10～) ・ 李唐筆「万壑松風図」、徽宗筆「文会図」 国立故宫博物院(台湾)(2006.12.25～07.3.25) ・ 国宝 絹本着色 十一面観音像 リートベルグ美術館(2007.2.18～4.9) ② 共同研究の成果として刊行した『国宝 紅白梅図屏風』(中央公論美術出版)の内容を、高精細デジタルコンテンツとして、作品の所蔵館の許可を得て、当所閲覧室で公開した(2006.9～)。また、奈良国立博物館との共同研究の成果「国宝 絹本着色 十一面観音像」の内容を、公開用のデジタルコンテンツとして作成した。</p> <p>3. 調査作品：絵画：「吉祥天立像」(薬師寺)、「伴大納言絵巻」(出光美術館)、「彦根屏風」(彦根城博物館)、関同筆「秋山晚翠図」、孫過庭筆「書譜」、黄庭堅筆「松風閣詩」(国立故宫博物院・台湾)、彫刻：龍門石窟蓮華洞諸像、等。</p>
----------	---

【実績値】	<p>学術雑誌等への掲載論文数 5件 (①～⑤) 学会研究会等での発表件数 1件 (⑥) 画像展示の件数 5件</p>
-------	---

【年度決算見込額】	13,183千円
-----------	----------

【備考】	<p>①Identification of Painting Materials Used for Mural Paintings by Image Analysis and XRF(S.Shirono, Y.Hayakawa), Advance in X-ray Analysis 49, 2006.10 ②「文化財の製作技法を探るーデジタル画像を用いた絵画技法の検証」 城野誠治 『社団法人日本非破壊検査協会誌』 第55巻7号 2006.7 ③「高松塚古墳壁画の彩色材料について 早川泰弘・城野誠治 『仏教藝術』 290号 毎日新聞社 口絵、2007.2 ④「写真の進歩 9.2 文化財」 城野誠治 日本写真学会誌(科学写真研) 9巻3号 2006.6 ⑤「現代によみがえる源氏物語絵巻」 科学技術白書(平成18年度) 2006.6 ⑥Non-destructive Analysis of a Painting, National Treasure in Japan(Y.Hayakawa, S.Shirono, S.Miura, T. Matsushima, T. Uchida, The 55th Annual Denver X-ray Conference, Denver, 06.8.7</p>
------	--

当該事務または事業の実績に関する自己点検評価

1. 定性的評価

観 点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判 定	A	A	A	A	A	A
備考						

2. 定量的評価

観 点	調査箇所数	論文数	発表数			
判 定	A	A	A			
備考						

3. 実績の総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	高精細デジタル画像および光学的手法を活用した文化財の調査については、先の中期計画における実績によって認知を得てきており、共同調査研究の数も増加している。それらの成果を本研究において広く、多様に活用する方法が質的にも量的にも目標以上のものとなったためAと判断した。今後はさらに多様な、独創的な応用に向けて努力したい。

4. 当年度における中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	調査については、従来の質を維持しつつ、より時間的効率性を獲得することができるようになった。 今後は、作品の所蔵者の許可を得た上で、報告書、展示等以外に、デジタル媒体による高精細画像の公開を拡大していきたい。

業務実績書

中期計画の項目 (I1(2)②)	小型可搬型機器の開発研究及び応用研究を行い、文化財の材質調査をその場で出来るようにする。また、有機化合物の物質同定を目的とした新規手法の検討及びその応用研究を行い、金属文化財や顔料など無機化合物に関する元素同定及び構造解析手法の確立等を目指す。
---------------------	--

【事業名称】	文化財の非破壊調査法の研究 (I1(2)②)
--------	------------------------

【事業概要】	文化財の材質調査をその場で行うことを目的に、小型可搬型機器の開発研究およびその応用研究を行う。金属文化財や顔料などの無機化合物に対して、その場での元素分析および構造解析手法の確立を行う。また、染料など有機化合物の物質同定を目的とした新たな非破壊調査法の調査・研究を行う。
--------	---

【担当部課】	保存科学部	【事業責任者】	保存科学部長 石崎武志
--------	-------	---------	-------------

【スタッフ】	早川泰弘、佐野千絵、木川りか、吉田直人、犬塚将英 (以上、保存科学部)
--------	-------------------------------------

【年度実績概要】	<p>5年計画の初年度として、下記の2点に重点をおいて研究を実施し、以下の成果を得た。</p> <p>(1) 可搬型機器による彩色文化財の材質調査とデータ解析 ポータブル蛍光X線分析装置を用いて、国宝絵画をはじめとした彩色文化財の材質調査を行い、各作品に使われている材料・技法を明らかにした。美術部・企画情報部など関連部門と連携し、調査作品に対する美術的・歴史的考察あるいは他の調査手法によるデータ・画像などが相互に関連付けられるような研究展開を図った。</p> <p>(2) 有機染料分析に関する検討とその応用 ファイバー型分光光度計を用いた、染織品を想定した試験片の紫外・可視反射分光スペクトル測定を行い、基質表面での拡散反射光や、繊維内在性蛍光物質などの影響について検討した。これらの結果をもとに、積分球を持たないタイプの分光光度計での反射スペクトル測定手順や補正法についての知見を得た。</p>
【実績値】	<p>論文等数 2件 (①、②)</p> <p>発表件数 2件 (③、④)</p>
【年度決算見込額】	6,538 千円

【備考】	<p>①早川泰弘、佐野千絵、三浦定俊・太田彩 「伊藤若冲『動植綵絵』の彩色材料について」 『保存科学』 46 2007.03</p> <p>②吉田直人 「紫外・可視反射分光法による染料非破壊分析のための基礎研究(3)―染織品を想定した試験片の紫外分光測定―」 『保存科学』 46 2007.03</p> <p>③早川泰弘、三浦定俊、松島朝秀 「根津美術館所蔵燕子花図屏風のX線調査」 日本文化財科学会第23回大会、東京学芸大学、2006.6.17</p> <p>④吉田直人、三浦定俊 「漆工品における藍の分光学的手法による非破壊的検出法(2)」 日本文化財科学会第23回大会、東京学芸大学、2006.6.17</p>
------	--

当該事務または事業の実績に関する自己点検評価

1. 定性的評価

観 点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判 定	A	A	A	A	A	A
備考						

2. 定量的評価

観 点	学術雑誌等への 掲載論文等数	学会研究会等での 発表件数				
判 定	A	A				
備考						

3. 実績の総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	研究会等による専門研究者間交流、基礎研究の確実な遂行のための情報収集、基礎研究の実施、速やかな研究成果公開を果たし、高い調査研究水準を保つことができた。

4. 当年度における中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	研究初年度として、専門研究者との交流を通して十分に情報収集し、基礎研究に着手し、今後の研究活動を進めていく上で基礎となる成果を得た。速やかな成果公開も果たし、包括的に調査研究を進めた。

業務実績書

中期目標の項目 (I1 (2) ③)	遺跡調査における新たな指標や属性分析法の確立に関する研究等を行い、全国における遺跡調査・研究の質的向上と発掘作業の効率化に資する。
-----------------------	---

【事業名称】	遺跡データベースの作成と公開 (I1 (2) ③ア)
--------	----------------------------

<p>【事業概要】</p> <p>遺跡調査における新たな指標や属性分析法の確立に関する研究等の一環として、官衙関連遺跡および豪族居宅遺跡の資料収集を行い、官衙や豪族居宅を認定するための指標、およびそれらの遺跡の発掘調査において抽出すべき基本的属性について調査研究を進め、収集し属性分析した資料をデータベース化し、順次一般公開する。</p>

【担当部課】	埋蔵文化財センター	【事業責任者】	文化遺産部 遺跡整備研究室長 山中敏史
--------	-----------	---------	---------------------

<p>【スタッフ】</p> <p>森本晋、志賀崇（京都大学大学院 人間・環境学研究科 博士後期課程）、清野陽一（京都大学大学院 人間・環境学研究科 博士後期課程）、家原圭太（京都大学大学院 人間・環境学研究科 博士後期課程）</p>
--

<p>【年度実績概要】</p> <p>① 各地の官衙関連遺跡および豪族居宅遺跡等の発掘調査資料の収集・整理・分析については、平成16年度以前刊行の報告書を中心に、めくり作業をおこない、国府・郡衙・城柵遺跡やその他の官衙関連遺跡・豪族居宅遺跡等の資料を収集整理した。官衙関連遺跡については、とくに中部・近畿地方のデータ収集と関東以北のデータの補訂作業を重点的に進めた。</p> <p>② 官衙関係遺跡データベースについて、建物データなどのデータベースのフィールド項目を一部補訂した。また、市町村合併に対応して、遺跡所在地の変更作業を進めた。</p> <p>③ 島根県以東の官衙関連遺跡については公開用のデータベースを作成し、奈良文化財研究所ホームページで公開しているデータベース保守管理担当職員に更新用のデータを提出した。4月早々に公開できる予定である。</p> <p>④ 豪族居宅遺跡の属性分析や資料収集等については、建物データの分析結果を報告し、また、主要遺跡の遺構図等を収集整理した。</p> <p>⑤ 郡衙および周辺の関連寺院の研究をおこない、報告書を刊行した。</p>
--

<p>【実績値】</p> <p>論文等数： 1件（論文1件 ①） 発表件数： 4件（講演1件 ⑥、研究報告3件 ③～⑤） 報告書数： 1件（刊行図書1件 ②） データベース資料収集・入力件数： 総めくり済み報告書等冊数約1,000冊、データベース入力件数約3,000件、データ補訂件数約1,000件、スキャナ取り込み件数約2,000件 公開予定データ数（累積数）： 遺跡データ数約700件、文献データ数約7,700件、建物データ数約10,900件等</p>
--

<p>【年度決算見込額】</p> <p>8,783千円 (I1 (2) ③イ「古代官衙・集落に関する研究会の開催」との合算額)</p>

<p>【備考】</p> <p>① 山中敏史 「上神主・茂原官衙遺跡群の倉庫群をめぐって」『栃木県考古学会シンポジウム 上神主・茂原官衙遺跡の諸問題』2007.2 ② 山中敏史（共編著）『郡衙周辺寺院の研究—因幡国気多郡衙と周辺寺院の分析を中心に—』奈良文化財研究所、2006.12 ③ 山中敏史 「地方官衙と交通」『古代交通研究会 第13回資料集 官衙と交通』2006.7 ④ 山中敏史 「地方豪族居宅の空間的構成」『古代官衙・集落研究会 古代豪族居宅の構造と機能 研究報告資料』2006.12 ⑤ 家原圭太 「京内貴族邸宅の構造—平城京を中心に—」『古代官衙・集落研究会 古代豪族居宅の構造と機能 研究報告資料』2006.12 ⑥ 山中敏史 「上神主・茂原官衙遺跡群の倉庫群をめぐって」『栃木県考古学会シンポジウム 上神主・茂原官衙遺跡の諸問題』2007.2</p>

当該事務または事業の実績に関する自己点検評価

1. 定性的評価

観 点	適時性	発展性	効率性	継続性	独創性	
判 定	A	A	A	A	A	
備考						

2. 定量的評価

観 点	収集資料数	データベース入力 件数				
判 定	A	A				
備考						

3. 実績の総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	科学研究費の研究成果も加えて、官衙関係遺跡データベースを島根県以東の主要遺跡を対象について作成し、公開できる状況に達したので、Aと評価した。

4. 当年度における中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	官衙関連遺跡のデータベースの作成を順調に進めることができ、また、豪族居宅遺跡関係については、貴族邸宅も含めて建物の属性分析を進め、研究報告ができた。

業務実績書

中期指書の項目 (I 1 (2) ③)	遺跡調査における新たな指標や属性分析法の確立に関する研究等を行い、全国における遺跡調査・研究の質的向上と発掘作業の効率化に資する。
------------------------	---

【事業名称】	古代官衙・集落に関する研究集会の開催 (I 1 (2) ③イ)
--------	---------------------------------

【事業概要】	地方官衙遺跡と豪族居宅遺跡に関する研究集会を実施し、全国におけるこの種の遺跡調査の質的向上を図る。
--------	---

【担当部課】	埋蔵文化財センター	【事業責任者】	文化遺産部 遺跡整備研究室長 山中敏史
--------	-----------	---------	---------------------

【スタッフ】	松村恵司、志賀崇(京都大学大学院 人間・環境学研究科 博士後期課程)、清野陽一(京都大学大学院 人間・環境学研究科 博士後期課程)、冨原圭太(京都大学大学院 人間・環境学研究科 博士後期課程)
--------	--

【年度実績概要】	<p>①12月15・16日の両日にわたって、「古代地方豪族居宅の構造と機能」のテーマで研究集会を開催した。</p> <p>②研究報告は、考古学サイドから6本、文献史学サイドから1本の計7本。</p> <p>③研究集会参加者は、147名であった。</p> <p>④7～9世紀代を中心とした主要な地方豪族居宅遺跡の調査研究の現状を整理し、中央貴族の邸宅や古墳時代の豪族居館の調査研究成果を踏まえ、また地方官衙の館などとの比較研究や文献史学におけるイヘ・ヤケ論などの再検討を行い、豪族居宅の構造・変遷の実態や、在地社会における地方豪族居宅の機能・役割について研究報告と議論をおこなった。</p> <p>⑤出席者の88%からアンケートを回収し、そのうちの93%から、たいへん有意義または有意義であったとの回答を得た。</p> <p>⑥昨年度開催した「在地社会と仏教」の研究集会の報告・討議に基づく研究報告論文・討議記録を掲載した『地方官衙と寺院』を刊行した。</p>
【実績値】	<p>参加者数： 147人(地方自治体職員・大学教官・大学院生など)</p> <p>報告者数： 7人</p> <p>研究報告要旨・資料集数： 2件(①②)</p> <p>刊行図書数： 1件(③)</p>
【年度決算見込額】	8,783千円 (I 1 (2) ③ア「遺跡データベースの作成と公開」との合算額)

【備考】	<p>① 奈良文化財研究所『古代官衙・集落研究会 古代豪族居宅の構造と機能 研究報告資料』2006.12</p> <p>② 奈良文化財研究所『古代豪族居宅関連遺跡資料集成』2006.12</p> <p>③ 奈良文化財研究所『在地社会と仏教』2006.12</p>
------	---

当該事務または事業の実績に関する自己点検評価

1. 定性的評価

観 点	継続性	独創性	適時性	発展性	効率性	
判 定	A	A	A	A	A	
備考 研究会参加者の要望に応じて実施した研究会であり、適時性の評価をAとした。						

2. 定量的評価

観 点	参加者数	参加者満足度				
判 定	A	A				
備考 予定人数を超えた参加者があり、アンケートの結果、回答者の93%が有意義であったと回答している。						

3. 実績の総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	参加者が100名の目標値を大幅に超え、アンケート回答者の93%から研究会の内容が有意義であったとの評価を得たこと、昨年度集会の論文報告集を計画どおり刊行できたことから、全体としてAと評価した。

4. 当年度における中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	当初の計画どおり研究会を実施し、昨年度の研究会報告論文集も予定期日までに刊行でき、業務を順調に実現できた。今後も、参加者の要望等を組み入れた研究会テーマや報告内容の設定を心がけていきたい。

業務実績書

中期計画の項目 (I1(2)③)	遺跡調査における新たな指標や属性分析法の確立に関する研究等を行い、全国における遺跡調査・研究の質的向上と発掘作業の効率化に資する。
---------------------	---

【事業名称】	遺跡の測量・探査技術の有効利用法の研究 (I1(2)③ウ)
--------	-------------------------------

<p>【事業概要】</p> <p>遺跡の測量・探査における新たな技術の有効利用法を研究し、全国の遺跡調査の質的向上と発掘作業の効率化に資するべく、機器の更新と実地テストを通じたデータの収集と分析を開始する。本事業は、現在の遺跡調査の実態に鑑み、従前の方法との乖離を埋めつつ、そうした技術の有効利用法を研究・提示することで、当該分野における指針としての役割を果たすことを目的としている。</p>

【担当部課】	埋蔵文化財センター	【事業責任者】	遺跡・調査技術研究室長 小澤毅
【スタッフ】	金田明大、西村康 (客員研究員)		

<p>【年度実績概要】</p> <p>当研究所における測量・探査関係の業務は平成14年度を最後に3年間に中断していたため、まず既存機器の確認・点検作業をおこない、更新機種を選定と導入を開始した。その後、関連機関の要請に応じて、地中レーダ探査を平城宮第二次大極殿院東方官衙(奈良県)、鈴谷瓦窯(大阪府)、徳島城本丸・阿波国分寺(徳島県)、造山古墳・両宮山古墳(岡山県)、綾羅木郷遺跡・仁馬山古墳(山口県)で実施し、データの収集と解析をおこなった。また、磁気探査を瓦塚瓦窯(茨城県)で、電気探査を造山古墳・両宮山古墳、徳島城本丸・阿波国分寺、綾羅木郷遺跡・仁馬山古墳で実施した。</p> <p>一方、遺構の記録を主眼としたデジタル写真計測の利用についての研究にも着手し、笠置寺(京都府)で試験的なデータ取得と解析をおこなった。さらに、遺物の記録を主眼とした三次元計測技術の応用研究も並行して開始し、三次元デジタルフォトおよびデジタル写真を用いて中国遼寧省唐代墳墓出土資料の計測を試行した。このほか、おもに奈良県内の研究者を対象に、地中レーダ探査に関するワークショップを開催した。</p> <p>また、東京文化財研究所やACCU招聘者を対象として、国内での測量研修を実施し、国外では、ベトナム・タンロン遺跡の基準点測量および現地研究者を対象とした測量研修をおこなった。</p>
<p>【実績値】</p> <p>発表件数： 3件 (日本文化財探査学会、奈良文化財研究所総合研究会)</p> <p>刊行図書数： 1件 (①)</p> <p>地中レーダ探査実施件数： 8件</p> <p>電気探査実施件数： 6件</p> <p>磁気探査実施件数： 1件</p> <p>ワークショップ開催件数： 1件</p> <p>測量研修実施件数： 3件</p> <p>遺跡測量実施件数： 2件</p> <p>遺物計測実施件数： 2件</p>
<p>【年度決算見込額】</p> <p>10,572千円</p>

<p>【備考】</p> <p>①「奈良文化財研究所における最近の遺跡探査」『埋蔵文化財ニュース第127号』2007.3</p>
--

当該事務または事業の実績に関する自己点検評価

1. 定性的評価

観点	適時性	発展性	効率性	継続性		
判定	A	A	A	A		
備考 適時性：技術革新が進行するなかでの確な指針を欠く現況の改善 発展性：全国の遺跡調査への応用性と影響力 効率性：時間的投資・人的投資の効率化 継続性：事業中断以前を含めたデータの継続的収集						

2. 定量的評価

観点	遺跡探査実施件数					
判定	A					
備考						

3. 実績の総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	定性的評価の全ての項目がAであることから、総合的評価もAと判定する。測量・探査ともに、遺跡調査への応用に関して地方公共団体や国外からの期待も大きく、今後、ナショナルセンターとしての確な役割を果たしていくことが必要である。

4. 当年度における中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	3年間におよぶ測量・探査関係業務の中断をへて新たに立ち上げた本事業だが、機器の更新とテスト、実際の運用を含めて、計画どおりの順調なすべり出しができた。今後も事業を円滑に推進するために、RTK 対応可能な GPS や三次元レーザスキャナなど、必要機材の早期導入が望まれる。機材の充実度で韓国の国立文化財研究所に大きく立ち後れている現状が懸念される。

業務実績書

中期計画の項目 (I 1 (2) ④)	木質古文化財の年輪年代測定等を進め、考古学・建築史・美術史の研究に資する。
------------------------	---------------------------------------

【事業名称】	年輪年代学研究 (I 1 (2) ④)
--------	---------------------

【事業概要】	<p>遺跡出土木材、木造建築物、木造美術工芸品などの年輪年代測定を実施し、考古学、建築史学、美術史、歴史学研究に資する。遺跡出土木材等を中心に汎用性のある年輪読取機による計測手法、木造建造物の現地調査等に適したデジタル画像計測手法、美術工芸品等を非破壊で年輪画像計測可能なマイクロフォーカス X 線 CT による計測手法などの各種年輪年代測定技術を対象に応じて適材適所で選択し、効率的かつ効果的な研究を実施する。また、埋没樹幹などの年輪年代測定を通して自然災害についても考究する。上記研究成果を、国際学会、学術論文、各種報告書として発表する。</p>
--------	---

【担当部課】	埋蔵文化財センター	【事業責任者】	年代学研究室長 光谷拓実
【スタッフ】	大河内隆之、伊東隆夫(客員研究員)		

【年度実績概要】	<p>考古学関連 7県下 10 遺跡から出土した木材試料の年輪年代調査を実施した。特筆すべきは、平城第 404 次調査で出土した西大寺食堂院井戸枠の年輪年代調査である (③)。井戸を構成していた全 20 点の井戸枠部材のうち年輪年代調査の可能な 16 点について、デジタルカメラによる年輪画像から年輪幅を画像計測する方法で調査を実施した。うち 15 点から年輪年代が得られ、最新の年代は 767 年であった。767 年の年輪年代が得られた試料 3 点はいずれも樹皮型であり、1 点は樹皮を、2 点は面皮を残存していた。したがって、得られた年輪年代は、用材の伐採年代を正確に示している。『続日本紀』によると、この年に造西大寺司が任命されており、西大寺造宮史を考究するうえでの貴重な情報が、考古学・文献史学・年輪年代学共同の調査成果として得られた意義は大きい。</p> <p>建築史関連 国宝 6 棟、重要文化財 1 棟を含む 7 府県下 9 棟の建造物に対して、年輪年代調査を実施した。</p> <p>美術史関連 国宝 8 点を含む 6 府県下の 17 軀の木彫像ならびに 2 点の工芸品に対して年輪年代調査を実施した。特筆すべきは、興福寺の国宝板彫十二神将像の年輪年代調査である。デジタルカメラを用いた年輪画像計測の技術により、対象物に接触することなく 6 軀から年輪データを取得し、うち 3 軀の年輪年代が確定した。波夷羅大将像からは、辺材部を欠くものの 965 年の年輪年代が得られ、これがお造像の上限年代を示している。また、真達羅大将像と伐折羅大将像は、年輪パターンの類似性により、同じ原木から造像されたものであることが確認された。興福寺板彫十二神将像の造像時期に関しては、従来 11 世紀半ばを降らないとする見解が美術史の視点から示されてきたが、切削によって失われてしまった辺材部の存在を考慮しても今回の年輪年代調査の結果はこれと矛盾せず、上記の見解が科学的な調査で裏付けられたことになる。</p> <p>自然災害史関連 長野県の遠山川埋没林から収集した試料に対して、年輪年代調査を実施した。</p> <p>新しい年輪計測技術の開発研究 マイクロフォーカス X 線 CT 装置を用いた非破壊による年輪年代測定技術について、研究を重ねた。この技術が、日本での年輪年代学研究の主要樹種であるスギやヒノキなどに有効であることは、これまでの研究 (⑤) などによって明らかにされてきたが、今年度の研究によって、針葉樹のみならず広葉樹に対しても有効であることが明らかになった。環孔材であるミズナラ、散孔材であるブナについての研究成果 (②) は、とりわけヨーロッパの年輪年代学研究者からたいへん注目されている。</p>
【実績値】	<p>論文等数： 3 件 (①～③、うち 1 件は原著論文査読あり)</p> <p>発表件数： 4 件 (④～⑦、うち 2 件は国際学会)</p>
【年度決算見込額】	9,886 千円

【備考】	<p>① 光谷拓実「弥生時代の年輪年代」『新弥生時代の始まり 第 1 巻 弥生時代の新年代』雄山閣、2006.4</p> <p>② Takayuki Okochi et al.: “Nondestructive tree-ring measurements for Japanese oak and Japanese beech using micro-focus X-ray computed tomography”, <i>Dendrochronologia</i>, Volume 24, Issues 2-3, February 2007)</p> <p>③ 大河内隆之「年輪年代測定」『西大寺食堂院・右京北辺発掘調査報告』2007.3</p> <p>④ 光谷拓実「年輪年代法と弥生～古墳時代～年輪年代研究からの提言」日本考古学協会第 7 回総会 東京学芸大学、2006.5</p> <p>⑤ Takayuki Okochi et al.: “Non-destructive dendrochronological study of a wooden sculpture of a guardian dog using micro-focus X-ray computed tomography”, 7th International Conference of Dendrochronology, Beijing, China, July 2006</p> <p>⑥ Takumi Mitsutani et al.: “Dendro-dating of ancient temples inscribed as World Heritage site in Nara, Japan”, 7th International Conference of Dendrochronology, Beijing, China, July 2006</p> <p>⑦ 大河内隆之「人魚を裸にする—X 線 CT が暴く人魚の正体—」葉山高等研究センタープロジェクト 人間生命科学 奈文研 2007.2</p>
------	--

当該事務または事業の実績に関する自己点検評価

1. 定性的評価

観 点	適時性	継続性	発展性	独創性	効率性	正確性
判 定	A	A	A	A	A	A
備考 適時性: 考古学・建築史・美術史等に関連した木材から得られた年輪年代情報を、速やかに多くの研究者に提供した。 継続性: 各地域・各年代にわたる年輪データを継続的に集積している。 発展性・独創性: マイクロフォーカス X 線 CT による非破壊年輪年代測定技術は、当研究室で開発した独自の技術であり、年輪年代学の応用範囲を格段に広げる発展性を有する。 効率性: 年輪年代測定対象に応じて、年輪読取機による計測手法、デジタル画像計測手法、マイクロフォーカス X 線 CT による非破壊年輪計測手法などを適材適所で選択し、効率的かつ効果的に研究を遂行した。 正確性: 1年単位の精度で年代確定可能であるという年輪年代法の正確性は、本年度の研究においてもいかに発揮された（西大寺井戸杵の事例など）。						

2. 定量的評価

観 点	論文等数	発表件数				
判 定	A	A				
備考						

3. 実績の総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	定性的評価における6項目がいずれもAであることから、Aと認めたものである。 なお、本年度の年度実績概要に記した年輪年代調査実績のうちのいくつかは、調査対象の所有者や調査主体などとの協議により、当該年度内に論文発表や学会発表などがなされず、論文等件数・学会発表等件数などの実績値として反映されていない。当該年度に実施された調査実績のすみやかなる発表を目指すべく、関係者との協議を重ねていきたい。

4. 当年度における中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	当該年度における調査研究事業は、その進捗度からみて順調に実施できたと考えられる。今後とも広く木材情報の収集に努め、研究成果の公表に努力したい。

業務実績書

中期計画の項目 (I 1 (2) ⑤)	遺跡出土の動植物遺体や古土壌の考古科学的分析により、過去の生業活動の解明と環境復元を行う。
------------------------	---

【事業名称】	動物遺存体による環境考古学研究 (I 1 (2) ⑤)
--------	-----------------------------

【事業概要】	遺跡における古環境復元の研究法を確立する。とくに日本および周辺国各地の遺跡から出土した動物遺存体、および水洗選別で得られる植物遺存体の同定を行い、その歴史的意義を探る。また、動物骨、人骨にみられる傷跡から、その目的と使われた利器を推定する。骨角器とその製作の際に生じた廃材、素材、未成品、そして破損品の研究を通じて、骨角器の製作技法の復元的研究を行う。全国各地の遺跡から出土した動物遺存体の出土例のデータを収集する。
--------	--

【担当部課】	埋蔵文化財センター	【事業責任者】	環境考古学研究室長 松井章
--------	-----------	---------	---------------

【スタッフ】	橋本裕子(客員研究員)、石丸恵利子(京都大学大学院 人間・環境学研究科 博士後期課程)、丸山真史(京都大学大学院 人間・環境学研究科 博士後期課程)、菊地大樹(京都大学大学院 人間・環境学研究科 博士後期課程)、ルブナ・オマル(京都大学大学院 人間・環境学研究科 修士課程)、廣藤紀子(京都大学大学院 人間・環境学研究科 修士課程)、納屋内高史(京都大学大学院 人間・環境学研究科 修士課程)
--------	--

【年度実績概要】	<p>韓国慶南考古学研究所の依頼により、紀元前1世紀から3世紀にかけて形成された金海へヒョンリ貝塚の報告書作成に対する協力、指導を行った。また、中国浙江省考古学研究所による田螺山遺跡の発掘に参加し、動物遺存体研究についての指導、助言を行った。このほか、ロシア科学アカデミー極東支部(在ウラジオストック)を訪問し、新石器時代から中世にかけての遺跡出土動物遺存体の調査を行い、今後の共同研究の提案を受けている。</p> <p>論文は、World Archaeology 誌に金原正明(奈良教育大学助教授)と連名で縄文農耕論について論じ、堅果類だけでなく、アカザ科に代表される蔬菜類もまた重要であったことを強調した。</p> <p>現生動物骨格標本の標本作製は、貝類30点、両生・爬虫類11点、魚類50点、鳥類5点、哺乳類10点と順調であった。今年度は奈良市在住の上村淳氏より、氏の飼育する鳥類の中から、主として海外の鳥類の死体の提供を受けることができ、種類を豊富にすることができた。</p> <p>動物骨に残る傷跡から利器を推定する研究は、新しくキーエンス社製デジタルマイクロスコープを導入し、画像記録を増加させた。</p> <p>韓国金海へヒョンリ貝塚の発掘の結果、韓国南部への牛馬の移入に関して、紀元前1世紀には相当数が存在したことを明らかにすることができた。今後、韓国と交流のあった長崎県原の辻遺跡など、従来の出土例の再検討と、現在の発掘出土例の見直しを行い、弥生時代に果たして牛馬が存在しなかったのかを再検討する必要性に迫られている。</p> <p>さきの中期計画において出版した『動物考古学の手引き』は、平成18年度に、“Fundamentals of Zooarchaeology of Japan”と題して英語版を出版した。これは韓国、中国、台湾、ロシアの研究者を主たる読者としたもので、魚類からヒトまで網羅した動物考古学の教科書は英語圏でも例がなく、世界中の動物考古学者の座右の書として長く使い継がれるだろう。この出版物は、平成19年度科学研究費補助金(研究成果公開)の対象として採択され、日英併記で出版される予定である。</p>
【実績値】	<p>標本作製数：魚類50点、鳥類5点、哺乳類10点、貝類30点、両生・爬虫類11点</p> <p>論文等数：3件(①~③、英文1件、和文2件)、報告書1件、その他9件(④~⑥)、計13件</p> <p>発表件数：8件(日本考古学協会2件(東京学芸大学)、近畿地区連合獣医師大会(京都)、和泉市制施行50周年記念シンポジウム(和泉市)、日本人類学会(高知工科大学)、名古屋大学AMSシンポジウム、富山県埋蔵文化財センター職員研修、DNA考古学研究会(京都))</p>
【年度決算見込額】	16,973千円(受託研究分1,917千円含む)

【備考】	<p>① 西田巖・中野充・甲元眞之・松井章「佐賀県佐賀市東名遺跡の調査」『考古学研究』53-1 2006.6</p> <p>② 丸山真史・松井章「動物資源の利用と変遷—骨角器と皮革の生産—」『鎌倉時代の考古学』高志書院 2006.6</p> <p>③ Akira Matsui and Masaaki Kanehara: “The question of prehistoric plant husbandry during the Jomon Period in Japan”, <i>World Archaeology</i>, Vol.38(2), Taylor&Francis, June 2006</p> <p>④ 松井章「佐賀市東名遺跡群の発掘」『ピオストーリー Vol.6』生き物文化誌学会 2006.11</p> <p>⑤ 松井章「辞書項目(鮎、犬、猪、馬、牛、猿、鹿、鶏、猫、蛇、脂肪酸分析法、貝塚、環境考古学)」『歴史考古学大辞典』吉川弘文館、2007.2</p> <p>⑥ Akira Matsui ed.: <i>Fundamentals of Zooarchaeology of Japan</i>, Kyoto, Japan, March 2007</p>
------	--

当該事務または事業の実績に関する自己点検評価

1. 定性的評価

観点	独創性	発展性	継続性			
判定	A	A	A			
備考 独創性：全時代をカバーする動物利用の歴史の解明 発展性：動物考古学から歴史学、部落史への発展 継続性：現生動物骨格標本の追加作成によるいっそうの充実化						

2. 定量的評価

観点	論文等数	発表件数				
判定	A	A				
備考						

3. 実績の総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	定性的評価、定量的評価のいずれもがAであることから、総合評価もAと判断する。

4. 当年度における中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	韓国、中国、台湾、ロシア、ベトナムなどの研究者との間で環境考古学、動物考古学の共同研究の体制が組み立てられた。今後、さらにこうした研究を発展させていきたい。さきの中期計画の成果品『動物考古学の手引き』は、日英併記の『動物考古学の基礎 Fundamentals of Zooarchaeology of Japan』として学術振興会の出版助成を受けて刊行される予定で、今回の中期計画も順調に進行しているといえる。

業務実績書

中期計画の項目 (I1(3)①)	生物被害を受けやすい木質文化財(社寺等建造物、彫刻など)の劣化診断や被害防止対策を確立する。
---------------------	--

【事業名称】	文化財の生物劣化対策の研究(I1(3)①)
--------	-----------------------

【事業概要】	歴史的建造物や彫刻等、屋外環境に近い空間にある文化財は、生物被害を受けやすい環境にあるが、その劣化の早期検出や被害防止対策について、研究はまだ十分な状況とはいえない。本プロジェクトでは、特に屋外に近い環境に置かれた文化財の生物劣化対策を確立することを目標に、生物による被害の現況について集約し、早期発見のためのシステム作りや劣化の防止手法の開発など、保存科学的研究を行う。
--------	--

【担当部課】	保存科学部	【事業責任者】	生物科学研究室長 佐野千絵
--------	-------	---------	---------------

【スタッフ】	木川りか、犬塚将英、吉田直人、石崎武志(以上、保存科学部)、山野勝次(客員研究員) トム・ストラング(カナダ保存研究所)
--------	---

【年度実績概要】	<p>(1) 害虫侵入早期検出のための基礎研究 害虫侵入の早期検出手法の可能性と、薬剤も利用した予防や処置など、すみやかな対処法についての基礎研究をおこなっている。本年度は、歴史的建造物(重要文化財)2棟の虫害調査を行った。また、シロアリの食害等の監視と早期発見に実績があるAEセンサーによる検出法の、他の文化財害虫への適用を検討するため、情報収集、機器購入・調整を行った。</p> <p>(2) 微生物被害の予測に関する基礎研究 微生物の繁殖は水分・酸素・栄養物によって起こることから、予防のためには環境制御と表面や室内大気の清浄化が重要である。本年度は博物館等での浮遊菌調査を通して、評価基準策定のための実態調査と除菌清掃などの各種対策の評価方法について検討した。</p> <p>(3) 研究会開催 テーマ: 「木質文化財の生物劣化対策」 日時: 平成18年11月16日(木)13:00-17:10 場所: 東京文化財研究所 地下セミナー室(講演)・会議室(展示) 木質文化財の特質と、それらによくみられる生物被害、そしてその修理や対応策について事例報告をもとに検討し、博物館環境とは異なる環境におかれる文化財を、どのように保存していくべきか検討した。参加者99名。</p> <p><プログラム> 文化財のシロアリ被害・対策と今後注意すべき「乾材シロアリ」について 山野 勝次・小峰 幸夫((財)文化財虫害研究所) 菌類による木材の劣化とその対策 桃原 郁夫(独立行政法人森林総合研究所) 文化財建造物の調査と修理手法について 前堀 勝紀((財)文化財建造物保存技術協会) 虫菌害対策の実践と予防 齋木 勝(千葉県教育庁教育振興部文化財課) 地区管理文化財の虫菌害管理へ向けての試み 布施 慶子(君津市立久留里城址資料館) カナダにおける屋外木質文化財の虫菌害対策 Tom Strang (Canadian Conservation Institute)</p>
【実績値】	<p>論文数 2件 (①, ②) 学会研究会等での発表件数 2件 (③, ④) 研究会 1回</p>
【年度決算見込額】	10,675千円

【備考】	<p>①浮遊真菌調査を用いた動的な室内環境評価法の検討-特別史跡キトラ古墳仮設保護覆屋をモデルとして-(間淵創、佐野千絵)、『保存科学』46 2007</p> <p>②旧日向別邸ブルーノ・タウト「熱海の家」の虫害調査-フルホンシバンムシ(<i>Gastrallus</i> sp.)による木材の被害例について-(木川りか、小峰幸夫、山野勝次、石崎武志)、『保存科学』46 2007</p> <p>③二酸化炭素処理時における多孔質材質のひずみの測定と最適な処理条件の検討(犬塚将英、木川りか、佐野千絵、石崎武志、二俣賢、木村広、鳥越俊行、今津節生、本田光子) 文化財保存修復学会大会 東京 2006.6.3-4</p> <p>④燻蒸剤等各種殺虫殺菌処理がタンパク質材質(標本、膠、絹)に及ぼす影響の検討(木川りか、早川典子、木村広、トム・ストラング、グレゴリー・ヤング) 文化財保存修復学会大会 東京 2006.6.3-4</p>
------	--

当該事務または事業の実績に関する自己点検評価

1. 定性的評価

観 点	適時性	独創性	発展性	継続性	正確性	
判 定	A	A	A	A	A	
備考						

2. 定量的評価

観 点	論文数	研究発表件数	研究会			
判 定	A	A	A			
備考						

3. 実績の総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	専門研究者間交流の促進、基礎研究の確実な遂行のための情報収集、基礎研究の実施、速やかな研究成果公開を果たし、高い調査研究水準を保つことができた。

4. 当年度における中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	研究初年度として、専門研究者との交流を通して十分に情報収集し、基礎研究に着手し、今後の研究活動を進めていく上で重要な成果を得た。速やかな成果公開も果たし、包括的に調査研究を進めた。

業務実績書

中期計画の項目 (I1(3)②)	環境の調査手法、モデル実験やシミュレーション技術を用いた環境の解析手法の確立のための研究および実践を行い、文化財を取り巻く保存環境の現状を把握し、改善することに資する。
---------------------	--

【事業名称】	文化財の保存環境の研究 (I1(3)②)
--------	----------------------

<p>【事業概要】</p> <p>文化財を大切に保存し次世代に継承していくためには、文化財施設内の温湿度や空気環境を良好に保つ必要がある。しかし、現在の博物館、美術館では様々な問題を抱えている。さらに、空調設備のない神社・仏閣、倉などの施設や古墳などの環境は、より屋外環境に近く、その温湿度の変動は大きい。この5カ年のプロジェクトでは、文化財を取り巻く保存環境の現状を把握し改善することを目的として、様々な文化財を取り巻く環境の調査手法、モデル実験やシミュレーション技術を用いた環境の解析手法の確立のための研究を行う。また、地方公共団体等が設置する文化財の収蔵・公開施設に対して、その依頼に応じて環境調査を行い、専門的・技術的な援助・助言を行う。</p>
--

【担当部課】	保存科学部	【事業責任者】	保存科学部長 石崎武志
--------	-------	---------	-------------

<p>【スタッフ】</p> <p>石崎武志、犬塚将英、佐野千絵、早川泰弘、木川りか、吉田直人 (以上、保存科学部)、三浦定俊 (情報企画部長)、カリル マグディ (外国人特別研究員)、森岡榮一 (曳山博物館)、田中敦子 (川越市教育委員会)</p>

<p>【年度実績概要】</p> <p>本年度は山車、曳山を収蔵展示している博物館の環境、山倉の環境調査、モデル土壁を用いた環境変化の影響による水分量の変化に関する測定を行った (長浜市曳山博物館収蔵庫・山蔵、川越市山車保管庫)。展示ケース内の湿度の安定性と VOC に対する衛生処置の両方の側面を考慮した上で展示ケースの換気回数の最適値を求めたいという目的から、安価かつ簡便な測定方法の確立とその測定精度に関する基礎研究を行った。静岡県立美術館では館内で生じる体感温度の勾配を定量的に理解するために、館内における温熱環境と温湿度、そして屋外における気象観測を行った。これらの測定結果はより定量的な問題の検証と解決策を検討するためのシミュレーションへの入力情報としても活用する。</p> <p>環境の解析手法に関しては、ドレスデン工科大学のハウブル教授、ブラーグ研究員、シラキュース大学のグルネワルド研究員を招聘して、共同研究を行った。(平成18年12月3日～12月10日)平成18年12月7日(木)「文化財の保存環境の研究—文化財を取り巻く温湿度解析—」をテーマに研究会を開催した。(於:セミナー室、参加者58名)</p> <p>博物館美術館の館内環境に関する調査指導に関しては、国宝・重要文化財などの指定品の借用に関して館内環境調査を行い、35館に対して報告書を作成・提出した。</p>
<p>【実績値】</p> <p>論文等数 3件 (①、②、③) 発表件数 3件 (④、⑤、⑥)</p>
<p>【年度決算見込額】</p> <p>12,469千円</p>

<p>【備考】</p> <p>①犬塚将英、新田建史、白石靖幸、石崎武志「静岡県立美術館における温熱環境の測定」『保存科学』46 2006.3 ②佐野千絵「文化財公開施設の空気調和設備等の設置状況—保存環境調査から—」『保存科学』46 2006.3 ③Masahide Inuzuka and Takeshi Ishizaki, Study of Ventilation Rate Measurements for Showcases and Facilities in Museum. Proc. of 12th International Symp. on Building Physics, Dresden 2007.3. ④石崎武志、犬塚将英、白石靖幸、肥塚祐美子「熊本城「細川家舟屋形」の調湿建材による展示環境の改善」文化財保存修復学会第28回大会 国土館大学 2006.6.3-4 ⑤犬塚将英、石崎武志「展示ケースの換気回数測定のための基礎実験」文化財保存修復学会第28回大会 国土館大学 2006.6.3-4 ⑥佐野千絵「災害と文化財/事例報告—緊急避難した文化財を取り巻く諸問題—」文化財保存修復学会第28回大会 国土館大学 2006.6.3-4</p>

当該事務または事業の実績に関する自己点検評価

1. 定性的評価

観 点	適時性	独創性	発展性		正確性	
判 定	A	A	A	A	A	
備考						

2. 定量的評価

観 点	学術雑誌等への 掲載論文等数	学会研究会等での 発表件数	研究会			
判 定	A	A	A			
備考						

3. 実績の総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	美術館・博物館での環境調査、海外の研究者との情報交換、研究会の実施、学会や紀要での研究成果公表など予定通り実施し、高い調査研究水準を保つことができた。

4. 当年度における中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	研究初年度として、海外の研究者を含めて専門研究者との交流を行い情報収集をおこなった。環境のシミュレーションに関する現地調査および基礎的な研究も行い、研究は予定通り進んでいる。

業務実績書

中期計画の項目 (I1 (3) ③)	屋外文化財の保存・修復の手法を確立する。また、文化財の防災についてその予防と被災後の情報収集を行い、文化財防災のネットワーク化の一層の推進を図る。
-----------------------	---

【事業名称】	周辺環境が文化財に及ぼす影響評価とその対策に関する研究 (I1 (3) ③)
--------	--

【事業概要】	屋外に位置する美術工芸品、文化財建造物等は、周辺環境の変化が大きな劣化要因となる。本研究では、周辺環境が文化財に及ぼす影響を評価し、予測手法の確立や新たな保存修復技法や材料の開発を目的とする。また、石造文化財の保存修復に関して韓国・国立文化財研究所との共同研究を行う。詳細には双方で対象を設け（日本側：白杵磨崖仏（大分県白杵市）、韓国側：弥勒里石仏）、現地観測や修復材料の試験などを行う。
--------	--

【担当部課】	修復技術部	【事業責任者】	修復材料研究室長 川野邊 渉
【スタッフ】	早川 典子、森井 順之（以上、修復技術部）、朽津 信明（文化遺産国際協力センター）		

【年度実績概要】	<p>石造文化財や木造建造物など屋外に位置する文化財について、周辺環境の観測を行った。また、その結果に基づいて劣化要因を解明し、その影響を軽減する方法および修復材料・技法の開発・評価を試みた。</p> <p>今年度の主な成果は次の通りである。</p> <p>(1) 白杵磨崖仏では今後の修復事業のために、劣化機構の把握を目的とした気象や岩体水分などの長期連続観測を実施している。特に今年は、ホキ2群の凍結劣化対策として、昨年度の赤外線灯照射実験に引き続き、寒冷時における覆屋閉鎖の実験を行った。また、植物繁茂を制御するための紫外線灯照射実験を、白杵磨崖仏および熊野磨崖仏（豊後高田市）にて実施した。</p> <p>(2) 碓氷峠鉄道関連施設（群馬県安中市）では碓氷第6トンネルおよび第8トンネルを対象に、内部の温湿度や煉瓦内水分量の季節変動を計測し、凍結破砕による煉瓦崩落量を測定した。また、煉瓦凍結現象を詳細に把握するため、凍結時における煉瓦内部の温度分布を測定した。</p> <p>(3) 木造建造物の腐朽に関して、富貴寺（豊後高田市）を対象に、腐朽菌や藍藻類の生息分布の調査や腐朽菌生息箇所における木材水分量の測定等を行った。</p> <p>(4) 今年度の大韓民国・国立文化財研究所との共同研究は、2006（平成18）年11月15日、大韓民国・国立文化財研究所講堂にて研究報告会を開催した。また、2006（平成18）年6月に韓国側研究員が来日し、碓氷峠鉄道関連施設での観測を共同で行うとともに、両国で問題となっている石造文化財の凍結破砕に関する情報交換を行った。</p>
【実績値】	<p>論文数 4件 (①～④)</p> <p>発表件数 4件 (⑤～⑧)</p> <p>報告書刊行数 4件 (⑨)</p>
【年度決算見込額】	16,905千円

【備考】	<p>①森井 順之「日本における磨崖仏保存施設の現状」『文化財保護施設の改善方案に関する国際シンポジウム』報告書 国立文化財研究所（大韓民国） 2006.11</p> <p>②森井 順之「覆屋が磨崖仏保存環境に与える影響と凍結防止策の検討」『韓日共同研究報告書 2006』国立文化財研究所（大韓民国）／東京文化財研究所 2006.11</p> <p>③J. K. Hong, D. S. Eom, Y. J. Chung and M. Morii "Investigation on the Conservation Environment for the Shelter of Stone Cultural Heritages -Focused on the Standing Stone Buddhist Triad in Bae-ri, Gyeongju and Rock-carved Triad Buddha in Seosan-" 『韓日共同研究報告書 2006』 国立文化財研究所（大韓民国）／東京文化財研究所 2006.11</p> <p>④C. Thomachot, N. Matsuoka, N. Kuchitsu and M. Morii "Dilation of bricks submitted to frost action: field data and laboratory experiments" Proceeding of Heritage, Weathering and Conservation Conference Taylor & Francis 2006.7</p> <p>⑤C. Thomachot, N. Matsuoka, N. Kuchitsu and M. Morii "Dilation of bricks submitted to frost action: field data and laboratory experiments" Heritage, Weathering and Conservation (HWC-2006) Conference The Spanish Council for Scientific Research (CSIC) 2006.6.21-24</p> <p>⑥森井 順之、川野邊 渉「白杵磨崖仏における凍結破砕防止策の検討」日本文化財科学会第23回大会 東京学芸大学 2006.6.17-18</p> <p>⑦森井 順之「日本における磨崖仏保存施設の現状」文化財保護施設の改善方案に関する国際シンポジウム 国立古宮博物館（大韓民国） 2006.11.14</p> <p>⑧森井 順之「覆屋が磨崖仏保存環境に与える影響と凍結防止策の検討」日韓共同研究・2006年度研究報告会 国立文化財研究所（大韓民国） 2006.11.15</p> <p>⑨『韓日共同研究報告書 2006』 大韓民国文化財庁国立文化財研究所／東京文化財研究所 2006.11</p>
------	---

当該事務または事業の実績に関する自己点検評価

1. 定性的評価

観 点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判 定	A	A	A	A	A	A
備考						

2. 定量的評価

観 点	論文数	発表件数	報告書刊行数			
判 定	A	A	A			
備考						

3. 実績の総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	屋外に位置する美術工芸品、文化財建造物等の周辺環境の継続的な調査を実施し、文化財に影響すると思われる事象の予測手法の確立や新たな修復材料の開発に関するの情報収集、研究が実施され、より高い研究水準を保つことが出来た。

4. 当年度における中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	初年度として、重要な調査結果を収集することが出来、また、各地の研究者との連携も可能となり、今後の研究を進める上で、重要な成果を得た。次年度以降も今年度の成果を元にさらに調査研究を発展させることが可能となった。

業務実績書

中期計画の項目 (I1 (3) ③)	屋外文化財の保存・修復の手法を確立する。また、文化財の防災についてその予防と被災後の情報収集を行い、文化財防災のネットワーク化の一層の推進を図る。
-----------------------	---

【事業名称】	文化財の防災計画に関する研究 (I1 (3) ③)
--------	---------------------------

<p>【事業概要】</p> <p>阪神淡路大震災などの大地震で被害を受けた文化財は数多く、また、1998（平成10）年の台風7号による倒木の被害を受けた室生寺五重塔など、自然災害による文化財の被害の甚大さは記憶に新しい。本研究は、地震や台風などの自然災害から文化財を守るために必要な情報を、地理情報システム（GIS）を用いてデータベース化し、それを分析することで災害予測を行う。また、災害時の文化財救済活動や被災文化財の応急修復方法の確立も目的としている。</p>

【担当部課】	修復技術部	【事業責任者】	修復技術部長 加藤 寛
--------	-------	---------	-------------

<p>【スタッフ】</p> <p>中山 俊介、森井 順之、加藤 雅人（以上、修復技術部） 青木 繁夫、二神 葉子（以上、文化遺産国際協力センター）</p>
--

<p>【年度実績概要】</p> <p>本年度は、GISを用いた文化財防災情報システムの開発、阪神淡路大震災や新潟県中越地震において被災した文化財建造物の追跡調査及び文化財の防災計画に関する研究会を行った。</p> <p>(1) 現在までに作成した災害による毀損文化財建造物データベースを用い、GISによる文化財防災情報システムの開発を行った。本システムでは、震源や自治体毎の震度などの災害基本情報とあわせ、毀損文化財との相関が分かり易く表示できるようにした。また、平常時にも使えるシステムを目指し、修復履歴の入力・閲覧も可能とした。</p> <p>(2) 2007（平成19）年1月29日、東京文化財研究所地階セミナー室にて「第3回文化財の防災計画に関する研究会—震災から美術工芸品を守る—」を開催した。第2回研究会で、主に文化財建造物の震災被害や修復に関する話題を提供したのに対し、今回は、文化財救援や所蔵施設の危機管理を取り上げた。</p> <p>(3) 昨年度開催した第2回研究会の報告および総合討議をまとめ、報告書『文化財の防災計画に関する研究 第2回研究会—震災から文化財をまもる—』を刊行した。</p>
<p>【実績値】</p> <p>発表件数 1件 (①) 論文数 1件 (②) 報告書刊行数 1件 (③)</p>
<p>【年度決算見込額】</p> <p>6,664千円</p>

<p>【備考】</p> <p>①二神 葉子「GISを用いた文化遺産防災の新たな取り組み」 文化遺産防災フォーラム in 山形 東北芸術工科大学 2006.10.21 ②森井 順之、高尾 曜 「震災により被災した文化財の現在」 『文化財の防災計画に関する研究／第2回研究会—震災から文化財をまもる—』 東京文化財研究所 2007.2 ③『文化財の防災計画に関する研究 第2回研究会—震災から文化財をまもる—』 東京文化財研究所 2007.2</p>
--

当該事務または事業の実績に関する自己点検評価

1. 定性的評価

観 点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判 定	A	A	A	A	A	A
備考						

2. 定量的評価

観 点	論文件数	報告書刊行数				
判 定	A	A				
備考						

3. 実績の総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	阪神淡路大震災、新潟県中越地震において被災した文化財の追跡調査を実施し、今後の研究を進める上で非常に貴重な情報を収集することが出来た。また収集した情報を毀損文化財建造物データベースへ反映するなど、今後の調査研究を実施する上で重要な成果を上げることが出来た。

4. 当年度における中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	大震災による文化財建造物への被害等について、調査研究を進めることが出来、また、データベースの構築など、対外的にも情報を発信することが可能となる体制が整いつつある。また、研究会を通じて、外部の研究者との交流も生まれ、今後の調査研究にもより重要な成果が期待される。

業務実績書

中期計画の項目 (I1(3)④)	考古資料の材質・構造の調査法に関して、特にレーザーラマン分光分析法や高エネルギーX線CT・CR法の実用化を図る。また、考古資料の保存・修復に関する実践的研究を実施する。
---------------------	--

【事業名称】	考古資料の材質・構造の調査法及び保存・修復に関する実践的研究 (I1(3)④ア～オ)
--------	--

【事業概要】	考古資料の材質・構造の調査法に関して、1) 考古遺物の完全非破壊非接触分析法としてのレーザーラマン分光法の応用をめざした標準試料および考古遺物のラマンスペクトルの収集蓄積ならびにデータベースの構築、短波長レーザーの応用可能性の検討、2) 高エネルギーX線CT法およびX線CR法を応用した考古遺物の内部構造と材質推定法の基礎的研究、3) 有機質遺物の分析法の実用化とデータベース作成、4) 木製遺物に対する超臨界溶媒乾燥法の基礎的研究と実用化をめざした強化含浸薬剤の検討ならびに乾燥条件の基礎データの集積と検討、5) 遺跡および遺物の保存修復の現状と課題を広く検討するための保存科学研究集会(国際会議)の開催、に取り組む。
--------	--

【担当部課】	埋蔵文化財センター	【事業責任者】	保存修復科学研究室長 肥塚隆保
【スタッフ】	高妻洋成、降幡順子、脇谷草一郎(企画調整部)		

【年度実績概要】	<ol style="list-style-type: none"> 1) 標準資料および考古遺物のラマンスペクトルの収集をおこなった。携帯型のマルチレーザーラマン分光分析装置を用いてキトラ古墳壁画の顔料分析に適用した。また、短波長レーザーに関する情報を収集し、考古遺物の分析に適した装置の検討をおこなった。 2) 考古遺物のX線CT撮影、オートラジオグラフィおよびX線CR撮影をおこない、基礎的なデータを収集した。 3) 昨年に引き続き、シンクロトロン顕微赤外分析法による出土絹繊維の埋蔵中の劣化について分析を進めた。 4) 本年度は、主として強化含浸に用いる薬剤(分子量の異なるリグノクレゾール、メチルセルロース(MC)、ヒドロキシプロピルセルロース(HPC))について検討をおこなった。その結果、飽和吸着量は増大するものの、十分な含浸量を得るには困難であることがわかった。 5) 日本・中国・韓国による「東アジア保存修復国際会議専門家会議」を開催した。
【実績値】	発表件数：10件(文化財保存修復学会大会4件、日本文化財科学学会大会1件、東アジア文化財保存修復国際会議専門家会議5件) 論文等数：12件(①～⑫) 刊行図書数：1件(⑬) 研究会参加者数：310名(1日目156名、2日目154名)、発表件数50件(口頭発表29件、ポスター発表21件)
【年度決算見込額】	11,704千円

【備考】	<ol style="list-style-type: none"> ① 佐藤昌憲・奥山誠義「出土絹繊維の顕微赤外分析と将来への保存に向けて」『日本文化財科学学会第23回大会研究発表要旨集』2006.6 ② 降幡順子・肥塚隆保「出土陶磁器の保存科学的研究—表面の光学的物性変化と保存処理—」『日本文化財科学学会第23回大会研究発表要旨集』2006.6 ③ 佐藤昌憲・一田昌利・三村充「絹文化財のセリシン層に関する顕微赤外分析の基礎検討」『日本文化財科学学会第23回大会研究発表要旨集』2006.6 ④ 北野信彦・上村和直・小椋山一良・竜子正彦・高妻洋成・宮腰哲雄「桃山文化期の漆塗料に関する新知見」『文化財保存修復学会第28回大会研究発表要旨集』2006.6 ⑤ 片岡太郎・栗本康司・高妻洋成「リグノフェノールを用いた出土木材の保存処理 II—強度の向上および寸法変化の抑制について—」『文化財保存修復学会第28回大会研究発表要旨集』2006.6 ⑥ 降幡順子・肥塚隆保「キトラ古墳の漆喰に関する保存科学的調査」『東アジア文化財保存修復国際会議専門家会議要旨集』2006.6 ⑦ 肥塚隆保「古代アジアガラスの科学的研究—日本と東アジア—」『東アジア文化財保存修復国際会議専門家会議要旨集』2006.9 ⑧ 奥山誠義・佐藤昌憲・今津節生「古墳出土繊維製品の保存と将来の分析について—下池山古墳出土繊維製品に浸透した剥離剤除去—」『東アジア文化財保存修復国際会議専門家会議要旨集』2006.9 ⑨ 野田真弓・高妻洋成・脇谷草一郎・佐藤昌憲・肥塚隆保「青谷上寺地遺跡出土木製容器の彩色に関する調査—木製容器に利用された赤色顔料の特性を中心として—」『東アジア文化財保存修復国際会議専門家会議要旨集』2006.9 ⑩ 降幡順子「出土陶磁器の分析—ベトナム青花を中心として—」『東アジア文化財保存修復国際会議専門家会議要旨集』2006.9 ⑪ 高妻洋成「長者屋敷遺跡出土転用硯の顔料分析」『鳥取県教育文化財団調査報告書107』2006.6 ⑫ 降幡順子・肥塚隆保「白水瓢塚古墳出土ガラス小玉・連玉の分析調査」『神戸市教育委員会白水瓢塚古墳発掘調査報告書(編集集中)』 ⑬ 小林達雄編『考古学ハンドブック』新書館、2007.1(分担執筆)
------	--

当該事務または事業の実績に関する自己点検評価

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
備考						

2. 定量的評価

観点	発表件数	論文等数	研究集会参加者数			
判定	A	A	A			
備考						

3. 実績の総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	定性的評価においてAが5つであり、これらの結果を総合的に判断して、Aと認めたものである。

4. 当年度における中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	本年度の計画を当初の計画どおり実施できたことから、順調であると判定した。

業務実績書

中期計画の項目 (I1 (3) ⑤)	伝統的修復材料や合成樹脂などの物性、製作技法、利用技法に関する調査・研究をもとに、修復材料・技法の評価及び開発を行う。また、海外の文化財保存担当者を対象に、日本の修復材料の使用法や修理技術に関する研修等を行い本国での基本的な作品の取り扱いや保存処理に反映させる。
-----------------------	---

【事業名称】	伝統的修復材料及び合成樹脂に関する調査研究 (I1 (3) ⑤)
--------	----------------------------------

【事業概要】	<p>各種の文化財に使用される材料は、天然素材をもとに膠と顔料、糊と紙、木と漆などを組み合わせて複合的に使用されている。それらのいずれかの材料に劣化が進むと、剥離や剥落などの損傷の原因となる。従来、文化財の修復材料は製作者や修復家の経験的判断のみにより、損傷の程度や原因などから選択されている。一方、合成樹脂などの新たな材料も世界的に文化財の修復に導入されつつあるが、これらの材料に関しては逆に経験的な知見が少ない。そこで本研究では各材料の基本的な物性に関する自然科学的な研究と、実証的な調査をもとに、最適な材料選択を可能にし、さらに改良を加えてより作業性の高い修復材料のあり方を追求したいと考えている。</p>
--------	--

【担当部課】	修復技術部	【事業責任者】	修復技術部長 加藤 寛
--------	-------	---------	-------------

【スタッフ】	<p>川野邊 渉、早川 典子、加藤 雅人 (以上、修復技術部) 舘川 修、小宮山 健二、安部 倫子 (客員研究員)</p>
--------	--

【年度実績概要】	<p>伝統的修復材料の調査研究では、糊・布海苔・膠・紙などの絵画修復材料、漆・膠などの工芸修復材料に分けて行った。また、合成樹脂に関する調査研究では、建造物修復で使用されている塗装や強化材料を対象に現状調査を行った。</p> <p>今年度の主な成果は次の通りである。</p> <p>(1) 伝統的修復材料に関する調査研究 伝統的な染色技法についての研究会を行った。また、布文化財および紙文化財を対象に染色の基本的な技法および染色品の性質を把握するために、ワークショップも開催した。ワークショップで作製した、紙および布の染色品を試料とし科学的な分析を行った。工芸修復材料については、色漆を対象に耐水性試験を行った。平成13(2001)年から現地曝露試験を継続しているが、5年経過後の試料を分析した結果、退色要因としては紫外線の影響のみならず、塗膜硬度の違いも要因となることが考えられた。そのため、新たに色漆の焼付け試料を作成したうえで再評価を行う予定である。</p> <p>(2) 合成樹脂に関する調査研究 塗料や補填材料として、昭和30年代より建造物修復における使用が頻繁となった合成樹脂に関しては、使用部分の退色が大きな問題となっている。今年度は、建造物で実際に使われている合成樹脂使用例を実見することにより、問題点の明確化を図った(主な調査地：桂離宮、日御碕神社、巖島神社、姫路城菱の門、大宰府天満宮)。</p> <p>(3) 伝統的修復材料に関する調査研究会の開催 2006(平成18)年8月2、3日に、修復技術部第2アトリエに於いて「草木染」をテーマとした調査研究会を開催した。染色工芸家の山崎和樹氏、染色家の津田千枝子氏を招へいし、草木染の色彩的特徴に関する講演及び染色実演、また参加者による染色実習が行われた。</p>
【実績値】	<p>発表件数 1件 (①) 論文数 2件 (②、③) 報告書刊行数 1件 (④)</p>
【年度決算見込額】	8,319千円

【備考】	<p>①加藤 雅人 「紙の科学的分析」 第一回東アジア紙文化財保存修復学術シンポジウム 新北緯飯店(中国・北京) 2006.5.27-28 ②加藤雅人「印刷と紙—保存性に関して—、玻璃彩(コロタイプ技術保存と印刷を考える会)、第6号 2007 ③舘川修、小宮山健二、加藤寛「文化財修復に使用した合成樹脂の劣化状況調査報告、伝統的修復材料に関する調査研究V 2007 ④『伝統的修復材料に関する調査研究V』 東京文化財研究所 2007.3</p>
------	---

当該事務または事業の実績に関する自己点検評価

1. 定性的評価

観 点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判 定	A	A	A	A	A	A
備考						

2. 定量的評価

観 点	論文数	発表件数	報告書刊行数			
判 定	A	A	A			
備考						

3. 実績の総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	伝統的修復材料及び合成樹脂に関する調査研究を実施し、今後の調査研究に対して重要な結果を得ることが出来た。また、草木染をテーマとした研究会も実施し広範な知識共有が実現できた。

4. 当年度における中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	今年度実施した調査研究に加え、さらに多くの調査、及び材料の研究を加えて行くことで、より使いやすく耐久性が高い伝統的修復材料、合成樹脂を開発するべく着実に前進している。

業務実績書

中期計画の項目 (I1 (3) ⑤)	伝統的修復材料や合成樹脂などの物性、製作技法、利用技法に関する調査・研究をもとに、修復材料・技法の評価及び開発を行う。また、海外の文化財保存担当者を対象に、日本の修復材料の使用法や修理技術に関する研修等を行い本国での基本的な作品の取り扱いや保存処理に反映させる。
-----------------------	---

【事業名称】	国際研修「紙の保存と修復」 (I1 (3) ⑤)
--------	--------------------------

【事業概要】	海外で所蔵されている絵画や書跡、冊子などの紙文化財は、日本と違った気象条件で長期間保存されてきたために、損傷を持った作品が多い。また、担当者の不慣れた取り扱いによって作品を破損する場合もある。日本美術品の保存・修復・活用を行うには、材料・技法などの基礎的な理解と基本的な取り扱いや修復に関する実技研修が必要であるが、海外でそのような機会を得ることは困難である。本研修は、紙文化財に関する保存修復の講義および演習を通して、研修参加者に、紙文化財に関わる基礎知識を伝えるものである。
--------	---

【担当部課】	修復技術部	【事業責任者】	修復技術部長 加藤 寛
【スタッフ】 加藤 雅人、早川 典子 (以上、修復技術部)			

【年度実績概要】	<p>研修日程 2006 (平成18) 年9月11日 (月) ~9月29日 (金)</p> <p>研修場所 東京文化財研究所、長谷川和紙工房、美濃和紙の里会館、京都国立博物館文化財修理所</p> <p>研修対象 紙文化財の保存と修復を担当する学芸員、修復技術者、科学者および保存担当者</p> <p>研修内容</p> <p><講義> 文化財修復に用いられる接着剤について 川野邊 渉 (東京文化財研究所)</p> <p>日本の紙文化財の保存と修復 池田 寿 (文化庁)</p> <p>絵画材料・装幀材料とその使い方 山本 記子 ((株)文化財保存)</p> <p>装幀技術概論 岡 泰央 ((株)岡墨光堂)</p> <p>和紙入門：製造法、耐久性、水分変化の影響 稲葉 政満 (東京芸術大学)</p> <p><実習></p> <p>9月12日~16日 工程の説明、糊の調製、補紙、補紙削り、肌裏打ち、増し裏打ち、仮張り、折れ伏せ</p> <p>9月17日~19日 エクスカーション (岐阜県美濃市長谷川和紙工房、見学。美濃和紙の里会館、展示資料観覧および和紙の手漉き。京都国立博物館文化財修理所、国宝修理装幀師連盟)</p> <p>9月20日~29日 本紙継ぎ、軸付け、仕上げ、巻緒つけ、掛け軸・屏風の取り扱い、掛け軸・冊子の応急処置</p> <p><ディスカッション> 研修全体を通しての成果、疑問などについての討論。</p>
【実績値】	<p>受講者数 10人</p> <p>受講者満足度 100%</p> <p>報告書刊行数 1件 (①)</p>
【年度決算見込額】	12,800千円

【備考】	①『International Course on Conservation of Japanese Paper, 2006』 東京文化財研究所 2007.3
------	---

当該事務または事業の実績に関する自己点検評価

1. 定性的評価

観 点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	
判 定	A	A	A	A	A	
備考						

2. 定量的評価

観 点	受講者数	受講者満足度	報告書刊行数			
判 定	A	A	A			
備考						

3. 実績の総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	海外から博物館などの修復の専門家を研修生として招き、3週間に渡り研修会を開催した。その間絵画、書跡などの修復工程や、取り扱い方法などの座学や実習を通じて研修生に知識と実技を学んでもらった。それぞれの国において、役立ててもらえることと思う。

4. 当年度における中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	従来、紙と漆の隔年開催としている国際研修であるが、これまでに研修生として参加いただいた方々からは、その国々における研修の成果を発揮していただいている。今後も、より多くの方々に受講いただき、少しでも日本の技術を伝えることが出来ることを目標としている。

業務実績書

中期計画の項目 (11 (3) ⑤)	伝統的修復材料や合成樹脂などの物性、製作技法、利用技法に関する調査・研究をもとに、修復材料・技法の評価及び開発を行う。また、海外の文化財保存担当者を対象に、日本の修復材料の使用法や修理技術に関する研修等を行い本国での基本的な作品の取り扱いや保存処理に反映させる。
-----------------------	---

【事業名称】	在外日本古美術品保存修復協力事業 (11 (3) ⑤)
--------	-----------------------------

<p>【事業概要】</p> <p>海外の美術館、博物館が所蔵する評価の高い作品の修復に協力し、併せて対象作品を所蔵している博物館等と共同で、保存修復に関連する研究を行う事業である。平成3年度から絵画を対象に事業を進めてきたが、平成9年度から工芸品など欧米の修復技術で修復の困難な分野にも協力対象を拡げた。</p> <p>この事業により修復した作品の公開によって、わが国の修復技術に対する理解が深まり交流が促進されている。本事業の立案のために、欧米の美術館、博物館にて作品調査のほか修復技術に関する討議を行い、併せて輸送手続きに関する協議を行っている。当研究所は修理内容の検討、修理作品の写真記録の作成および整理・保存、輸送手続きに責任を持って当たっている。</p> <p>この修復協力事業によって修理された作品の公開展示回数が増すことは当然であるが、修復協力事業が契機となって所蔵の日本古美術品に対する関心が高まりつつあり、欧米諸国では日本古美術品を所蔵する博物館の間でネットワークが構築されつつある。さらに、文化財保存の専門家の交流も促進され、わが国の文化財修復技術の普及と理解に対し効果をあげている。</p>

【担当部課】	修復技術部	【事業責任者】	修復技術部長 加藤 寛
--------	-------	---------	-------------

<p>【スタッフ】</p> <p>中山 俊介、加藤 雅人 (以上、修復技術部)、佐野 智典 (管理部)、江村 知子、城野 誠治 (以上、企画情報部) 中野 照男、津田 徹英、塩谷 純、綿田 稔 (以上、美術部)、青木 繁夫、稲葉 信子 (以上、文化遺産国際協力センター)</p>
--

<p>【年度実績概要】</p> <p>平成18年度は、9館11点の作品を修復した(うち1点が17年度からの継続、2点が海外での修復(◆印))。</p> <p><絵画> 1)「源平合戦図屏風」 6曲1双(2点) オーストリア応用美術館 2)「洛中洛外図屏風」 6曲1双(2点) ロイヤル・オンタリオ美術館 3)「阿弥陀三尊来迎図」 1面 チューリッヒ・リートベルグ美術館 (2年計画の1年目) 4)「保元物語図屏風」 6曲1双 ナーブルステク博物館 5)「明皇蝶幸図屏風」 4曲1双 ブラハ国立美術館 6)「歌川豊春筆見立反魂香図」 1幅 ブラハ国立美術館</p> <p><工芸品> 1)「山水人物時絵筆筒」 1基 スペイン国立装飾美術館 (2年計画の2年目) 2)「花卉螺鈿ライティングビューロー」 1基 クラコウ国立美術館 (2年計画の1年目) 3)「楼閣山水螺鈿筆筒」 1基 キヨソネ東洋美術館 (2年計画の1年目) 4)◆「花樹鳥獣時絵螺鈿洋櫃」 1基 ケルン東洋美術館 (3年計画の1年目) 5)◆「雷文鱗紋螺鈿提子」 1合 ケルン東洋美術館</p> <p>平成18年度、絵画の事前調査ではビクトリア美術館10点、バンクーバー博物館1点、ローマ東洋美術館5点、ベネチア東洋美術館3点の調査を行った。また、工芸品はフレンツ・ホップ東洋美術館2点、ブダペスト工芸美術館1点、シェーンブルン宮殿2点、ウィーン国立民族学博物館2点、美術史博物館(ウィーン)1点、ウィーン国立工芸博物館3点の調査を行った。また、平成17年度に修復した絵画、工芸品の修理状況をまとめて「在外日本古美術品保存修復協力事業」の報告書を刊行した。</p>
<p>【実績値】</p> <p>事前調査事案件数 2件 修復件数 11件 報告書刊行数 1件(①)</p>
<p>【年度決算見込額】</p> <p>61,244千円</p>

<p>【備考】</p> <p>①『在外日本古美術品保存修復協力事業修理報告書 平成17年度(絵画/工芸品)』東京文化財研究所 2007.3</p>
--

当該事務または事業の実績に関する自己点検評価

1. 定性的評価

観 点	適時性	発展性	効率性	継続性	正確性	
判 定	A	A	A	A	A	
備考						

2. 定量的評価

観 点	調査件数	修復件数	報告書刊行数			
判 定	A	A	A			
備考						

3. 実績の総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	今年度は9館、11点の作品の修復を実施した。海外においても、修復家を派遣し、修復作業を実施した。このように、海外における日本絵画や工芸品を修復することで、その技術、取り扱い方法などを伝えることだけでなく、再び、展示することが出来るようになり、その価値を高めることが出来た。

4. 当年度における中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	今年度も引き続き、事前調査を実施しており、来年度に向けて、修復する候補作品を抽出している。今後は、より広範な美術館、博物館から、収蔵庫に眠っている価値ある日本絵画と工芸品を修復し、再度展示可能な姿にするべく努力を重ねる。

業務実績書

中期計画の項目 (I1 (3) ⑥)	近代の文化遺産に特徴的な鉄、コンクリート、プラスチックなどの複合素材および技法について国際共同研究を実施し、その成果をもとに国内所在の近代文化遺産の保存・修復に関する手法を開発する。
-----------------------	---

【事業名称】	近代の文化遺産の保存修復に関する調査研究 (I1 (3) ⑥)
--------	---------------------------------

【事業概要】

近代の文化遺産は、絵画、彫刻、木造建造物など従来の文化財とは、規模、材質、製造方法などに大きな違いがあるため、その保存修復方法や材料にも大きな違いがある。本研究では、近代の文化遺産の保存修復を行う上で必要とされる材料と技術について調査研究を行う。具体的には、大型構造物の劣化機構の解明とその修復方法の立案、航空機、船舶、鉄道車両などの保存修復上の問題点とその解決方法の究明を目指している。

【担当部課】	修復技術部	【事業責任者】	近代文化遺産研究室長 中山 俊介
【スタッフ】 川野邊 渉、森井 順之 (以上、修復技術部)、朽津 信明 (文化遺産国際協力センター) 横山晋太郎、長島 宏行 (以上、客員研究員)			

【年度実績概要】

今年度は、近代化遺産の保存活用とともに利活用に関する手法や問題点を主なテーマとして研究を行った。ドイツから、博物館の保存担当官、近代化遺産の保存計画立案者や修復技術者などを招いて、大阪市において、関西圏の研究者の参加も得て研究会を行い、各研究者の視点から近代化遺産の利活用に関する検討会を行った。さらに、ドイツ技術博物館においては、合成樹脂の経年劣化に関する共同研究を行っている。また、屋外展示されている鉄道車両や航空機などの金属を主体とする文化財の防錆対策のために、各種仕様のサンプルを作成し、小樽交通記念館、船の科学館、かみかみはら航空宇宙博物館、大樹町多目的航空公園、海上自衛隊鹿屋航空基地での曝露実験を行っている。これらの地点では、試料の受けた紫外線量をはじめ、温度、湿度などの測定も行い、これらの塗装仕様と劣化速度の相関についても検討している。屋外展示航空機の環境測定も継続している。また、設計図などに多く用いられる青焼き図面の修復方法の実験も引き続き実施した。

・調査施設

生野銀山、兵庫庫公館、三井鉱山宮原坑跡、三井鉱山万田坑跡、富岡製紙場、旧下野煉瓦製造、トヨタ産業技術記念館、柵原ふれあい鉱山公園、JR 四国多度津工場、琴平電鉄仏生山工場、瀬戸大橋記念公園、所沢航空発祥記念館、産業技術博物館、横須賀ドライドック、航空自衛隊入間基地、小樽交通記念館、交通博物館、交通科学博物館、船の科学館、碓氷鉄道文化むら、加悦SL広場、梅小路蒸気機関車館、大樹町多目的航空公園、西都原考古博物館、海上自衛隊鹿屋航空基地、知覧特攻記念館、万世平和記念館、愛媛県立科学博物館、別子銅山記念館、東京駅、日本銀行本店、博物館明治村、美濃和紙の里会館、天文台

【実績値】

発表件数 2件 (①、②)

報告書刊行数 2件 (③、④)

研究会開催数 2件

【年度決算見込額】

16,324 千円

【備考】

① 中山 俊介 「鉄道遺産の利活用」 第19回研究会「鉄道遺産の利活用」 交通科学博物館 2006.10.26

② 中山 俊介 「路面電車の運行と文化財の保存」 第20回研究会「路面電車の運行と文化財の保存」 東京文化財研究所 2007.3.10

③ 『呉市における近代化遺産の保存修復と活用』 東京文化財研究所 2007.3

④ 『Conservation of Large Scale Structures』 東京文化財研究所 2007.3

近代の文化遺産の保存修復に関する研究会 第19回「鉄道遺産の利活用」2006.10.26/第20回「路面電車の運行と文化財の保存」 2007.3.10

当該事務または事業の実績に関する自己点検評価

1. 定性的評価

観 点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判 定	A	A	A	A	A	A
備考						

2. 定量的評価

観 点	研究会等の開催数	発表件数	報告書刊行数			
判 定	A	A	A			
備考						

3. 実績の総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	近代文化遺産の保存と活用について、各種調査及び専門家を招いた研究会を実施した。今後の修復材料の開発、修復技法の開発に対する重要な成果を得ることが出来た。また、現地調査や研究会を通じて、近代文化遺産の重要性を多くの方に認識いただいた。

4. 当年度における中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	今年度現地調査を実施し多くの成果を挙げたが、その他にも多数の近代文化遺産が存在する。今後もそれらの調査を実施すると共に、修復技法や修復材料の調査研究を続けて行く。

業務実績書

中期計画の項目 (I1(4))	我が国の文化保護政策上、重要かつ緊急に保存及び修復の措置等を行うことが必要となった文化財について、国・地方公共団体の要請に応じて、保存措置等のために必要な実践的な調査・研究を迅速かつ適切に実施する。
--------------------	---

【事業名称】	文化庁が行う高松塚古墳・キトラ古墳の壁画の調査及び保存・活用に関する技術的協力 (I1(4))
--------	---

【事業概要】	キトラ古墳：石室内の発掘調査で出土した遺物の調査・保存処理、ならびに石室内の環境調査と壁画の取り外し作業を実施 高松塚古墳：壁画の環境や修復に関する調査・研究、墳丘の発掘調査、ならびに石室解体方法検討のための調査・研究を実施
--------	---

【担当部課】	副所長・保存科学部・修復技術部 (東文研) 都城発掘調査部 (飛鳥藤原地区)、埋蔵文化財センター、文化遺産部 (奈文研)	【事業責任者】	副所長 三浦定俊 (東文研) 都城発掘調査部副部長 巽淳一郎 (奈文研)
--------	---	---------	---

【スタッフ】	石崎武志、佐野千絵、木川りか、吉田直人、早川泰弘、犬塚将英、川野辺渉、森井順之、加藤雅人 (以上、東文研) 松村恵司、廣瀬寛、内田和伸、井上直夫、中村一郎、豊島直博、岡田愛、加藤雅士、長谷川透、石田由紀子、玉田芳英、村上隆、高橋克壽、肥塚隆保、高妻洋成、降幡順子、脇谷草一郎、高瀬要一 (以上、奈文研) 宮原晋一 (奈良県教育委員会)、岡林孝作 (奈良県立橿原考古学研究所)、相原嘉之 (明日香村教育委員会)、花谷浩 (出雲市教育委員会)
--------	---

【年度実績概要】	<p>キトラ古墳</p> <p>平成18年度は、保存処置の一手法として壁画の取り外し作業を続行した。漆喰の厚みが薄いため従来用いていたへらで取り外しが困難であった十二支像 寅、朱雀について、ダイヤモンドソーを利用して取り外す手法を開発し、12月に寅、2月に朱雀を取り外した。取り外した壁画の保存処置を順次行い、処置がほぼ終了した白虎を飛鳥資料館で公開できるようにした。</p> <p>漆喰の剥落などの損傷防止、およびカビ等微生物の繁殖低減のため、温度湿度等環境監視とセンサー等メンテナンス、週2回のカビ点検と処置、発生した微生物の分離同定と保存菌株化、および、施設壁画等の除菌施工や小前室天井結露対策工事などの施設管理、遮水シートの補填などの墳丘管理をおこなった。その他、石室内外より発掘調査によって出土した各種遺物に対して分析を進めた。掘り出された石室石材の保存処理を行い、接合検討を加えたところ、石室南壁の欠損範囲内の位置を特定できる接合資料を数点得ることができ、将来の展示活用の好材料が得られた。また年度末に石室内の3D測量を実施した。</p> <p>高松塚古墳</p> <p>高松塚古墳壁画の現状調査、微生物分離同定、カビ酵母等の発育試験、石室の環境調査等を行い、壁画の劣化に係わる各種要因の把握、解析のための基礎調査を進めた。加茂町の実験場に作られた実大の石室模型を用いて石室解体実験を繰り返して行い、安全性の確認に努めた。また実験結果を基にして、解体に使用する治具の改良を行った。さらに石材を輸送する際に生じる振動や衝撃の検出方法について研究を行った。</p> <p>10月から発掘調査に着手し、上段調査区の調査を12月末に終え、1月の断熱覆屋の建設後に下段調査区の調査を実施し、3月に石室の全体を検出した。上段調査区では墳丘封土を突き破る多数の地割れを検出し、過去の南海地震で墳丘や石室が損傷を受け、壁画の保存環境に大きな影響を及ぼしている事実を明らかにした。墳丘の調査では、版築上面に敷かれたムシロ目や塙き棒痕跡を検出し、版築による墳丘の築成方法を明らかにした。下段調査区の調査では、石室の規模や構造、損傷状況などを明らかにし、石室取り出し作業の各種基礎データを整備した。さらに取合部や石室外部の調査では、カビの分布状況をはじめ、植物の根や虫の侵入経路を調査し、壁画の劣化原因究明のための資料収集を行った。</p> <p>【実績値】</p> <p>キトラ古墳：論文等数5件 (①～⑤)、学会発表1件 (⑥) 高松塚古墳：論文等数5件 (⑦～⑪)</p> <p>【年度決算見込額】</p> <p>62,100千円 (受託研究分)</p>
----------	---

【備考】	①木川りか・佐野千絵・立里臨・喜友名朝彦・小出知己・杉山純多「キトラ古墳のバイオフィームから分離されたバクテリア・菌類に対するケータンCG相当品(抗菌剤)の効果」、②木川りか・佐野千絵・石崎武志・三浦定俊「キトラ古墳における菌類等生物調査報告(3)」、③佐野千絵・犬塚将英・間瀬創・木川りか・吉田直人・森井順之・加藤雅人・降幡順子・石崎武志・三浦定俊「キトラ古墳保護覆屋内の環境について(2)」(以上、『保存科学』第46号2007.3)、④村上隆「キトラ古墳出土遺物に関わる科学的調査研究」『仏教芸術』290号、2007.1、⑤花谷浩、宮原晋一、相原嘉之、玉田芳英、村上隆「キトラ古墳の発掘調査」『日本考古学』第23号2007.5、⑥玉田芳英、村上隆、花谷浩「キトラ古墳の発掘調査」(日本考古学協会第72回)、⑦小椋大輔・石崎武志・鈴木修一・北原博幸・犬塚将英・多羅間次郎・木下舞子「高松塚古墳石室解体時の空調方法の検討」、⑧Magdi KHALIL and Takeshi ISHIZAKI "Moisture Characteristic Curves of the Soil of Takamatsuzuka Tumulus", ⑨木川りか・佐野千絵・石崎武志・三浦定俊「高松塚古墳における菌類等生物調査報告(平成18年)」、⑩犬塚将英・石崎武志「高松塚古墳解体時のための観測システム」(以上、『保存科学』第46号2007.3)、⑪松村恵司・廣瀬寛「高松塚古墳の調査」『奈良文化財研究所紀要2007』2007.6(予定)
------	---

当該事務または事業の実績に関する自己点検評価

1. 定性的評価

観 点	適時性	発展性	正確性			
判 定	A	A	A			
備考 適時性：緊急を要する調査への取り組み 発展性：今後の調査への明確な見通し 正確性：正確なデータと調査結果への有意性						

2. 定量的評価

観 点	援助・助言実施件数					
判 定	A					
備考						

3. 実績の総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	キトラ古墳、高松塚古墳ともに、今後の保存を進めていく上で重要な資料を得た。

4. 当年度における中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	高い調査研究の水準で事業を進めることができた。

業務実績書

中期計画の項目 (I 1 (4))	我が国の文化財保護政策上重要かつ緊急に保存及び修復の措置等を行うことが必要となった文化財について、国・地方公共団体の要請に応じて、保存措置等のために必要な実践的な調査・研究を迅速かつ適切に実施する。
----------------------	---

【事業名称】	外部機関の要請に基づく文化財の保存修復に関する実践的研究 (I 1 (4))
--------	--

【事業概要】	平成18年度は、受託研究として、文化庁2件、地方公共団体及び財団等4件（鳥取県教育委員会1件、長野県教育委員会1件、三重県教育委員会1件、奈良県教育委員会1件）を実施した。
--------	--

【担当部課】	埋蔵文化財センター	【事業責任者】	保存修復科学研究室長 肥塚隆保
【スタッフ】	高妻洋成、降幡順子、脇谷草一郎（企画調整部）		

【年度実績概要】	<p>加茂岩倉遺跡より出土した銅鐸4点の保存処理にともなう事前調査を実施し、報告書を作成した。</p> <p>加茂岩倉遺跡より出土した銅鐸4点の保存処理を実施し、報告書を作成した。</p> <p>妻木晩田遺跡における大型住居跡の露出保存に関する工法研究において、現地における暴露試験を継続するとともに、遺構の劣化要因と劣化状態を調査し、報告書を作成した。</p> <p>長野県社宮司遺跡より出土した六角木幢の保存処理を継続し、年次報告書を作成した。</p> <p>三重県より委託された中道遺跡出土クスノキ製削り抜き井戸の真空凍結乾燥法による保存処理を終了し、報告書を作成した。</p> <p>奈良県より委託された唐招提寺金堂壁画の顔料分析調査をおこない、報告書を作成した。</p>
【実績値】	<p>報告書数：6件 (①～⑥)</p> <p>調査・処理点数：454点（重要文化財加茂岩倉遺跡出土品の事前調査：銅鐸4点、重要文化財加茂岩倉遺跡出土品の保存修理：銅鐸4点、中道遺跡出土クスノキ製削り抜き井戸：1点、唐招提寺金堂壁画顔料分析箇所：445点）</p>
【年度決算見込額】	16,086千円（受託研究分）

【備考】	<p>①『島根県加茂岩倉遺跡出土品事前調査2006年度報告書』</p> <p>②『島根県加茂岩倉遺跡出土品保存修理2006年度報告書』</p> <p>③『妻木晩田遺跡土質遺構露出展示技法の研究2006年度報告書』</p> <p>④『長野県千曲市社宮司遺跡出土の六角木幢保存修復委託事業2006年度報告書』</p> <p>⑤『クスノキ製削り抜き井戸の真空凍結乾燥法による保存処理研究2006年度報告書』</p> <p>⑥『国宝唐招提寺金堂壁画顔料分析調査完了報告書』</p>
------	--

当該事務または事業の実績に関する自己点検評価

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
備考						

2. 定量的評価

観点						
判定						
備考						

3. 実績の総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	定性的評価においてAが5つであり、これらの結果を総合的に判断して、Aと認めたものである。

4. 当年度における中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	受託期間内において、本年度の計画を予定どおり遂行したことから、当事業は順調であると判定した。継続事業については、今後、計画どおりに遂行する予定である。

業務実績書

中期計画の項目 (12(1))	文化財の保護制度や施策の国際動向及び国際協力等の情報を収集、分析して活用するとともに、国際共同研究を通じて保存修復事業を実施するために必要な情報収集を行う。また、国内の研究機関間の連携強化や共同研究、研究者間の情報交換の活発化、継続的な国際協力のネットワークを構築し、その成果をもとにアジア諸国に於いて文化財の保存修復事業を推進する。
--------------------	---

【事業名称】	文化財保存施策の国際的研究 (12(1)①)
--------	------------------------

【事業概要】	日本国内における文化財保護政策・施策の充実に、また日本が行う国際協力事業の円滑な実施に必要とされる、文化財の概念やその保護の理念、保護のための各種施策に関する国際情報を収集し分析、報告する。また文化遺産に関する国際ワークショップを国内外で開催してこれら情報の共有の場を提供することにより専門家国際ネットワークの構築を図り、文化遺産分野での日本の国際貢献、日本からの情報発信に寄与する。これらの事業により得た国際情報は、国際情報データベースに蓄積、また国際資料室に配架して公開する。
--------	--

【担当部課】	文化遺産国際協力センター	【事業責任者】	国際企画情報研究室長 稲葉信子
【スタッフ】	青木繁夫、岡田健、山内和也、朽津信明、二神葉子、岩出まゆ、岩井俊平、谷口陽子、西山伸一、宇野朋子、大竹秀実、ウーゴミズコ、関博充、芹生春菜、江草直友 (以上文化遺産国際協力センター)、鳥海基樹 (首都大学東京)、田中暁子 (東京大学)		

【年度実績概要】	<p>1. 文化財保存施策に関する国際情報の収集・分析、活用</p> <p>2006年度からの5ヵ年計画においては、2005年度までに行ってきた西ヨーロッパ諸国の文化財保護制度研究をさらに発展させる形で、調査対象を欧州委員会・欧州評議会、北欧、北米諸国に拡大し、これらの比較分析を行って、先進国の動向のまとめを行うこととしている。本年度は、欧州委員会・欧州評議会の現地調査を行った。調査結果は比較分析中であり、2007年度において報告の予定である。またユネスコ等が開催する主要な国際会議に職員を派遣して、文化財の保存に関する国際的な動向についての情報収集を行った。</p> <p>2. 文化遺産国際ワークショップの開催</p> <p>アジア文化遺産国際会議：文化遺産国際協力センターでは、1990年から14回にわたりアジアの文化財をテーマにアジア各国の参加者を招へいして国際会議を開催してきた。しかし文化遺産の保存をめぐる国際的な状況は大きく変化してきており、これからも日本がアジアにおいてリーダーシップを発揮していくためには、テーマ設定のあり方などさまざまな側面からプログラムを見直し、新たな方向を探る必要がある。本年度は、今後4年間のプログラムを新たに定めていくための戦略会議を、「アジアにおける文化遺産の現在—本当の問題はどこにあるのか」をテーマに、この分野で長く活躍しているアジア各地の専門家を招へいして開催した(日時：2007年2月5～7日、場所：東京文化財研究所会議室)。</p> <p>国際文化財保存修復研究会：上記会議が外国人専門家・機関を主たる参加者として国際的な連携の構築を目指しているのに対し、本研究会は、日本国内への国際情報の発信と、国際協力に関する国内専門家の情報交換・連携強化を目的として国内向け一般公開の研究会として開催している。本年度は、「文化遺産の生物劣化と国際協力」をテーマに開催した(日時：2006年10月25日、場所：東京文化財研究所セミナー室)</p>
【実績値】	<p>資料収集件数： 20件</p> <p>国際ワークショップ開催件数： 2件</p> <p>報告書刊行件数： 1件(□)</p> <p>外国人招へい者数： アジア文化遺産国際会議：6人 国際文化財保存修復研究会：2人</p> <p>国際ワークショップのうち一般公開分(国際文化財保存修復研究会)参加者数： 75人</p> <p>国際ワークショップのうち一般公開分(国際文化財保存修復研究会)参加者満足度： 97%</p>
【年度決算見込額】	21,251千円

【備考】	□ 国際文化財保存修復研究会報告書「文化遺産の生物劣化と国際協力」07.03
------	--

当該事務または事業の実績に関する自己点検評価

1. 定性的評価

観点	適時性	独自性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
備考 (観点の考え方について説明する必要がある場合、その他定性的評価に関し付記事項がある場合等について記述する。)						

2. 定量的評価

観点	参加者数	収集資料件数				
判定	A	A				
備考						

3. 実績の総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	文化財保存施策に関する調査研究事業は予定通り終了し、日本の文化財保護施策の策定に有効な情報を収集し、国際情報データベースの充実に貢献した。国際・国内ワークショップも所定の成果をあげ、国際情報の交換、専門家ネットワークの構築、国内外への情報発信に貢献した。

4. 当年度における中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	調査研究、国際・国内ワークショップとも、これまでの成果をもとに、それらを着実に発展させる形で実現できたと考える。調査研究については、今後もこのペースを維持しつつ事業を進め、国内の文化財保護施策の充実に貢献する。国際ワークショップについては今後とも国際的に時宜を得たテーマの開発に力を注ぎ、専門家ネットワークの構築、国内外への情報発信に貢献する。

業務実績書

中期計画の項目 (I 2 (1))	文化財の保護制度や施策の国際動向及び国際協力等の情報を収集、分析して活用するとともに、国際共同研究を通じて保存修復事業を実施するために必要な情報収集を行う。また、国内の研究機関間の連携強化や共同研究、研究者間の情報交換の活発化、継続的な国際協力のネットワークを構築し、その成果をもとにアジア諸国に於いて文化財の保存修復事業を推進する。
----------------------	---

【事業名称】	アジア諸国における文化遺産を形作る素材の劣化と保存に関する調査研究 (I 2 (1) ②ア)
--------	--

【事業概要】	アジア諸国では、煉瓦、土、石など、各地の遺跡に共通して用いられている材料が認められる。本研究では、地域で区切って研究を行うのではなく、各文化財に共通して用いられている素材を調査・研究することから、その素材で形作られた多くの文化財の保存修復に寄与することを目的とする。具体的には、材料の物性とその劣化に関する基礎的な研究を行うことから、それぞれの材料が劣化しにくい条件を考察し、材料に対して、あるいは遺跡の環境に対して、材料劣化を起しにくい条件を与えることで、文化財の保存修復に貢献する。
--------	---

【担当部課】	文化遺産国際協力センター	【事業責任者】	主任研究員 朽津信明
--------	--------------	---------	------------

【スタッフ】	青木繁夫、二神葉子、関博充、宇野朋子 (以上、文化遺産国際協力センター)、鈴木修一 (客員研究員)
--------	---

【年度実績概要】	<p>まず、カンボジアのアンコール遺跡群のタ・ネイ遺跡において、石材表面を覆って存在する生物群に関して検討を行った。同遺跡においては地衣類や苔類などの繁殖が認められるが、その具体的な生物種に関して、科学博物館と共同で解析を進めた結果、これまでに蘚類 8 属 9 種、苔類 2 属 3 種と、地衣類 34 属 41 種 (シアノバクテリア、緑藻を含む) が同定された。これらの生物種の分布には、一定の傾向が認められ、環境条件がその息に大きな影響を与えていることが考えられた。このことから、温度、湿度、風向風速などの環境計測機器を現地に設置し、微気象計測を開始した。これにより遺跡に悪影響を与える生物種の繁殖しやすい環境、そして繁殖しにくい環境が明らかになれば、保存対策の方向性を策定することに貢献できると期待される。</p> <p>一方、タイ・スコタイ遺跡のスリチュム寺院では、レンガ造漆喰仕上げの大仏表面に藻類などが繁殖することで、本来は純白の仏像が、黒ずんで見える状況になっていた。こうした生物が繁殖しにくい条件を考察する目的で、同寺院における気象観測を行い、そのデータについて解析した。また、気象観測とそのデータ解析を現地で行えるように、現地若手研究者の研修を行った。</p> <p>また、ベトナムのミーソン遺跡において、環境計測装置を設置してデータ回収と解析を行うとともに、現地スタッフだけでデータ回収を行えるように若手研究者の研修を行った。</p>
【実績値】	報告書刊行 1 冊 (①) 論文掲載数 2 編 (②、③) 学会発表数 3 件 (④、⑤、⑥)
【年度決算見込額】	10,567 千円

【備考】	①『アジア諸国における文化遺産を形作る素材の劣化と保存に関する調査・研究 平成 18 年度成果報告書』2007.03 ②朽津信明「エコーチップ試験による文化財石材の硬さに関する研究」『保存科学』46 2007.03 ③朽津信明「屋外石化財に対する微生物の影響に関して」『第 20 回国際文化財保存修復研究会報告書』2007.03 ④二神葉子・津村宏臣「マハタート寺院煉瓦造建造物の劣化評価に関するモニタリング」日本文化財科学会第 23 会大会 東京学芸大学 2006.6.16, 17 ⑤宇野朋子・鈴木修一・宮内真紀子「スコタイ遺跡における仏像の保存に関する研究 その 3 大仏周辺の温熱環境調査」日本建築学会大会 神奈川大学 2006.9.9 ⑥宮内真紀子・鈴木修一・宇野朋子「スコタイ遺跡における仏像の保存に関する研究 その 4 藻類の生長モデルの作成」日本建築学会大会 神奈川大学 2006.9.9
------	---

当該事務または事業の実績に関する自己点検評価

1. 定性的評価

観 点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判 定	A	A	A	A	A	
備考						

2. 定量的評価

観 点	報告書刊行数	論文掲載数	学会発表数			
判 定	A	A	A			
備考						

3. 実績の総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	報告書刊行、論文数、学会発表件数ともに、計画通りの数字が得られたことからAと判断した。また、順調にデータが蓄積されていることから、次年度にも同等の成果が期待される。

4. 当年度における中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	当初の計画通り、順調にデータが蓄積されている。次年度以降もさらに継続してデータを増やす予定である。

業務実績書

中期計画の項目 (I 2 (1)・(2))	文化財の保存・修復に関する国際協力に関して、事業を有機的・総合的に展開することにより、人類共通の財産である文化財の保存・修復に関する国際協力を通じて、我が国の国際貢献に寄与する。
--------------------------	---

【事業名称】	アンコールワット遺跡群西トップ寺院の調査 (I 2 (1) ②ア)
--------	-----------------------------------

【事業概要】	カンボディア王国アンコール遺跡群において、現地のAPSARA機構と共同研究を行い、文化遺産の保護と人材育成に貢献する。平成18年度から新たな中期計画に基づき西トップ寺院を対象とした共同研究を継続した。このため、本年度末に新たな覚え書きを交わした。
--------	---

【担当部課】	飛鳥資料館	【事業責任者】	学芸室長・杉山洋
--------	-------	---------	----------

【スタッフ】	肥塚隆保、高妻洋成、降幡順子、神野恵、豊島直博、和田一之輔、石村智、窪寺茂、島田敏男、清水重敦 (企画調整部、文化遺産部、都城発掘調査部、埋蔵文化財センター)
--------	--

【年度実績概要】	西トップ寺院では、引き続き諸調査を行った。8月には東テラス南北縦断トレンチの最終調査として北端に調査区を設定して、砂岩建築装飾などを検出した。12月の調査では東テラスの東端部にトレンチを設定し、セマ石の基部の構造物や、下層の石列を検出した。こうした成果については6月の国際調整委員会で発表するとともに、いくつかの国内の研究会で発表を行った。3月には3名の若手研究者を招聘し、奈良・京都の世界遺産を視察するとともに、東京国立博物館などの博物館の視察を行った。また本年度7月から8月に大阪歴史博物館で行なわれた『大アンコール・ワット展』に協力するとともに、シンポジウムに杉山と神野が参加した。
【実績値】	発表件数：2件 (①～②)
【年度決算見込額】	10,960 千円 (受託研究分)

【備考】	①『大アンコール・ワット展』シンポジウム 大阪歴史博物館 2006.8.21 ②国際調整委員会 ソキメック ホテル 2006.6.5
------	---

当該事務または事業の実績に関する自己点検評価

1. 定性的評価

観 点	適時性	独創性	応用性	継続性		
判 定	A	A	A	A		
備考						

2. 定量的評価

観 点						
判 定						
備考						

3. 実績の総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	定性的評価において、適時性、独創性、応用性、継続性の4項目においてAであることから、実績の総合的評価をAと判定した。

4. 当年度における中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	本年度の計画を当初の予定とおり遂行したことから、当事業は順調であると判定した。

業務実績書

中期計画の項目 (I 2 (1))	文化財の保護制度や施策の国際動向及び国際協力等の情報を収集、分析して活用するとともに、国際共同研究を通じて保存修復事業を実施するために必要な情報収集を行う。また、国内の研究機関間の連携強化や共同研究、研究者間の情報交換の活発化、継続的な国際協力のネットワークを構築し、その成果をもとにアジア諸国に於いて文化財の保存修復事業を推進する。
----------------------	---

【事業名称】	龍門石窟及び陝西省唐代陵墓石彫像の保存修理に関する調査研究 I 2 (1) ②イ)
--------	---

【事業概要】	中国龍門石窟の保存に協力するため、龍門石窟研究院との緊密なパートナーシップを構築し、龍門石窟の現状を詳細に調査し、保存修復の方法についての研究と具体的な処置、人材の養成などを実施する。陝西省所在の唐時代の乾陵、橋陵、順陵に附属する石彫像の保存修理に関して、科学的研究と保存修理作業を行うと共に、石彫像保存地区の保存計画策定の研究を行う。
--------	--

【担当部課】	文化遺産国際協力センター	【事業責任者】	保存計画研究室長 岡田健
--------	--------------	---------	--------------

【スタッフ】	青木繁夫、朽津信明、谷口陽子、関博充 (以上、文化遺産国際協力センター)
--------	--------------------------------------

【年度実績概要】	<p>(1) 龍門石窟人材養成</p> <p>1月10日から2月4日までの日程で、龍門石窟研究院保護センター楊剛亮研究員を招へいし、地理情報システム GIS の技術を活用した文化遺産の保護研究方法についての研究・研修を行なわせた。期間中は、同志社大学文化情報学科に受け入れを依頼し、センター客員研究員津村宏臣氏 (同学科専任講師) の指導のもと、2週間同学科に滞在し、GIS の理論と操作技術について研修を受けた。その後1週間、東京文化財研究所で龍門石窟における GIS の活用法に関する研究を行い、成果報告書をまとめて研修を終了した。</p> <p>(2) 石造文化財の保存修復に関する研究会</p> <p>西安文物保護修復センターと共催で、「石造文化財の表面処理に関する各種の問題」をテーマとする研究会を開催した。日中双方の保護修復、地質、考古学などの専門家30人以上が参加した。龍門石窟研究院保護センターの研究員3名が西安市に出張し、参加した。</p> <p>【場所】西安文物保護修復センター</p> <p>【日程】平成18年11月10日～12日 (3日間)</p> <p>第1日 (10日) 研究会 第2日 (11日) 乾陵視察、順陵視察、漢陽陵地下博物館視察 第3日 (12日) 陝西歴史博物館視察</p> <p>【研究会内容】</p> <p>1) プロジェクト報告 「唐陵石彫像保護処理の進捗状況」(西安文物保護修復センター 周偉強) 「」(西安文物保護修復センター 李衛) 「考古発掘調査報告」(陝西省考古研究所 張建林)</p> <p>2) 生物と石造文化財 「入水三十三観音石仏の保存修復」(国士舘大学 西浦忠輝) 「地衣類の岩石表面への固着と劣化メカニズム—固着性地衣類のレプラゴケを事例として」(東北芸術工科大学 張大石)</p> <p>3) 石造文化財の保護処理と変色 「シラン系樹脂の含浸実験」(西浦忠輝) 「石造文化財における保存処理—変色と耐候試験—」(九州国立博物館 今津節生)</p>
【実績値】	研究会の開催 1回
【年度決算見込額】	3,833 千円

【備考】	研究会資料集
------	--------

当該事務または事業の実績に関する自己点検評価

1. 定性的評価

観 点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	
判 定	A	A	A	A	A	
備考						

2. 定量的評価

観 点	研究会開催					
判 定	A					
備考						

3. 実績の総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	毎年段階的に研究テーマを発展させており、着実に成果を上げているため、Aと判定した。次年度は、龍門石窟においてはGISの現場での実践活用が期待され、唐代陵墓では修復作業実施に向けてさらに堅実な実験研究の実施が期待できる。龍門石窟研究院と西安文物保護修復センターの研究交流も促進されつつある。

4. 当年度における中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	その進捗度、従来水準を維持しつつ比較的堅調に実現できたと考える。

業務実績書

中期計画の項目 (I 2 (1))	文化財の保護制度や施策の国際動向及び国際協力等の情報を収集、分析して活用するとともに、国際共同研究を通じて保存修復事業を実施するために必要な情報収集を行う。また、国内の研究機関間の連携強化や共同研究、研究者間の情報交換の活発化、継続的な国際協力のネットワークを構築し、その成果をもとにアジア諸国に於いて文化財の保存修復事業を推進する。
----------------------	---

【事業名称】	敦煌壁画の保護に関する共同研究 (I 2 (1) ②イ)
--------	------------------------------

<p>【事業概要】</p> <p>敦煌壁画に関して、東京文化財研究所と敦煌研究院が共同で調査研究を行うもので、これまで両研究所が行ってきた4期にわたる共同研究を継承し、あらたに第5期として推進するものである。その内容は、以下のものとなっている。</p> <p>壁画制作技法・制作材料に関する光学的方法及び分析的方法を用いた総合研究 放射性炭素年代測定法による主要窟の年代同定に関する研究 日中の若手研究者育成 第4期において修復作業を完了した研究対象窟第53窟についての継続的経過観察</p> <p>これは、近年のシルクロード各地における各国・各研究機関の専門家による壁画を中心とした文化財研究の進展を念頭に置きつつ、壁画の制作材料と技法を古代のシルクロードを通じた文化交流、技法・材料の移動という観点から研究し、敦煌壁画を総合的に理解しようとするものである。</p>

【担当部課】	文化遺産国際協力センター	【事業責任者】	保存計画研究室長 岡田健
<p>【スタッフ】</p> <p>青木繁夫、山内和也、朽津信明、谷口陽子、宇野朋子、高林弘実、大竹秀実 (以上、文化遺産国際協力センター)、石崎武志 (保存科学部)、中野照男 (美術部)、初井基充 (実践女子大学)、中村俊夫 (名古屋大学)、齋藤努 (歴史民族博物館)</p>			

<p>【年度実績概要】</p> <p>(1) 合意書の調印：第5期日中共同研究を開始するにあたって中国国家文物局が定める規則に従い、共同研究に関する合意文書への調印と交換を行った。共同研究の期間は2006年4月からの5年間。</p> <p>(2) 合同調査：7月30日から9月16日の日程で、調査チームを現地に派遣し、敦煌研究院のメンバーと共同で、第285窟壁画の写真撮影・顕微鏡観察・分光反射率測定、第53窟の環境調査、放射性炭素年代測定に供する試料の採取、鉛同位対比分析に供する顔料試料の選定を行った。8月28日には、敦煌研究院において名古屋大学年代測定総合研究センターの中村俊夫教授による放射性炭素年代測定の原理と応用についての講演会を実施した。</p> <p>(3) 評価委員会の開催：10月18日に、敦煌研究院において第4期までの日中共同研究に関する中国側専門家による評価委員会を開催した。評価委員から、15年に及ぶ共同研究の成果が高く評価されるとともに、第5期共同研究に対する期待が寄せられた。</p> <p>(4) 敦煌研究員の来日研修：1月11日から3月9日の日程で敦煌研究院保護研究所研究員2名を招へいし、研修をおこなった。郭青林研究員は、名古屋大学年代測定総合研究センターで2006年8月に莫高窟第285窟で採取した試料の放射性炭素年代測定実施に必要な作業を通しての研修を受けた。趙林毅研究員は、国立歴史民俗博物館において、莫高窟で採取した鉛系顔料の化学分析及び鉛同位対比分析の実習を行った。3月9日には、本研修の成果をまとめて報告会を行った。</p> <p>(4) 王旭東副院長以下の来日：第5期を開始するにあたり、3月12日から21日の日程で、王旭東敦煌研究院副院長 (保護研究所長) 以下4名を招へいし、交流を図るとともに、国内の関係研究機関と文化遺産保護現場の視察を行った。</p> <p>(5) 報告書の作成：2006年度の成果をまとめ、東京文化財研究所と敦煌研究院両者共同の成果報告書を編集し、発行した。</p>
<p>【実績値】</p> <p>報告書 1冊 (①)</p>
<p>【年度決算見込額】</p> <p>11,709千円</p>

<p>【備考】</p> <p>① 報告書「敦煌壁画の保護に関する日中共同研究2006」 2007.03</p>
--

当該事務または事業の実績に関する自己点検評価

1. 定性的評価

観 点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判 定	A	A	A	A	A	A
備考						

2. 定量的評価

観 点	報告書作成					
判 定	A					
備考						

3. 実績の総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	シルクロード沿線の壁画研究が注目される中、近年開発が進んでいる可搬型観測機器の導入、積極的な外部研究機関との連携などが実現し、調査による新たな発見に基づく研究方法の改善、科学的分析手法の確立も順調に行われているため、Aと判定した。敦煌研究院との研究者同士の意思疎通も順調に図られていて、研究の一層の発展が期待できる。

4. 当年度における中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	これまでの経験を生かしつつ、比較的堅調に実現できたと考える。観測機器の準備など、改善すべき点を見直しつつ、次年度へ向けて順調に作業を進めている。

業務実績書

中期計画の項目 (I2(1))	文化財の保護制度や施策の国際動向及び国際協力等の情報を収集、分析して活用するとともに、国際共同研究を通じて保存修復事業を実施するために必要な情報収集を行う。また、国内の研究機関間の連携強化や共同研究、研究者間の情報交換の活発化、継続的な国際協力のネットワークを構築し、その成果をもとにアジア諸国に於いて文化財の保存修復事業を推進する。
--------------------	---

【事業名称】	西アジア諸国等文化遺産保存修復協力事業 (I2(1)②ウ)
--------	-------------------------------

【事業概要】	西アジア諸国の文化財の保護・保存・修復に関する協力・支援事業の一環として、とくに内戦・紛争によって破壊の危機にさらされているアフガニスタン及びイラクの文化財の調査研究を行い、それに基づいて文化財保護支援事業の優先順位を定め、破壊された文化財の保存・修復事業を通して、関連する分野の技術移転を図るとともに、当該国から強い要請を受けている人材育成を行い、自国民の手による文化財保護事業の確立の支援を目指す。
--------	---

【担当部課】	文化遺産国際協力センター	【事業責任者】	センター長 青木繁夫
--------	--------------	---------	------------

【スタッフ】	稲葉信子、山内和也、朽津信明、岩井俊平、岩出まゆ、宇野朋子、谷口陽子、西山伸一、前田耕作、大竹秀実、関博充 (以上、文化遺産国際協力センター)、岡村道雄、井上和人、窪寺茂、森本晋、石村智、脇谷草一郎 (以上、奈良文化財研究所)、中村俊夫 (名古屋大学)
--------	--

【年度実績概要】	<p>1. アフガニスタン</p> <p>1) バーミヤーン第6次ミッション (2006 (平成18) 年6月19日～7月14日) 及び第7次ミッション (2006 (平成18) 年9月11日～10月16日) の派遣 (⑤、⑥) : バーミヤーン遺跡の考古学的調査、バーミヤーン遺跡の建造物調査、バーミヤーン仏教壁画の保存 (④) の各事業を実施。</p> <p>2) アフガニスタン専門家研修事業 : 第6次ミッション及び第7次ミッションで実施した各事業において現場でアフガニスタン人専門家の人材育成を実施。また、2006 (18) 年10月4日～10月8日にかけてバーミヤーンにおいて「保存修復ワークショップ」を開催。</p> <p>3) 「バーミヤーン遺跡保存に関する第5回専門家作業グループ国際会議」への参加 : 2006 (平成18) 年12月14日～16日にかけてドイツのアーヘン大学で開催された同会議に参加し、バーミヤーン遺跡保存に関して情報収集をするとともに、今後の方針について各国の専門家 (アフガニスタン、ドイツ、イタリア、フランス) と意見交換を行なった。</p> <p>4) 『アフガニスタン文化遺産調査資料集』の出版 : 『Radiocarbon Dating of the Bamiyan Mural Paintings』、『アフガニスタン流出文化財の調査 バーミヤーン仏教壁画の材料と技法』及び『Study of the Afghanistan's Displaced Cultural Properties, Materials and Techniques of the Bamiyan Mural paintings』を刊行 (①、②、③)。</p> <p>5) バーミヤーン仏教壁画の年代測定 : 名古屋大学年代測定総合研究センターと共同で、仏教壁画の放射性炭素年代測定法による年代測定を、平成16年度から継続して実施。</p> <p>2. イラク文化財専門家研修事業</p> <p>バグダード国立博物館等から専門家2名を日本に招へいし、東京文化財研究所、奈良文化財研究所、静岡県埋蔵文化財研究所で、考古遺物の保存修復の理論と実践に関する研修を実施した (ユネスコ/日本信託基金によるイラク博物館における修復研究室復興プロジェクト参照)。</p>
【実績値】	<p>招へい専門家 : 2名</p> <p>職員派遣数 : 12名</p> <p>報告書作成 : 6件 (①-⑥)</p> <p>学会発表件数 : 1件 (⑦)</p> <p>プレスリリース発出件数 : 2件</p>
【年度決算見込額】	71,241千円

【備考】	<p>①『Radiocarbon Dating of the Bamiyan Mural Paintings』 06.08、②『アフガニスタン流出文化財の調査 バーミヤーン仏教壁画の材料と技法』 06.05、③『Study of the Afghanistan's Displaced Cultural Properties, Materials and Techniques of the Bamiyan Mural paintings』 06.11、④『Inventory for Bamiyan Mural Painting Fragments』 06.12、⑤『バーミヤーン遺跡保存事業概報—2005年度 (第4・5次ミッション)』 07.03、⑥『Preliminary Report on the Safeguarding of the Bamiyan Site 2005・4th and 5th Missions』 07.03</p> <p>⑦山内和也、岩井俊平 アフガニスタン、バーミヤーン遺跡保存事業—2006年度の成果—『平成18年度考古学が語る古代オリエント 第14回西アジア発掘調査報告会報告集』日本西アジア考古学会 07.3.4</p>
------	---

当該事務または事業の実績に関する自己点検評価

1. 定性的評価

観 点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判 定	A	A	A	A	A	
備考						

2. 定量的評価

観 点	招へい者	職員派遣数	報告書作成数	発表件数	プレスリリース件数	
判 定	A	A	A	A	A	
備考						

3. 実績の総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	治安等の問題がありながら、全体的に計画に沿って事業が実施されており、成果も上がっていることから、Aと判断した。

4. 当年度における中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	治安情勢等のさまざまな問題に配慮しながらも、計画に沿って事業が遂行されている。

業務実績書

中期計画の項目 (I 2 (2))	諸外国に於ける文化財の保存・修復に関する技術移転を積極的に進める。また、アジア諸国の文化財保護担当者や保存・修復専門家などの人材養成に関する支援事業を国内外で実施するとともに、人材養成に必要な教材や教育手法に関する研究開発を行う。
----------------------	---

【事業名称】	諸外国の文化財保存修復専門家養成 (I 2 (2) ア)
--------	------------------------------

【事業概要】	文化遺産の保存修復を実施するためには、経験豊かな修復専門家の関与が必要不可欠である。しかし、紛争が長期間続いた国々では、文化遺産を保存・修復する人材が決定的に不足しており、その養成が緊急的課題になっている。そのため諸外国における専門家の研修を実施する際の教科書として使用することを目的として、「土器の修復」をテーマにしたテキストおよびビデオDVDを作成した。
--------	---

【担当部課】	文化遺産国際協力センター	【事業責任者】	センター長 青木繁夫
--------	--------------	---------	------------

【スタッフ】	稲葉信子、岡田健、朽津信明、関博充 (文化遺産国際協力センター)
--------	----------------------------------

【年度実績概要】	諸外国における文化財保存修復に携わる専門家を研修することを目的とした、教科書とビデオの作成を実施した。初年度には、世界各地で普遍的に存在する文化財である、土器の修復をテーマにしたテキストおよびビデオDVDを作成した。言うまでもなく土器は世界中で産出するが、その殆どの場合には破損して原型を保っていない。これを有効に活用して行くためには、それ以上土器が損傷しないように対策することとともに、破片を適切に接合したり、一部を充填したりして、原型をある程度復元して展示することを要求される場合が少なくない。こうしたことから、土器を修復して適切に保存・活用していく手順を示したビデオDVDを作成した。これは、「焼き物の種類」「製作工程」「劣化メカニズム」「修復方法」「修復材料」などについて順番に解説したもので、英語と日本語それぞれで14分ずつのナレーションを入れてある。また、同内容について、英語と日本語でテキストを作成し、上記の見出しに加え、修復記録カードの例なども付録で掲載した。これにより、土器の修復を目的とした諸外国専門家養成は、効率的に行うことが可能となった。
【実績値】	ビデオ編集 1巻 (①) テキスト作成 1冊 (②)
【年度決算見込額】	5,709千円

【備考】	① 文化遺産国際協力センター編集 「土器の修復」ビデオDVD 07.03 ② 文化遺産国際協力センター編集 「土器の修復」テキスト 07.03
------	--

当該事務または事業の実績に関する自己点検評価

1. 定性的評価

観 点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判 定	A	A	A	A	A	
備考						

2. 定量的評価

観 点	ビデオ作成数	テキスト作成数				
判 定	A	A				
備考						

3. 実績の総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	計画通りにビデオとテキストが製作できたので、Aと判断した。

4. 当年度における中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	土器の保存についてのビデオとテキストが完成し、当初の計画通り順調に進行している。次年度以降も、それぞれのテーマごとに引き続き製作していく予定である。

業務実績書

中期計画の項目 (I2(2))	諸外国における文化財の保存・修復に関する技術移転を積極的に進める。また、アジア諸国の文化財保護担当者や保存・修復専門家などの人材養成に関する支援事業を国内外で実施するとともに、人材養成に必要な教材や教育手法に関する研究開発を行う。
--------------------	---

【事業名称】	JICA・ACCU等の研修事業への協力 (I2(2)イ)
--------	------------------------------

<p>【事業概要】</p> <p>JICA・ACCU等が実施する研修事業への協力を行う。</p> <p>①アジア太平洋地域文化遺産保護調査修復研修 (個人研修・パラオ) 2名</p> <p>②アジア太平洋地域文化遺産保護調査修復研修 (集団研修) 15名</p> <p>③アジア太平洋地域文化遺産保護調査修復研修 (個人研修・ベトナム) 2名</p>
--

【担当部課】	企画調整部	【事業責任者】	部長 岡村道雄
--------	-------	---------	---------

<p>【スタッフ】</p> <p>松井章、石村智、西口寿生、神野恵、金井健、小池伸彦、高瀬要一、中島義晴、光谷拓実、井上和人、脇谷草一郎 (企画調整部、文化遺産部、都城発掘調査部、埋蔵文化財センター)</p>

<p>【年度実績概要】</p> <p>①、②とも文化財全般にわたる保存修復についての知識・技術習得のための研修であり、①については、獣骨の観察と分析法、微細遺物の採集法と観察分析法、民族資料等の展示管理法の現地研修、遺物の整理と実測、遺構の記録法、遺跡の発掘実習、遺跡の保護と整備という課題で講義・実習を行った。また②については、年輪年代法講義・考古遺物の整理実習・環境考古学概論と調査実習・保存整備臨地講義を実施した。</p> <p>③はベトナム・タンロン皇城遺跡の調査研究に係わる文化財支援事業の一環として実施したもので、保存科学全般にわたる基礎知識および遺物の保存環境管理と金属製品の保存修復に関する必要な技術習得についての研修を実施した。</p>
<p>【実績値】</p> <p>研修生員数 ①：2名 ②：15名 ③：2名</p>
<p>【年度決算見込額】</p> <p>10,281千円</p>

【備考】

当該事務または事業の実績に関する自己点検評価

観 点	適時性	発展性	継続性			
判 定	A	A	A			
備考						

1. 定性的評価

2. 定量的評価

観 点	研修生員数	協力件数				
判 定	A	A				
備考						

3. 実績の総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	定性的評価、定量的評価の項目がいずれもAであるので、総合評価をAとした。

4. 当年度における中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	関係機関からの定期的および不測の協力依頼に適切に対応している。

業務実績書

中期計画の項目 (I 3 (1))	文化財関係の情報を収集して積極的に発信するため、ネットワークのセキュリティの強化及び高速化等に対応した情報基盤の整備・充実を図る。また、文化財情報の計画的収集・整理・保管及びそれらの電子化の推進による文化財に関する専門的アーカイブの拡充を行うとともに、調査研究に基づく成果としてのデータベースの充実を図る。
----------------------	---

【事業名称】	情報システムの整備(I 3 (1) ①)
--------	----------------------

【事業概要】	文化財関係の情報を収集し、積極的に発信するために、ネットワーク環境におけるセキュリティの強化及び高速化を進めるなど、情報基盤の整備・拡充を図る。
--------	--

【担当部課】	企画情報部	【事業責任者】	情報システム研究室長 勝木言一郎
--------	-------	---------	------------------

【スタッフ】	江村知子(企画情報部)、菊地昌弘、横山隆史(以上管理部 LAN 委員)、綿田稔(美術部 LAN 委員)、俵木悟(無形文化財部 LAN 委員)、吉田直人(保存科学部 LAN 委員)、加藤雅人(修復技術部 LAN 委員)、二神葉子(文化遺産国際協力センター LAN 委員)
--------	--

【年度実績概要】	<p>1. 情報システムの整備</p> <p>(1) システム管理</p> <p>所内におけるシステムの運用については、システム管理者がシステム全体の日常的な運用をはじめ、保守契約等の協議、メールアカウントの管理を行った。また LAN 委員会の協議を経て、中長期的な更新計画を策定した。とくに平成 18 年度は研究活動及び日常業務が滞りなく円滑に遂行されるように、IP アドレスの確保や Web Mail 対応を図った。</p> <p>(2) ネットワーク環境の整備</p> <p>現在のユーザー環境を維持しつつ、より効率的運用ができるよう、ネットワーク環境の機器更新を下記の通り、大規模かつ段階的に進めた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・外部 DNS/Mail/NTP サーバー ns ・外部 DNS/Mail/NTP サーバー ns01 ・内部 DNS/Mail/NTP サーバー dns01 ・内部 DNS/Mail/NTP サーバー dns02 ・メール用 InterScan dns03 ・HTP・FTP 用 InterScan proxy ・スイッチングハブ(各階 EPS 機械室およびシステム管理室) ・Reverse Proxy サーバー ISA ・DHCP サーバー dhcpsv ・所内スケジュール管理用サーバー ・管理端末 <p>(3) 情報セキュリティ</p> <p>情報セキュリティに関するポリシーおよび運用手順の策定に向け、関連情報を収集した。</p>
【実績値】	
【年度決算見込額】	20,638 千円 (No.7 2 との合算額)

【備考】	
------	--

当該事務または事業の実績に関する自己点検評価

1. 定性的評価

観 点	適時性	効率性	継続性	正確性		
判 定	A	A	A	A		
備考						

2. 定量的評価

観 点						
判 定						
備考						

3. 実績の総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	情報システムの整備についてはネットワーク環境の更新に伴い、セキュリティの強化及び高速化が図られた結果、適時性、効率性、継続性、正確性が向上したと判断した。

4. 当年度における中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	情報システムの整備についてはセキュリティの強化及び高速化を図るに当たり、現在のユーザー環境を維持しつつ、より効率的な運用ができるよう、ネットワーク環境の段階的な更新を進めた。

中期計画の項目 (I 3 (1))	文化財関係の情報を収集して積極的に発信するため、ネットワークのセキュリティの強化及び高速化等に対応した情報基盤の整備・充実を図る。また、文化財情報の計画的収集・整理・保管及びそれらの電子化の推進による文化財に関する専門的アーカイブの拡充を行うとともに、調査研究に基づく成果としてデータベースの充実を図る。
----------------------	--

【事業名称】	ネットワークのセキュリティの強化及び高速化等に対応した情報基盤の整備・充実 (I 3 (1) ①)
--------	---

【事業概要】	コンピュータウイルスをはじめとする様々な脅威から研究所の情報を守り、正確な情報を発信して行くため、ネットワークのセキュリティを強化する。また、文化財情報の電子化によるデータベース及びホームページに掲載された情報の所内外への提供を推進するため、サーバ機器・ネットワークといった情報基盤システムの整備・充実を行う。
--------	---

【担当部課】	管理部文化財情報課	【事業責任者】	課長 山田耕一
--------	-----------	---------	---------

【スタッフ】	太田仁 ほか 1名
--------	-----------

【年度実績概要】	平成18年度、研究所として総務省の策定する情報セキュリティに関するガイドラインを基にした「情報セキュリティポリシー」を策定した。セキュリティポリシーに沿った啓発活動を行なうとともに、不正接続防止装置・迷惑メール対策ファイアーウォールを導入してセキュリティ強化に努めた。 情報基盤の整備としては、スイッチの定期更新及びルータ類のインターネットオペレーティングシステムを更新した。
----------	---

【実績値】	
-------	--

【年度決算見込額】	39,746 千円
-----------	-----------

【備考】	
------	--

当該事務または事業の実績に関する自己点検評価

1. 定性的評価

観 点	適時性	効率性	継続性			
判 定	A	A	A			
備考 適時性：情報セキュリティポリシーを整備した。 効率性：不要メールを無くして効率化を図った。 継続性：適切に機器及びソフトの更新した。						

2. 定量的評価

観 点						
判 定						
備考						

3. 実績の総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	定性的評価において、全てがAであり、Aと判定した。

4. 当年度における中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	情報漏洩・ウイルス感染もなく、機器及びソフトの更新がなされ、順調な運営を行なう事ができた。

業務実績書

中期計画の項目 (I-3 (1))	文化財関係の情報を収集して積極的に発信するため、ネットワークやセキュリティの強化及び高速化等に対応した情報基盤の整備・充実を図る。また文化財情報の計画的収集・整理保管及びそれらの電子化の推進による文化財に関する専門的アーカイブの拡充を行うとともに調査研究に基づく成果としてのデータベースの拡充を図る。
----------------------	--

【事業名称】	専門的アーカイブの拡充 (I 3 (1) ②)
--------	-------------------------

【事業概要】	企画情報部では1) 受入した文化財関連の図書などの文字資料や、作成したアナログ・デジタル画像資料の登録・管理、2) 閲覧室で月・水・金の週3回一般利用者へ所蔵資料を提供、3) データベースや検索システムの構築・運用を通常業務としている。過去五カ年で定まった文化財関連資料の公開機関としての周知をふまえ、次年度五カ年では提供する資料や情報の質に主眼を置き、より専門性の高い文化財関連資料や情報の収集・構築・公開の場として専門的アーカイブの拡充を図る。また、上記アーカイブのための資料収集及び作成には画像形成技術の開発が必要不可欠である。画像形成部門では、常に技術の進歩をみる写真機材及び設備の整備が必須であり、本プロジェクトでは継続的にこれらの更新を行うことによって、世界最先端の研究活動を支援することをも目的とする。
--------	--

【担当部課】	企画情報部	【事業責任者】	企画情報部長 三浦定俊
--------	-------	---------	-------------

【スタッフ】	山梨絵美子、勝木言一郎、皿井 舞、江村知子、中村節子、中村明子、井上さやか (以上、企画情報部)		
--------	--	--	--

【年度実績概要】	従来どおり文化財に関する文字資料および画像資料の収集、管理、公開、データベースの構築・運用を基本に、より充実した文化財に関するアーカイブの形成を試みた。昨年度試験運用を開始したデジタルアーカイブについて運用評価をおこない、改良を加えた。また、アーカイブ拡充に不可欠なデジタルコンテンツ作りを文字情報・画像ともにすすめた。一方、その他文化財関連資料の公開機関として周知され利用頻度が高まるにつれ、明治大正期刊行の資料類や機器類の劣化が予想以上にすすんでいるため、サービスの低下を招かぬ形での保護対策として、資料については引き続きデジタル化をすすめた。また、資料閲覧室での画像公開のためにすでに報告書を作成している「紅白梅図屏風」の高精細画像、蛍光 X 線分析データ、関連文献データをリンクした閲覧のためのデータを公開し、ついで「国宝絹本着色 十一面観音像」についても同様のコンテンツを公開用に作成した。画像資料の作成・整理については、第一期で完了した既存の写真原板台帳からの画像データベース(写真管理検索システム)の所内イントラネット公開を行い、所蔵画像名をウェブ上で公開する準備をした。閲覧室やホームページで公開している「研究資料データベース検索システム」は運用も5年を過ぎ、機器アプリケーションともに保守期限が終了したためハードソフトともに更新した。また、イントラネット、インターネット共に和雑誌と楽器のデータベースを新たに公開した。
----------	--

撮影件数	フルカラー画像 3,239 件、特殊画像 1,577 件	モノクロフィルム (4×5) 登録総数	48,289 件
写真検索管理システム登録件数	709 件		

資料閲覧室にて作成・更新中の目録データベース (33 種)	
<ul style="list-style-type: none"> ・所蔵和漢書データベース (2005 年度まで) ・所蔵洋書データベース ・売立目録データベース ・和雑誌誌名データベース ・所蔵中国雑誌誌名データベース ・所蔵和雑誌巻号データベース (2002 年まで) ・所蔵和雑誌巻号データベース (2003 年以降) ・所蔵中国雑誌巻号データベース ・所蔵地方公共団体刊行報告書データベース ・展覧会データベース (2002 年まで) ・近現代作家名データベース ・写真原板データベース ・古美術文献目録データベース (明治～1965 年) ・美術館博物館名データベース ・所蔵近現代図録目次データベース(1948～1990 年) ・東京文化財研究所年表データベース ・受入和漢書データベース (2006 年度分) ・所蔵簡易図書データベース ・所蔵美術館博物館収蔵目録データベース ・所蔵洋雑誌誌名データベース ・所蔵韓国雑誌誌名データベース ・所蔵洋雑誌巻号データベース (1999 年まで) ・所蔵洋雑誌巻号データベース (2000 年以降) ・所蔵韓国雑誌巻号データベース ・所蔵香取秀真資料関係データベース ・展覧会データベース (2003 年以降) ・近現代展覧会開催情報データベース(1944 年以降) ・キャビネット写真データベース ・近現代美術文献目録データベース(1959～1990 年) ・所蔵古美術展図録目次データベース(1989～2001 年) ・古美術展覧会開催情報データベース(1944 年以降) ・美術懇話会・開所記念展覧会出品目録データベース・物故記事データベース 	

【実績値】	通常フルカラー画像撮影件数 3,239 件	特殊画像撮影件数 1,577 件	デジタル画像撮影の全体にしめる割合 99%
	図書受入数 和漢書 575 件 洋書 16 件	展覧会図録・報告書等 2,160 件	雑誌 3,731 件 受入総数 6,482 件
	目録所在情報 目録所在情報の種類 33 種	目録所在情報作成件数 21,857 件	
	目録所在情報収録件数 622,183 件	目録所在情報公開件数 495,555 件	
	イントラネットで公開中の目録累計数 12 種		
資料閲覧室の利用状況	公開日総数 139 日	利用者年間合計 926 人	平成 17 年度の利用者数との対比 5 人減

【年度決算見込額】	26,666 千円
-----------	-----------

【備考】	所内イントラネットによる目録の公開 http://www2.tobunken.go.jp
------	---

当該事務または事業の実績に関する自己点検評価

1. 定性的評価

観 点	適時性	独自性	発展性	効率性	継続性	正確性
判 定	A	A	A	A	A	A
備考						

2. 定量的評価

観 点	文献資料受入件数	画像資料収集件数	データベース公開件 数	閲覧室利用者数		
判 定	A	A	A	A		
備考						

3. 実績の総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	文化財に関する資料の両輪である文献資料、画像資料双方について質的にも量的にも充実した収集・整理・公開を行うことができたためAと判断した。

4. 当年度における中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	中期計画の実行上、順調な進捗を示すことができた。 これまでの業績をふまえて、次年度は文献・画像ともに精度の高い情報を、より多く収集・整理するとともに、公開の拡大を図りたい。

業務実績書

中期計画の項目 (I-3 (1))	文化財関係の情報を収集して積極的に発信するため、ネットワークやセキュリティの強化及び高速化等に対応した情報基盤の整備・充実を図る。また文化財情報の計画的収集・整理保管及びそれらの電子化の推進による文化財に関する専門的アーカイブの拡充を行うとともに調査研究に基づく成果としてのデータベースの拡充を図る。
----------------------	--

【事業名称】	東京文化財研究所七十五年史編纂事業 (I 3 (1) ③)
--------	-------------------------------

【事業概要】	昭和29年7月に当所の前身である東京国立文化財研究所が設立されて以来、当所の歴史を概観するものは「20年のあゆみ」が刊行されている。他は、各年度の事業を記した概要、年報が刊行されているのみで、まとめた所史は編纂されていない。本事業は、東京国立文化財研究所の前身である帝国美術院附属美術研究所が昭和5年6月に設立されてから平成17年で75周年を迎えたのを機に、当所の歴史を跡づけ、さらには東京国立博物館との統合を迎える平成18年までの記録を残すことを目的として、資料収集及びそのデータ化を図り、所史を編集する。
--------	--

【担当部課】	企画情報部	【事業責任者】	企画情報部長 三浦定俊
【スタッフ】	山内浩一 (管理部)、塩谷純 (美術部)、飯島満 (無形文化遺産部)、佐野千絵 (保存科学部)、加藤寛 (修復技術部)、岡田健 (文化遺産国際協力センター)、山梨絵美子、中村節子、中村明子、井上さやか (以上、企画情報部)		

【年度実績概要】	<p>東京文化財研究所七十五年史に関わる資料収集のため、旧職員へのインタビュー、資料調査を引き続き行い、データ化、原稿化した。沿革・調査研究篇については、各部・センターの担当者を中心として資料を収集し、原稿を作成した。事業・資料篇については、収集した資料をデジタルデータ化し、編集、原稿化するとともに、その一部を研究等に資するデジタル・コンテンツとして公開にむけて編集し、ホームページ上での公開に向けて加工を進めた。</p> <p>これらの作業をもとに『東京文化財研究所七十五年史』(二分冊)を平成19年度に刊行する。</p> <p>事業・資料篇のために収集・編集した資料には以下のようなものがある。</p> <table border="0"> <tr> <td>科学研究費題目一覧</td> <td>受託研究費題目一覧</td> <td>特別研究一覧</td> </tr> <tr> <td>アジア文化財保存セミナー</td> <td>アジア文化財保存修復研究会</td> <td>在外日本美術品修理</td> </tr> <tr> <td>開所記念行事目録</td> <td>黒田清輝巡回展</td> <td>芸能部夏期学術講座</td> </tr> <tr> <td>美術部・情報資料部夏期学術講座</td> <td>近代の文化遺産の保存修復に関する研究会</td> <td>芸能部公開講座</td> </tr> <tr> <td>美術部公開講座</td> <td>国際シンポジウム</td> <td>能楽技法研究会</td> </tr> <tr> <td>文化財保存修復研究協議会</td> <td>民族芸能研究協議会</td> <td>漆の研修</td> </tr> <tr> <td>紙の研修</td> <td>資料保存地域研修</td> <td>大学院教育</td> </tr> <tr> <td>博物館学実習</td> <td>保存修復講座</td> <td>保存担当学芸員実習</td> </tr> <tr> <td>開設期の公文書一覧</td> <td>所蔵作品目録</td> <td>戦前調査撮影記録一覧</td> </tr> <tr> <td>矢代幸雄収集西洋美術関係図版目録</td> <td>ピニオン氏招聘委員会主催英国水彩画展覧会出品目録</td> <td>物故旧職員略歴</td> </tr> <tr> <td>美術懇話会会員名簿</td> <td>東洋美術国際研究会会員名簿</td> <td>「美術研究」総目次</td> </tr> <tr> <td>「美術研究」図版総目次</td> <td>「保存科学」総目次</td> <td>「芸能の科学」総目次</td> </tr> <tr> <td>Bulletin of Eastern Art 目次</td> <td>歴代名誉研究員一覧</td> <td>職員名簿</td> </tr> </table>		科学研究費題目一覧	受託研究費題目一覧	特別研究一覧	アジア文化財保存セミナー	アジア文化財保存修復研究会	在外日本美術品修理	開所記念行事目録	黒田清輝巡回展	芸能部夏期学術講座	美術部・情報資料部夏期学術講座	近代の文化遺産の保存修復に関する研究会	芸能部公開講座	美術部公開講座	国際シンポジウム	能楽技法研究会	文化財保存修復研究協議会	民族芸能研究協議会	漆の研修	紙の研修	資料保存地域研修	大学院教育	博物館学実習	保存修復講座	保存担当学芸員実習	開設期の公文書一覧	所蔵作品目録	戦前調査撮影記録一覧	矢代幸雄収集西洋美術関係図版目録	ピニオン氏招聘委員会主催英国水彩画展覧会出品目録	物故旧職員略歴	美術懇話会会員名簿	東洋美術国際研究会会員名簿	「美術研究」総目次	「美術研究」図版総目次	「保存科学」総目次	「芸能の科学」総目次	Bulletin of Eastern Art 目次	歴代名誉研究員一覧	職員名簿
科学研究費題目一覧	受託研究費題目一覧	特別研究一覧																																							
アジア文化財保存セミナー	アジア文化財保存修復研究会	在外日本美術品修理																																							
開所記念行事目録	黒田清輝巡回展	芸能部夏期学術講座																																							
美術部・情報資料部夏期学術講座	近代の文化遺産の保存修復に関する研究会	芸能部公開講座																																							
美術部公開講座	国際シンポジウム	能楽技法研究会																																							
文化財保存修復研究協議会	民族芸能研究協議会	漆の研修																																							
紙の研修	資料保存地域研修	大学院教育																																							
博物館学実習	保存修復講座	保存担当学芸員実習																																							
開設期の公文書一覧	所蔵作品目録	戦前調査撮影記録一覧																																							
矢代幸雄収集西洋美術関係図版目録	ピニオン氏招聘委員会主催英国水彩画展覧会出品目録	物故旧職員略歴																																							
美術懇話会会員名簿	東洋美術国際研究会会員名簿	「美術研究」総目次																																							
「美術研究」図版総目次	「保存科学」総目次	「芸能の科学」総目次																																							
Bulletin of Eastern Art 目次	歴代名誉研究員一覧	職員名簿																																							
【実績値】																																									
【年度決算見込額】	824 千円																																								

【備考】	
------	--

当該事務または事業の実績に関する自己点検評価

1. 定性的評価

観 点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判 定	A	A	A	A	A	
備考						

2. 定量的評価

観 点						
判 定						
備考						

3. 実績の総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	この事業により、当所の歴史のみならず、文化財に関わる諸学の歴史およびその社会的背景に関連する資料を多数収集、整理することができ、それらをもとに当所の歴史を初めて本格的に編纂を進めることができたためAと判定した。

4. 当年度における中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	今後は、編集を続け、平成19年度の刊行を目指すとともに、専門的アーカイブの拡充の一環として、当所史に関わる資料の収集・整理、公開を継続していきたい。

業務実績書

中期計画の項目 (I 3 (1))	文化財関係の情報を収集して積極的に発信するため、ネットワークのセキュリティの強化及び高速化等に対応した情報基盤の整備・充実を図る。また、文化財情報の計画的な主州・整理・保管及びそれらの電子化の推進による文化財に関する専門的アーカイブの拡充を行うとともに、調査研究に基づく成果としてのデータベースの充実を図る。
----------------------	--

【事業名称】	無形文化財に関わる音声・画像・映像資料のデジタル化 (I 3 (1) ②)
--------	---------------------------------------

【事業概要】	無形文化遺産部が所蔵する音声・画像・映像資料のデジタル化。平成18年度からの中期計画では、平成17年度に終了した中期計画の事業案策定後に購入あるいは寄贈を受けたアナログ資料を中心に、これまで収集蓄積してきた分野を補完する資料の媒体転換を重点的に実施する。併せて、既にデジタル化を済ませた音声資料に関しては、インデックス付与を含む整理を推進する。この事業は、将来的には所蔵資料のデータベース公開と音声・画像等の配信をめざすものである。
--------	--

【担当部課】	無形文化遺産部	【事業責任者】	無形文化遺産部長心得 宮田繁幸
【スタッフ】	飯島満、鎌倉恵子、高桑いづみ、俵木悟、佐竹悦子、中司由起子		

【年度実績概要】	<p>2006年度までに受入れ手続きが完了した資料の内、経年変化に伴う音質劣化が懸念されるオープンテープ約800本(4トラック録音約300本を含む)のデジタル化に本格的に着手した。これらは、無形文化遺産部がこれまでに収集蓄積してきた分野を補完する資料を数多く含むものである。</p> <p>今年度は、資料的な価値が高く、なおかつ資料の絶対数が少ない古曲(河東節・一中節・宮園節・荻江節)を中心に268枚のCDを作成した。古曲は1997年に重要無形文化財に指定され保持者の総合認定を受けているが、今回デジタル化した資料は全てが指定以前に録音されたものであり、非常に貴重なものである。古曲のデジタル化は来年度も継続する予定である。また、寺事と近世芸能を中心に、インデックス付与済みCD73枚を作成した。</p> <p>所蔵画像資料のデジタル化については、データベースの作成に着手しており、昨年度は明治期の五代目尾上菊五郎写真の所蔵一覧を公表したが、今年度はそれに引き続き、五代目菊五郎以外の明治大正期の歌舞伎絵はがき・プロマイド1094点の所蔵一覧を作成し、公表した。</p> <p>このほか、無形文化財関連のDVD171枚を登録した。これらは、昭和30年代にさかのぼる映像を含む貴重な使用である。</p>
【実績値】	作成資料 [CD] 341枚 [DVD] 171枚
【年度決算見込額】	3,274千円

【備考】	作成資料一覧
------	--------

当該事務または事業の実績に関する自己点検評価

1. 定性的評価

観 点	適時性	独創性	発展性	継続性		
判 定	A	A	A	A		
備考						

2. 定量的評価

観 点	資料作成数					
判 定	A					
備考						

3. 実績の総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	新たに寄贈された資料を中心に、劣化が懸念される貴重なアナログ資料の媒体変換を行うとともに、デジタル化しただけでは一般の利用には供しがたい音声資料へのインデックス付与も着実に実施している。また、専門の研究者も少なく、現存資料の確認すら十分に行われていない古曲などの分野における資料整理も併せて遂行している。以上の状況を総合的に判断して、Aと判定した。

4. 当年度における中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	事業の進捗は、従来水準を維持するだけでなく、インデックス付与CDに関していえば作成点数はむしろ増えている。また、所蔵資料の内、写真資料については、将来的なデータベース公開へ向けて、所蔵一覧の作成を着実に進めている。

業務実績書

中期計画の項目 (I3(1))	文化財関係の情報を収集して積極的に発信するため、ネットセキュリティの強化及び高速化等に対応した情報基盤の整備・充実を図る。また、文化財情報の計画的収集・整理・保管及びそれらの電子化の推進による文化財に関する専門的アーカイブの拡充を行うとともに、調査研究に基づく成果としてのデータベースの充実を図る。
--------------------	---

【事業名称】	国際資料室の整備 (I3(1)②)
--------	-------------------

<p>【事業概要】</p> <p>本プロジェクトは、国際資料室に配置する外国の文化財や文化財保存修復事業に関する蔵書・資料の質及び量を充実させ、国際文化財保存修復協力センターでの関連の研究や事業に利用するとともに、国内外の関連分野の専門家が閲覧・利用できるようにする。同時に、資料のデータベース化を行い、利用者の便を図る。</p>
--

【担当部課】	文化遺産国際協力センター	【事業責任者】	主任研究員 二神葉子
<p>【スタッフ (法人外のスタッフがいる場合も記入)】</p> <p>青木繁夫、稲葉信子、岡田健、山内和也、朽津信明</p>			

<p>【年度実績概要】</p> <p>1 資料の収集とデータベース化</p> <p>今年度は1,070点(和漢書479点、洋書591点)の資料を収集し、データベース化した。また、データベースについては図書および雑誌検索専用の画面を新たに作成し、国際資料室で公開した。さらに、現在よりも資料へのアクセスを容易にする分類項目について検討を行い、現在の「大陸→国→文化財の種類」という順序の分類から、「大陸→文化財の種類→国」という分類に改めるとともに、文化財の種類による分類も、より現状を反映したものに改めることとした。</p> <p>2 『国際資料室蔵書目録』の作成</p> <p>2007(平成19)年3月に、今年度に国際資料室で受け入れてデータベース化した1,070点(和漢書479点、洋書591点)の資料、および国際資料室で所蔵する雑誌340種類を掲載した『国際資料室蔵書目録』を発行した。</p>
<p>【実績値】</p> <p>目録作成数 1件 (①)</p>
<p>【年度決算見込額】</p> <p>2,875千円</p>

<p>【備考】</p> <p>①『国際資料室蔵書目録』 07.03</p>
--

当該事務または事業の実績に関する自己点検評価

1. 定性的評価

観 点	適時性	発展性	効率性			
判 定	A	A	A			
備考 現在および今後の調査研究業務に必要な資料を収集しており、適時性、発展性がある。また、資料の収集について他プロジェクトの外国での現地調査の機会を利用するなど、効率的に実施している。						

2. 定量的評価

観 点	目録作成数					
判 定	A					
備考						

3. 実績の総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	調査研究業務に必要な資料を効率的に多数収集し、データベース化している。次年度以降、本センターの他事業との連携をいっそう強化し、資料の収集を実施する。

4. 当年度における中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	資料の収集は例年の実績を堅持し、順調に実施することができた。今後もよりいっそうの資料の充実に努めたい。

業務実績書

中期計画の項目 (I-3- (1))	文化財関係の情報を収集して積極的に発信するため、ネットセキュリティの強化及び高速化等に対応した情報基盤の整備・充実を図る。また、文化財情報の計画的収集・整理・保管及びそれらの電子化の推進による文化財に関する専門的アーカイブの拡充を行うとともに、調査研究に基づく成果としてのデータベースの充実を図る。
-----------------------	---

【事業名称】	文化財保存修復国際情報データベース化に関する研究 (I 3 (1) ②)
--------	--------------------------------------

【事業概要】	<p>世界各地の文化財およびその保存修復に関する情報を収集・整理し、調査研究に活用するとともに、関連分野の専門家に対して効果的に発信していくことを目的にデータベースを作成する。</p> <p>また、文化遺産国際協力センターでこれまでに実施してきた事業の成果をデータベース化して公開する。</p> <p>さらに、ウェブサイトを利用してセンターの事業について広報を行う。</p>
--------	---

【担当部課】	文化遺産国際協力センター	【事業責任者】	主任研究員 二神葉子
--------	--------------	---------	------------

【スタッフ】	青木繁夫、稲葉信子、岡田健、山内和也、朽津信明
--------	-------------------------

【年度実績概要】	<p>1 情報の収集とデータベース化</p> <p>本年度は、平成 3 年度から調査研究を実施しているタイ、カンボジアなど東南アジアの遺跡について、過去に撮影したスライドフィルム 2600 点余りなど、画像のデジタル化を行った。また、カンボジアのアンコール遺跡における保存管理計画やタイのスコータイ遺跡の衛星画像をはじめとした関連の文献を収集した。さらに、平成 13 年度から収集を行っている世界各国の文化財保護に関連する法令について、最も多様な文化財を対象とする法律のひとつである日本の文化財保護法で用いられている分類を手がかりとして、各国の法令が対象とする文化財による分類を行い、データベース化を実施した。</p> <p>2 情報の発信</p> <p>出版物の目次をウェブサイトに掲載するとともに、ヨーロッパ諸国の文化財保護制度に関する報告書のうち「イタリアの文化財保護制度の現在」、「オランダ文化財保護制度調査報告」、および「文化財の調査研究および保護に対する GIS の利用」を PDF 化し、一部をウェブサイトで公開した。</p>
【実績値】	報告書 PDF 作成数 3 件
【年度決算見込額】	3,974 千円

【備考】	
------	--

当該事務または事業の実績に関する自己点検評価

1. 定性的評価

観点	適時性	発展性	効率性			
判定	A	A	A			
備考						

2. 定量的評価

観点	PDF作成数	動向ウェブ公開数				
判定	A	A				
備考						

3. 実績の総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	資料の蓄積、調査研究成果の発信を予定通り実施することができた。当該年度は第1年目で準備期間を要したため、「動向」のウェブサイトでの公開は2回行ったが、次年度は回数を増やす予定である。

4. 当年度における中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	資料の蓄積、調査研究成果の発信を順調に実施することができた。 次年度以降も当該年度の水準を維持し、いっそうの資料収集・整理、成果発信を実施していきたい。

中期計画の項目 (I 3 (1))	文化財関係の情報を収集して積極的に発信するため、ネットワークのセキュリティの強化及び高速化等に対応した情報基盤の整備・充実を図る。また、文化財情報の計画的収集・整理・保管及びそれらの電子化の推進による文化財に関する専門的アーカイブの拡充を行うとともに、調査研究に基づく成果としてデータベースの充実を図る。
----------------------	--

【事業名称】	文化財関係資料や図書の収集・整理・公開・提供の充実 (I 3 (1) ③)
--------	---------------------------------------

【事業概要】	文化財に関する資料・図書を計画的に収集・整理し、外部の研究者および一般の利用者に積極的に公開・提供するための方策を検討し、実施する。
--------	--

【担当部課】	管理部文化財情報課	【事業責任者】	課長 山田耕一
--------	-----------	---------	---------

【スタッフ】	太田仁 ほか 5名
--------	-----------

【年度実績概要】	<p>遺跡の発掘調査報告書、歴史的建造物の修理報告書等歴史・考古学分野を中心に図書・逐次刊行物の購入および寄贈による収集・整理を行った。また、発掘調査関係の遺跡、建造物、庭園等の写真の収集、整理を行った。</p> <p>また、資料・図書の公開の一層の推進を図るため、所蔵図書データベースの継続的な公開に加え、国立情報学研究所の目録所在情報サービスに図書の登録を開始した。</p> <p>図書資料室ではカウンタ・アトラス台・利用者検索用パソコンを更新し、利用者の便宜を図っている。また、ホームページ上では所外利用者向けに図書資料室利用についての広報を行っている。</p>
----------	--

【実績値】	<ul style="list-style-type: none"> ・平成18年度受入資料数 購入図書 1,905 冊 寄贈図書 10,589 冊 写真資料 10,822 点 ・目録所在情報作成件数 8,565 件 ・目録所在情報公開件数 325,243 件 ・目録所在情報収録件数 325,243 件 ・一般利用者数 220 人 ・一般利用者利用冊数 1,129 冊 ・直接来館者複写件数 775 件 ・ILLによる複写件数 401 件
-------	---

【年度決算見込額】	26,160千円
-----------	----------

【備考】	
------	--

当該事務または事業の実績に関する自己点検評価

1. 定性的評価

観点	公開性	独創性	効率性	継続性		
判定	A	A	A	A		
備考 公開性：文化財関係資料の所外への公開 独創性：文化財関係資料を重点的に収集 効率性：NACSIS-CATに登録することにより、効率的に検索 継続性：資料の継続的収集、公開						

2. 定量的評価

観点	資料の・図書の 受入数	目録所在情報 作成件数	資料閲覧室等の 利用者数			
判定	A	A	A			
備考 平成17年度受入資料数 購入図書 1,179 冊 寄贈図書 12,950 冊 写真資料 35,528 点						

3. 実績の総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	定性的評価において、Aが4つであり、定量的評価において、Aが3つであり、これらの結果を総合的に判断して、Aと評価した。

4. 当年度における中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	資料・図書の収集・整理については、寄贈資料の比重が高いため多少の変動が生じるのは止むを得ぬところである。文化財資料と云う特定分野の資料室との観点から見た場合、利用者数・複写数とも一定の水準は確保できていると考え、順調と判断した。

業務実績書

中期計画の項目 (I 3 (1))	文化財関係の情報を収集して積極的に発信するため、ネットワークのセキュリティの強化及び高速化等に 対応した情報基盤の整備・充実を図る。また、文化財情報の計画的収集・整理・保管及びそれらの電子化の推進による文化財に関する専門的アーカイブの拡充を行うとともに、調査研究に基づく成果としてデータベース の充実を図る。
----------------------	--

【事業名称】	文化財情報電子化の研究に基づき、データベースの充実 (I 3 (1)③)
--------	--------------------------------------

【事業概要】	文化財情報の電子化及びシステムの構築に関する研究を行い、文化財の特性に対応したシステムによるデータベースの構築 を継続、データの拡充を行う。一般に公開するデータベースへとデータを提供するとともに、内部の業務用データベースのデー タ拡充もあわせて行う。
--------	---

【担当部課】	企画調整部	【事業責任者】	文化財情報研究室長 森本晋
--------	-------	---------	---------------

【スタッフ】	
--------	--

【年度実績概要】	<p>文化財情報の電子化及びシステム構築については、研究会等においてそれらの研究成果を公表するとともに、所外の研究状況について情報を収集し、今後のシステム構築、改良等の検討材料とした。10月には地理情報システム学会大会において「遺構 情報の考古学研究における応用スキーマ・モデル適用のメリット」と題して、遺構情報の分析に関する研究成果を発表した。また、同月に第11回となる遺跡GIS研究会を開催し、メタデータ共有の問題、GISに関する最近の動向、Web-GISや3次元 計測の活用について研究発表が行われた。</p> <p>文化財情報の電子化として、木簡、図書、抄録、写真、遺跡、航空写真等の各データベースにおいて、データの更新ならびに追加入力を行い、データの充実にも努めた。また、業務用のデータベースについては、各担当で作成したデータの追加を行った。なお、データベースへの入力に際しては、事前のデータ整理が必要である。本年度も個々のデータについて広い範囲の文献や参考書目等の調査を行いながらデータの拡充を行った。データベースに関連する大判の資料の電子化のために大型スキャナを新規 導入して資料の入力の効率化を図った。</p> <p>写真データベースの基礎となる写真の電子化に関しては、35mm、ブローニ、4×5、8×10、ガラス乾板、奈文研が発注した空中写真について電子化を継続した。航空写真データベースにおいては、入力の基礎となる原フィルムからのマイクロフィルム作成、マイクロフィルムからの電子画像の作成を継続して行った。</p>
【実績値】	<p>発表件数 2件(①～②)</p> <p>データベースの件数 平成18年度末 () 内は平成17年度末の値</p> <p>木簡150,243 (149,366)、図書325,009 (317,154)、抄録43,829 (35,683)、写真160,020 (148,144)、 遺跡363,876 (349,802)、航空写真1,103,718 (1,090,043)</p>
【年度決算見込額】	50,765千円

【備考】	<p>①地理情報システム学会第15回研究発表大会</p> <p>②第11回遺跡GIS研究会</p>
------	---

当該事務または事業の実績に関する自己点検評価

観 点	継続性	網羅性	最新性	発展性	公開性	
判 定	A	A	A	A	A	
備考						

1. 定性的評価

2. 定量的評価

観 点						
判 定						
備考						

3. 実績の総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	定性的評価においてAが5つであることから総合評価をAにした

4. 当年度における中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	各データベースにおいて、着実にデータの充実が進んでいる。システムの改良を行いつつ、新規入力のみならず、既存データの更新も推進し、全体として当初計画通り進捗しているため、順調と判定した

業務実績書

中期計画の項目 (I3(2))	文化財に関する調査・研究に基づく成果について、定期的な刊行物を平成17年度の実績以上刊行するとともに、公開講演会、現地説明会、国際シンポジウムの開催等により、積極的に公開・提供する。また、研究所の研究・業務等を広報するためホームページの充実を図り、ホームページアクセス件数を前期中期計画期間の年度平均以上確保する。
--------------------	---

【事業名称】	『東京文化財研究所年報』・『東京文化財研究所概要』・『東文研ニュース』の刊行(I3(2)①)
--------	--

【事業概要】	企画情報部では各部・センターの研究成果を外へ発信するために、『年報』『概要』『東文研ニュース』を定期的に刊行し、かつホームページ上でもPDFファイル形式で配信している。また所蔵資料の目録編纂事業は第2期中期計画の中で2冊の刊行を予定している。
--------	---

【担当部課】	企画情報部	【事業責任者】	企画情報部長 三浦定俊
--------	-------	---------	-------------

【スタッフ】	勝木言一郎, 山梨絵美子, 皿井舞, 江村 知子, 城野 誠治, 中村節子, 中村明子, 井上さやか, 鳥光美佳子 (以上、企画情報部)
--------	--

【年度実績概要】	<p>1. 広報企画事業</p> <p>(1) 『年報』</p> <p>プロジェクト研究、科学研究費補助金や受託研究による研究の成果、その他、さまざまな研究会・研修など、昨年度における研究所の活動すべてを網羅して報告した。編集に際しては、『年報』編集委員会の協議を通じ、編集方針を検討するとともに、自己点検評価・外部評価における基礎資料としての役割を果たすべく留意した。第1四半期に刊行された。</p> <p>(2) 『概要』</p> <p>研究所の組織の紹介をはじめ、当該年度のプロジェクトや国際事業、国内事業、出版物などを視覚的にわかりやすく、日英2カ国語で紹介した。編集に際しては、『概要』編集委員会の協議を通じ、編集方針を検討した。第1四半期に刊行された。</p> <p>(3) 『東文研ニュース』</p> <p>研究所の研究活動のうち速報性と公共性の高い記事、文化財研究などを一般向けに解説したコラム、そして刊行物の案内などを四半期ごとに伝えた。各年度4号を刊行する。平成18年度の実績は下記の通りである。</p> <p>No25 全16頁 記事16件 図版23件 コラム1件 No26 全16頁 記事17件 図版30件 コラム1件 No27 全16頁 記事17件 図版27件 コラム2件 No28 全20頁 記事21件 図版32件 コラム2件</p> <p>(4) 広報誌の配布</p> <p>『年報』『概要』『東文研ニュース』は文部科学省・文化庁各部署、国および都道府県の美術館・博物館、そして文化財研究部門をもつ大学図書館に配布した。『概要』は黒田記念館や研究所で一般向けに配布を行った。とくに『東文研ニュース』は従来、研究所の資料閲覧室や黒田記念館で配布していたが、さらに大分県立歴史博物館、九州国立博物館、京都国立博物館、東京芸術大学美術館、東京国立博物館、奈良国立博物館でも一般向けに配布を進めた。</p> <p>(5) パネル展示</p> <p>プロジェクト研究「高精細デジタル画像の応用に関する調査研究」の一環として、出光美術館蔵「伴大納言絵巻」について同館と共同調査を行った。研究成果の一部を公表するため、パネルを製作し、2006年10月18日より研究所1階エントランスホールにおいて展示した。</p> <p>2. 所蔵目録の刊行</p> <p>『東京文化財研究所蔵書目録7 外国語雑誌(韓文・中文・欧文)編』の刊行に向け、データ617件の校正を行った。</p>
----------	---

【実績値】	<p>刊行物数 『東京文化財研究所年報』2005年度版 1,000部 『東京文化財研究所概要』2006年度版 4,000部 『東文研ニュース』第25号・第26号・第27号・第28号 2,000部</p>
-------	---

【年度決算見込額】	11,991千円
-----------	----------

【備考】	<p>『東京文化財研究所年報』2005年度版 2006年5月31日発行 『東京文化財研究所概要』2006年度版 『東文研ニュース』第25号 2006年5月31日発行 『東文研ニュース』第26号 2006年8月31日発行 『東文研ニュース』第27号 2007年11月30日発行 『東文研ニュース』第28号 2007年2月28日発行</p>
------	--

当該事務または事業の実績に関する自己点検評価

1. 定性的評価

観 点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判 定	A	A	A	A	A	A
備考						

2. 定量的評価

観 点	刊行物数					
判 定	A					
備考						

3. 実績の総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	広報企画事業については各広報誌の紙面の内容を見直し、その充実を図った。またそれらの配布先を検討したほか、一般向けへの配布を拡大した。こうした結果、広報企画事業の適時性、独創性、発展性、効率性、継続性、正確性が改善された。一方、所蔵目録については計画通り、データ校正を行い、刊行に向け目途を付けた。その結果、所蔵目録の刊行の適時性、独創性、発展性、効率性、継続性、正確性の確保・向上につながった。したがって実績の総合評価も十分な成果が認められると結論した。

4. 当年度における中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	広報企画事業については各広報誌の紙面の内容を見直し、その充実を図ったこと、そしてそれらの配布先を検討したほか、一般向けへの配布を拡大したことから、東京文化財研究所における広報活動の事業展開が拡充された。一方、所蔵目録については刊行に向け目途が付いたことから、研究所のもつアーカイブ機能を充実させることにつながった。こうした実績から、当年度における中期計画の実施状況は順調であると判断した。

業務実績書

中期計画の項目 (I3(2))	文化財に関する調査・研究に基づく成果について、定期的な刊行物を平成17年度の実績以上刊行するとともに、公開講演会、現地説明会、国際シンポジウムの開催等により、積極的に公開・提供する。また、研究所の研究・業務等を広報するためホームページの充実を図り、ホームページアクセス件数を前期中期計画期間の年度平均以上確保する。
--------------------	---

【事業名称】	「平成17年版 日本美術年鑑」・「美術研究」の刊行 (I3(2)①)
--------	------------------------------------

【事業概要】	各年の美術活動と美術研究、批評の状況を記録するために、昭和11年以来刊行を続けている「日本美術年鑑」を年1冊刊行するとともに、昭和7年1月以来、日本・東洋の古美術、日本の近代・現代美術等に関わる研究論文・図版解説・書評、展覧会評、研究資料、研究ノート等を掲載する「美術研究」を年3冊刊行する。
--------	--

【担当部課】	美術部	【事業責任者】	黒田記念近代現代美術研究室長 田中淳
--------	-----	---------	--------------------

【スタッフ】	中野輝男、綿田稔、塩谷純、津田徹英、小林未央子、田中淳 (以上、美術部)、相沢正彦、青木茂 (以上、美術部客員研究員)、山梨絵美子、勝木言一郎、皿井舞、江村知子 (以上、企画情報部)
--------	---

【年度実績概要】	<p>① 『平成17年版 日本美術年鑑』 2004 (平成16) 年美術界年史、美術展覧会 (企画展、作家展、団体展)、美術文献目録 (定期刊行物所載文献、美術展覧会図録所載文献 (企画展、作家展))、物故者</p> <p>② 『美術研究』389号 (論 文) 明代晩期の宋代官窯青磁鑑賞と「碎器」の流行 謝明良 (矢島律子訳) (論 文) 帝国大学のパブリックアート—青山熊治「九州大学工学部壁画」— 後小路雅弘 (書 評) 吉澤勝弘『白隠—禅画の世界—』 浅井京子 (書 評) 生きている画家、あるいは距離の逆説—田中淳『画家がいる「場所」近代日本美術の基層から』について— 北澤憲昭 (研究資料) 兵庫・法恩寺木造菩薩坐像 津田徹英・皿井舞 (研究資料) 公刊『黒田清輝日記』(下) 臺信祐爾、(同資料解題) 公刊「黒田手紙控え」及び『黒田清輝日記』 田中淳</p> <p>③ 『美術研究』390号 (論 文) 後期印象派・考—一九二二年前後を中心に (下) — 田中 淳 (図版解説) 菊池容斎《観音経巻》 塩谷 純 (図版解説) 黄輔周の舌画—民国期絵画資料— 鶴田武良 (展覧会評) 古密教—日本密教の胎動— 皿井 舞 (展覧会評) アジアのキュビズム—境界なき対話 田中 淳、ソウルの古宮で見るアジアのキュビズム 金 恵信 (書 評) 日本の中国彫刻研究の百年—石松日奈子『北魏仏教造像史の研究』を読む— 肥田路美 (書 評) 荒屋舗透著『グレー＝シュル＝ロワンに架かる橋 黒田清輝・浅井忠とフランス芸術家村』 山梨絵美子</p> <p>④ 『美術研究』391号 (論 文) 追三代於鼎彝之間—宋代の「考古」から「玩古」への展開について— 陳 芳梅 (金立言訳) (論 文) 大徳寺所蔵《水月観音図》の供養人物群像に関する新解釈 朴 銀卿 (金正善訳) (論 文) 『破墨山水図』と宗淵 相澤正彦 (展覧会評) 森鷗外と美術 青木茂、 (研究資料) 善光寺式 阿弥陀如来像ならびに観音菩薩像 津田徹英</p>
【実績値】	『日本美術年鑑』刊行数 1点 (①) 『美術研究』刊行数 3点 (②～④)
【年度決算見込額】	11,753千円

【備考】	<p>① 『平成17年版 日本美術年鑑』東京文化財研究所 07.3 ② 『美術研究』389号 東京文化財研究所 2006.6、③ 『美術研究』390号 2006.12、④ 『美術研究』391号 2007.3</p> <p>各配布先リスト</p>
------	--

当該事務または事業の実績に関する自己点検評価

1. 定性的評価

観 点	適時性	発展性	正確性	継続性		
判 定	A	A	A	A		
備考						

2. 定量的評価

観 点	刊行物件数	配布部数				
判 定	A	A				
備考						

3. 実績の総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	<p>広く文化財、美術史研究の情報を調査収集、データ化した『日本美術年鑑』は、計画通り刊行できた。しかし、情報量の増大にともなう編集作業の増大は、情報のより精査が必要になっている点、及び編集作業の効率化を次年度にむけた改善点としてあげたい。また、『美術研究』においては、研究論文だけではなく、書評、展覧会評、研究ノートなど、将来の研究成果を見据えた萌芽的な研究をも掲載するようにしたことなど、改善がみられ、この点は評価できる。</p>

4. 当年度における中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	<p>中期計画にあげた実施状況は、順調である。『日本美術年鑑』については、情報の調査収集と編集作業の効率化にむけて、あらためて問題点を改善し、次年度にむけて改善したいと考えている。</p>

業務実績書

中期計画の項目 (13 (2))	文化財に関する調査家・研究に基づく成果について、定期的な刊行物を平成17年度の実績以上刊行するとともに、公開講演会、現地説明会、国際シンポジウムの開催灯により、積極的に公開・提供する。また、研究所の研究・業務棟を広報するためホームページの充実を図り、ホームページアクセス件数を前期中期計画の年度平均以上確保する。
---------------------	--

【事業名称】	「無形文化遺産研究報告」・「無形民俗文化財研究協議会報告書」の刊行 (13 (2) ①)
--------	--

【事業概要】	以下の2冊を刊行し、配布した。 ①主として今年度行った無形文化遺産部スタッフの業績に基づいた論考・報告・資料紹介などを内容とする『無形文化遺産研究報告』第1号。 ②平成18年11月22日に当研究所セミナー室で「民俗技術の保護をめぐって」をテーマに、民俗文化財保護行政担当者、無形民俗文化財保存関係者、研究者の参加を得て開催した、第1回無形民俗文化財研究協議会の事例報告・総合討議を内容とする『第1回無形民俗文化財研究協議会報告書』。
--------	--

【担当部課】	無形文化遺産部	【事業責任者】	部長心得 宮田繁幸
【スタッフ】	高桑いづみ、飯島満、俵木悟、鎌倉恵子 (以上、無形文化遺産部) 大島暁雄、深津 (福岡) 裕子、森下愛子、服部比呂美 (以上 客員研究員) 埋忠美沙 (アシスタント)		

【年度実績概要】	『無形文化遺産研究報告』第1号は以下の内容で刊行し、関係者に配布した。 「無形文化遺産保護における国際的枠組み形成」 宮田繁幸、「続・無形文化財の保護をめぐって」 大島暁雄、「無形民俗文化財映像記録の有効な保存・活用のための提言」 俵木悟、「吉田兵次『とやぶれ』」 飯島満、「陶芸技術に関する展覧会から」 森下愛子、「染色文化財の製作技法」 深津裕子、「東京文化財研究所無形文化遺産部所蔵 歌舞伎絵はがき・プロマイド目録」 梅忠美沙、「過渡期の鼓胴その後」 高桑いづみ、「『七夕馬』の技術伝承」 服部比呂美、「[聞き書き] 人形浄瑠璃文楽の鬘・床山の世界」 鎌倉恵子 『第1回無形民俗文化財研究協議会報告書』は以下の内容で刊行し、関係者に配布した。 I序にかえて、II趣旨説明、III報告1『民俗技術』創設の背景と課題 大島暁雄、2「民俗技術保護のための行政的取り組み」文化庁文化財部伝統文化課 菊池健策、3「現存する民俗技術の全校的な動向と問題点」(株)TEM 研究所長 真島俊一、4「上総掘りの技術の伝承活動について」袖ヶ浦市教育委員会 井口崇、5「津軽海峽周辺地域の和船製作技術」青森県立郷土館学芸課 昆政明、IV総合討議、V参考資料、VIアンケート集計結果、VIIあとがき
【実績値】	刊行数 2件 (1) 配布部数 1025部 (『無形文化遺産研究報告』627部、『無形民俗文化財研究協議会報告書』398部) (2)
【年度決算見込額】	1,683千円

【備考】	1 『無形文化遺産研究報告』07.03・『無形民俗文化財研究協議会報告書』07.03 2 配布先リスト
------	--

当該事務または事業の実績に関する自己点検評価

1. 定性的評価

観点	適時性	発展性	継続性			
判定	A	A	A			
備考						

2. 定量的評価

観点	刊行数					
判定	A					
備考						

3. 実績の総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	<p>「無形文化遺産研究報告」：本年度は、研究誌名を左のように改めて第1号を刊行した。これまでの研究誌「芸能の科学」の内容が芸能に関わるものであったのに対して、本誌は芸能の他に、伝統的工芸技術、文化財保存技術、風俗・慣習、民俗技術などを対象としたものになった。これにより今後の無形文化遺産全般の保護行政や、研究に役立つ研究誌としてスタートした。来年度もこの姿勢を貫くことで、日本のみならず、海外の保護行政担当者や研究者にも参考とされる研究誌をめざすこととする。</p> <p>「無形民俗文化財研究協議会報告書」：当研究所でおこなった民俗技術に関する研究協議会の報告書で、会場での研究報告や総合討議の様相を掲載したものである。これまで民俗技術に関する協議会はなされたことは殆どなく、その内容を伝える本誌は民俗技術の保護や研究をめざす人々に寄与することになるであろう。今後もこれまでの研究を踏まえながら、協議会をおこない、報告書の刊行を見る予定である。</p> <p>以上を総合的に判断して、Aと判定した。</p>

4. 当年度における中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	<p>両誌ともに、年度当初の計画通り、年1回の刊行がなされており、目的を順調に達成した。今後もこのペースの維持をめざす。そして「無形文化遺産研究報告」は、内外の無形文化遺産保護行政担当者や研究者の要望を視野に入れた研究誌として、内容の充実を図ることとする。「無形文化財研究協議会報告書」は、今後も協議会の内容を掲載するものとして、刊行を続けてゆくこととなる。</p>

業務実績書

中期計画の項目 (I 3(2))	研究報告書、年報、研究論文集、図録等を12年度の実績以上刊行するとともに、公開講演会、現地説明会、国際シンポジウムの開催等により、積極的に公開・提供する。また、研究所の研究・業務等を広報するためのホームページの充実を図り、ホームページアクセス件数を前期中期計画期間の年度平均以上確保する。
---------------------	--

【事業名称】	『保存科学』46号の出版 (I 3(2)①)
--------	------------------------

【事業概要】	保存科学部・修復技術部・文化遺産国際協力センターで行われた文化財の保存・修復に関する調査・研究に基づく資料の作成・公開を目的とし、年1回研究論文集『保存科学』を刊行する。様々な文化財の科学的調査結果や基礎研究に関する論文、受託研究に関する研究報告・修復処置概報などの活動報告を掲載する。また、より一層の研究成果の公開につとめるため、『保存科学』掲載論文の電子化(画像ファイル化)を行い、最終的にインターネット上での全文掲載による公開を行う。 平成18年度は第46号を発行した。印刷部数 700部。
--------	---

【担当部課】	保存科学部	【事業責任者】	保存科学部長 石崎武志
--------	-------	---------	-------------

【スタッフ】	加藤 寛(修復技術部)、青木 繁夫(文化遺産国際協力センター)、早川 泰弘(保存科学部)
--------	--

【年度実績概要】	保存科学部長、修復技術部長、文化遺産国際協力センター長、東京国立博物館文化財部保存修復課長・神庭信幸氏、東京芸術大学大学院美術研究科教授・稲葉政満氏の5名からなる編集委員会によって、編集を行った。 平成18年度は、33件の研究論文・報告を掲載した『保存科学』第46号を発行した。論文題目を以下に記す。 1. 高松塚古墳石室解体時の空調方法の検討 2. Moisture Characteristic Curves of the Soil of Takamatsuzuka Tumulus 3. 古墳壁面の取り外し片等の保管時に使用する仮止めテープのカビ耐性簡易スクリーニング試験について 4. 浮遊真菌調査を用いた動的な室内環境評価法の検討-特別史跡キトラ古墳仮設保護覆屋をモデルとして- 5. キトラ古墳のバイオフィームから分離されたバクテリア・菌類に対するケソンCG相当品(抗菌剤)の効果 6. 伊藤若冲『動植綵絵』の彩色材料について 7. 武雄鍋島家所蔵皆春齋絵具の材質分析 8. 紫外・可視反射スペクトル法による染料非破壊分析のための基礎研究(3)-染織品を想定した試験片の紫外スペクトル測定- 9. 文化財の透過X線撮影におけるマンモグラフィ用フィルムの特性 10. ガス電子増幅フォイルを用いた文化財のX線透過撮影のための検出器の開発 11. 燻蒸製剤による金属表面の外観変化-評価手法の検討- 12. 大学における学術資料の保管状況とその問題点-東京大学経済学部図書館の事例 13. 旧日向別邸 ブルーノ・タウト『熱海の家』の虫害調査 -フルホンシバンムシ(<i>Gastrallus</i> sp.)による木材の被害例について- 14. 石造建造物の壁面の劣化に関わる水分、塩分分布の測定 15. エコーチップ試験による文化財石材の硬さに関する研究 16. 敦煌莫高窟第285窟壁画の光学調査(1) 17. パーミヤーン遺跡における環境調査(2)-石窟内環境と保存対策- 18. パーミヤーン仏教壁画の材質分析(2)-シンクロトン放射光を用いたN(a)窟における錫箔を用いた技法の分析- 19. パーミヤーン仏教壁画の保存修復(2)-I窟およびN(a)窟における保存修復- 20. 壁画表面の水溶性黒色物質の洗浄-パーミヤーン N(a)窟の事例- 21. 高松塚古墳における菌類等微生物調査報告(平成18年) 22. 高松塚古墳解体時のための観測システム 23. キトラ古墳における菌類等生物調査報告(3) 24. キトラ古墳保護覆屋内の環境について(2)-土壌水分推移と環境管理- 25. 「独々涅槃鳥斯(ドドネウス)草木譜」原本の科学的調査(2) 26. ポータブルマルチLED蛍光分析装置の評価-既存装置との測定結果の比較- 27. 文化財への微生物被害と調査手法-保存科学1号~45号- 28. 文化財の生物被害防除法に関するアンケート集計結果-2005年臭化メチル全廃を迎えて- 29. 臭化メチル製剤の使用停止に伴う文化財の新たな生物被害防除法の情報普及 -博物館美術館等保存担当学芸員研修 研修前アンケートから読む- 30. 静岡県立美術館における温熱環境の測定 31. 文化財公開施設の空気調和設備等の設置状況-保存環境調査から- 32. 重要文化財美術工芸品のGISデータベース構築と今後の課題 33. 展示公開施設の館内環境調査報告-平成17年度-
【実績値】	刊行物刊行数 1件 印刷部数 700部 : 配布部数 577部
【年度決算見込額】	1,427千円

【備考】	1. 『保存科学』第46号、07.3 2. 配布先リスト
------	---------------------------------

当該事務または事業の実績に関する自己点検評価

1. 定性的評価

観 点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判 定	A	A	A	A	A	A
備考						

2. 定量的評価

観 点	発行部数	刊行数				
判 定	A	A				
備考						

3. 実績の総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	報告、報文数は33件、全ページ数も322ページとなり、多くの論文を掲載できた。

4. 当年度における中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	報告、報文の査読および、出版作業を順調に行うことができた。

業務実績書

中期計画の項目 (I 3 (2))	文化財に関する調査・研究に基づく成果について、定期的な刊行物を平成17年度の実績以上刊行するとともに、公開講演会、現地説明会、国際シンポジウムの開催等により、積極的に公開・提供する。また、研究所の研究・業務等を広報するためホームページの充実を図り、ホームページアクセス件数を前期中期計画期間の年度平均以上確保する。
----------------------	---

【事業名称】	第29回文化財の保存・修復に関する国際研究集会報告書の刊行 (I 3 (2) ①)
--------	---

【事業概要】	平成17年度に文化遺産国際協力センターが担当して行った第29回文化財の保存・修復に関する国際研究集会「シルクロードの壁画が語る東西文化交流」の報告書を作成し、刊行する。
--------	--

【担当部課】	文化遺産国際協力センター	【事業責任者】	センター長 青木繁夫
--------	--------------	---------	------------

【スタッフ】	山内和也、谷口陽子、宇野朋子、岩井俊平、岩出まゆ、西山伸一
--------	-------------------------------

【年度実績概要】	<p>下記の通り、平成17年度に文化遺産国際協力センターが担当して行った第29回文化財の保存・修復に関する国際研究集会「シルクロードの壁画が語る東西文化交流」の報告書の日本語版及び英語版を作成し、刊行した。</p> <p>1) 『シルクロードの壁画』第29回文化財の保存および修復に関する国際研究集会「シルクロードの壁画が語る東西文化交流」コロキウム・シンポジウム報告書、独立行政法人文化財研究所東京文化財研究所・文化遺産国際協力センター、2007年3月</p> <p>2) <i>Mural Paintings of the Silk Road: Cultural Exchanges between East and West, Proceedings of the 29th Annual International Symposium on the Conservation and Restoration of Cultural Property, National Research Institute for Cultural Properties, Tokyo, January 2006.</i> The Japan Center for International Cooperation in Conservation, National Research Institute for Cultural Properties, Tokyo, Japan, 2007.</p>
【実績値】	報告書作成：2冊 (①、②)
【年度決算見込額】	3,689千円

【備考】	<p>①『シルクロードの壁画』第29回文化財の保存および修復に関する国際研究集会「シルクロードの壁画が語る東西文化交流」コロキウム・シンポジウム報告書、独立行政法人文化財研究所東京文化財研究所・文化遺産国際協力センター、2007年3月</p> <p>②<i>Mural Paintings of the Silk Road: Cultural Exchanges between East and West, Proceedings of the 29th Annual International Symposium on the Conservation and Restoration of Cultural Property, National Research Institute for Cultural Properties, Tokyo, January 2006.</i> The Japan Center for International Cooperation in Conservation, National Research Institute for Cultural Properties, Tokyo, Japan, 2007.</p>
------	---

当該事務または事業の実績に関する自己点検評価

1. 定性的評価

観 点	適時性	独創性	発展性			
判 定	A	A	A			
備考						

2. 定量的評価

観 点	報告書刊行数	配布件数				
判 定	A	A				
備考						

3. 実績の総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	計画通りに英文日文で二冊刊行できたため、Aと判断した。

4. 当年度における中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	当初の計画通り、今年度分に関しては順調に出版することができた。引き続き、次年度にも刊行していく予定である。

業務実績書

中期計画の項目 (I 3 (2))	文化財に関する調査・研究に基づく成果について、定期的な刊行物を平成17年度の実績以上刊行する。		
【事業名称】	研究報告書、年報、研究論文集、図録等の刊行 (I 3 (2) ①)		
【事業概要】	研究報告書、年報、研究論文集、図録等の刊行		
【担当部課】	奈良文化財研究所	【事業責任者】	所長 田辺征夫
【スタッフ】			
【年度実績概要】	<p>(年報等) 『奈良文化財研究所紀要』2006年6月、3,000部、 『奈良文化財研究所概要』2006年6月、4,500部</p> <p>(ニュース) 『奈文研ニュース』No.21、2006年6月、3,000部、『奈文研ニュース』No.22、2006年9月、3,000部、 『奈文研ニュース』No.23、2006年12月、3,000部、『奈文研ニュース』No.24、2007年3月、3,000部 『埋蔵文化財ニュース』126号、2007年2月、3,500部、 『埋蔵文化財ニュース』127号、2007年3月、3,000部、 『埋蔵文化財ニュース』128号、2007年3月、3,500部、 『埋蔵文化財ニュース』129号、2007年3月、2,800部</p> <p>(研究報告書、研究論文集等) 『都衙周辺寺院の研究』2006年11月、1,000部 『中国古代の銅剣』(奈良文化財研究所学報第75冊)2006年11月、600部 『在地社会と仏教』2006年12月、1,000部 『西大寺食堂院・右京北辺発掘調査報告』2007年3月、600部 『法隆寺若草伽藍跡発掘調査報告』2007年3月、600部 『重要文化財堀内家住宅保存活用計画調査報告書』2007年3月、1,000部 『動物考古学の手引き(英語版)』2007年3月、300部 『ベトナム社会主義共和国ハタイ省ドゥオンラム村集落調査報告書』2007年3月、500部</p> <p>(史料等) 『飛鳥藤原宮発掘調査出土木簡概報(二十)』2006年11月、14,000部 『重要文化財建造物現状変更説明1971-1973(本文編)』2006年12月、500部 『重要文化財建造物現状変更説明1971-1973(図版編)』2006年12月、500部 『国宝・重要文化財写真乾板目録Ⅳ』2007年3月、500部 『黒草紙・新黒双紙』(奈良文化財研究所史料第78冊)2007年3月、500部 『飛鳥藤原京木簡一 一飛鳥池・山田寺木簡一(図版編)』(奈良文化財研究所史料第79冊)2007年3月、600部、 『飛鳥藤原京木簡一 一飛鳥池・山田寺木簡一(解説編)』(奈良文化財研究所史料第79冊)2007年3月、600部 『平城京出土陶硯集成Ⅱ』(奈良文化財研究所史料第80冊)2007年3月、600部</p> <p>(図録、カタログ等) 『飛鳥の金工―海獣葡萄鏡の諸相―』(飛鳥資料館カタログ第16冊)2006年10月、4,000部 『飛鳥の考古学2006』(飛鳥資料館カタログ第17冊)2007年1月、2,000部 『研究図録海獣葡萄鏡』(飛鳥資料館研究図録No.9)2007年3月、600部</p> <p>(パンフレット) 『藤原宮朝堂院東第四堂の調査 飛鳥藤原第142・144次調査現地説明会資料』2006年9月、3,000部 『飛鳥藤原第145次(石神遺跡第19次)発掘調査現地説明会資料』2007年3月、3,000部 『甘樫丘東麓遺跡 現地説明会資料』2007年2月、10,000部 『日中共同 唐大明宮太液池の発掘調査』(速報展資料)2006年5月、10,000部 『奈良の都を掘る 発掘成果展平城2006』(速報展資料)2006年10月、5,000部 『西大寺食堂院・北辺坊の調査』(現地説明会資料)、2006年10月、2,000部 『西大寺食堂院の井戸』(速報展資料)、2006年11月、7,000部</p>		
【実績値】	新聞、雑誌等への寄稿および資料提供件数 2,696件		
【年度決算見込額】	33,987千円		
【備考】			

当該事務または事業の実績に関する自己点検評価

1. 定性的評価

観 点	適時性	継続性	正確性			
判 定	A	A	A			
備考 適時性：調査研究の実施状況 発展性：紀要、ニュース等の継続発行 継続性：調査報告書の調査データ						

2. 定量的評価

観 点	年報刊行数	研究報告書、 研究論文集刊行数	図録、史料等の 刊行数	新聞、雑誌等への寄稿 および情報提供数		
判 定	A	A	A	A		
備考						

3. 実績の総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	定性的評価においてAが3つ、定量的評価においてA4つで、これらを総合的に評価してAと認めたものである。

4. 当年度における中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	年報、ニュース、研究報告書、研究論文集、図録、史料等の刊行は順調に実施してきている。

業務実績書

中期計画の項目 (I3(2))	文化財に関する調査家・研究に基づく成果について、定期的な刊行物を平成17年度の実績以上刊行するとともに、公開講演会、現地説明会、国際シンポジウムの開催灯により、積極的に公開・提供する。また、研究所の研究・業務棟を広報するためホームページの充実を図り、ホームページアクセス件数を前期中期計画の年度平均以上確保する。
--------------------	--

【事業名称】	第30回文化財の保存・修復に関する国際研究集会 (I3(2)②)
--------	----------------------------------

【事業概要】	<p>「第30回文化財の保存及び修復に関する国際研究集会」は、「無形文化遺産の保護—国際的協力と日本の役割—」をテーマとして、無形文化遺産部の担当で開催した。無形文化遺産の保護をめぐる2001年のユネスコによる「人類の口承及び無形遺産の傑作」第1回宣言以来、世界各国において急速にその意識が高まりを見せ、その保護の枠組みも2003年に締結され、2006年4月に発効した「無形文化遺産の保護に関する条約」により整備されつつある。今回の研究集会では、関係する研究機関・保護行政関係者等の異なった立場の内外の参加者が、それぞれの直面している問題点や将来的な展望に関して発表し、情報の共有化を図るとともに、この分野における今後の国際的協力のあり方と日本の役割につき、研究的側面を中心として討議を実施した。</p>
--------	--

【担当部課】	無形文化遺産部	【事業責任者】	無形文化遺産部長心得 宮田繁幸
【スタッフ】	鎌倉恵子、高桑いづみ、飯島満、俵木悟、中司由起子、佐竹悦子		

【年度実績概要】	<p>日時：2007(平成19)年2月14日(水)～16日(金) 会場：東京文化財研究所セミナー室</p> <p><第1日> 開会式 基調講演 日本の無形文化遺産保護と無形文化遺産保護条約 宮田繁幸(東京文化財研究所無形文化遺産部) ユネスコ無形文化遺産保護条約—その採択(2003)から第1回政府間委員会開催(2006.11)まで 愛川紀子(ユネスコ)</p> <p>セッションⅠ：各国の無形文化遺産保護の現状と課題Ⅰ 中国の無形文化遺産保護の国際的重要性 白庚勝(中国 中国民間文芸家協会) 日本の無形文化遺産—古典芸能の伝承と将来 飯島満(東京文化財研究所無形文化遺産部)</p> <p><第2日> セッションⅡ：各国の無形文化遺産保護の現状と課題Ⅱ 無形文化遺産の保護と人間文化財：経験と挑戦 イム・ドンヒ(韓国 東国大学) 日本における「無形文化財」の保護の現状と課題—工芸技術を中心として— 佐々木正直(文化庁伝統文化課) インドネシアの無形文化遺産の保護：システム、計画、活動と問題 ガウラ・マンチャチャリタディブラ(インドネシア 文化専門家)</p> <p>セッションⅢ：各国の無形文化遺産保護の現状と課題Ⅲ 日本の無形民俗文化財の保護 菊池健策(文化庁伝統文化課) フィリピン：無形文化遺産の保護について ヘスス・ペラルタ(フィリピン 国家文化芸術委員会) 近年のヴェトナムにおける無形文化遺産の保護とコミュニティの関与 グウェン・キム・ドゥン(ヴェトナム 文化情報省文化遺産部)</p> <p>セッションⅣ：国際的協力における日本の経験 伝統芸能の保護と映像記録の役割 福岡正太(国立民族学博物館) 無形文化遺産とコミュニティのキャパシティビルディング 大貫美佐子(財団法人ユネスコ・アジア文化センター) 東京文化財研究所の無形文化遺産保護のための取り組み 俵木悟(東京文化財研究所無形文化遺産部)</p> <p><第3日> 総合討議</p>
【実績値】	<p>1 参加者数 90名 2 参加者満足度 100%</p>
【年度決算見込額】	4,920千円

【備考】	<p>1 参加者名簿 2 参加者アンケートまとめ</p>
------	----------------------------------

当該事務または事業の実績に関する自己点検評価

1. 定性的評価

観 点	適時性	独自性	発展性	効率性		
判 定	A	A	A	A		
備考						

2. 定量的評価

観 点	参加者数	満足度				
判 定	A	A				
備考						

3. 実績の総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	無形文化遺産保護条約が発効したことを受けて開催した本研究集会は、内外の参加者からの有意義の発表と討論により、今後の無形文化遺産保護をめぐる国際的な取り組みにとって、一定の方向性を提示することが出来た。また海外の参加者との交流を通じて、今後の研究協力体制の基礎を構築できた。参加者からも有意義であったとの評価を得ており、以上の状況を総合的に判断して、Aと判定した。

4. 当年度における中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	本研究集会は、年度当初の計画通り順調に実施できたと考える。

業務実績書

中期計画の項目 (I3②)	文化財に関する調査・研究に基づく成果について、定期的な刊行物を平成17年度の実績以上刊行するとともに、公開講演会、現地説明会、国際シンポジウムの開催等により、積極的に公開・提供する。また、研究所の研究・業務等を広報するためホームページの充実をはかり、ホームページアクセス件数を前期中期計画期間の年度平均以上確保する。
------------------	--

【事業名称】	平成18年度美術部オープンレクチャー (I3(2)②)
--------	-----------------------------

【事業概要】	美術史研究の成果を一般に公表することを目的とする。
--------	---------------------------

【担当部課】	美術部	【事業責任者】	美術部長 中野照男
--------	-----	---------	-----------

【スタッフ】	田中淳、津田徹英、塩谷純、綿田稔、小林未央子 (以上、美術部) 山梨絵美子、勝木言一郎、皿井舞、江村知子 (以上、企画情報部)
--------	--

【年度実績概要】	<p>美術部では、研究成果を広く公表するために公開学術講座「美術部オープンレクチャー」を毎年秋に開催しており、本年度で40回を迎えた。昨年度同様、今年度も金曜日と土曜日の午後、2日連続で開催し、聴講者の便宜を図るよう努めた。今回は「人とモノの力学」をテーマに掲げた。個々の講演内容は以下の通りである。なお、この講座は、上野の山文化ゾーン連絡協議会が主催して毎年秋に開く「上野の山文化ゾーンフェスティバル」の講演会シリーズのプログラムとしても企画されている。</p> <p>2日間で約239人の参加があり、参加者にアンケートを実施したところ、211人から回答を得た(回収率88%)。結果は、「たいへん満足した」81人、「おおむね満足した」103人、「不満が残った」12人、無回答15人を数え、回答者の87%が満足感を得たことがわかる。</p> <p>第1日：2006(平成18)年10月27日(金)午後1:30～4:30 於東京文化財研究所・地階セミナー室 皿井舞(企画情報部)「10世紀の造寺造仏」 瀬谷貴之(神奈川県立金沢文庫学芸員)「奈良・興福寺の造像と凶像継承」</p> <p>第2日：2006(平成18)年10月28日(土)午後1:30～4:30 於東京文化財研究所・地階セミナー室 綿田稔(美術部)「雪舟と宗湛」 五十嵐公一(兵庫県立歴史博物館学芸員)「本朝画史の情報と成立」</p>
【実績値】	<p>参加者数 239人 満足度 87%(回収率88%)</p>
【年度決算見込額】	461千円

【備考】	アンケート集計表
------	----------

当該事務または事業の実績に関する自己点検評価

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	継続性		
判定	A	A	A	A		
備考						

2. 定量的評価

観点	参加者数	満足度				
判定	A	A				
備考						

3. 実績の総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等					
A	文化財に関する調査・研究に基づく成果・新知見を、時宜に適応しながら、公表することができ、その参加者数も満足度も目標値を満たしたので、Aと判断した。					

4. 当年度における中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等					
順調	当初の計画通り、進捗した。次年度以降も文化財に関する調査・研究に基づく成果・新知見を、公開講演というかたちで開催していきたい。					

業務実績書

中期計画の項目 (I 3 (2))	文化財に関する調査・研究に基づく成果について、定期的な刊行物を平成17年度の実績以上刊行するとともに、公開講演会、現地説明会、国際シンポジウムの開催等により、積極的に公開・提供する。また、研究所の研究・業務等を広報するためホームページの充実を図り、ホームページアクセス件数を前期中期計画期間の年度平均以上確保する。		
【事業名称】	公開講演会、現地説明会、国際シンポジウムの開催等 (I 3 (2) ②)		
【事業概要】	文化財に関する調査・研究に基づく成果について、公開講演会、現地説明会、国際シンポジウムの開催等により、積極的に公開・提供する。		
【担当部課】	管理部文化財情報課、管理部業務課	【事業責任者】	文化財情報課長 山田耕一、業務課長 佐藤敏明
【スタッフ】	永田裕美、桑原隆佳、今西康益、飯田信男、石田義則、井手真二		
【年度実績概要】	<p>I 公開講演会等</p> <p>1. 第98回公開講演会 平成18年6月17日(土) 参加者数 200人 演題・講演者 「キトラと高松塚について」 奈良文化財研究所長 田辺征夫 「唐代宮殿の風景」 都城発掘調査部 今井晃樹 「遺跡からの情報発信」 都城発掘調査部 金井 健 アンケート結果=回収数131人・回収率65.5%：満足度A=126人(96.2%)/B=5人(3.8%)/C=0人(0%)</p> <p>2. 第99回公開講演会 平成18年10月28日(土) 参加者数 165人 演題・講演者 「遺跡の現地保存を考える」 奈良文化財研究所長 田辺征夫 「明治・大正・昭和の住まいと文化財」 都城発掘調査部 西田紀子 「木簡調査の100年—全国出土木簡の追跡から」 都城発掘調査部 山本 崇 アンケート結果=回収数98人・回収率59.4%：満足度A=94人(95.9%)/B=4人(4.1%)/C=0人(0%)</p> <p>3. 飛鳥資料館特別講演会 平成18年10月21日(土) 参加者数 58人 演題・講演者 「海獣葡萄鏡について」 学芸室長 杉山 洋 アンケート結果=回収数39人・回収率67.3%：満足度A=39人(100%)/B=0人(0%)/C=0人(0%)</p> <p>4. 飛鳥資料館特別講演会 平成18年10月28日(土) 参加者数 29人 演題・講演者 「伯牙彈琴鏡—唐と日本で好まれた鏡—」 國學院大學日本文化研究所共同 研究員 植松勇介 アンケート結果=回収数24人・回収率82.8%：満足度A=24人(100%)/B=0人(0%)/C=0人(0%)</p> <p>5. 飛鳥資料館特別講演会 平成19年2月3日(土) 参加者数 266人 演題・講演者 「飛鳥の考古学2006—発掘された蘇我氏の飛鳥—」 明日香村教育委員会 相原嘉之 アンケート結果=回収数158人・回収率59.4%：満足度A=157人(99.4%)/B=0人(0%)/C=1人(0.6%)</p> <p>II 発掘調査現地説明会等</p> <p>1. 平城第404次(西大寺旧境内)発掘調査 ※現場一般公開 平成18年6月30日(金) 参加者数 600人 発表者 馬場 基 調査面積 1,762㎡</p> <p>2. 飛鳥藤原第142・144次(藤原宮朝堂院第四堂)発掘調査 平成18年9月30日(土) 参加者数 515人 発表者 中川あや 調査面積 2,024㎡ アンケート結果=回収数206人・回収率40.0%：満足度A=105人(51.0%)/B=97人(47.1%)/C=4人(1.9%)</p> <p>3. 平城第404・410次(西大寺旧境内)発掘調査 平成18年10月7日(土) 参加者数 900人 発表者 馬場 基 調査面積 1,775㎡ アンケート結果=回収数293人・回収率32.5%：満足度A=170人(58.0%)/B=118人(40.3%)/C=5人(1.7%)</p> <p>4. 飛鳥寺講堂 ※現場公開 平成18年11月14(火)～16日(木) 参加者数 2,077人 発表者 玉田芳英 調査面積 55㎡</p> <p>5. 平城第401次(東院地区)発掘調査 平成18年12月9日(土) 参加者数 445人 発表者 和田一之輔 調査面積 1,711㎡ アンケート結果=回収数101人・回収率22.7%：満足度A=61人(60.4%)/B=39人(38.6%)/C=1人(1.0%)</p> <p>6. 飛鳥藤原第146次(甘樫丘東麓遺跡)発掘調査 ※現地見学会 平成19年2月11日(日) 参加者数 5,015人 発表者 西田紀子 調査面積 916㎡</p> <p>7. 平城第406次(第二次大極殿東院東方官衙地区)発掘調査 平成19年3月24日(土) 参加者数 450人 発表者 栗野 隆 調査面積 1,296㎡ アンケート結果=回収数120人・回収率26.7%：満足度A=84人(70.0%)/B=36人(30.0%)/C=0人(0.0%)</p> <p>8. 飛鳥藤原第145次(石神遺跡第19次)発掘調査 平成19年3月31日(土) 参加者数 1,153人 発表者 小田裕樹 調査面積 870㎡ アンケート結果=回収数239人・回収率20.7%：満足度A=161人(67.4%)/B=76人(31.8%)/C=2人(0.8%)</p>		
【実績値】	<p>I 公開講演会等 年5回：参加者延数718人 回収数450人・回収率62.7%： A大変満足である：440人(97.8%)/Bおおよそ満足である：9人(2.0%)/Cあまり満足でない：1人(0.2%)</p> <p>II 発掘調査現地説明会等 年8回：参加者延数11,155人 内アンケート実施回数5回：参加者延数3,463人 回収数959人・回収率27.7%： A大変満足である：581人(60.6%)/Bおおよそ満足である：366人(38.2%)/Cあまり満足でない：12人(1.2%)</p>		
【年度決算見込額】	1,223千円		
【備考】			

当該事務または事業の実績に関する自己点検評価

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	継続性		
判定	A	A	A	A		
備考 適時性：発掘調査等研究成果の適時適切な公開 独創性：公開内容の新規性及び卓越性 発展性：遺跡等の重要性の確認と社会への影響性 継続性：研究成果の継続的な社会還元						

2. 定量的評価

観点	開催回数	参加者数	参加者満足度			
判定	A	A	A			
備考 開催回数 公開講演会：年4回、現地説明会：年4回 参加者数 公開講演会：年延350人以上、現地説明会：年延3,000人以上 参加者満足度 公開講演会・現地説明会：80%以上						

3. 実績の総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	定性的評価においてAが4つ、定量的評価においてAが3つであり、これらの結果を総合的に判断して、Aと認めたものである。

4. 当年度における中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	公開講演会、現地説明会の開催事業は、開催回数、参加者数ともに、従来水準を維持し、順調に実施できたと考える。今後もこのペースを維持しつつ、調査研究の成果に基づく講演、現地説明会等の内容及び配布資料の充実、アンケート調査による参加者ニーズの把握等に力を注ぎ、さらに参加者数の増加と満足度の向上に努めたい。

業務実績書

中期計画の項目 (I3(2))	文化財に関する調査・研究に基づく成果について、定期的な刊行物を平成17年度の実績以上刊行するとともに、公開講演会、現地説明会、国際シンポジウムの開催等により、積極的に公開・提供する。また、研究所の研究・業務等を広報するためホームページの充実を図り、ホームページアクセス件数を前期中期計画期間の年度平均以上確保する。
--------------------	---

【事業名称】	ホームページの運用(I3(2)③)
--------	-------------------

【事業概要】	研究所の研究・業務などの広報活動の一環として、ホームページの運用を充実させる。
--------	---

【担当部課】	企画情報部	【事業責任者】	情報システム研究室長 勝木言一郎
--------	-------	---------	------------------

【スタッフ】	江村知子, 中村明子 (以上企画情報部), 菊地昌弘, 横山隆史 (以上管理部 LAN 委員), 綿田稔 (美術部 LAN 委員), 俵木悟 (無形文化財部 LAN 委員), 吉田直人 (保存科学部 LAN 委員), 加藤雅人 (修復技術部 LAN 委員), 二神葉子 (文化遺産国際協力センター LAN 委員)
--------	--

【年度実績概要】	<p>1. ホームページの運用</p> <p>ホームページは研究所の広報活動の一翼を担うメディアであるとともに、文化財研究のデジタル・アーカイブとして情報発信の機能を果たす。例えば黒田記念館のページでは、日記・書簡・自筆文献・白馬会関係資料などの黒田清輝研究に必要なデータベースを公開するとともに、近年、黒田清輝作品に対して行った光学的調査・研究の成果の一部をデジタルコンテンツとして提供するなど、単なる黒田清輝作品の紹介にとどまらない、多角的な情報発信を行った。なお、各部・センターのページは自主的に更新されている。</p> <p>平成18年度のホームページアクセス件数は1,355,306件に達し、平成17年度に比べ、約50万件増加した。</p>
【実績値】	ホームページアクセス件数：1,355,306件
【年度決算見込額】	20,638千円 (No.54との合算額)

【備考】	
------	--

当該事務または事業の実績に関する自己点検評価

1. 定性的評価

観 点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判 定	A	A	A	A	A	A
備考						

2. 定量的評価

観 点	ホームページアク セス件数					
判 定	A					
備考						

3. 実績の総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	ホームページの運用については、ホームページアクセス件数の飛躍的な増加が適時性、独創性、発展性、効率性、継続性、正確性の向上を裏付ける結果だと判断した。したがって実績の総合評価も十分な成果が認められると結論した。

4. 当年度における中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	ホームページの運用については、ホームページが研究所の広報活動の一翼を担うとともに、かつ文化財研究のデジタル・アーカイブとして多角的な情報発信を行ってきたことがホームページアクセス件数の飛躍的な増加に結びついた。こうした実績から、当年度における中期計画の実施状況は順調であると判断した。

中期計画の項目 (I 3 (2))	文化財に関する調査・研究に基づく成果について、定期的な刊行物を平成17年度の実績以上刊行するとともに、公開講演会、現地説明会、国際シンポジウムの開催等により、積極的に公開・提供する。また、研究所の研究・業務等を広報するためホームページの充実を図り、ホームページアクセス件数を前期中期計画期間の年度平均以上確保する。
----------------------	---

【事業名称】	ホームページアクセス件数の前期中期計画期間の年度平均以上の確保 (I 3 (2) ③)
--------	---

【事業概要】	研究所の事業・研究成果をはじめ、施設・案内など様々な広報をしているホームページであり、常に拡充を図っている。社会への広報の目安となるアクセス件数を把握し、より一層の情報提供に務めるものである。
--------	--

【担当部課】	管理部文化財情報課	【事業責任者】	課長 山田耕一
--------	-----------	---------	---------

【スタッフ】	太田仁ほか 1名
--------	----------

【年度実績概要】	<p>ホームページのアクセシビリティについて再検討を行ない、音声ファイルを追加する事によって目の不自由な方々に配慮したページ構成とした。</p> <p>キトラ情報専用サーバの新設、携帯サイトをはじめとする新しいコンテンツの追加・更新によってコンスタントに高いアクセス件数が維持できている。</p> <p>独立行政法人文化財研究所のホームページにおいても法人情報提供のため、継続的に中期目標、中期計画、規程等の情報提供を行うとともに、法人文書の公開の実施にともない文書ファイル管理簿をホームページ上で公開した。</p>
----------	--

【実績値】	<p>ホームページアクセス件数</p> <table> <tr> <td>独立行政法人文化財研究所</td> <td>306,213 件</td> </tr> <tr> <td>奈良文化財研究所</td> <td>1,033,457 件</td> </tr> </table>	独立行政法人文化財研究所	306,213 件	奈良文化財研究所	1,033,457 件
独立行政法人文化財研究所	306,213 件				
奈良文化財研究所	1,033,457 件				

【年度決算見込額】	2,713 千円 (No.5 5 39,746千円の内)
-----------	------------------------------

【備考】	
------	--

当該事務または事業の実績に関する自己点検評価

1. 定性的評価

観点	公開性	効率性	継続性	適時性		
判定	A	A	A	A		
備考 公開性：インターネット経由によるデータベースを含む文化財情報を公開 効率性：アクセシビリティを重視した文化財情報への効率的なアクセスを提供 継続性：データベース及びホームページの情報を拡充 適時性：即時更新により最新の文化財情報を提供						

2. 定量的評価

観点	ホームページ アクセス件数					
判定	A					
備考 前中期計画中の平均ホームページアクセス件数 368,000 件						

3. 実績の総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	定性的評価において、Aが4つであり、定量的評価において、Aが1つであり、これらの結果を総合的に判断して、Aと認めたものである。

4. 当年度における中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	情報を改竄される事なく順調に運営できた。 引き続きコンテンツを追加して最新の文化財情報を提供する。

業務実績書

中期計画の項目 (I 3 (3))	黒田記念館、平城宮跡資料館、藤原宮跡資料室、飛鳥資料館については、研究成果の公開施設としての「役割を強化する観点から展示を充実させ、調査・研究成果の内容を広く一般に理解を深めてもらうことに資する。入館者数については、前期中期計画期間の年度平均以上確保する。
----------------------	--

【事業名称】	黒田記念館における作品の展示公開 (I 3 (3))
--------	----------------------------

【事業概要】	黒田清輝の作品を多数所蔵している当研究所は、黒田清輝の芸術を顕彰するために黒田記念館において作品を公開するとともに、地方文化の振興に資するために、昭和52年からの事業として「近代日本洋画の巨匠 黒田清輝」展を年1回地方において共催している。また、同じ目的から、当研究所の所蔵作品を他機関に貸与し、展覧会の企画、運営に協力している。
--------	---

【担当部課】	美術部	【事業責任者】	黒田記念近代現代美術研究室長 田中淳
--------	-----	---------	--------------------

【スタッフ】	塩谷純、小林未央子 (以上、美術部)
--------	--------------------

【年度実績概要】	<p>①「特集展示 黒田清輝の素描作品」：記念館2階の一室を会場に、黒田記念館が所蔵する木炭素描288点から優品を選び、前期、後期にわけて特集展示を行なった(会期：2006年9月7日から07年3月31日まで)。</p> <p>②黒田記念館における作品の展示公開：毎週木・土曜日の午後1時から4時まで、無料で一般公開した。また、上野の山文化ゾーンフェスティバルの期間中、2006年10月30日から11月5日まで、特別公開を行った。</p> <p>総入館者数 20,975人(平成16年4月1日から平成16年3月31日まで)、公開日数：延91日、一日平均：230人</p> <p>③2007年2月15日から3月17日まで、来館者にアンケートを実施した。2,169人の来館者に対して、578人から回答を得た(来館者数の26.6%)。回答は、「満足した」及び「おおむね満足した」が99.9%、「不満が残った」が1人であり、アンケート回答の99%が満足感を得たことになる。</p> <p>④平成18年度共催展：豊田市美術館を会場に、2006年7月15日(土)から8月27日(日)まで開催した。開催日数は延38日間で、その間の入場者は、16,598人であった。陳列品は、油彩・パステル画85点、素描62点、写生帖17冊、書簡4通、日記5冊、参考出品2点、記録写真16点。図録は、A4版変形、182ページ。なお会期中の平成17年7月24日(日)に、会場出口において来館者にアンケート調査を実施し、209人から回答を得た。(入館者数462人に対して、回収率45.2%)。「良かった」、「普通」の回答が、98.5%をしめた。</p> <p>⑤所蔵作品の貸与：(5件14点貸与)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「二世五姓田芳柳と近代洋画の系譜」展/会場：明治神宮文化館宝物展示室/会期：平成18年5月27日から7月2日/作品名：黒田清輝「《昔語り》の僧侶」(油彩画)、同「明治天皇殯宮の図」(素描)、以上2点 ・「森鴎外と美術」展/会場：和歌山県立近代美術館・静岡県立美術館/会期：和歌山会場・平成18年9月10日から10月22日/静岡会場・平成18年11月7日から12月17日/作品名：黒田清輝「編物」(油彩画)、同「昼寝」(油彩画)、同「昔語り下絵(構図Ⅱ)」(油彩画)、同「昔語り(舞妓)」(油彩画)、同「智・感・情」(油彩画)、以上7点 ・「日本近代洋画への道」展/会場：松本市美術館/会期：平成18年11月3日から平成19年1月8日/作品名：黒田清輝「花野」(油彩画)、同「裸体・男(半身)」(油彩画)、以上2点 ・「揺らぐ近代 日本画と洋画のはざまに」展/会場：東京国立近代美術館、京都国立近代美術館/会期：東京会場・平成18年11月7日から12月24日/京都会場 平成19年1月10日から平成19年2月25日/作品名：黒田清輝「湖畔」(油彩画)、以上1点 ・「時代と美術の多面体」展/会場：神奈川県立近代美術館葉山/会期：平成19年1月13日から同年3月25日/作品名：黒田清輝「もるる日影」(油彩画)、同「風景(富士遠望)」(油彩画)、以上2点
【実績値】	<p>黒田記念館入館者数：20,975人 入館者の満足度：99%</p> <p>共催展：入場者数 16,598人、入場者の満足度：96.5%</p> <p>作品貸与数：5件14点</p>
【年度決算見込額】	5,917千円

【備考】	<p>黒田記念館 アンケート、同集計表</p> <p>「特集展示 黒田清輝の素描作品」のための入館者配布用解説パンフレット</p> <p>共催展 アンケート集計表</p>
------	---

当該事務または事業の実績に関する自己点検評価

1. 定性的評価

観 点	適時性	発展性	継続性	正確性		
判 定	A	A	A	A		
備考						

2. 定量的評価

観 点	黒田記念館 入館者数	同記念館入館者 満足度	共催展入場者数	同入場者 満足度	作品貸与数	
判 定	A	A	A	A	A	
備考						

3. 実績の総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	黒田記念館における公開、共催展開催、作品の貸与等、いずれも評価できる内容であった。黒田記念館においては、今年度、特集展示として「黒田清輝の素描作品」を催した。これは、作品公開の促進としてのみならず、研究成果の一般への公開として高く評価できるものとする。次年度の計画においても、このような特集展示を研究成果の公開と位置づけ、より充実したものにしていきたいと考える。

4. 当年度における中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	中期計画通り、進捗したと考える。ただし、今年度は、作品貸与数が急増しており、この点は、各美術館等の展覧会への積極的な協力と作品の公開促進をはかりつつ、作品の保存にも留意して、精査しながら対応したい。

業務実績書

中期計画の項目 (I 3 (3))	黒田記念館、平城宮跡資料館、藤原宮跡資料室、飛鳥資料館については、研究成果の公開施設としての役割を強化する観点から展示を充実させ、調査・研究成果の内容を広く一般に理解を深めてもらうことに資する。入館者数については、前期中期計画期間の年度平均以上確保する。
----------------------	---

【事業名称】	平城宮跡資料館における展示・公開(I 3 (3))
--------	---------------------------

【事業概要】	平城宮跡資料館において、常設展、速報展などを実施した。
--------	-----------------------------

【担当部課】	企画調整部	【事業責任者】	部長 岡村道雄
--------	-------	---------	---------

【スタッフ】	千田剛道、永田裕美、桑原隆佳
--------	----------------

【年度実績概要】																																						
<p>展示：</p> <p>平城宮跡資料館において、常設展、速報展を開催した。常設展は通年開催し、速報展は、以下の3件開催した。</p> <p>「日中共同 唐長安城大明宮太液池の発掘調査」パネル展 (2006.5.27～12.27)</p> <p>奈良文化財研究所と中国社会科学院考古研究所と共同でおこなっている調査の成果を紹介したもの。</p> <p>「奈良の都を掘る 発掘成果展 平城2006」(2006.10 ～12.27)</p> <p>都城発掘調査部が2005年度に実施した平城宮、平城京における発掘調査を紹介したもの。</p> <p>写真パネル、図面のほか、出土遺物約30点を展示した。展示した遺跡は、平城宮では、中央区朝堂院(平城第389次)、朝集殿院(平城394次)、平城京では、旧大乘院庭園(平城第390次)「西大寺食堂院の井戸」(2006.11.20～)</p> <p>都城発掘調査部が実施した西大寺食堂院の発掘で井戸から出土した木簡、土器、木製品、種子など約30点を展示した。</p> <p>アンケート：</p> <p>平城宮跡資料館において入館者に対するアンケート調査をおこなった。</p> <p>アンケート実施期間 2006年10.31～12.27</p> <p>アンケート回収率</p> <table border="1"> <tr> <td>入館者数</td> <td>回収数</td> <td>回収率</td> </tr> <tr> <td>13,411</td> <td>939</td> <td>7.00 %</td> </tr> </table> <p>常設展に対する満足度</p> <table border="1"> <tr> <td>入館者数</td> <td>回収数</td> <td>回収率</td> <td>普通以上</td> <td>満足度</td> </tr> <tr> <td>13,411</td> <td>924</td> <td>7.00%</td> <td>910</td> <td>98.5%</td> </tr> </table> <p>詳細： とても良い かなり良い 普通 あまり良くない まったく良くない 無回答</p> <table border="1"> <tr> <td>356(37.9%)</td> <td>369(39.3%)</td> <td>185(19.7%)</td> <td>8(0.9%)</td> <td>6(0.6%)</td> <td>6(1.6%)</td> </tr> </table> <p>「奈良の都を掘る 発掘成果展—平城2006—」に対する満足度</p> <table border="1"> <tr> <td>入館者数</td> <td>回収数</td> <td>回収率</td> <td>普通以上</td> <td>満足度</td> </tr> <tr> <td>13,411</td> <td>939</td> <td>7.00%</td> <td>893</td> <td>98.1%</td> </tr> </table> <p>詳細： とても良い かなり良い 普通 あまり良くない まったく良くない 無回答</p> <table border="1"> <tr> <td>329(35.0%)</td> <td>345(36.7%)</td> <td>219(23.3%)</td> <td>8(0.9%)</td> <td>9(1.0%)</td> <td>29(3.1%)</td> </tr> </table>	入館者数	回収数	回収率	13,411	939	7.00 %	入館者数	回収数	回収率	普通以上	満足度	13,411	924	7.00%	910	98.5%	356(37.9%)	369(39.3%)	185(19.7%)	8(0.9%)	6(0.6%)	6(1.6%)	入館者数	回収数	回収率	普通以上	満足度	13,411	939	7.00%	893	98.1%	329(35.0%)	345(36.7%)	219(23.3%)	8(0.9%)	9(1.0%)	29(3.1%)
入館者数	回収数	回収率																																				
13,411	939	7.00 %																																				
入館者数	回収数	回収率	普通以上	満足度																																		
13,411	924	7.00%	910	98.5%																																		
356(37.9%)	369(39.3%)	185(19.7%)	8(0.9%)	6(0.6%)	6(1.6%)																																	
入館者数	回収数	回収率	普通以上	満足度																																		
13,411	939	7.00%	893	98.1%																																		
329(35.0%)	345(36.7%)	219(23.3%)	8(0.9%)	9(1.0%)	29(3.1%)																																	
【実績値】																																						
<table border="1"> <tr> <td>平成18年度の入館者数</td> <td>入館者の満足度</td> <td>公開日数</td> <td>展示品貸し出し件数</td> </tr> <tr> <td>77,560人</td> <td>98.5%</td> <td>308日</td> <td>17件</td> </tr> </table>	平成18年度の入館者数	入館者の満足度	公開日数	展示品貸し出し件数	77,560人	98.5%	308日	17件																														
平成18年度の入館者数	入館者の満足度	公開日数	展示品貸し出し件数																																			
77,560人	98.5%	308日	17件																																			
【年度決算見込額】																																						
3,520千円																																						

【備考】
<p>展示に因んで、パンフレットを作成した。</p> <p>『日中共同 唐長安城大明宮太液池の発掘調査』 2006.5</p> <p>『奈良の都を掘る 発掘成果展 平城2006』 2006.10</p> <p>『西大寺食堂院の井戸』(速報展資料) 2006.11</p>

当該事務または事業の実績に関する自己点検評価

観 点	適時性	発展性	継続性			
判 定	A	A	A			
備考 適時性：調査研究成果をアピール 発展性：平城宮・平城京発掘成果 継続性：速報展の恒例化						

1. 定性的評価

2. 定量的評価

観 点	入館者数	入館者の満足度				
判 定	A	A				
備考 年間目標入館者数 平城宮跡資料館 72,500名						

3. 実績の総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	定性的評価がAが3つ、定量的評価でAが2つで、これらを総合的に評価してAと認めたものである。

4. 当年度における中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	常設展、速報展を順調に実施できた。とくに、速報展では、中国との共同研究の長安城太液池の成果を展示できたこと「奈良の都を掘る」では、昨年度実施の調査の現地説明会以後の成果をまとめて紹介できたこと、「西大寺食堂院の井戸」の速報展では、記者発表直後に出土木簡の現物のほか、食料になった種子類などを見ていただけたこと も好評であった。今後も継続的な調査研究の進展に応じた展示公開の充実に努力したい。

業務実績書

中期計画の項目 (I3(3))	黒田記念館、平城宮跡資料館、藤原宮跡資料室、飛鳥資料館については、研究成果の公開施設としての役割を強化する観点から展示を充実させ、調査・研究成果の内容を広く一般に理解を深めてもらうことに資する。入館者数については、前期中期計画期間の年度平均以上確保する。
--------------------	---

【事業名称】	飛鳥資料館における常設展示の充実と特別展示の開催
--------	--------------------------

【事業概要】	<p>特別展の実施：春期特別展示「キトラ古墳と発掘された壁画たち」平成18年4月14日～6月25日 秋期特別展示「飛鳥の金工」平成18年10月14日～11月26日 企画展の実施：夏期企画展示「東アジアの十二支像」平成18年8月1日～9月3日 ；冬期企画展示「発掘調査速報展」平成19年1月16日～2月25日 山田寺出土展示部材の経年変化の計測研究 アジア史の中の飛鳥文化の研究として飛鳥地方壁画古墳の研究 飛鳥時代の工芸技術の研究として飛鳥・奈良時代の金工品の研究</p>
--------	--

【担当部課】	飛鳥資料館	【事業責任者】	学芸室長：杉山洋
【スタッフ】	加藤真二、清永洋平		

【年度実績概要】	<p>春期特別展示「キトラ古墳と発掘された壁画たち」を実施した。本展覧会は一昨年度より取り外しが行われているキトラ古墳の壁画のうち、状態の良い白虎が展示公開できることになった事を受けて、特別展を開催し、期間中の平成18年5月11日～5月28日までの17日間、壁画四神のうち白虎を展示した。</p> <p>夏の企画展では、春の壁画の展示にちなんで夏期企画展示「東アジアの十二支像」を行った。キトラ古墳では四神とともに十二支を描いた獣頭人身像12体が描かれている。展示では中国・韓国の十二支像の実例を掲げるとともに、その変遷を展示した。</p> <p>秋の特別展示では、当館で保管展示中の高松塚古墳出土海獣葡萄鏡に焦点を当て、この種の中型海獣葡萄鏡の同型鏡を借用展示するとともに、期間中に蛍光X線分析を行った。その成果は図録に掲載するとともに、飛鳥資料館研究図録第9冊として刊行した。</p> <p>本年から冬の企画展として飛鳥地方の発掘速報展を行った。昨年度飛鳥地方で話題となったカズマヤマ古墳出土品などを展示し、最新の発掘成果を公開した。</p> <p>山田寺出土部材の経年変化の研究は継続して行っており、問題となるような大きな変化は見られなかった。さらに山田寺後出土遺物については、平成19年度重要文化財指定に向けての整理作業に協力した。</p> <p>壁画古墳の研究も継続して行いその成果は上記の春期特別展や夏期企画展で公開した。</p> <p>飛鳥時代の工芸技術の研究として飛鳥・奈良時代の金工品の研究も継続して行い、今年度は高松塚古墳出土の海獣葡萄鏡を中心とする、中型海獣葡萄鏡の研究を行い、成果は研究図録にまとめた。</p>																
【実績値】	<table border="1"> <tr> <td>平成18年度の入館者数</td> <td>入館者の満足度</td> <td>公開日数</td> <td>展示品貸し出し件数</td> </tr> <tr> <td>112,128人</td> <td>98.3%</td> <td>320日</td> <td>4件</td> </tr> <tr> <td>刊行図書 5冊</td> <td></td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>講演会 5回</td> <td></td> <td></td> <td></td> </tr> </table>	平成18年度の入館者数	入館者の満足度	公開日数	展示品貸し出し件数	112,128人	98.3%	320日	4件	刊行図書 5冊				講演会 5回			
平成18年度の入館者数	入館者の満足度	公開日数	展示品貸し出し件数														
112,128人	98.3%	320日	4件														
刊行図書 5冊																	
講演会 5回																	
【年度決算見込額】	88,742千円																

【備考】	<p>刊行図書(5冊) 「キトラ古墳と発掘された壁画たち」 飛鳥資料館図録第43冊 平成17年4月 「東アジアの十二支像」 飛鳥資料館カタログ第15冊 平成18年8月 「飛鳥の金工 海獣葡萄鏡の諸相」 飛鳥資料館カタログ第16冊 平成18年10月 「飛鳥の考古学2006」 飛鳥資料館カタログ第17冊 平成19年1月 「海獣葡萄鏡の研究」 飛鳥資料館研究図録第9冊 平成18年3月</p> <p>講演会(5回) 東京芸術大学客員教授 有賀祥隆「日本の古代壁画について」平成18年5月20日 東京文化財研究所 修復材料研究室 川野邊渉「キトラ古墳壁画の保存・修復について」平成18年5月20日 奈良文化財研究所 飛鳥資料館 杉山 洋「海獣葡萄鏡について」平成18年10月21日 國學院大學客員研究員 植松勇介「唐代の鏡」平成18年10月28日 明日香村教育委員会 相原嘉之 「蘇我氏の飛鳥」平成19年2月3日</p>
------	---

当該事務または事業の実績に関する自己点検評価

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	正確性			
判定	A	A	A			
備考	適時性…国民の文化財に関する適時的な興味への即応性 独創性…わかりやすい展示のための創意工夫 正確性…文化財の知識を正確な展示によって伝える					

2. 定量的評価

観点	論文等数	発表件数				
判定	A					
備考						

3. 実績の総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	定性的評価において、適時性、独創性、正確性3項目においてAであることから、実績の総合的評価をAと判定した。

4. 当年度における中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	本年度の計画を当初の予定どおり遂行したことから、当事者は順調であると判定した。

業務実績書

中期計画の項目 (I 3 (3))	黒田記念館、平城宮跡資料館、藤原宮跡資料室、飛鳥資料館については、研究成果の公開施設としての役割を強化する観点から展示を充実させ、調査・研究成果の内容を広く一般に理解を深めてもらうことに資する。入館者数については、前期中期計画期間の年度平均以上確保する。
----------------------	---

【事業名称】	藤原宮跡資料室における展示公開 (I 3 (3))
--------	---------------------------

【事業概要】	都城発掘調査部 (飛鳥・藤原地区) 展示室において、常設展、速報展などを実施し、展示公開充実をはかる。
--------	---

【担当部課】	都城発掘調査部 飛鳥藤原地区	【事業責任者】	副部長 巽淳一郎
【スタッフ】	高橋克壽		

【年度実績概要】	<p>常設展を通年実施し、一部近年の発掘調査で得られた木簡のレプリカを加え、内容を充実させた。書類等で申請のあった団体へはその都度展示説明を行った。展示活用のために、石神遺跡出土鋸のレプリカ製作及び飛鳥池遺跡出土漆塗土師器の修復を行った。</p> <p>また、エントランス部分では速報展コーナーを通じて、140次調査 (石神遺跡)、142・144次調査 (藤原宮朝堂院東第四堂)、146次調査 (甘樫丘東麓遺跡)、145次調査 (石神遺跡) の速報展示を行った。</p> <p>展示スペースについては、エントランス部分の飛鳥地域の模型を、橿原市が新設した資料室に移動させるなど、一部レイアウトの変更を行った。</p>
【実績値】	平成18年度の入館者数 4457人 公開日 244日 遺物貸し出し件数 10件
【年度決算見込額】	1,443千円

【備考】	
------	--

当該事務または事業の実績に関する自己点検評価

1. 定性的評価

観 点	適時性	発展性	継続性	正確性		
判 定	A	A	A	A		
備 考	適時性・調査研究成果をアピール。 発展性・藤原宮、藤原京の発掘調査成果。 継続性・速報展の恒常化。 正確性・展示に於ける修復、模型制作。					

2. 定量的評価

観 点	入館者数					
判 定	A					
備 考	昨年度より微減したが一昨年度よりは大幅に増加。					

3. 実績の総合的評価

判 定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	定性的評価、定量的評価ともにすべてAであるので、Aと判断した。

4. 当年度における中期計画の実施状況の確認

判 定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	速報展示も充実し、順調。

業務実績書

中期計画の項目 (I 3 (4))	文化庁が行う平城宮跡、飛鳥・藤原宮跡等の公開・活用事業に協力し、支援を実施する。
----------------------	--

【事業名称】	平城宮跡等公開活用事業への協力・支援 (I 3 (4))
--------	------------------------------

【事業概要】 文化庁平城宮跡等管理事務所の運営に対する積極的協力を以下のとおり実施する。 <input type="checkbox"/> 施設の公開・利用等に係る連絡調整及び連携協力 <input type="checkbox"/> 各種行事、発掘調査等の連絡調整 <input type="checkbox"/> 修繕等に係る相談、状況の把握、業者の紹介等

【担当部課】	管理部業務課	【事業責任者】	業務課長 佐藤敏明
--------	--------	---------	-----------

【スタッフ】 今西康益、飯田信男、久保慶史、松本正典

【年度実績概要】 平城宮跡及び飛鳥・藤原宮跡における文化庁平城宮跡等管理事務所の運営に対し、積極的な協力を行った。 <input type="checkbox"/> 宮跡利用申込みに対する連絡及び申込者との打合せ <input type="checkbox"/> 各種行事、発掘調査等に係る連絡調整 <input type="checkbox"/> 宮跡内建物、工作物等の修繕に当たり、状況の把握、文化庁・業者との連絡調整、現場監理等 <ul style="list-style-type: none"> ・平城宮跡内柳倒木撤去 ・平城宮跡内東院庭園池循環設備修理 ・平城宮跡内便所等施設設備維持修繕 ・平城宮跡内車止め改修 ・平城宮跡内看板改修 ・平城宮跡整備工事実施調整 ・平城宮跡外灯補修工事 ・平城宮跡内火災等対応調整 ・藤原宮跡内看板改修 ・藤原宮跡整備工事実施調整 ・藤原宮跡工作物等損傷調査 <input type="checkbox"/> 住民等からの苦情対応・取次ぎ <ul style="list-style-type: none"> ・宮跡内水路、道路等の修理改善等 <input type="checkbox"/> 平城宮跡内禁止行為への対応・異状報告 <input type="checkbox"/> 所轄消防署との連絡調整 <ul style="list-style-type: none"> ・平城宮跡内火災等対応調整 <input type="checkbox"/> 宮跡内事件事故、放置車両・ホームレス対策のための警察署との打合せ <ul style="list-style-type: none"> ・平城宮跡内事件等対応調整

【実績値】 _____

【年度決算見込額】 10,812 千円

【備考】

当該事務または事業の実績に関する自己点検評価

1. 定性的評価

観点	適時性	発展性	効率性	継続性		
判定	A	A	A	A		
備考 適時性：緊急性の高い連絡・修繕相談等へ適時に対応 発展性：宮跡内建物、工作物等の維持管理に寄与 効率性：専門知識を活かした協力による人的投資上の効率性 継続性：需要に応じた継続的な連携協力体制						

2. 定量的評価

観点						
判定						
備考						

3. 実績の総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	定性的評価においてAが4つであり、この結果を判断して、Aと認めたものである。

4. 当年度における中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	施設の公開・利用等の連絡、各種行事・工事・発掘調査の連絡、修繕相談・状況の把握・業者の紹介等、各業務について積極的に協力できたと考える。 特に、修繕相談等は、緊急性の高い場合が多かったが、適時・的確に対応できた。 今後もこのペースを維持しつつ実施していきたい。

業務実績書

中期計画の項目 (I 3 (4))	宮跡等への来訪者に文化財に関する理解を深めてもらうため、各種ボランティアに対して、活動機会・場所等の支援を行う。
----------------------	--

【事業名称】	平城宮跡解説ボランティア事業の運営 (I 3 (4))
--------	-----------------------------

【事業概要】	<p>平城宮跡の来訪者に平城宮跡解説ボランティアが、平城宮跡資料館、遺構展示館、復原建物等の案内・解説を行うことにより研究所の調査研究の成果を発信するとともに、平城宮跡の歴史や文化遺産に対する理解を深めてもらう。</p> <p>年間約3万人に解説事業を行い、解説ボランティアについては、継続的に約100名確保し、研修、学習会の実施や解説資料の配付等の積極的な活動支援を行う。</p>
--------	---

【担当部課】	管理部文化財情報課	【事業責任者】	課長 山田耕一
--------	-----------	---------	---------

【スタッフ】	千田剛道、永田裕美、桑原隆佳
--------	----------------

【年度実績概要】	<p>本年は平城宮跡を訪れた約9万8千人に案内・解説を行った。平城宮跡は小・中学校の校外学習の場としても活用され、その説明は解説ボランティアに依頼されることが多く、学校関係者等から高い評価を得ている。</p> <p>この事業は、6年を超え定着してきているが更に充実させるため、解説を受けた来訪者にアンケート調査をおこなった結果、97.5%が良かったと答えている。</p> <p>解説ボランティアの活動支援として、解説のための専門研修(3日間)、「続日本紀」読書会(毎月1回)、遺跡見学会(1回)、等を実施し、解説資料の配付をおこなうなど積極的に支援した。</p> <p>○アンケート調査集計表(回答657)</p> <p>ボランティアの解説を受けられた方にお尋ねします。解説の満足度はいかがですか。</p> <table> <tr> <td>1 とてもよい</td> <td>379 (57.7%)</td> </tr> <tr> <td>2 かなりよい</td> <td>163 (24.9%)</td> </tr> <tr> <td>3 ふつう</td> <td>99 (15.1%)</td> </tr> <tr> <td>4 あまりよくない</td> <td>9 (1.3%)</td> </tr> <tr> <td>5 まったくよくない</td> <td>7 (1.0%)</td> </tr> </table>	1 とてもよい	379 (57.7%)	2 かなりよい	163 (24.9%)	3 ふつう	99 (15.1%)	4 あまりよくない	9 (1.3%)	5 まったくよくない	7 (1.0%)					
1 とてもよい	379 (57.7%)															
2 かなりよい	163 (24.9%)															
3 ふつう	99 (15.1%)															
4 あまりよくない	9 (1.3%)															
5 まったくよくない	7 (1.0%)															
【実績値】	<ul style="list-style-type: none"> ・解説ボランティア：137名 ・ボランティア解説延べ人数：98,955名 ・各種ボランティアに対する学習会等 <table> <tr> <td>専門研修</td> <td>156名</td> <td>3日間/年</td> </tr> <tr> <td>平城宮跡クリーンフェスティバル</td> <td>350名</td> <td>1日間/年</td> </tr> <tr> <td>『続日本紀』読書会</td> <td>330名</td> <td>1日間/月</td> </tr> <tr> <td>遺跡見学会</td> <td>57名</td> <td>1日間/年</td> </tr> <tr> <td>清掃活動</td> <td>60名</td> <td>3日間/年</td> </tr> </table> 	専門研修	156名	3日間/年	平城宮跡クリーンフェスティバル	350名	1日間/年	『続日本紀』読書会	330名	1日間/月	遺跡見学会	57名	1日間/年	清掃活動	60名	3日間/年
専門研修	156名	3日間/年														
平城宮跡クリーンフェスティバル	350名	1日間/年														
『続日本紀』読書会	330名	1日間/月														
遺跡見学会	57名	1日間/年														
清掃活動	60名	3日間/年														
【年度決算見込額】	2,381千円															

【備考】	
------	--

当該事務または事業の実績に関する自己点検評価

1. 定性的評価

観 点	継続性	効率性	発展性	正確性		
判 定	A	A	A	A		
備考 継続性：ボランティア解説者の学習等により基礎的知識は十分な成果を認める。 効率性：ボランティア解説者の案内は十分に成果を認める。 発展性：ボランティア解説者の来訪者への影響は十分な成果を認める。 正確性：ボランティア解説事業の運営に十分な成果を認める。						

2. 定量的評価

観 点	ボランティア 登録者数	事業参加者数	参加者の満足度			
判 定	A	A	A			
備考 ボランティア登録者数 : 100人 事業参加者数 : 45,000人 参加者の満足度 : 80%						

3. 実績の総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	定性的評価・定量的評価において、Aが7つであり、これらを相互的に判断してAと認めたものである。

4. 当年度における中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	解説ボランティア事業は、ボランティアの更なる研修、事業参加者数の増加、ボランティアへの積極的な支援も順調に実現できたと考える。今後もこのペースを維持しつつ平城宮跡の公開活用に力を注ぎたい。

業務実績書

中期計画の項目 (I 3 (4))	宮跡等への来訪者に文化財に関する理解を深めてもらうため、各種ボランティアに対して、活動機会、場所の提供、文化財に関する学習会の実施等の支援を行う。
----------------------	---

【事業名称】	各種ボランティアに対する活動機会・場所の提供、文化財に関する学習会の実施等への支援 (I 3 (4))
--------	---

【事業概要】	平城宮跡で活動しようとする各種ボランティア、また文化財関係のボランティアに対して要請があれば、平城宮跡(施設を含む)を活動の場所として提供することや、文化財に関する学習会等への講師の派遣をおこなう等の支援を行い、ボランティア団体の育成に寄与する。
--------	---

【担当部課】	管理部文化財情報課	【事業責任者】	課長 山田耕一
--------	-----------	---------	---------

【スタッフ】	千田剛道、永田裕美、桑原隆佳
--------	----------------

【年度実績概要】	<p>各種ボランティアに対する学習会等を実施した。</p> <p>「特定非営利活動法人なら・観光ボランティアガイドの会」から朱雀門、東院庭園でボランティア解説をしたいと要請があり、活動場所の提供をおこなった。</p> <p>また、平成13年11月に設立された「特定非営利活動法人平城宮跡サポートネットワーク」に対して、活動機会、場所、講師等の派遣等、積極的な活動支援をおこなった。具体的には、平城宮跡の清掃活動への用具等の提供、歴史文化講演会への講師派遣、市民参加の平城宮跡クリーンフェスティバル、拓本づくり教室を行った。それらは新聞、テレビでも紹介され好評であった。</p>
----------	--

【実績値】	<ul style="list-style-type: none"> ・各種ボランティアに対する学習会等 専門研修 156名 3日間/年 平城宮跡クリーンフェスティバル 350名 1日間/年 『続日本紀』読書会 480名 1日間/月 遺跡見学会 57名 1日間/年 清掃活動 60名 3日間/年 NPO通歴史文化講演会 372名 2日間/年 万葉集勉強会 360名 1日間/月 拓本づくり教室・出前教室 276名 10日間/年
【年度決算見込額】	2,139千円

【備考】	
------	--

当該事務または事業の実績に関する自己点検評価

1. 定性的評価

観 点	継続性	適時性	効率性			
判 定	A	A	A			
備考 継続性：各種ボランティアへの支援には、十分な成果を認める。 適時性：各種ボランティアへの支援は、学習会の実施等十分な成果を認める。 効率性：各種ボランティアへの場所の提供要請等には、十分な成果を認める。						

2. 定量的評価

観 点	各種ボランティアに 対する学習会等	参加者数	参加者の満足度			
判 定	A	A	A			
備考 ボランティアに対する学習会実施回数：2回 参加者数：150人						

3. 実績の総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	定性的評価、定量的評価を合わせて、Aが6つであり、これらを総合的に判断して、Aと認めたものである。

4. 当年度における中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	各種ボランティアの要請に対し、積極的に支援し、各事業が行われた。 今後も各種ボランティア育成に寄与したい。

業務実績書

中期計画の項目 (I 4 (1))	地方公共団体や大学、研究機関との連携・協力体制を構築し、これらの機関が有する文化財に関する情報の収集、知見・技術の活用、本法人が行った調査。研究成果の発信等を通じて、文化財に関する協力・助言の円滑かつ積極的な実施を行う。
----------------------	--

【事業名称】	無形文化遺産に関する助言 (I 4 (1))
--------	------------------------

【事業概要】	地方公共団体等の依頼に基づき、それらの実施する無形文化財・無形民俗文化財の調査・保存・修復・整備・活用などの事業に対し助言を行う。
--------	---

【担当部課】	無形文化遺産部	【事業責任者】	無形文化遺産部長心得 宮田繁幸
--------	---------	---------	-----------------

【スタッフ】	鎌倉恵子、高桑いづみ、飯島満、俵木悟
--------	--------------------

【年度実績概要】	<p>(事業の実績を800字以内で記述する。この枠内は、8P、52字×16行=832字)</p> <p>平成18年度は、無形文化遺産の保存・伝承・活用等に関する各種委員会等へ出席し、以下の指導・助言を実施した。</p> <ol style="list-style-type: none"> (1) 文部科学省(教育映画等審査に関して)に対する助言 12件 (2) 文化庁芸術文化課地域文化振興室に対する助言(文化芸術による創造のまち支援事業に関して) 17件 (3) 文化庁伝統文化課に対する助言(国際民俗芸能フェスティバルに関して) 1件 (4) 岐阜県揖斐川町教育委員会に対する助言 1件 (5) 日本芸術文化振興会に対する助言(劇場賞選考、運営計画、文化デジタルライブラリー関連) 9件 (6) 日本芸術文化振興基金に対する助言(助成事業に関して) 3件 (7) (財)伝統文化活性化国民協会に対する助言(伝統文化データベース、ふるさと文化再興事業、伝統文化こども教室関連事業に関して) 9件 (8) 全国民俗芸能大会に関する助言 5件 (9) 全国青年大会郷土芸能の部運営委員会での助言 2件 (10) 園田学園近松研究所に対する助言 2件 (11) 韓国国立民俗博物館に対する助言 4件
【実績値】	1 助言件数 64件
【年度決算見込額】	現地へ出向く出張旅費等の所用経費については、相手方の負担

【備考】	
------	--

当該事務または事業の実績に関する自己点検評価

1. 定性的評価

観点	適時性	発展性	継続性			
判定	A	A	A			
備考						

2. 定量的評価

観点	助言件数					
判定	A					
備考 平成13年度～平成17年度年度平均助言数 64件						

3. 実績の総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	本事業は、依頼を受けて行うものであり、あらかじめ個々の助言について予定することは出来ないが、本年度も各種委員会等への出席及び助言の依頼が全中期計画時の平均値以上寄せられており、無形文化遺産分野での様々な要望に的確に対応できたものとする。以上の状況を総合的に判断して、Aと判定した。

4. 当年度における中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	例年通りの助言依頼に順調に対応できたとする。

業務実績書

中期計画の項目 (I4 (1))	地方公共団体や大学、研究機関との連携・協力体制を構築し、これらの機関が有する文化財に関する情報の収集、知見・技術の活用、本法人が行った調査・研究成果の発信等を通じて、文化財に関する協力・助言の円滑かつ積極的な実施を行う。
---------------------	--

【事業名称】	文化財の修復及び整備に関する調査・助言 (I4 (1))
--------	------------------------------

【事業概要】	地方公共団体等の実施する文化財の調査・保存・整備・活用などの事業を援助・助言するために、文化財の修復及び整備に関する調査を行う。
--------	--

【担当部課】	修復技術部	【事業責任者】	修復技術部長 加藤 寛
--------	-------	---------	-------------

【スタッフ】	川野邊 渉、中山 俊介、加藤 雅人、早川 典子、森井 順之 (以上、修復技術部)
--------	--

【年度実績概要】	<ul style="list-style-type: none"> ・財団法人日本航空協会評議員会 (川野邊 渉) ・有限責任中間法人国宝修理装飾師連盟資格試験委員会 (川野邊 渉) ・史跡原爆ドーム保存技術指導委員会 (川野邊 渉) ・史跡原爆ドーム躯体レンガの保存修復に関する指導助言 (川野邊 渉・中山 俊介) ・重要文化財旧下野煉化製造会社煉瓦窯の保存修復に関する指導助言 (川野邊 渉・中山 俊介・朽津 信明) ・重要文化財旧手宮鉄道施設 (小樽市) の保存修復に関する指導助言 (川野邊 渉・中山 俊介) ・御料車及び1号機関車 (交通博物館) の搬出入方法に関する指導助言 (川野邊 渉・中山 俊介) ・所沢航空発祥記念館所蔵91式戦闘機胴体の保存修復に関する指導助言 (川野邊 渉・中山 俊介) ・第五福竜丸エンジンの保存修復に関する指導助言 (川野邊 渉・中山 俊介) ・国宝高松塚古墳壁画の保存修復に関する指導助言 (川野邊 渉・加藤 雅人・早川 典子・森井 順之) ・特別史跡キトラ古墳壁画の保存修復に関する指導助言 (川野邊 渉・加藤 雅人・早川 典子・森井 順之) ・重要文化財「京都府行政文書」の調査/保存修復の指導助言 (川野邊 渉・加藤 雅人) ・曼殊院所蔵竹虎図の保存修復に関する指導助言 (川野邊 渉・加藤 雅人) ・熊野磨崖仏 (豊後高田市) の保存整備に関する指導助言 (川野邊 渉・森井 順之) ・愛媛県立科学博物館所蔵グレイトフォールズ型転戸の保存修復に関する指導助言 (中山 俊介) ・大韓民国に所在する鉄道文化財の保存修復に関する指導助言 (中山 俊介) ・市川市指定有形文化財常夜灯の保存修復に関する指導助言 (朽津 信明・森井 順之) ・喜多見氷川神社 (世田谷区) 石鳥居の保存修復に関する指導助言 (森井 順之) ・小倉城 (北九州市) 三の丸跡の遺構整備に関する指導助言 (森井 順之) ・重要文化財0.5t及び3tスチームハンマーの修復後処置に関する指導助言 (森井 順之)
【実績値】	指導助言実施件数 20件
【年度決算見込額】	現地へ出向く出張旅費等の所用経費については、相手方の負担

【備考】	
------	--

当該事務または事業の実績に関する自己点検評価

1. 定性的評価

観 点	適時性	継続性	正確性			
判 定	A	A	A			
備考						

2. 定量的評価

観 点	指導・助言件数					
判 定	A					
備考						

3. 実績の総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	重要文化財を含む各種文化財の保存修復に関して、それぞれの保有団体、所有者の方々あるいは修復を担当する団体に対して、指導助言を行った。またその過程において、私たちも、現地を調査する機会を得、更に知見を得ることが出来た。

4. 当年度における中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	今年度は件数こそ20件であったが、それぞれ、内容が多岐にわたり、1回の指導助言で終わらない物件が多数であった。今後この様に指導助言を実施し適正に文化財が保存修復されるように努めると共に、私たちも新たな知見を得るよう努力する。

業務実績書

中期計画の項目 (I 4 (1))	地方公共団体や大学、研究機関との連携・協力体制を構築し、これらの機関が有する文化財に関する情報の収集、知見・技術の活用、本法人が行った調査・研究成果の発信等を通じて、文化財に関する協力・助言の円滑かつ積極的な実施を行う。
----------------------	--

【事業名称】	地方公共団体等が行う史跡の整備、復原事業等に関する技術的助言 (I 4 (1))
--------	--

【事業概要】	地方公共団体等が行っている遺跡、建造物などの調査・整備・修復・保存等について、依頼を受け専門委員会の委員になるなどして、必要な事項に関し援助・助言を行っている。
--------	--

【担当部課】	奈良文化財研究所	【事業責任者】	所長 田辺征夫
【スタッフ】			

【年度実績概要】	<p>地方公共団体等が行っている文化財の調査・保存・修復・整備・活用等の事業に対し、各分野において専門的・技術的な援助・助言を実績値のごとく多数行っている。そのうち史跡等の発掘調査、保存、修理、整備活用、建造物修理、出土文字資料調査について、いくつかの事例を上げて、実績報告とする。</p> <p>大内氏館跡(山口県山口市)は、大内氏館跡西北部に残る枯山水庭園跡の発掘調査・復原整備事業を平成9年度から行っている。庭園という特殊な遺構であり、発掘調査成果に基づく復原整備事業であることから当研究所が指導、助言を引き受けた。平成18年度は庭園復原整備の最終年度であり、景石の立直し、補充、地被類や周囲の修景植栽など庭園全体の復原整備計画・工事の実施について、現場の進捗に合わせて助言を行った。</p> <p>文化財建造物の調査、修復、整備等の事業では、奈良市指定春日大社桂昌殿、同四脚門の修理中に、破損木材の具体的な補修方法について技術的な援助を行うとともに、桂昌殿の飾金具の在来仕様、小屋組の復原に関する専門的な助言を現地で行った。兵庫県太子町所在の斑鳩寺仁王門、山王社の2棟の建造物の文化財指定に際し、専門的な調査援助を行うとともに、町内建造物の保存のあり方に関する助言を行った。このほか、岐阜県恵那市、滋賀県大津市、奈良県大宇陀町、島根県高梁市等の伝建群保存地区審議会などにおいて、専門的立場からの助言等を行った。</p> <p>官衙・寺院跡などの発掘調査や整備事業では、調査方法、検出した遺構の性格、建物遺構の構造的特徴、整備計画について援助・助言を行った。</p> <p>主なものには、茨城県石岡市常陸国衙跡、福島県須賀川市栄町遺跡、埼玉県深谷市幡羅遺跡、岐阜県垂井町美濃国府跡、三重県四日市市久留倍遺跡、愛媛県松山市史跡久米官衙遺跡群、鳥取県倉吉市伯耆国衙跡発掘調査への援助・助言、岩手県盛岡市志波城跡、鳥取県鳥取市栴本庵寺跡、福岡県大刀洗町下高橋官衙遺跡、佐賀県大和町肥前国府跡、宮崎県西都市日向国府・国分寺跡の整備事業への助言などがある。</p> <p>全国各地21の遺跡から出土した木簡・墨書土器などの出土文字資料419点については、その釈読・写真撮影などの調査・研究に関する援助・助言を行った。主なものには、奈良市平城京跡、大阪府枚方市禁野本町遺跡、兵庫県加古川市坂元遺跡、兵庫県氷上郡氷上町市辺遺跡、兵庫県赤穂郡上郡山野里四ツ日遺跡、青森市高間(1)遺跡、同新田(1)遺跡などがある。</p>
【実績値】	<p>地方公共団体等の委員就任件数 180件</p> <p>援助・助言実施件数(出張依頼を受けた件数) 400件 (委員会出席175, 審議会出席20, 指導50, 調査47, 講演21, その他87)</p>
【年度決算見込額】	現地へ出向く出張旅費等の所用経費については、相手方の負担

【備考】	平成18年度地方公共団体等の専門委員会の委員就任一覧
------	----------------------------

当該事務または事業の実績に関する自己点検評価

1. 定性的評価

観 点	継続性	適時性	発展性			
判 定	A	A	A			
備考 継続性：依頼機関への対応 適時性：実施業務に適時対応、社会的要請 発展性：的確な援助・助言による実施業務の順調な実現						

2. 定量的評価

観 点	援助・助言実施件数					
判 定	A					
備考						

3. 実績の総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	定性的評価において、Aが3つあり、これらの結果を総合的に判断して、Aと認めたものである。

4. 当年度における中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	現在、全国で行われている遺跡の発掘調査、保存・整備・復原事業や、建造物の調査、修理事業について、各担当機関から専門的な援助・助言を求められ、これに対応している状況である。不動産文化財に関する総合的な研究所という奈文研に対する社会的要求に、今後もの確に対応していく必要がある。

業務実績書

中期計画の項目 (I 4 (1))	地方公共団体や大学、研究機関との連携・協力体制を構築し、これらの機関が有する文化財に関する情報の収集、知見・技術の活用、本法人が行った調査・研究成果の発信等を通じて、文化財に関する協力・助言の円滑かつ積極的な実施を行う。
----------------------	--

【事業名称】	地方公共団体が行う平城京城発掘調査への援助・助言 (I 4 (1))
--------	------------------------------------

【事業概要】	平城宮に密接に関連する平城京城発掘調査への援助・助言の事業は総数 12 件あり、主に開発行為に対する事前発掘調査である。発掘の総面積は 184.2 m ² 、調査期間は 2006 年 4 月 12 日～2007 年 3 月 16 日の間、述べ 97 日に及ぶ。
--------	---

【担当部課】	都城発掘調査部 平城地区	【事業責任者】	部長 川越俊一
--------	--------------	---------	---------

【スタッフ】	小池伸彦、次山淳、和田一之輔、西口壽生、神野恵、森川実、深澤芳樹、今井晃樹、林正憲、高田貴太、島田敏男、金井健、栗野隆、大林潤、渡邊晃宏、馬場基、山本崇
--------	--

【年度実績概要】					
次数	調査地	調査原因	面積	期間	概要
402 次	右京三条一坊十坪	住宅建設	6 m ²	2006.4.12～4.14	遺建物包含層の確認。
403 次	平城宮北方	住宅建設	12 m ²	2006.4.24～4.25	奈良時代の土器類が出た。
405 次	左京一条二坊九坪	住宅建設	8.5 m ²	2006.5.15～5.18	礎石据付穴と推定する穴を検出。
408 次	平城宮北方・市庭古墳周溝	住宅建設	18 m ²	2006.7.6～7.10	奈良時代整地土を検出。
409 次	西大寺薬師金堂	住宅建設	6 m ²	2006.7.24～8.3	西大寺薬師金堂身舎北側柱礎石据付穴を検出。
411 次	馬寮北方	建物建設	15 m ²	2006.8.7～8.9	鎌倉時代以降の礫面を検出。
412 次	法華寺	住宅建設	54 m ²	2006.8.23～8.31	二条条間北小路北側溝を検出し、ガラス小玉鋳型・羽口等が出土した。
413 次	左京一条二坊十五坪	住宅建設	13.2 m ²	2006.9.5～9.11	奈良時代整地土と木取山古墳周濠を確認。
414 次	法華寺	住宅建設	7.5 m ²	2006.10.12～10.16	平城宮、古墳関連遺構は検出されていない。
416 次	市庭古墳周溝	住宅建設	9 m ²	2006.11.6～11.8	近世の土坑を検出。
417 次	法華寺	住宅建設	9 m ²	2006.11.13～11.16	一条条間路北側溝を検出。
419 次	法華寺旧境内	住宅建設	26 m ²	2007.3.8～3.16	中世の溝。丸瓦・土管運用の暗渠を検出。
【実績値】					
論文等数 3 件 (論文 3 件①～③)					
出土品 瓦磚など 3,994 点、土器 33 箱、金属器・木器、石器など 145 点					
記録作成数 実測図 29 枚、写真 (4×5) 31 枚					
【年度決算見込額】					
現地へ出向く出張旅費等の所用経費については、相手方の負担					

【備考】	① 林正憲「西大寺・薬師金堂の調査 第 409 次」『奈良文化財研究所紀要 2007』2007.6 ② 金井健「馬寮北方の調査 第 411 次」『奈良文化財研究所紀要 2007』2007.6 ③ 林正憲・島田敏男・山本崇「法華寺旧境内の調査 第 412・414・417 次」『奈良文化財研究所紀要 2007』2007.6
------	--

当該事務または事業の実績に関する自己点検評価

1. 定性的評価

観 点	継続性	適時性	正確性			
判 定	A	A	A			
備考 継続性：データ収集のため規模の大小にかかわらず発掘を継続する。 適時性：開発に対応する迅速性。 正確性：文化財行政に協力する事前調査。						

2. 定量的評価

観 点	援助・助言実施件数					
判 定	A					
備考						

3. 実績の総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	緊急性を要する発掘調査に効率よく対応し、平城宮・京についての基礎資料を継続的に蓄積していることからAと判断した。

4. 当年度における中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	平城宮・京の構造や変遷を検討するために有効な基礎的データを得た。

業務実績書

中期計画の項目 (I 4(2))	埋蔵文化財に関する高度な研究成果をもとに、地方公共団体等で中核となる文化財担当者に埋蔵文化財に関する研修及び保存科学に関する保存担当学芸員研修を実施する。
---------------------	---

【事業名称】	埋蔵文化財担当者研修 (I 4(2)①)
--------	----------------------

【事業概要】	地方公共団体の埋蔵文化財担当職員若しくはこれに準ずる者に対する研修を実施する。 研修受講者のうち平均80%以上の者から「有意義だった」、「役に立った」と評価されるよう研修内容の充実を図る。
--------	---

【担当部課】	企画調整部、管理部業務課	【事業責任者】	企画調整部長 岡村道雄、業務課長 佐藤敏明
--------	--------------	---------	-----------------------

【スタッフ】	小林謙一、今西康益、石田義則、井手真二 研修内容に応じ、研究所職員の適任者及び外部の学識経験者が講師を行っている。
--------	--

【年度実績概要】	一般研修1課程、専門研修12課程の計13課程を実施し、延べ182人が受講した。 また、研修受講者に対し、「今回受講した研修が『有意義だった』あるいは『役に立った』と思うか、思わないか」のアンケート調査を行った結果、100%の者から『思う』の回答を得た。
----------	---

		実施期日(日数)	定員	受講者数	満足度
一般研修	遺物観察調査課程	9月 4日～ 9月29日(26日)	16人	14人	100%
専門研修	掘立柱建物・礎石建物遺構調査課程	5月15日～ 5月19日(5日)	12人	20人	100%
	保存科学Ⅰ(無機質遺物)課程	5月30日～ 6月 7日(9日)	10人	13人	100%
	保存科学Ⅱ(有機質遺物)課程	6月 7日～ 6月15日(9日)	10人	11人	100%
	文化財写真Ⅰ(基礎)課程	7月10日～ 7月26日(17日)	10人	11人	100%
	文化財写真Ⅱ(応用)課程	7月26日～ 8月 9日(15日)	10人	6人	100%
	遺跡地区情報課程	10月24日～10月27日(4日)	16人	16人	100%
	自然科学的年代決定法課程	11月14日～11月17日(4日)	10人	10人	100%
	古代集落遺跡調査課程	11月27日～12月 1日(5日)	12人	12人	100%
	中近世城郭調査課程	12月12日～12月19日(8日)	16人	22人	100%
	報告書作成課程	1月10日～ 1月19日(10日)	20人	20人	100%
	古代陶磁器調査課程	2月 1日～ 2月 9日(9日)	16人	12人	100%
	環境考古学(生物編)課程	2月21日～ 2月28日(8日)	12人	15人	100%
計	13課程	(129日)	170人	182人	100%

【実績値】	実施課程数 13課程 受講者数 182人 受講者の満足度 100%
-------	---

【年度決算見込額】	21,439 千円
-----------	-----------

【備考】	
------	--

当該事務または事業の実績に関する自己点検評価

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性		
判定	A	A	A	A		
備考 適時性：研修の需要・必要性、公共性、緊急性への対応 独創性：研修内容のオリジナリティ、新規性、卓越性 発展性：発掘・保存・整備等に関する技術の全国的な水準向上 効率性：時間的投資、人的投資、設備的投資上の効率性						

2. 定量的評価

観点	研修実施回数	受講者数	受講者の満足度			
判定	A	A	A			
備考 実施課程数 13課程 受講者数 170人 受講者の満足度 80%以上						

3. 実績の総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	定性的評価においてAが4つ、定量的評価においてAが3つであり、これらの結果を総合的に判断して、Aと認めたものである。

4. 当年度における中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	<p>当年度は計画どおり13課程の研修を実施し、受講者数は年度計画の170人に対し182人であった。</p> <p>研修受講者に対するアンケートでは「今回受講した研修が『有意義だった』或いは『役に立った』と『思う』との回答が100%という結果であった。</p> <p>研修の実施に当たっては、各課程の企画・運営について研修企画委員会を開催し、前回実施した研修結果の分析及び研修終了者のアンケート結果を基に、カリキュラム編成に係る意見交換を行い、研修内容の充実に努めており、今後も同様に対応していきたい。</p>

業務実績書

中期計画の項目 (I 4(2))	埋蔵文化財に関する高度な研究成果をもとに、地方公共団体等で中核となる文化財担当者に埋蔵文化財に関する研修及び保存科学に関する保存担当学芸員研修を実施する。なお、参加者等にアンケート調査を行い、80%以上の満足度が得られるようにする。また、東京芸術大学、京都大学、奈良女子大学との間での連携大学院教育を実施し、若手研究者の育成に寄与する。
---------------------	--

【事業名称】	博物館・美術館等の保存担当学芸員研修 (I 4(2)②)
--------	------------------------------

【事業概要】	近年、博物館・美術館の数が増加すると共にその施設が近代化し、燻蒸室、保存・修理などの保存に関する施設が整備されて保存部門を担当する職員が配置されつつある。しかし、これらの職員が保存科学の知識や技術を習得しようとしても適当な学習の場がないのが現状である。そのために博物館、美術館などの学芸員の保存担当者を対象に、文化財の科学的保存に関する基本的な知識及び技術について研修を行い、その資質の向上を持って文化財の保護に資することを目的とし、研修を実施する。また、なるべく多くの文化財公開施設に勤務する職員に、文化財保護に関する知識を学んで貰うため、本研究所職員が地方へ出向き、資料保存地域研修を開催する。過去の研修生に最新の知識を学んで貰うためフォローアップ研修を開催する。
--------	--

【担当部課】	保存科学部	【事業責任者】	保存科学部長 石崎武志
--------	-------	---------	-------------

【スタッフ】	佐野千絵、早川泰弘、木川りか、吉田直人、犬塚将英 (以上 保存科学部) 加藤寛、加藤雅人 (以上 修復技術部) 青木繁夫 (文化遺産国際協力センター) 三浦定俊 (企画情報部長)
--------	---

【年度実績概要】	本年度の研修は、7月10日から21日までの2週間開催し、参加者は30名であった。総論、文化財材質調査、温湿度管理など、保存環境に関する講義と実習、また紙や油絵、考古資料の修復についての講義でプログラムを構成した。さらに、2004年末、燻蒸剤である臭化メチルが全廃されたことから、その代替法や総合的害虫管理(IPM)についての講義と実習には特に時間を割いた。ケーススタディは国立新美術館で行った。研修参加者が小グループに分かれ、展示・収蔵環境管理や生物被害対策など個別にテーマを設定、実地調査を行ったあと、それぞれが発表し、活発な質疑応答を行った。このケーススタディにより、参加者の間に、適切な保存環境管理の必要性に対する認識が高まった。参加者全員が全てのプログラムに出席し、保存担当学芸員研修修了証書が授与された。また、保存担当学芸員研修終了カードも配布された。 また、これまでの研修受講生を対象に、最新の保存科学に関する研究成果・知見を講義する「フォローアップ研修」を6月5日に実施した(参加者62名)。この研修では、臭化メチルに替わる害虫対策法や館内化学物質の新しい検出法、また断熱材などによる温湿度管理法についての講義を行い、参加者から好評を得た
【実績値】	実施回数 1回 研修受講者数 30名 受講者の満足度 100%
【年度決算見込額】	2,412千円

【備考】	1. 学芸員研修応募要項、保存担当学芸員研修テキスト 2. フォローアップ研修プログラム
------	---

当該事務または事業の実績に関する自己点検評価

1. 定性的評価

観 点	適時性	発展性	継続性	正確性		
判 定	A	A	A	A		
備考						

2. 定量的評価

観 点	研修参加数	研修参加者の満足度				
判 定	A	A				
備考						

3. 実績の総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	研修の準備および研修は予定通り行われ、参加数30名、満足度は100%であった。

4. 当年度における中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	研修生のアンケートをもとに、研修内容の検討を行い、改善を図っていく。

業務実績書

中期計画の項目 (I 4 (2))	埋蔵文化財に関する高度な研究成果を下に、地方公共団体等で中核となる文化財担当者に埋蔵文化財に関する研修及び保存科学に関する保存担当学芸員研修を実施する。なお参加者等に対するアンケート調査を行い80%以上の満足度が得られるようにする。 また東京芸術大学、京都大学、奈良女子大学との間で実践的な連携大学院教育を実施し、若手研究者の育成に寄与する。
----------------------	--

【事業名称】	東京芸術大学、京都大学、奈良女子大学との間での連携大学院教育の推進 (I 4 (2) ③) ○東京芸術大学：システム保存学 (保存環境学、修復材料学)
--------	--

【事業概要】	1995 (平成 7) 4 月より東京芸術大学大学院と連携して大学院教育を行い、21 世紀の文化財保存を担う人材を育成している。システム保存学教室は、文化財の保存環境を研究する保存環境学講座と保存修復に用いる材料について研究する修復材料学講座の二講座から成っている。各講座3名ずつの研究所員が連携教員として研究教育指導に当たっている。
--------	---

【担当部課】	保存科学部、修復技術部	【事業責任者】	副所長 三浦定俊
--------	-------------	---------	----------

【スタッフ】	石崎武志、木川りか、早川泰弘 (以上、保存科学部)、大野 彩 (保存科学部客員研究員) 青木繁夫 (文化遺産国際協力センター)、加藤 寛 (修復技術部) 鈴木規夫 (所長) 松島朝秀 (東京芸術大学非常勤講師)
--------	--

【年度実績概要】	次にあげる講義と演習を各教官が担当した。 文化財保存学演習 (三浦、早川)、保存環境計画論 (三浦)、保存環境学特論 (石崎、木川)、修復計画論 (青木)、 修復材料学特論 (加藤、早川)
【実績値】	
【年度決算見込額】	教官研究費及び学生の教育費は連携大学が支出

【備考】	
------	--

当該事務または事業の実績に関する自己点検評価

1. 定性的評価

観 点	発展性	効率性	継続性			
判 定	A	A	A			
備考						

2. 定量的評価

観 点						
判 定						
備考						

3. 実績の総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	研究現場から得られる新しい情報を加えるなど、学生にとって有益で高い水準の内容の授業や演習を行うことができた。

4. 当年度における中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	年度当初に予定した授業・演習計画通り、事業は進捗した。 今年度で青木教官と加藤教官が退職するので、来年度は新たに川野辺渉室長と中山俊介室長を連携教員として予定している。

業務実績書

中期計画の項目 (I 4(2))	京都大学、奈良女子大学との間での連携大学院教育を実施し、若手研究者の育成に寄与する。
---------------------	--

【事業名称】	京都大学、奈良女子大学との間での連携大学院教育を推進 (I 4(2)③)
--------	--------------------------------------

【事業概要】	大学院教育の豊富化、社会との連携強化、人材養成を図るため、京都大学大学院人間・環境学研究科及び奈良女子大学大学院人間文化研究科と協定を結び連携・協力し、文化財保存・活用に関する幅広い知識と高度な技術を兼ね備えた研究者及び技術者の育成を行っている。
--------	---

【担当部課】	奈良文化財研究所	【事業責任者】	所長 田辺征夫
--------	----------	---------	---------

【スタッフ】	山中敏史、光谷拓実、肥塚隆保、松村恵司(京都大学客員教授) 窪寺茂、松井章(京都大学客員助教授) 小林謙一、渡邊晃宏(奈良女子大学客員教授) 次山淳(奈良女子大学客員助教授)		
--------	--	--	--

【年度実績概要】	それぞれ次の内容の講義を大学及び奈良文化財研究所において行った。 ●京都大学大学院人間・環境学研究科 山中敏史、松村恵司、窪寺茂(文化財調査論1) 各種の遺跡・歴史的建造物・庭園などの不動産文化財や、遺跡から出土した各種考古遺物や伝世された古文書などの動産文化財を対象資料として取り上げ、それぞれの文化財資料の特性に応じた分析的調査研究法を追求し、文化財と諸環境との関わりについて考える。 山中敏史、松村恵司、窪寺茂(文化財調査論2) 各種の遺跡・歴史的建造物・庭園などの不動産文化財や、遺跡から出土した各種考古遺物や伝世された古文書などの動産文化財を対象資料として、考古学・建築史学・庭園史学・地理学・文献史学などの諸分野における研究成果を総合化しながら、文化財の歴史的意義、文化財の保存と活用に関する諸問題について考察する。 光谷拓実、肥塚隆保、松井章(環境考古学論1) 古代の人々はいかなる環境下で生活し、文化を築いてきたか、年輪年代学や考古学的分析手法を通して古環境の復元的研究を行う。年輪年代法では、古年輪の暦年標準パターンデータを使って、考古学、建築史、美術史などの歴史学の編年研究に資する方法について考察する。さらに埋没樹幹の年輪年代から過去の地震や火山噴火等の発生年代を明らかにし、自然災害史を紐解くと共に当時の人々の対応のあり方を追求し、災害予知に関する研究もおこなう。また、考古学分野では、遺跡から出土する動植物遺存体などを分類・分析する基本的技術を習得させ、動植物利用の実態や人類による自然への働きかけ(適応・改変・破壊)の様相や変化を探る。 光谷拓実、肥塚隆保、松井章(環境考古学論2) 年輪年代法では、木質文化財から多量の年輪データを収集し、年代を一年単位で割り出す際に基準となる古年輪の暦年標準パターンを作成する。これを使った歴史学への応用研究を行う。さらに埋没樹幹の年輪年代から過去の地震や火山噴火等の発生年代を明らかにし、災害予知に関する研究もおこなう。また遺跡から出土する動植物遺存体・木材・花粉などについて自然科学的手法も採用しながら分析し、遺跡出土遺存体の意義や、周辺の古環境復元や人類と環境との関わり方の様相や変化を明らかにする。 山中敏史、松村恵司、窪寺茂(文化遺産学演習1) 文化財には、土地に構築された土地から切り離せない不動産文化財と、持ち歩ける動産文化財とがある。そうした各種文化財について、実際の資料整理や分析などの実習や文献の精読作業などを通じて、調査分析方法を習得させ、文化財の歴史的意義についての理解を深めさせる。 光谷拓実、肥塚隆保、松井章(文化遺産学演習2) 発掘された遺構や考古資料などの保存修復や活用のための理化学的方法や各種の自然科学的方法を駆使した文化財の分析技術を習得させるとともに、動植物遺存体などを主とした考古資料の調査や古環境復元を通じて、環境と人間との関わりを追求する。 ●奈良女子大学大学院人間文化研究科 小林謙一(日本考古学特論) 律令制下の都城や地方官衙でおこなわれていた、人形・馬形・土馬などの多数の形代を使った祭祀をとりあげ、律令国家の祭祀形態、その系譜、年代的变化などを、中央と地方の関係を中心に論じ、日本古代社会の宗教構造を明らかにする。 次山淳(歴史考古学特論) 7世紀を中心とする飛鳥藤原地域の遺跡と遺物を主な題材として、歴史考古学の研究方法と現在の研究成果や課題について論ずる。また、歴史考古学の基礎となる考古学的調査研究法を踏まえつつ、古代史学や建築史学等の関連分野や韓国朝鮮中国考古学の成果にも言及する。 渡邊晃宏(歴史資料論) 文献史料だけでなく多様な資料が歴史資料として注目されるようになってきた今日、従来の枠組みにとらわれない新しい歴史資料論が必要となってきた。中でも考古学による調査成果、特に木簡、漆紙文書、墨書土器などの出土文字資料が歴史資料に占める位置づけは格段に大きくなってきた。このような新しい歴史資料を視野に入れながら、新しい日本史の歴史資料論の構築を目指す。
【実績値】	受入学生数 京都大学 修士・博士課程10名 奈良女子大学 博士課程4名
【年度決算見込額】	教官研究費及び学生の教育費は連携大学が支出

【備考】	
------	--

当該事務または事業の実績に関する自己点検評価

1. 定性的評価

観 点	効率性	適時性	発展性			
判 定	A	A	A			
備考 効率性：研究水準の社会的評価 適時性：時代の要請 発展性：若手研究者層の充実、人材確保						

2. 定量的評価

観 点	受入学生数					
判 定	A					
備考						

3. 実績の総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	定性的評価において、Aが3つであり、これらの結果を総合的に判断して、Aと認めたものである。

4. 当年度における中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	連携大学と協定を締結し、継続的に実施しており、受入学生も昨年より増加した。

業務実績書

中期計画の項目 (II)	業務運営の効率化に関する目標を達成するために取るべき措置
-----------------	------------------------------

【事業名称】	業務運営の効率化に関する目標を達成するために取るべき措置 (具体的な措置については「事業概要」欄に記載) (II)
--------	---

<p>【事業概要】</p> <p>1 事務・事業・組織等の見直し等により経費の合理化を図る。また、運営費交付金を充当して行う業務については国において実施されている行政コストの効率化を踏まえ、下記の業務の効率化を進める。</p> <p>(1) 両文化財研究所の共通業務の見直し等による一般管理部門の効率的な運用</p> <p>(2) 業務の見直しによる研究・事業部門の効率的な実施</p> <p>(3) 省エネルギー、廃棄物減量化、リサイクルの推進、ペーパーレス化の推進及び環境物品等の調達等の推進等</p> <p>(4) セミナー室、講堂等の施設の有効利用</p> <p>2 役職員の給与に関し、国家公務員の給与構造改革を踏まえ取り組む。</p> <p>3 外部有識者による評価を含めた適切な自己点検評価自己点検評価を実施するとともに、評価結果を法人運営の改善に反映させる。</p>
--

【担当部課】	総務部 総務課 (取りまとめ) (両研究所管理部)	【事業責任者】	総務部長 出口小太郎
--------	------------------------------	---------	------------

<p>【スタッフ】</p> <p>総務部長、総務課：課長、総務係、予算・決算係 東京文化財研究所 管理部長、管理課：課長、課長補佐、庶務係、企画渉外係、予算係、経理係 奈良文化財研究所 管理部長、管理課：課長、課長補佐、庶務係、会計係、用度係、業務課：課長、課長補佐、研修・事業係、施設係、文化財情報課：課長、課長補佐、普及・資料係、図書・情報係</p>
--

<p>【年度実績概要】</p> <p>1 平成18年度運営費交付金(物件費)が、前年度よりも約6.95%の減少という要因があるなかで下記努力を行った結果、効率化率2.47%以上を達成することができた。</p> <p>(1) 共通業務の効率化と経費の節減に資するため、東京・奈良双方の担当者が集まり「事務部課長連絡会」や「事務担当者連絡会」において、検討を進めるとともに、平成19年4月からの国立博物館との統合をふまえた、業務(組織)の見直しや人事・給与事務の効率化(人事・給与システムの構築)等について検討を進めた。</p> <p>(2) 効率的かつ効果的な事業運営を行うため、東文研・奈文研ともに研究部門の組織の見直しを行った。 特に、国際協力に関する業務については、東文研の文化遺産国際協力センターに拠点機能を集約し、奈文研企画調整部国際遺跡研究室の人員を同センターに兼務させることにより、アフガニスタン・イラク等の保存修復協力事業について一体的に実施した。 また、奈文研においては、従来の平城宮跡発掘調査部と飛鳥・藤原宮跡発掘調査部を統合して都城発掘調査部として再編成することにより、柔軟な人員配置等を可能にし、重点事項・緊急事態へも対応できるようにした。</p> <p>(3) 省エネルギー、リサイクルの推進、ペーパーレス化の推進を図るため、日常の節電節水等を周知徹底し、夏季におけるノーネクタイ等の励行、夏季及び冬季の冷暖房の省エネ運転等を引き続き行った。また、コピー用紙は再生紙の使用、古紙の回収、所内LANの活用による回覧文書のペーパーレス化の推進を図った。また、「環境物品等の調達の推進を図るための方針」を定め、これを推進した。 なお、省エネルギーに係る光熱水量の節減について、電気は1,854千円(2.5%)、水道料は、654千円(5.2%)、ガス料は約105千円(0.8%)の節減となった</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th></th> <th>17年度</th> <th>18年度</th> <th>差額</th> <th>(単位:千円)</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>電気料</td> <td>73,274</td> <td>71,419</td> <td>△1,855</td> <td></td> </tr> <tr> <td>水道料</td> <td>12,580</td> <td>11,926</td> <td>△654</td> <td></td> </tr> <tr> <td>ガス料</td> <td>13,431</td> <td>13,326</td> <td>△105</td> <td></td> </tr> </tbody> </table> <p>(4) 施設の有効利用を推進するため、施設使用貸付規程に基づき、セミナー室や講堂等を外部へ貸付を行い457千円の有料化を図った。</p> <p>2 平成18年度運営費交付金(人件費A分類(退職手当、法定福利費を除く))について、前年度よりも約2.53%の減少という要因があるなか、効率化率4.16%以上を達成することができた。また、「行政改革の重要方針」に基づく中期計画期間中の5%削減の基準額の見直しを行った。</p> <p>3 昨年度の評価を、法人運営に反映させるとともに、評価手続きのあり方についての反省点等を踏まえ、効率的かつ効果的な自己点検評価の実施方法(様式等)を変更するとともに、外部委員からの評価内容等についても見直し、平成18年度の自己点検評価を行うこととした。</p> <p>【実績値】 運営費交付金を充当して行う業務に係る業務運営の効率化2.47%</p> <p>【年度決算見込額】 運営費交付金を充当して行う業務 2,848,880千円 (予算2,883,077千円)</p>		17年度	18年度	差額	(単位:千円)	電気料	73,274	71,419	△1,855		水道料	12,580	11,926	△654		ガス料	13,431	13,326	△105	
	17年度	18年度	差額	(単位:千円)																
電気料	73,274	71,419	△1,855																	
水道料	12,580	11,926	△654																	
ガス料	13,431	13,326	△105																	

【備考】

当該事務または事業の実績に関する自己点検評価

1. 定性的評価

観点	適時性	効率性	継続性			
判定	A	A	A			
備考	博物館との統合に際し、19年度より向こう5年間 毎年度一般管理費を2%減の統合効果額見込を課すことにした。効率的かつ効果的な事業運営を行うため、東文研・奈文研とも研究部門の組織の見直しを行い実施した。随意契約の適正化により、契約基準の額を見直し、19年度から一般競争契約を推進することにした。省エネ、リサイクル、ペーパーレス化については、引き続き業務の効率化が図られ、実績を上げた。					

2. 定量的評価

観点	業務運営の効率化					
判定	A					

3. 実績の総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	18年度運営費交付金のうち人件費（人件費A分類（退職手当・法定福利費を除く））は17年度より2.53%削減され、また物件費も、前年度より6.95%削減された。こうした厳しさの中で更に、前年度に引続いて、1%以上の経費節減が達成できた。

4. 当年度における中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	業務運営の効率化の目標である5年間で5%、毎年1%以上の目標を超えた2.47%の実績を示しており、中期計画期間中の目標を十分達成した。